福中城跡
芝崎遺跡

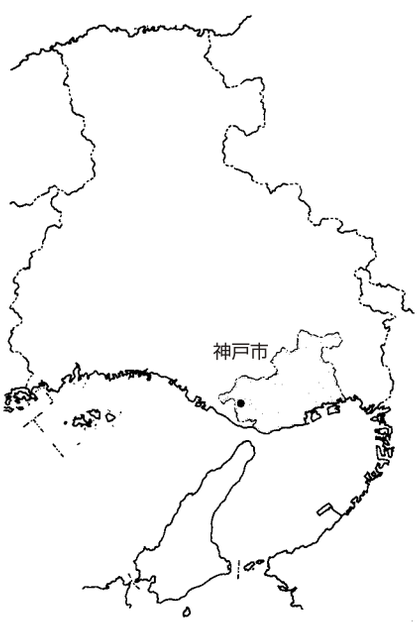
一般国道175号平野拡幅事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月

兵庫県教育委員会

神戸市西区

福中城跡
芝崎遺跡



1 区 SD1002 出土　土馬の復元

たてがみを復元
（尾部は北東土坑出土）

1 区 SD1002　土馬出土状況

１区　SK1006 出土　銅鏡

１区　SK1006（南から）

２区　SE02 出土　箱釣瓶

２区　SE02（西から）

2区　SE05 出土　漆器

2区　SE05（南から）

1区　SH01（南から）

1区　SH01竈（南から）

1区　SH02（北から）

11区　SH03・04（北から）

6区　内堀南辺（西から）

11区　堀状遺構（東から）

２区　甕倉１（東から）

３区　甕倉２（東から）

例　言

1．本書は、兵庫県神戸市西区平野町に所在する福中城跡（ふくなかじょうせき）、及び芝崎遺跡（しばさきいせき）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺跡の発掘調査は、一般国道175号平野拡幅事業に伴い国土交通省近畿地方整備局兵庫国道工事事務所（平成7年度は建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．遺跡の本発掘調査は、平成７・13・14年度に実施し、調査担当として兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　森内秀造・渡辺　昇・別府洋二・久保弘幸・國本綾子があたった。

4．報告書作成にかかる整理作業は、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼を受けて、平成16～18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所がおこなった。

5．掲載した写真のうち、写真図版１の空中写真は国土地理院発行のものを使用した。そのほかの空中写真は平成７年度にはアジア航測株式会社、平成13・14年度には株式会社ワールドに委託して撮影したものを使用した。その他の遺構写真等は調査担当者によるものである。遺物写真は株式会社アコードに委託して撮影したものを使用した。

7．掲載した図については、地形図については国土地理院発行および神戸市発行のもの或いは国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所提供のものを使用した。また、図２は神戸市教育委員会　神戸市文化財調査報告４から、図３は兵庫県教育委員会「兵庫県の中世城館・荘園遺跡」からそれぞれ転載した。その他の図に関しては株式会社ワールドによる空中写真測量図及び調査担当者、嘱託職員他の手によるものである。

8．発掘調査および本報告書作成に際しては、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所、神戸市教育委員会や地元の方々にはお世話になりました。記して感謝の念と変えさせていただきます。

9．本書の編集は森本貴子の補助の元、別府がおこなった。また、木器の樹種同定結果については伊東隆夫京都大学名誉教授に依頼し、原稿を頂いた。そのほかの執筆の分担は目次に掲載している。

10．発掘調査中、整理作業中には以下の方々に様々な御指導、御教示を受けました。記して感謝いたします。

（順不同、敬称略）

伊東隆夫・千種　浩・黒田恭正・山本三郎・大平　茂・岡田章一・岸本一宏・西口圭介

山上雅弘・藤田　淳・池田征弘・仁尾一人

目　　次

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過
　第１節　調査に至る経緯……１（別府洋二）
　第２節　調査の経過……２（別府）
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境……７（別府）
　第２節　歴史的環境……８（山上雅弘・別府）
第３章　１～３区（芝崎遺跡）の調査
　第１節　概要……11（別府）
　第２節　１区の遺構……11（別府）
　第３節　２区の遺構……14（別府）
　第４節　３区の遺構……19（森内秀造）
第４章　４～12区（福中城跡）の調査
　第１節　概要……21（別府）
　第２節　４～６区の遺構……21（森内・別府）
　第３節　７～10区の遺構……23（森内・別府）
　第４節　11区の遺構……24（渡辺　昇・別府）
　第５節　12区の遺構……26（別府）
第５章　遺物
　第１節　概要……27（別府）
　第２節　１区の土器……27（岡田章一・別府）
　第３節　２区の土器……31（岡田・別府）
　第４節　３区の土器……35（岡田・別府）
　第５節　６・９区の土器……36（岡田・別府）
　第６節　11区の土器……37（岡田・渡辺・別府）
　第７節　木器・木製品……38（別府）
　第８節　石器・石製品……41（別府）
　第９節　金属製品……44（別府）
　第10節　芝崎遺跡出土木製品の樹種……46（伊東隆夫）
第６章　中世後半期、福中城跡・芝崎遺跡の景観……61（山上）
第７章　まとめ……71（別府）

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版１　１区SD1002出土　土馬の復元
たてがみを復元（尾部は北東土坑出土）、１区SD1002　土馬出土状況
巻頭カラー図版２　１区　SK1006出土　銅鏡
１区　SK1006（南から）
巻頭カラー図版３　２区　SE02出土　箱釣瓶
２区　SE02（西から）
巻頭カラー図版４　２区　SE05出土　漆器
２区　SE05（南から）
巻頭カラー図版５　１区　SH01（南から）
１区　SH01 竈（南から）
巻頭カラー図版６　１区　SH02（北から）
11区　SH03・04（北から）
巻頭カラー図版７　６区　内堀南辺（西から）
11区　堀状遺構（東から）
巻頭カラー図版８　２区　甕倉１（東から）
３区　甕倉２（東から）

表　目　次

表１　周辺の遺跡……10
表２　芝崎遺跡樹種同定一覧表……47
表３　福中城跡・芝崎遺跡出土土器等観察表……49

挿　図　目　次

図１　芝崎遺跡出土木製品の樹種……48
図２　縄張り図１……62
図３　縄張り図２……64
図４　周辺の城跡（Ｓ＝１：200,000）……70

図　版　目　次

図版１　遺跡の位置（Ｓ＝1：25,000）
図版２　周辺の地形（Ｓ＝1：5,000）
図版３　調査区の配置（Ｓ＝1：2,500）
図版４　調査地区断面模式図
図版５　１区　遺構配置図
図版６　１区　基本土層図
図版７　１区　SH01、SH01竈
図版８　１区　SH02、SD1002
図版９　１区　SK1006、SK1001、SK1009
図版10　１区　SB01、SK1005、SE01
図版11　２区　遺構配置図
図版12　２区　基本土層図
図版13　２区　甕倉１、SB03
図版14　２区　SE02
図版15　２区　SE05
図版16　２区　SE06、SE03
図版17　２区　SE04・03・08、SE07、SX04
図版18　２区　窯状遺構
図版19　２区　SD2011・2006・2004・2005
図版20　３区　遺構配置図
図版21　３区　甕倉２、SE09
図版22　６区　遺構配置図
図版23　６区　内堀南辺東西断面
図版24　９区　遺構配置図
図版25　９区　基本土層図、内堀北辺土層図
図版26　10区　遺構配置図、基本土層図
図版27　11区　遺構配置図
図版28　11区　基本土層図
図版29　11区　SH03
図版30　11区　SH03・04
図版31　11区　SB04、SB05、SK1101
図版32　11区　SD1102、SD1101、堀状遺構
図版33　12区　遺構配置図
図版34　12区　基本土層図
図版35　１区の土器・土製品１（SH01、SD1002）
図版36　１区の土器・土製品２（SD1002）
図版37　１区の土器・土製品３（SH02）
図版38　１区の土器・土製品４（SH02、北東土坑）
図版39　１区の土器・土製品５（SK1001、SK1005、SK1006、包含層）
図版40　２区の土器・土製品１（P2014、SE02、SE03、SE05）
図版41　２区の土器・土製品２（SE06、SE07、SX01、SX04）
図版42　２区の土器・土製品３（SD2004、SD2005）
図版43　２区の土器・土製品４（SD2006、SD2009）
図版44　２区の土器・土製品５（SD2011、整地層）
図版45　３～６区の土器・土製品（甕倉2、SX05、P3006、内堀南辺）
図版46　９～12区の土器・土製品（内堀北辺、堀状遺構、SK1101、包含層、SH03、SH04）
図版47　木器・木製品１（SE02）
図版48　木器・木製品２（SE02）
図版49　木器・木製品３（SE02、SE03、SE05）
図版50　木器・木製品４（SE05）
図版51　木器・木製品５（SE05）
図版52　木器・木製品６（SE05、SE07、SX01）
図版53　木器・木製品７（SE06）
図版54　石器・石製品１（SE02）
図版55　石器・石製品２（SE02）
図版56　石器・石製品３（SE05）
図版57　石器・石製品４（SE05）
図版58　石器・石製品５（SK1009、SE05、P2017、11区、2区）
図版59　金属器（SK1006、SK3001、11区、堀状遺構）

写真図版目次

写真図版１　遺跡の位置
写真図版２　遺跡遠景（南から）
遺跡遠景（北から明石城跡・明石大橋を望む）
写真図版３　遺跡遠景（北東から）
遺跡遠景（西から）
写真図版４　遺跡遠景（北から）
遺跡遠景（南から）
写真図版５　遺跡遠景（西から）
遺跡遠景（東から）
写真図版６　福中城跡遠景（西から）
福中城跡遠景（東から）
写真図版７　調査範囲全景
写真図版８　１・２区　全景（南から）
１・２区　全景（北から）
写真図版９　１・２区全景
写真図版10　１区　全景
写真図版11　１区全景（南から）
１区全景（北から）
写真図版12　SH01　全景（南から）
竈検出状況　　竈断ち割り断面
竈断ち割り断面　竈内土師器出土状況
写真図版13　SH02掘削状況（南から）
SH02掘削状況（北から）
写真図版14　SD1002
SD1002　土馬出土状況
SD1002　土馬出土状況
写真図版15　SK1006　全景（南から）
SK1006　土層断面（南から）
写真図版16　SK1006　遺物出土状況（東から）
SK1006　土器出土状況（南から）
SK1006　銅鏡出土状況（南から）
写真図版17　SK1001　土層断面（北から）
SK1009　土層断面（北から）
SK1005　全景（南西から）
SK1005　土器出土状況
SB01（北から）
SE01　土層断面（南から）
写真図版18　２区　全景
写真図版19　２区
写真図版20　２区　全景（南から）
２区　全景（北から）
写真図版21　SE02　全景（西から）
SE02　井側内釣瓶出土状況
写真図版22　SE02　断ち割り一石五輪塔出土状況（西から）
SE02　断ち割り状況（西から）
SE02　石組み内一石五輪塔出土状況
写真図版23　SE05　検出状況（北東から）
SE05　土層断面（南東から）
SE05　石組み検出状況（東から）
写真図版24　SE05　石組みと根太（南から）
SE05　根太（南から）
写真図版25　SE03　土層断面（南から）
SE06　全景（西から）
SE07　土層断面（西から）
写真図版26　窯状遺構１（南から）
窯状遺構１（西から）
窯状遺構１貼り床断面（西から）
窯状遺構２（北西から）
写真図版27　甕倉１（東から）
SK2012（東から）
SK2015（西から）
写真図版28　SD2004・2005　土層断面（西から）
SD2005　集石（西から）
SD2011（東から）
写真図版29　３～10区　全景
写真図版30　３区　全景（左が北）
３区　全景（北から）
写真図版31　甕倉２（東から）
SE09（南東から）
SE09　埋土層断面（西から）
写真図版32　３・４・６区全景

写真図版33　６・７区　全景（左が北）
６区　南側外堀･内堀南辺(南から)
写真図版34　６区　内堀南辺（東から）
６区　内堀南辺西壁
写真図版35　６区　内堀南辺（西から）
６区　内堀南辺東壁
写真図版36　７・８区全景（左が北）
７区　全景（南から）
８区　全景（北から）
写真図版37　９区　全景
９区　全景（北から）
内堀北辺南肩（西から）
写真図版38　８～12区（西から）
８～12区（西から）
写真図版39　10区　全景
10区　内堀北辺北肩（北から）
10区　内堀北辺北肩（西から）
写真図版40　北側外堀（西から）
北側外堀（南から）
写真図版41　11区　全景
写真図版42　11区　全景（南から）
SB04・05（北から）
写真図版43　SH03・04　検出状況（北から）
SH03　完掘状況（北から）
写真図版44　SH04　床面の炭
SH03　土器出土状況
SH03　土器出土状況
写真図版45　SH04　完掘状況（北から）
SH03・04と堀状遺構（東から）
写真図版46　堀状遺構断面（東から）
SD1102（南から）
SK1101（北から）
写真図版47　12区　全景
12区　全景（南から）
12区南端　谷への落ち（西から）
写真図版48　福中城跡西の段丘崖（西から）
福中城跡西の平坦面（推定上の丸）
福中城跡西の段丘崖（北から）
写真図版49　宝珠寺
伝 間嶋彦太郎　五輪塔
三木街道
写真図版50　１区　SH01、SD1002出土土器
写真図版51　１区　SD1002出土土器
写真図版52　１区　SD1002出土土馬
写真図版53　１区　SD1002、北東土坑出土土馬
写真図版54　１区　SH02出土土器
写真図版55　１区　SH02出土土器
写真図版56　１区　SH02出土土器
写真図版57　１区　SK1001・1002・1006
出土土器・瓦
写真図版58　１区　SK1005、包含層出土土器
写真図版59　２区　Ｐ2014、SE02・03
出土土器・瓦
写真図版60　２区　SE05出土土器・瓦
写真図版61　２区　SE05出土瓦
写真図版62　２区　SE06・07出土土器・瓦
写真図版63　２区　SX01・04出土土器・瓦
写真図版64　２区　SD2004・2005出土土器
写真図版65　２区　SD2005出土瓦
写真図版66　２区　SD2006・2009出土土器
写真図版67　２区　SD2011、整地土出土瓦
写真図版68　３区　甕倉２、Ｐ3006等出土土器
写真図版69　６区　内堀南辺出土土器
９区　内堀北辺出土瓦
写真図版70　11区　堀状遺構、SK1101、包含層
出土土器
写真図版71　11区　SH03･04、包含層出土土器
写真図版72　２区　SE02出土箱釣瓶
写真図版73　２区　SE02出土箱釣瓶
写真図版74　２区　SE02出土木器
写真図版75　２区　SE05出土根太
写真図版76　２区　SE05出土木器
写真図版77　２区　SE03・06・07、SX01出土木器
写真図版78　２区　SE02出土五輪塔
写真図版79　２区　SE02出土五輪塔
写真図版80　２区　SE05等出土石製品
写真図版81　１・２・11区　出土石器・石製品
写真図版82　１・３・11区　出土金属製品

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道 175 号線は兵庫県明石市から京都府舞鶴市を結ぶ南北の主要幹線道である。国土交通省は建設省時代から道路拡幅やバイパス工事を計画して、交通混雑の解消と交通安全の確保を図ってきている。

平成４年度から実施している神出窯跡群･遺跡の調査（報告書作成中）や、玉津田中遺跡南大山地点、小野市浄谷遺跡、南山古墳群（兵庫県文化財調査報告第 121 集）などの遺跡の調査もこれに伴う一連のものである。

昭和 60 年度に調査された芝崎遺跡（平野町芝崎字樋ノ口）も同様に一般国道 175 号線（玉津拡張）に伴い調査が実施されている。（兵庫県文化財調査報告第 53 集）この調査によって、弥生時代後期の竪穴住居や中世の堀状遺構が検出された。この芝崎遺跡はそれに先立つ昭和 58 年度に神戸市教育委員会によって初めて確認され、古墳時代から中世の集落が検出されている。

今回の調査地点の南端である１区は、この昭和 60 年度芝崎遺跡調査地点から北に約 40m の位置にあたる。本発掘調査は後述するように、３年次にわたって千鳥式に実施したため、本報告にあたってこの１区から北方向に順に２区、３区と呼称し、合計 12 区までを設定した。

１区は現在の行政区画では平野町向井字前垣内となり、芝崎の範囲から外れるが、同一の段丘上に立地し、福中城跡とは外堀と考えられている谷地形を挟んでいることなどの地形的条件や、出土した遺物や遺構が芝崎遺跡と近い点を考慮して、１～３区を「芝崎遺跡」、４～ 12 区を「福中城跡」として報告することとした。但し、３区は当初、福中城跡に含めて考えていたが、２区との遺構の類似性から、芝崎遺跡とした。３区北端部から南側外堀の落ち込みが見られる。また、北端の 12 区は大きな谷地形の北に位置することから城域外と思われるが、谷地形の北の肩を検出できたにすぎないため便宜的に「福中城跡」に含めて報告する。

福中城跡は、15 世紀初め頃には平野荘を領有していたものと推定される赤松氏の一族間嶋氏によって、文明年間（1469 ～ 1487）に土師道海に命じて築かせたと伝えられている。また、天正８年（1580）に秀吉が取り毀しを命じた別所方の９城のうちの「平野之城」がこれに該当すると考えられている。本格的な発掘調査は今回の調査以前には実施されてはいないが、昭和 30 年代頃には曲輪・堀切・土塁などが地形状からも確認されており、現在でも一部は確認できる。今回の調査範囲内は現状では、工場や店舗、溜池跡となっており、堀跡と推定される谷状を呈する地形以外には城跡の痕跡を示す兆候は認められなかった。

本発掘調査にかかる１～３区は平野町向井字前垣内、４・５・７～ 10 区は平野町福中字本丸、６区は東から平野町向井字祇園尾が突出している。11 区は平野町向井字後垣内、12 区は平野町下村字平瀬前に含まれる。以上のように調査範囲内の字名や、周辺に見られる「屋敷」「居屋敷」「玉屋敷」「北垣内」「鴨ヶ市（鴨垣内）」「的場」など城や居館に関係した字名が集中している。北側に広がる「平瀬」の字名も間嶋家の被官であった平瀬氏の屋敷が存在したものと考えられている。

また、今回の今回報告する４区の東側では、平成 12 年に神戸市教育委員会によって南側外堀の調査が行われており、遺物は出土しなかったが、南側外堀の深さが 5.1 ～ 6.8 mであったことが判明している。

第２節　調査の経過

１．確認調査

確認調査は平成６年度から12年度にかけて４次に渉って実施した。

１～３区の確認調査は平成６年５月に実施し、合計10本のトレンチを設定した。（調査番号940151・940356）１区にあたる地点には２本のトレンチを設定し、竪穴住居の一部と柱穴や包含層を検出している。１区の北側にもトレンチを設定したが、撹乱などを含む厚さ20㎝ほどの旧耕土を除去すると即、地山である段丘面が確認され、遺構・遺物包含層とも検出されなかった。同様に２区の南側に設定したトレンチでも段丘面まで非常に浅く、旧地形が高くなっており、後世に大きく削平されたことが想定された。このことは、１・２区間を東に抜ける里道でも確認でき、高さ１ｍ以上の段差の切り通しが見られる。このため、１・２区間は全面調査を実施しなかった。

２区にあたる地点には４本のトレンチを設定し、中世頃の遺構や遺物包含層を確認した。３区では２本のトレンチを設定し、北端のトレンチでは溜池に向かって落ちる地形を検出した。この溜池はもともと福中城の外堀を利用した可能性が考えられ、幅２ｍ、深さ２ｍまで掘削したが、底は確認できなかった。このため、同年11月に再度幅４ｍのトレンチ２本を設定し、外堀の確認調査を実施した。（調査番号940263）北側のトレンチでは深さ4.7mで地山と考えられる層に達した。南側の落ち際では深さ約６ｍまで掘削したが湧水が激しいため、明確に底を検出できなかった。ともに最下層から約10㎝の厚さにのみ自然堆積層が確認できたが、遺物等は出土していない。それ以上の埋土は非常に新しい埋め土である。溜池として利用されていたため、城の時期の堆積は除去された可能性がある。この谷地形の落ち込みは本発掘調査時に３区の北端で南側の肩を検出し、６区南端で北側の肩を検出している。４区、５区と南側外堀中央部を調査したが、近代以前の堆積を示す土層などは検出できていない。同時におこなったボーリングによる調査では現地表面下約６ｍで底が検出されている。（調査番号990217）

６区から11区までの福中城跡内部の確認調査は、平成12年７月に実施し、５本のトレンチを設定した。（調査番号2000198）すべて著しい削平・撹乱を示していたが、一部に大きな落ち込みや柱穴状の遺構を確認した。11区の北西側の谷状地形は南端部の現地表面下約１ｍで自然堆積層を検出したが、遺物等は含まれていなかった。

また、10区と11区間は現道があるため調査ができなかったが、北側外堀の北縁を検出するため、平成18年６月に立会調査（調査番号2006046）を実施した。配水管工事によってすでに大きく破壊されていたが、外堀北縁は北西から南東方向へと延びていることがわかった。

11区と12区間は神戸市環境局の作業車の出入りが著しく、確認調査ができなかった。旧建設省からボーリングデータの提供を受け、現地表面下約７ｍが谷底であることが判明し、自然地形である可能性が高いことから本発掘調査からは除外した。

12区以北は玉津田中遺跡平野地区の範囲に含まれており、10ヶ所でトレンチを設定した。（調査番号990217）平成11年９月に調査を実施したが、削平・撹乱が著しく、遺構・遺物とも検出できなかった。但し、この範囲で最も南に当たるトレンチでは当初、福中城跡の外堀とも考えられていた谷地形の北の肩が検出されたため、その地区を12区として本発掘調査範囲とした。

確認調査・立会調査の担当者は以下のとおりである。

平成６年５月 18 日～ 19 日　遺跡調査番号 940356・940151

調査第１班　調査担当　　別府洋二、鐵　英記、鈴木敬二

平成６年 11 月 28 日　遺跡調査番号 940263

調査第３班　調査担当　　山田清朝

平成 11 年９月 27 日～ 29 日　遺跡調査番号 990217

企画調整班　調査担当　　高瀬一嘉

平成 12 年７月 25 日～ 26 日　遺跡調査番号 2000198

企画調整班　調査担当　　別府洋二

平成 18 年６月 13 日　遺跡調査番号 2006046

調査第２班　調査担当　　別府洋二

２．本発掘調査

確認調査結果やボーリングデータから本発掘調査範囲を設定したが、通行の著しい国道に沿った調査地区であり、また、沿道の民家や工場、倉庫などの進入路確保のため、調査範囲を細かく分割して調査せざるを得なかった。

平成７年度の調査は芝崎遺跡の続きとして１・２区の調査を実施した。１区では中世前半の木棺墓や古墳時代後期の竪穴住居などが検出され、土馬や銅鏡などが出土した。２区では中世後半の井戸や溝、甕倉や近世の窯状遺構などが検出され、箱釣瓶や漆器、石硯などが出土した。

その後、本体工事の進捗状況に応じて平成 13 年度になって本発掘調査が再開され、福中城跡本体部分の調査が 13・14 年度と連続して実施された。平成 13 年度には３・４・６～８・10 区が調査され、南側外堀・北側外堀の南肩、内堀南辺・内堀北辺の北肩等が検出されたが、本体部分は削平が著しくその他の城に伴う施設は検出されなかったが、南側外堀の外では甕倉が検出された。４区は南側外堀中央部の調査であったが、近代の撹乱が厚く堀底を確認することはできなかった。

平成 14 年度には前年度調査の間を埋める５・９区及び、北端にあたる 11・12 区の調査を実施した。５は南側外堀中央部の調査であったが、近代の撹乱が厚く堀底を確認することはできなかった。９区では内堀北辺南肩を検出し、11 区は北側外堀の外側にあたり、一段高い地形であったが、堀状遺構や、弥生時代の竪穴住居が検出された。

各調査地区で検出された遺構は、調査員によって写真・実測図などの記録に留め、全景・遠景などはヘリコプターによる空中写真撮影をおこなった。平成 13・14 年度の調査では空中写真測量を実施している。

本発掘調査の担当者は以下のとおりである。

平成７年度　１・２区の調査

平成７年 11 月 15 日～平成８年１月 18 日　（遺跡調査番号 990292）

調査第１班　調査専門員　西口和彦

調査担当　　別府洋二、國本綾子、（深江英憲）

調査補助員　進藤眞己子

平成 13 年度　３・４・６～８・10 区の調査

平成 13 年 12 月 10 日～平成 14 年３月 12 日　（遺跡調査番号 2001174）

調査第２班　調査専門員　小川良太

調査担当　　森内秀造、久保弘幸

調査補助員　李　義民、白谷朋代

室内作業員　菊島昌子、五百蔵道代

平成 14 年度　５・９・11・12 区の調査

平成 14 年７月３日～平成 14 年８月１日　（遺跡調査番号 2002059）

調査第１班　調査専門員　吉田　昇

調査担当　　渡辺　昇、別府洋二

調査補助員　森崎由起子

３．出土品整理作業

発掘調査によって出土した土器等の遺物は、一部については発掘調査現場事務所にて洗浄をおこない、ネーミングをおこなった。平成 16 年度には、埋蔵文化財調査事務所にて芝崎遺跡から出土した土器の接合・復原作業を開始し、また、遺物の実測・写真撮影、金属器・木製品の保存処理を実施した。平成 17 年度には平成 14・15 年度調査分の福中城跡出土遺物の実測やトレース及びレイアウト作業をおこない、平成 18 年度には引き続き原稿執筆とあわせて報告書を刊行した。

調査地区が年度によって前後するため、南から順に１区、２区～ 12 区とし、本発掘調査を行わなかった地点に関しては確認調査結果・ボーリングデータを元に地形復元等をおこなった。遺構名は竪穴住居（SH）、掘立柱建物（SB）、井戸（SE）などは全地区の通し番号を付け直し、その他の溝（SD）、土坑（SK）、柱穴（P）等は調査時の番号の上に調査地区番号を付加して報告する。出土遺物については、全調査区を併せて１区から順に報告しており、土器・土製品、石器・石製品、木器、金属器にわけて掲載している。原稿執筆は調査担当者及び整理担当職員が担っており、木製品の樹種同定は伊東隆夫京都大学名誉教授に依頼して原稿を頂戴した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

平成16年度	整理保存班	主任調査専門員	池田正男
	同	主　査	長濱誠司
	同（金属器保存担当）	主　任	岡本一秀
	調査担当者	主　査	別府洋二

非常勤嘱託職員　眞子ふさ恵、島村順子、中田明美、三好綾子
栗山美奈、藤井光代、三島重美、豊田貞代、森田美穂

平成17年度　整理保存班　主任調査専門員　池田正男
同　主　査　別府洋二
同（金属器保存担当）　主　任　岡本一秀
非常勤嘱託職員　森本貴子、岸野奈津子、佐伯純子、長川加奈子、三島重美、眞子ふさ恵、
島村順子、中田明美、木村淑子、奥野政子、三好綾子、荒木由美子、
藤池かづさ、今村直子、小林俊子、渡辺二三代、村上令子、早川陽子

平成18年度　整理保存班　主任調査専門員　岡崎正雄
同　担当課長補佐　岡田章一
同（木製品保存担当）　主　査　藤田　淳
調査担当者　担当課長補佐　森内秀造
担当課長補佐　渡辺　昇
主　査　別府洋二
主　査　山上雅弘
非常勤嘱託職員　森本貴子、長川加奈子

〔参考文献〕

兵庫県教育委員会　1987『芝崎遺跡』
岡　久雄・黒田義隆　1961『福中城と間嶋彦太郎』神戸市文化財調査報告４　神戸市教育委員会
兵庫県教育委員会　1981『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』
神戸市教育委員会　1987「芝崎遺跡」『昭和 59 年度神戸市埋蔵文化財年報』

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

福中城跡・芝崎遺跡は兵庫県神戸市西区平野町に所在する。明石市の市街地や明石川河口から北に約６㎞さかのぼった地点に位置し、明石川に沿った南北の交通路として現在も往来の多い場所である。遺跡は明石川中流域左岸の洪積段丘上に立地しており、東からは丘陵尾根が延び、西には明石川まで沖積平野が広がっている。段丘面には北東から南西に向けて多くの開析谷が派生し、谷を利用した多くの溜池が作られている。

調査地点は２本の大きな開析谷に挟まれている。南側の谷は明石川の支流である田中川が流れる東谷（幅約 50 m）が、大きく蛇行して段丘の東側と南側を囲んでいる。北側には 11 区と 12 区間を抜けるように同じく幅約 50 mの谷が抜けている。

調査地点西側の段丘前面の崖は比高差約 10 m、沖積地から切り立ってそびえる地点も見られる。（写真図版 48）段丘の東側は丘陵の裾が迫っており、そこには「辻ノ口」「山ノ口」の小字名が残されている。このように周囲を谷と段丘崖、丘陵で囲まれた東西約 400 m、南北約 700 mの段丘面は周囲から隔絶した環境を有するが、その中には更に数条の谷地形が観察でき、特に３区から６区間には幅約 30 mの大きな谷が走っている。この谷と北側の谷に挟まれた範囲が字「本丸」である。

字「本丸」前面の段丘裾には「玉屋敷」の小字名が残されている。近世以前には街道が段丘下に沿うように抜けていたようであり、（写真図版 49）「屋敷」や「居屋敷」「道バタ」「道竹」の小字名も街道に沿った南北に残されている。

段丘上には「北垣内」「前垣内」「 鴨ヶ市 」「後垣内」の垣内地名が多く見られ、段丘下の沖積地にも「正カイヂ」の小字名が見られる。この地域に溝などで区画された集落が集合して営まれていたことを窺わせる。この他に「的場」など城郭に関連した地名も見受けられる。（註１）

字「本丸」の北側の段丘末端には、曹洞宗「宝珠寺」があり、境内には福中城主「間嶋彦太郎」の墓といわれる五輪塔が残されている。（写真図版 49）

今回の発掘調査の原因ともなった国道 175 号線は、瀬戸内側の明石から三木や小野、西脇を経て日本海側の舞鶴を結ぶ南北の交通路であり、明舞国道と呼ばれ、古くは三木街道とも呼ばれていたらしい。このルートや由良川・加古川を結ぶルートは、中国山地や六甲連山によって阻まれる南北方向の交通路のなかで、比較的容易く瀬戸内と日本海を結ぶルートであり、古くからの交通路として重要であったと思われる。北側には古代から中世前半の神出古窯群や中世の三木城が控えており、それらと南側の地名に見られる「玉津」「今津」「中津」など海へ向かう水上交通を結ぶルートでもあった。

遺跡の東背後に広がる丘陵は、現在では西神ニュータウンなどの開発により大きく変貌しており、交通の要衝としての頻度は益々増加している。

註１　岡・黒田 1961「福中城と間嶋彦太郎」によると、古い字名では「本丸」の東側が「 裏垣内 」、西側は「川の上」、南側は「北谷」となっている。また、「正カイジ」は「性海寺」からきたものとし、「鴨ヶ市」は「鴨垣内」となっている。

第２節　歴史的環境（図版１）

芝崎遺跡・福中城跡の位置する明石川中流域ではこれまで多くの発掘調査が行われている。これらの遺跡に関して、遺跡周辺の歴史的な経緯を考える上で重要なものをここでは紹介したい。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡は、明石川が形成する沖積地に立地する。主なものとしては後期まで存続する新方遺跡（29）や玉津田中遺跡（３）などがあるが全体的には事例が少ない。このうち玉津田中遺跡は調査地の南西から西側までに広がる大規模な遺跡である。

弥生時代中期では先の玉津田中遺跡竹添地区などで大規模な集落や方形周溝墓、水田等が検出されているが、中期後半には大洪水に見舞われたようである。さらに、この時期の集落は玉津田中遺跡南大山地点や居住・小山遺跡（６）、西神ニュータウン№48・50・65（71・70・69）や青谷遺跡（45）などのように丘陵上に立地するものが多く、数も増大するようである。

弥生時代後期の遺跡では吉田南遺跡・玉津田中遺跡唐土・狭間地区・黒岡地区、同じく玉津田中遺跡平野地区の下村字中町や芝崎字出口などが知られる。全体的な立地としては沖積地や下位段丘上に再び集落が営まれるようになる。さらに、明石川上流の養田遺跡（79）・大畑遺跡（66）などのように既存の拠点集落とは別の集落が出現するのもこの時期の特徴である。

古墳時代

古墳時代中期には前代に引き続き玉津田中遺跡唐土・狭間地区、池ノ内地区で集落が営まれ、居住地区でも生活痕跡が確認される。出合遺跡（12）や新方遺跡でも住居跡が見つかり、新方遺跡では玉造りが行われている。

古墳時代後期から奈良時代初頭（飛鳥時代）では、玉津田中遺跡居住地区や印路遺跡（81）、養田遺跡などで集落が見つかっているが、遺跡の数は限られている。芝崎遺跡１区でも竪穴住居 SH01・SH02、溝 SD1002 などが見られる。1986 年度に調査した芝崎遺跡でも遺物が出土しており、北東側の確認調査（神戸市）では古墳時代の周溝状の遺構が確認されている。近辺にもこの時代の遺跡の広がりが推測されるが、未だに当地域での集落の様相は不明の部分が多い。

古代

奈良時代から平安時代前期にかけての遺跡では、明石郡衙に比定される吉田南遺跡で掘立柱建物群や木簡・陶硯が見つかっている。また、西神ニュータウン№62 地点で掘立柱建物が検出され散在的な集落が検出されたが、他には顕著な遺跡は見つかっていない。

中世前半

これに比べ、平安時代後期から鎌倉時代に入ると集落遺跡の数が増大する。玉津田中遺跡二ノ郷・徳政地区・辻ケ内地区、同平野地区、二ツ屋遺跡（９）・栃木遺跡（52）などが知られるが、芝崎遺跡でもわずかながら土器の出土が見られる。このほか、須恵器の窯も神出窯の操業に絡んで西神ニュータウン№90 地点や繁田遺跡（73）などが確認されている。

玉津田中遺跡二ノ郷・徳政地区では条里地割に沿って掘立柱建物群が検出されている。多くが建物群とともに条里境の溝を区画溝とし、屋敷地を形成している。建物面積は 50 ～ 100 ㎡前後のものが多く、大多数の主屋は総柱構造である。全体に屋敷地は散在しており、沖積地の広い範囲に点在する散居村状を呈している。これらの集落では屋敷地や建物個々には較差が一定程度見られるが、居館構造や大規模

な溝・堀などの区画施設を持つものは見られない。

一方、辻ケ内地区は13世紀前半に遺構が出現するが、周囲を堀で囲み1町以上の規模の屋敷地が検出されている。内部には広大な園池を構築し、園池北側の中心建物前面には瓦が大量に出土したことから瓦葺建物が建ったと推定されている。以上から、この遺跡は寺院ないし居館であるとされている。
同じく二ツ屋遺跡でも1町規模の区画溝内部にコの字型配置の屋敷が検出されている。主屋に南面して園池が検出され、西側脇には礎石構造の持仏堂を建立する。全体的な構造からこの屋敷地は居館であるといわれている。

一般集落のほかにこのような居館ないし寺院的な屋敷地が検出されることから、押部谷・櫨谷の合流点にあたる玉津から二ツ屋にかけての周辺は、中世前半期の拠点的な場であった可能性が高い。このように拠点的な場が、散在しながら都市的な様相を持つあり方は、平安時代末期から鎌倉時代頃の各地の都市遺跡に共通する景観をもつ。

このほか、集落では西神ニュータウン№62地点や栃木遺跡でも13世紀代の集落遺跡が検出されている。特に栃木遺跡では用水溝が部分的に巡る屋敷地が、散在して検出された。用水溝の基点には井戸も掘削され、開発と屋敷地の関係が良好に残る事例である。

玉津田中遺跡平野下村地区でもこの時期の集落が確認され、掘立柱建物や硯･鉄滓などが出土したが、これらは荘官クラスの建物に関連するものという。この場所が舟運に関連する経済的な拠点の1つであったと推測され、検出された建物や遺構はこれらに関係した施設の可能性が高い。調査地は福中城の西側に隣接する沖積地であるため、中世前半段階からこの場所が1つの拠点であったことを示すもので福中城・芝崎遺跡の前史を考える上で重要である。

中世後半

戦国時代になると明石川流域には多くの城館の存在が知られる。明石川下流域では、明石氏の拠点城郭であった枝吉城がある。この城は段丘端部に主郭を構築し、丘陵裾に城下集落を持つ。城下の構造は必ずしも明確ではないが、城郭域も含めると大規模な構造を有していた。さらに枝吉城の北側には沖積地に下津橋砦（21）がある。高さ3m前後の土塁を持つ居館で、現在では内部に寺院と神社が建ち、南側は破壊を受けるが、居館の景観をよく残す遺跡である。兵庫県下では土塁をもつ居館が20例ほどしか残されない現状では貴重な存在となっている。

伊川谷では居館は小寺城･脇村構居（上脇遺跡）、山城は太山寺城と、櫨谷との中間点に高畑城がある。太山寺城は同寺の山城とされるが、縄張りは簡素である。櫨谷には山城では端谷城・池谷城・城ケ市城、丘城では福谷城・菅野城などが知られる。一方、押部谷では福中城跡を除くと性海寺の周辺にある西盛城・細田城以外は存在が知られず、全体的には櫨谷に城館が集中するようである。ただ、この地域では枝吉城を除くと大規模な城郭はなく、櫨谷でも中小規模の城館が集中する。

これらのうち櫨谷の端谷城で近年発掘調査が行われ主郭櫓台付属建物で塼列建物が検出され、内部から甲冑10数量が出土している。この城は16世紀後半まで存続しており、最後は三木合戦に関わって廃城となったといわれている

中世の寺院では伊川谷の太山寺、櫨谷の如意寺、押部谷の性海寺などが著名である。性海寺は福中城の城主といわれる間嶋氏との関係が文書にも登場する寺で、開基は法道仙人とされる。

天正8年（1580）の三木合戦が終結すると、播磨でも戦国時代は終焉を迎える。天正14年、高山右近重友の入部によって船上城が築城される。船上城は明石川河口の明石市船上町に築かれた平城で、豊

臣政権の瀬戸内航路経営に関わって築城が行われたとされる。現在では市街地化に伴って城郭構造の実態は不明な部分が多いが、字「本丸」には櫓台状の小さな丘が残され稲荷神社が祭られている。また、平成７年の明石市教育委員会などの調査でわずかながら存在が検証されつつある。

こののち、明石の地は豊臣家の蔵入地となるが、慶長５年（1600）の池田家入部により、池田家領となる。さらに、元和６年（1616）には本多忠真が入部し、明石城を築き船上城は廃城となる。

〔参考文献〕

中四国城館調査検討会　2005『第 10 回　中四国城館検討会資料』

兵庫県教育委員会　1985『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』

多田暢久　1994「中世の城館」『大都市の中の農村』和泉書院

神戸市教育委員会　2005『平成 17 年度　神戸市埋蔵文化財包蔵地分布調査』

神戸市教育委員会　2004『平成 13 年度　神戸市埋蔵文化財年報』

兵庫県教育委員会　1985『芝崎遺跡』

木村英昭　1985『史料明石の戦国史』

神戸市教育委員会　2000『玉津田中遺跡発掘調査報告書』第８・10・12・13・15 次調査－宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

兵庫県教育委員会　1993『浄谷遺跡・南山古墳群・玉津田中遺跡南大山地点』兵庫県文化財調査報告　第 121 冊

兵庫県教育委員会　1995『玉津田中遺跡第６分冊（総括編）』兵庫県文化財調査報告　第 135-6 冊

表１　周辺の遺跡

1	福中城跡	30	鬼神山群集墳	59	西の谷群集墳
2	芝崎遺跡	31	天王山古墳群	60	下村遺跡
3	玉津田中遺跡	32	天王山古墳	61	散布地
4	居住遺跡	33	白水瓢塚古墳	62	下村古墳群
5	慶明宮山遺跡	34	延命寺古墳	63	春日神社西遺跡
6	居住・小山遺跡	35	高津橋大塚古墳・遺跡	64	西神Ｎ.Ｔ№55
7	日輪寺遺跡	36	馬掛原遺跡	65	西神Ｎ.Ｔ№56～№60
8	花丘群集墳	37	水谷遺跡	66	大畑遺跡
9	二ツ屋遺跡	38	南山神古墳	67	春日神社裏山群集墳
10	小山遺跡	39	水谷遺跡	68	春日神社遺跡
11	丸塚遺跡	40	二ツ屋東遺跡	69	西神65号遺跡
12	出合遺跡	41	鎌谷群集墳	70	西神Ｎ.Ｔ№50
13	中村群集墳	42	ザブカゼ古墳	71	西神Ｎ.Ｔ№48
14	王塚古墳	43	青谷南遺跡	72	西神Ｎ.Ｔ№45～47
15	枝吉城跡	44	青谷南遺跡	73	繁田遺跡
16	曙町遺跡	45	青谷遺跡	74	西神Ｎ.Ｔ№41・42
17	散布地	46	城ガ谷遺跡	75	堅田遺跡
18	森友遺跡	47	散布地	76	西神Ｎ.Ｔ№40
19	持子遺跡	48	松本古墳	77	堅田神社古墳
20	散布地	49	丸尾谷古墳	78	西神Ｎ.Ｔ№21
21	下津橋砦	50	松本遺跡	79	養田遺跡
22	今津遺跡	51	川重裏山遺跡	80	印路群集墳
23	高津橋岡遺跡	52	栃木遺跡	81	印路遺跡
24	万願寺遺跡	53	如意寺	82	西戸田遺跡
25	潤和遺跡	54	菅野遺跡	83	印路遺跡
26	白水遺跡	55	松本古墳群	84	矢の谷群集墳
27	南別府遺跡	56	松本古墳群	85	常本遺跡
28	北別府遺跡	57	西神62号遺跡	86	黒田遺跡
29	新方遺跡	58	栃木遺跡	87	散布地

第３章　１～３区（芝崎遺跡）の調査

第１節　概要

１区から３区までの地区は現在では西区平野町向井にあり、平野町芝崎に位置する芝崎遺跡とも、福中城跡が位置していたと推定される平野町福中とも異なった大字に属している。福中城跡は北東から南西に走る２本の谷地形を外堀に利用した城郭と推定されていたため（岡・黒田 1961）、３区以南は城郭の外側となることから、芝崎遺跡に含まれるものとして対応した。

１・２区は平成７年度に、３区は平成 13 年度に調査を実施した。１・２区間は地山が著しく高くなっており、現状では大きく削平されているものと判断された。２・３区間は埋設管のある現道のため調査できなかった。

第２節　１区の遺構

１区は今回の一連の調査において最も南に位置する地区である。昭和 60 年度に調査された芝崎遺跡に約 40 ｍと近いことから、同遺跡と一連のものとして考えられた。

１区は調査前には民家の建つ平らな地形であったが、南側は谷地形となり、水路が存在する。この水路以南が平野町芝崎字樋ノ口であり、１～３区の調査範囲は平野町向井字前垣内に含まれている。１区の北側では２区との間の道に地山を削った切り通しの断面が観察できた。このことから１区は北から南へと傾斜する地形であることが予想され、確認調査の結果でも１区の北側は砕石を含む盛土直下で地山が検出され、遺構や包含層は完全に削平されていることが判明した。このため１・２区間の本発掘調査は実施しなかった。１区の調査結果でも１区の北端から約１ｍまでは地山が即検出され、そこから南端までは１ｍ以上の比高差が認められる。

この地区からは、古墳時代後期から奈良時代前期の竪穴住居や溝、中世前半の土坑などが検出された。

１．竪穴住居

SH01（図版７、写真図版 12）

１区の中央西寄りで検出された。南西隅が調査区外となり、また一部を撹乱で失うが、ほぼ全容は把握できる。一辺約６ｍの方形の平面形を有し、北側では約 35 ㎝の高さの周壁を残す。周壁溝は断続的にしか見られず、杭或いは矢板などを打ち込んだ痕跡の可能性が高い。主柱穴は４本と思われるが、そのうち東側の２本は直径 65 ～ 80 ㎝、深さ 40 ㎝以上と大きな規模をもつ。床面や埋土からはあまり遺物は出土せず、図版 35 の７・８が図化できたに過ぎないが、埋土の上層と考えられる遺構検出中にも須恵器杯片が出土している。

北壁の中央に造り付けの竈を有する。竈は一部確認調査時に削平したが、明黄褐色中砂～細砂で構築した両袖が残る。奥行き約 1.5m 、焚口幅約 0.8m を測る。燃焼部からは土師器甕の破片（図版 35 の２・３）が口縁部を下にして出土している。竈内部の土師器周辺の床は 15 ㎝程掘り窪められており、支脚として一部を埋め込んで用いられたものであろうか。竈の埋土の上層からは図版 35 の４～６の須恵器

片が出土している。

SH02（図版８、写真図版 13）

１区のほぼ中央、SD1002 の南側で調査区の東壁に一部がかかる形で検出された。焼土塊や炭片が大量に含まれ、特に床面には炭が多く堆積していたため、当初土師器焼成土坑の可能性をも考えていた。調査の進展と共に須恵器片や煤の附着した土師器も含まれていることが判明したため、別の性格をもつものとして竪穴住居とした。平面形が方形の竪穴住居の一隅が検出されたものと考えていたが、周壁溝などは検出できず、壁面も SH01 よりも傾斜することから、土坑である可能性が高いが、SH として報告する。

前述のように、埋土の下層には炭片や焼土、直径 10 ㎝以下のスサを含んだ炉或いは竈壁片などとともに大量の土師器片が含まれていた。須恵器片はわずかで、図化できたものは１点にすぎない。土師器には杯・甕・鉢・竈が見られ、甕などの一部には使用による煤が附着したものが見られる。（図版 37・38 の 15 ～ 42）

主軸方向は西隣の SH01 とは異なり、等高線に並行する溝 SD1002 とも異なる。

２．溝

SD1002（図版８、写真図版 14）

１区の北半部を東西に横切る溝で、西端では竪穴住居 SH01 を囲むように湾曲する。等高線にほぼ沿った位置に設けられており、底の深さも東西では余り差はない。幅 0.8 ～ 1.2m 、深さ 15 ～ 28 ㎝を測る。埋土から土師器甕・鍋・イイダコ壺とともに円筒形の土製品が数点出土したため、調査完了直前に西側の用地境界ぎりぎりまで約 40 ㎝の幅で範囲を拡張して遺物を検出したところ、土馬の頭部などが出土した。（図版 35・36 の 9 ～ 14）調査範囲内からは土馬の頭部・左前足、右後足と胴部の一部、右前足、左後足がばらばらの状態で出土した。胴部の大半や尻尾、耳先、たてがみは欠損している。

３．土坑

SK1001（図版９、写真図版 17）

１区の南端で検出され、南半は調査区外となる。幅約 80 ㎝、深さ約 30 ㎝の隅丸長方形の土坑で、墓址となった SK1006 と主軸方位や規模が近いものである。土師器小皿（46）が出土した。

SK1002

１区の南西隅で検出された。東西約 2.5m 、南北約 1.3m 、深さ約 10 ㎝の皿状の落ち込みで、掘立柱建物 SB1 の柱穴が切り込んでいる。10YR5/3 にぶい黄褐色中砂の埋土をもつ。須恵器小皿（47）や、図化できなかったが外面に赤色顔料の附着した須恵器杯Ｈ片が出土している。

SK1005（図版 10 、写真図版 17）

調査区のほぼ中央に位置するひょうたん形の平面形をもつ土坑である。南側が約 35 ㎝と深く、北側は約 30 ㎝の深さで、北西の肩付近から土師器鍋・羽釜、須恵器鉢片（48 ～ 52）が出土した。

この土坑の南東に位置する SK1004 も深さ 0.3m ほどの土坑であり、SK1005 と同様の埋土をもつが、

ここからは遺物の出土はない。

SK1006（図版９、写真図版 15・16）

竪穴住居 SH01 の東側で北辺を揃えるように検出された。南北約 1.15 m、東西 0.8 mの隅丸方形の平面形を持ち、深さは約 35 ㎝で壁面はほぼ垂直に立つ。床面はほぼ平らだが、南東部が僅かに窪む。人骨の検出はなく、また、木棺の痕跡も検出できなかったが、箱形の棺を収めた土壙墓であろう。釘などの棺装具も出土していない。

北東の隅から須恵器椀２点（56・57）が壁にもたれるように斜めになって出土し、その下には土師器小皿が３点（53 ～ 55）やはり重なって出土した。更にその下からは青銅製の和鏡（M1）が１点鏡面を外にして、やはり壁にもたれるように出土した。55 の土師器底部には緑青が附着する。出土時の鏡は錆化が著しく一部の周縁を失い、鏡背の紋様も確認できなかったが、保存処理の結果、小型の飛ぶ鳥や菊花らしき紋様が鋳出されていることがわかった。鏡面には針葉樹と思われる木質が附着しており、棺材に接していたか或いは、鏡箱に収められていたものと推測される。周辺の最下層からは堅果類と思われる植物種子の皮片が数点出土しており、数珠玉や鏡などに伴う紐飾りではないかと推定される。土器や鏡は棺上に供えられていたものが棺の腐朽とともに転落したものと考えられる。

また、土壙床面に食い込むように鉄塊が出土しており、当初は鉄滓と考えていたが、Ｘ線撮影と錆落しの結果、鉄製鋤先の一部（M2）と判明した。棺下にあったものと考えられる。58 の平瓦片は埋土中出土のものである。この土壙墓は出土した土器から 12 世紀後半から 13 世紀前半頃のものと思われる。

SK1009（図版９、写真図版 17）

SH01 の西半部で竪穴住居埋土を切り込んで検出された。南北約 1.35 m、東西 0.7 mの隅丸方形の平面形を持ち、深さは約 25 ㎝で壁面はほぼ垂直に立つ。出土遺物は見られないが、ほぼ同様の規模や主軸方向をもつ SK1006 と類似することから、墓址の可能性が高い。SK1006 や SK1009 周辺の包含層からは 68 の白磁椀が出土しており、墓址に伴うものの可能性がある。

この他、１区南東隅で検出された SK1007 からは古墳時代の須恵器杯片が出土している。また、機械掘削後に排水・土層観察用のサブトレンチを調査区東壁に沿って掘削したところ、北東部で土坑状の落ち込みを検出し、土馬の脚部片や尾部片が出土した。この遺構は遺構検出時には見当たらず、また土層断面でも確認できなかったことから、浅く小さな落ち込みであったものと思われる。この遺構と SD1002 から土馬脚部が合計５点出土していることから、複数の土馬が存在していたことがわかる。遺物の報告に際しては北東土坑出土として取り扱う。

４．掘立柱建物

掘立柱建物は発掘調査中に復元できたものは SB01 の１棟のみである。復元できなかったが、他にも SH01 に切り合う形で柱穴が集中している。これらの建物の主軸方位は SH01 や SD1002 と一致するが、北端の現代の溝にも一致することから斜面の地形に即した方位をもつものであろう。

SB01（図版 10 、写真図版 17）

調査区の南西端で検出された２間×２間以上の南北棟の掘立柱建物である。柱間は桁行で 1.1 ～ 1.5m 、梁間は 0.9 ～ 1.3m である。柱穴の規模は比較的大きく直径、深さとも 40 ㎝を越えるものがある。柱根の埋土上層に石が入っているものが見られる。出土遺物は少なく図化できるものはなかったが、北東の P1007 から土師器鍋片が、他の柱穴からも須恵器の糸切りの底部や椀片が出土している。また、柱穴が切り込んだ土坑 SK1002 からは 47 の須恵器皿が出土している。

SB02

SB01 の北東側に接するように２間×３間以上の東西棟建物が検出された。この建物は直径 15 ㎝以下で深さ 20 ㎝ほどの非常に小さな柱穴で構成されている。柱間は 1.8 ～ 1.9m と等間であり、更に東側に２間延ばした位置にも同規模の柱穴があることや、中央の列にも西から１間と４間の位置にやはり同規模の柱穴が見られることから東西５間以上の建物であることが推測できる。時期の決定できる遺物は出土していない。

５．井戸

SE01 （図版 10 、写真図版 17）

１区の西辺、竪穴住居 SH01 の南側で素掘りの井戸を検出した。平面形は直径 0.8m の円形で、深さは約 2.2m を測る。底付近では直径約 0.94m と広くなる。深さ約 1.5m 付近では地山が砂層質となり湧水が見られた。出土遺物は見られない。同様の素掘り井戸状の遺構は芝崎遺跡では、昭和 61 年度の立会調査や今回報告する２区でも検出されているが、平面規模は一回り大きく、深さは浅いものが多い。

第３節　２区の遺構

２区は南に下がる１区から一旦上りきった段丘頂部の平坦地に位置する。１区北端まではやや高くなっていたらしく、現状では大きく削平されて、遺構・遺物包含層は残存していなかった。

調査区の北端は調査直前まで民家が建っていたため、撹乱が著しかったが、その他は中世前半から近代までの遺構が同一面で検出されている。弥生土器片も出土しているが、弥生時代、古墳時代の遺構は確認できなかった。南端部は地形的には上がっていると想定されたが、溝状遺構が検出され、その上面は地山に類する土層で整地されていた。

１．掘立柱建物

２区北端部で１棟のみ復元できた。この他にも、この SB03 周辺や井戸 SE05 周辺には柱穴が集中しているため、複数の建物が存在した可能性が高い。

SB03（図版 13）

２区の北半で復元したが、調査区の東に続くものと思われる。南北２間以上、東西１間以上の建物で、柱間は約 2.5 ｍを測る。南西隅の P2014 から須恵器鉢(71)が、その北側２間目の P2017 からは石硯(S22)と滑石の石鍋を加工した温石（S23）が出土しており、いずれも 13 世紀頃のものと考えられ、２区の他

遺構群よりも古い傾向を示している。

２．甕倉

甕倉１（図版 13 、写真図版 27）

２区のほぼ中央部の西よりで検出された。平面形が円形を呈する深さ 20 ㎝程の浅い土坑が連続して設けられており､その各々に甕の底部を据え付けた埋甕遺構と判断した。各土坑の間隔は狭く､土坑心々距離は 0.7 ～ 0.9 ｍを測り、土坑間の隙間は 20 ㎝以下の箇所も見られる。西側や南側は６基並ぶが、他の列は１～４基となり、合計 20 基の甕を据え付けたと考えられる。南側、東側の土坑の規模がやや大きいようだ。

北西端の土坑からは北方向に小溝が走る。南西の２基は SK2012 に切られている。SK2012 は浅い不整形な平面形の土坑で、炭片やスサ入りの焼土塊、須恵器片が出土している。また、近接する SX02 ～ 04 を含めた範囲はその東側から一段低く下げられている｡元々半地下式の倉庫としての甕倉が想定でき、SX02 ～ 04 も近世の遺物が出土し、粘土採掘坑としているが、一連の遺構であった可能性も残される。

甕を据え付けたであろう土坑内の１ヶ所から須恵器甕破片が出土している以外には、この甕倉に備わっていた甕や時期を推測させる遺物は出土していない。但し甕倉１周辺の近世以降の粘土採掘坑などからは備前焼と思われる大型の底部片が数個体分出土していることから近世段階に廃棄された可能性も考えられる。

３．井戸

２区の井戸は石組みを持つもの、桶組みを持つもの、素掘りのものがある。石組みを持つものには SE02 と SE05 の２基があり、16 世紀代の遺物が出土している。時期的にも最も古く、福中城の時期に一致する。素掘りのものは１区のものに比べて浅く、水溜状のものであろう。これらは 18 世紀以降のものが多い。

SE02（図版 14 、写真図版 21・22）

２区の北半で検出され、周辺には SE06 、SE07 と時期や構造の異なる井戸が集中する。

直径 1.7 ｍ以上の歪な円形の平面形をもち、約 35 ㎝の深さまでは漏斗状に落ち込み、以下は直径約 1.2 ｍとなり、約 1.55 ｍの深さまでほぼ垂直な掘り方をもつ。内径約 50 ㎝の主として川原石を用いた石組みをもち、石組みの一部には一石五輪塔が用いられていた。一石五輪塔は最下段から三段目までに多く見られ、長手方向に積まれたものもあるが、多くは地輪底面を内側にした小口積みである。一石五輪塔は６点出土し、内４点が完形に復元されるが、３点が風輪と火輪の間で折れている。

井戸の底はわずかに窪む程度で、曲物等を設置した痕跡は見られなかった。井側内の埋土は上層を除くと自然堆積と考えられる植物質を含んだシルト層で、底付近から箱作りの釣瓶（W1）が把手は外れていたものの、そのままの形で出土した。その他には曲物側板片も出土している。また、底部に墨書の残る無釉陶器（72）や平瓦片（73）などが出土した。

SE03（図版 16 、写真図版 25）

２区のほぼ中央東壁沿いで検出された。この地点にも SE04 、SE08 と井戸が集中している。南北約

1.5 mの不整円形の平面形を呈し、深さは１mを越える。湧水の見られる中砂層を掘り抜き、礫層にまで達していることから、素掘りの井戸とした。埋土はレンズ状の堆積が見られるが、一部に炭やベースブロックが含まれることから、人為的に埋められた可能性がある。74 の無釉陶器香炉やW３の曲物底板の他、備前焼破片や土師器擂鉢片が出土した。

SE04（図版 17）

南北 2.5 mを測るが、大半が調査区の外となる。深さは約 40 ㎝と浅いため、粘土採掘坑などの可能性もあるが、湧水層を掘り抜いていることから井戸とした。埋土中に礫が多いなど SE03 と類似する。遺物は出土していない。

SE05（図版 15 、写真図版 23・24）

２区のほぼ中央部、調査区の西壁に接した位置で検出された。検出当初は長径約 2.2 mの楕円形の土坑内に拳大から 30 ㎝大の河原礫が北西部に偏って充填されていた。この礫層からは石臼片（S19）や砥石（S21）が出土している。南東部は極細砂層となるが、約 0.8 m以下の深さでは再び埋土全体が拳大の礫層となる。その下面で井側の石組みが検出されるが、石組みは高く積まれた部分でも３段程度しか残されていない。井側内からも塊石が検出されていることから、人為的に石組みも崩され、礫を投入して破棄した可能性が高い。

掘り方は、深さ約 1.5 m付近で長径約 3.0 mと広がって袋状を呈している。石組みの周囲はすべて拳大の礫によって裏込めされており、他の井戸とは掘り方・構築法が異なっている。

石組みは木材を井桁に組んだ根太上に積み上げられている。根太はマツ（二葉）の芯持ち材を用いており、根に近い湾曲した材を意図的に用いて、湾曲した面を内側にして２本を約 0.75 mの距離に平行に据え、その上の両端に跨るように別の２本の材を仕口によって組んでいる。積み上げられた石材は差し渡し 0.6 mもの大きなものや、五輪塔の地輪（S15・16）が含まれている。埋土中や裏込めからは一石五輪塔片やわずかではあるが宝篋印塔片（S17･18）も見られる。また､底近くの埋土からは漆器椀（W6･7）、曲物底板や竹などとともに桶材と考えられる幅約７㎝、長さ 50 ㎝程の板材（W 13）が４点出土しているが、根太以下は浅く、井戸の溜水施設として結い桶を組んだものかはわからない。

埋土からは土師器擂鉢、備前焼擂鉢・甕、染付、瓦など（75 ～ 86）が出土している。16 世紀後半に埋められたものであろう。

SE06（図版 16 、写真図版 25）

SE07 の北側に接するように検出された。長径 2.6 m、短径 2.0 mの楕円形の掘り方内に、直径約 1.1 mの結い桶を組み込んでいる。桶は針葉樹の幅 13 ～ 18 ㎝､長さ 60 ㎝程の板目材を 12 枚繋いだもので、表面にはたがの痕跡が残るものである。たがは残存していなかった。掘り方は桶上面で段をもち、その部分には拳大の礫を配している。87 の徳利や 88・89 の瓦が出土した。18 世紀代の時期が与えられる。

SE07（図版 17 、写真図版 25）

SE02 を切り込むように接しており、西半は撹乱により破壊されているが、長径 2.15 m、短径 1.6 mの楕円形の平面形をもち、深さ 0.7 mを測る素掘りの井戸である。粘土質細砂を掘り抜き、礫層にまで

達している。90 ～ 94 の焙烙・備前大甕・施釉陶器・染付磁器の他、瓦小片やW 14 のイスノキ製の横櫛が出土した。18 世紀後半までの時期が与えられる。

SE08（図版 17）

SE03 、SE04 に近接して検出され、大半が調査区の東外となる素掘りの井戸である。平面の南北は約 1.8 m、深さは 1.1 mに達する。出土遺物は見られないが他の素掘りの井戸と同様、近世のものであろう。

４．粘土採掘坑

２区の北半で検出された比較的平面規模が大きく、浅い土坑を粘土採掘坑とした。掘削がシルト層までであり、その下層の礫層に達した深さで止まっている。但しSX01 やSX04 では底に塊石が並んでおり、別の性格を持つものかもしれない。その他のものでも溝が伴うなどの状況が看取されることから、瓦などに用いられる粘土を採取後、粘土溜まりや粘土をこねる作業をこの場所でおこなったことも考えられる。すべて達磨窯状遺構の周辺に配されていることから、近世の瓦製作に関連したものと考えている。

SX01

井戸 SE03･04･08 の西側、窯状遺構２の北東で検出された。南北５m、東西６m程の歪な平面形をもち、深さは 0.4 m程である。北辺には SD2011 が取り付き、南辺からは西に小溝が延びている。ほぼ中央の底には５石の塊石が東西に並んでいる。96･97 の陶磁器、98 ～ 100 の瓦の他、切り込みをもつ桟瓦片や、W15 の板状木製品が出土した。

SX02・03

窯状遺構１・３の西で検出された。ともに 0.3 m程度の深さである。SX02 の南端壁沿いには拳大の石が３石並ぶ。北東には直径 1.2 m、深さ 0.2 m程の円形の土坑 SK2011 が見られ、共に瓦片や近世陶磁器小片が出土している。南辺には小溝が取り付き、SX03 の西側には SD2012 が東西に走る。

SX04（図版 17）

南北約 5.1 m、東西約 3.6 mの隅丸長方形を呈している。深さは 0.7 mと他のものに比して深いが、極細砂層まで掘り下げ、礫層に達して止めている。南辺は SD2012 に接している。101・102 の陶器や 103 の軒丸瓦片の他も瓦片が出土している。

５．達磨窯状遺構

２区の中央部から北半にかけて３基の窯状遺構を検出したが、焼土を伴って火を用いた痕跡が見られるのは窯状遺構２の１基だけである。窯状遺構２・３は一方の燃焼室のみの検出であるが、達磨窯状遺構としておく。SD2011 内から出土した瓦（図版 44 の 134 ～ 138）や粘土採掘坑等から出土した瓦もここで焼成されたものであろう。

窯状遺構１（図版 18 、写真図版 26）

２区の北半で検出された。機械掘削時の検出でユンボの爪痕状に観察されたため、当初撹乱と考えて

いたが、爪痕が向かい合っており、ベース層と異なる粘土質の土層が一部分布していたことから遺構と判断し、姫路市の「大釜瓦窯跡」調査担当者の教示を受け、達磨窯の基底部であると判断した。達磨窯は、焼成室を中央に置き、その前後それぞれに燃焼室と焚口をもつ平窯である。

現存する全長は 4.64 m、最大幅 2.35 mで、平面形は楕円形を呈している。幅約 0.8 mの焼成室からは、４本の畦と約 30° の角度をつけた５本の溝状の焔道が燃焼室に向かって下っている。焼成室の一部と燃焼室には最大で 15 ㎝の厚さで黄褐色シルト質極細砂を貼り付けており、畦も貼り付けにより構築されている。燃焼室の深さは貼り床下で 38 ㎝、貼り床上で 28 ㎝を測る。黄褐色シルト質極細砂内からは数十片の桟瓦の破片が南北とも出土しており、敗瓦を用いて窯を構築した可能性がある。

上面を大きく削平されており、天井部や壁は残存しない。また、焼土や炭・灰なども検出されていないことから、何らかの理由によって窯構築途上で作業を中断したものと思われる。

窯状遺構２（図版 18 、写真図版 26）

２区の南半中央寄りで井戸 SE05 に近接して検出された。歪な半円形の土坑の一部が焼けており、一部には炭の堆積が見られた。達磨窯の燃焼部の一方が検出されたものと考えるが、もう一方の燃焼室は浅い落ち込み状となり、不明瞭である。畦は３本、溝状の焔道は４本と思われる。残存する推定全長は 2.84 m、幅は 1.6 mとなる。

窯状遺構３（図版 18）

窯状遺構１の南に近接して検出された平面形が半円形を呈する土坑である。深さは 10 ㎝程しかなく、火も受けていないが、両端に溝状の焔道と思われる突出部が認められるため達磨窯状遺構とした。焔道と考えた両端部で石が数点認められた。

６．溝状遺構

SD2004（図版 19 、写真図版 28）

２区の南端で検出された東西方向に走る溝である。西端で規模が最大となり、幅は約 3.2 m、深さ約 0.4 mを測る。105 の土師器鍋の他、須恵器の椀・鉢・甕片が出土している。隣接して並行に走る SD2005 と異なり、備前焼や瓦は出土していない。15 世紀中頃までに埋没したものであろう。

この SD2004 の西端の南に土坑状の SD2007 が掘られているが、ここからは近世の遺物が出土している。

SD2005（図版 19 、写真図版 28）

SD2004 の北側約１mの位置に SD2004 と平行に東西に走る溝である。西端は一旦途切れて、西側にまた SD2006 が掘られている。幅約 2.6 m、深さ約 0.4 mを測り、北側は更に２m程の幅で、深さ 15 ㎝程の浅い段が設けられており、東端は別の落ち込みが見られる。東端に近い部分には拳大程度の礫が幅約２mにわたって検出されている。上面が削平されていることを考慮すると、土橋状の施設であろうか。

図化した 106 ～ 115 以外にも備前焼大甕片や小型の徳利と思われる備前焼破片などの土器が出土しており、また掲載した 116 ～ 118 や 201 以外にも 20 片近い丸瓦・平瓦片が出土している。16 世紀後半には埋没したものと考えられる。

SD2006（図版 19）

SD2005 の西側で検出されたが、一部のみの検出であるため、溝であるかも確かではない。SD2005 が一旦途切れ、西に続くものかもしれないが、深さは 0.45 m と SD2005 よりも深くなる。119 ～ 129 の土器が出土している。他に備前焼の破片も出土している。

SD2006 から北側は削平が著しいが、一段低い部分があり、SD2009 としている。ここからは 130 ～ 133 の土器が出土している。

SD2011（図版 19 、写真図版 28）

２区のほぼ中央を東西に走る溝で、西半で幅約 0.9 m、深さ約 0.3 mを測る。SX01 を挟んで規模や様相が変わることから別の溝の可能性もある。西半部では底に桟瓦数枚（134 ～ 138）が敷かれているように出土した。

SD2012

粘土採掘坑 SX04 の南を東西に走る溝で、幅約 0.4 m、深さ約 0.1 mを測る。SX04 を囲むように東端を湾曲させるが、その部分で途切れる。桟瓦片が出土した。

第４節　３区の遺構

３区では表土層の直下は黄褐色の地山面となり、遺物包含層は南西隅の一部を除き遺存していなかった。地山面の高さは東端で 37.25 m、南端で 37.17 mを測り、傾斜は東から西に向かってゆるやかに下がっている。ややレベルの高い調査区東半分は近現代の開墾により削平を受けたと思われ、検出された遺構はいずれも近現代のもので、中世代を中心とする遺構群は西半分から検出されている。西側で検出された遺構は SE09 、甕の据付穴群（甕倉２）および南側外堀の肩口の一部である。

１．井戸

SE09（図版 21 、写真図版 31）

調査区の南西隅から検出された遺構である。円形の掘りこみで、径 1.2 m、深さ 0.95 mを測る。側壁はほぼ垂直、底面は平らである。埋土は第１層暗灰褐色細砂、第２層黒色砂質シルト（炭層）、第３層褐灰色シルト質細砂、第４層灰褐色シルト質細砂、第５層暗黄褐色シルト質細砂の５層に分かれる。第３層から第５層は人為的に埋められた土層である。壁面がほぼ垂直で、埋土中に壁面の崩壊土が含まれていないことから判断して埋桶の可能性があるが、木質部は全く検出されていない。他地区でも同様の遺構が検出され、状況から井戸遺構と判断しており、ここでもその見解に従う。なお、遺物は出土していないので、時期については不明である。

２．甕倉

甕倉２（図版 21 、写真図版 31）

調査区北西隅から検出された遺構である。当初、３×３間の総柱建物と想定し、調査を進めた。しかしながら、明瞭な柱痕は検出できず、掘方の断ち割りでも柱痕断面は検出できなかったことから検出遺

構は柱穴ではなく甕の据付穴と判断した。甕の据付穴は南北辺・東西辺ともに４つずつ並び，計 16 個あるが、同様の穴はこの一群の西側にも２個検出されている。この２個を含めると調査区内からは計 18 個の据付穴が検出されていることになる。据付穴は直径 0.8 m前後、深さは深い穴で 0.45 m、浅い穴で 0.1 m前後である。

据付穴からは甕そのものは出土していないが、埋土中から土師器椀（141・142)、土師器擂鉢（143)、土師器鍋（145)、無釉陶器擂鉢（144)、無釉陶器壺（146)、施釉陶器椀（147)、白磁椀･皿（148 ～ 150）が出土している。このうち土師器椀 141 は 12 世紀後半から 13 世紀前半代のもので甕倉の時期を示すものではない。これ以外で最も古く遡るものは無釉陶器壺（146）で 14 世紀から 15 世紀代、時期の下るものでは、施釉陶器椀（147)、白磁椀･皿（148 ～ 150）で 16 世紀代、土師器鍋（145）が 16 世紀末前後の年代に比定されている。以上のように遺物に比定年代の上下幅は認められるが、遺構は 16 世紀を中心とする年代が考えられる。

この他、３区南西端の SE09 の南で 25 ㎝ほど一段落ち込んだ箇所があり、SX05 とした。灰褐色砂が堆積しており、土師器椀 151 が出土した。ここからは他に燻瓦片や土師器焙烙片が出土している。近世のものであろう。

また、３区中央の直径 0.6m 、深さ約 12 ㎝の柱穴状遺構 P3006 からは、18 世紀後半から 19 世紀前半のものである無釉陶器 153 が出土している。

３区中央部の SK3001 は直径 1.5m 、深さ 35 ㎝の平面形が円形を呈する土坑であるが、他の近世以降の遺構と同様の埋土を有するものである。ここからはＭ３の金銅製飾り金具とＭ４の鉄釘が出土した。

〔参考文献〕

兵庫県教育委員会　1987『芝崎遺跡』

岡　久雄・黒田義隆　1961『福中城と間嶋彦太郎』神戸市文化財調査報告４　神戸市教育委員会

兵庫県教育委員会　1981『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』

神戸市教育委員会　1987「芝崎遺跡」『昭和 59 年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会　1985「如意寺」『昭和 57 年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会　1998「附物遺跡」『平成 10 年度　神戸市埋蔵文化財年報』

仁尾一人他　1996『大釜瓦窯跡』兵庫県文化財調査報告第 156 冊　兵庫県教育委員会

藤原　学　1991「兵庫県姫路市御国野町所在深志野瓦窯の実測調査」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会

藤原　学　2000「織豊期における達磨窯と瓦生産」『織豊城郭』第７号　織豊期城郭研究会

吹田市立博物館　2007『達磨窯－瓦匠のわざ 400 年－』平成９年度特別展図録

村田　弘　1989「根来寺坊院跡発掘調査の成果」『中世末から近世のまち・むらと都市』第 27 回埋蔵文化財研究集会実行委員会

菅原良祐　1992「甕倉出現の意義－中世経済の一足面－」『国立歴史民俗博物館研究報告第 46 集』

兵庫県教育委員会　1999『三田城跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 194 冊

第４章　４～12区（福中城跡）の調査

第１節　概要

３区の北端で検出された南側外堀の南肩以北では、４区・５区の本発掘調査や、数次に亘る確認調査及び、ボーリング調査によって深さ５ｍほどの落ち込みが続くことが判明した。この大きな落ち込みは６区南端まで続き、６区南端で検出された南への落ちを同じく南側外堀の北肩とした。また、６区では内堀南辺を検出した。

７・８区は福中城跡中核部となるが、確認調査でも判明していたように、かなり大きく削平されており、本発掘調査を実施した７・８区でも面は検出できたものの、顕著な遺構は全くといって検出されず、また、遺物も出土しなかった。

９・10区の調査で北辺の内堀の幅が判明したが、調査では深さを判明するには至らなかった。10区の北端で検出された落ち込みを北側外堀の南肩とし、11区南端の落ち込みをその対岸、北側外堀の北肩と想定した。

このように３～６区間で検出された南側外堀と、10～11区間で検出された北側外堀の南北２本の大型の落ち込みを外堀として、その内側にあたる４区から10区を福中城跡として捉えた。

当該地区は、昭和36年の「福中館城址想定復原平面図」（岡・黒田1961）では福中城の本丸跡及び二の丸跡とされており、この復元図に従うと調査区はこの本丸跡を南から北に縦断する形になる。同報告書では、明舞国道（国道175号線）と本丸平坦線の比高差は2.3ｍあったと記されている。ところが、現在では国道175線と調査地は高さがほとんど同じで比高差がない。現地での聞き取りによると、国道の高さに合わせた調査地一帯の地盤の切り下げが行なわれたということである。今回の発掘調査では、検出された遺構は、深度のある外堀と内堀のみで、城に伴う建物等の遺構は検出されず、当時の遺構面が削平されてしまった可能性が高い。

11・12区は想定では福中城域外となるが、11区では福中城期の堀状遺構なども検出された。また、弥生時代の竪穴住居が検出された。

12区は今回の本発掘調査範囲の北端部にあたる。11区とは約60mの距離を隔てている。12区では南へ落ちる谷地形の北肩を検出した。12区以北は確認調査の結果から見て、地盤が大きく改良されているが、遺物なども出土していないことから、各時代の集落からは一旦外れるようである。

11区と12区に挟まれた大きな谷地形は現状では神戸市環境局の用地であり、多くの車両の出入りがあるため、本発掘調査は不可能と判断された。南端部の確認調査および、ボーリング調査により、約6.7ｍの深さがあることが判っている。

第２節　４～６区の遺構

３区北端で検出できた北へ向かって落ちる落ちを南側外堀の南肩とし、６区南端で検出された南への急激な落ちを同じく南側外堀の北肩とした。４区・５区はこの南側外堀の深さや堀の堆積状況を把握するために設定した。範囲内では本発掘調査以外にも、数次に亘る確認調査や、ボーリング調査を実施し

ている。また、６区では内堀南辺を検出した。

南側外堀

谷の自然地形を利用している。外堀の名称を与えてよいかは、議論の余地があろうが、城全体の発掘が行なわれていない現状では判断が難しいので、ここでは外堀と呼称しておく。

３区調査区北端において南肩の一部、６区の南端で北肩が検出された。３区で検出された南肩は北肩のように急に深くなるのではなく、ゆるやかに北に向かっての下がり勾配となっており、深さは最も深い北壁際で 0.8 mでしかない。肩の一部が崩れ、本来の肩口よりも幅が広がっている場合もあるので、検出した南肩口は正確には本来の肩口を示していると言えるかどうかは不明である。

深さについては、４・５区において２mの深さまで機械掘削を実施したが、底面には至っていない。それ以上の掘削は狭い調査区の中で危険を伴うので実施していないが、国土交通省が事前に行なったボーリング調査のデータでは GH31.5m のレベルが底面となっている。遺構検出面での両肩口の GH が 37 m前後であるので堀の深さは約 5.5 mと推定される。埋土層は約２mの深さまでは近現代のヘドロ土層であるが、深度２m以下の土層については、掘削に至っていないので把握できていない。平成６年度の確認調査では 4.6 ～ 6 m の深さで、自然堆積によると考えられる厚さ約 10 ㎝の黒灰色シルト層を検出したが、遺物は出土していない。

この南側外堀は前述のように数度にわたって掘削したが、近代以降の埋め土によって埋没しており、堀として機能していた時期の遺物は全く出土しなかった。近世・近代と溜池などに利用され、改修が行われたのであろう。著しい改変が行われた可能性はあるが、以上の調査によって南側外堀の幅は約 52 m、深さは約 5.5 mと推測できる。

内堀南辺（図版 23 、写真図版 34・35）

６区調査区のほぼ中央部で検出された東西方向に走る内堀である。幅は肩口で 4.5 m～ 5.0 m、底面で 1.9 ～ 2.9 mを測る。底面は平坦で、台形の断面形状を呈している。遺構検出面での肩口の高さは東端 37.55 m前後、西端で 37.22 m、底面の GH は東端 35.45 m前後、西端で 35.2 mである。底面の高さは東の方が高く西側の方が低い。検出面からの深さは 2.1 mである。

埋土層は図版 23 で示したように 10 層に分かれ、このうち第１層～第４層は現代の埋め土、第５層～第７層は城破却の堆積土、第８層～第 10 層は城活動時の堆積土である。城活動時の堆積層は砂質シルトを主体とし、４層に細分されるが、その間に１～５層の炭の薄層を挟む。炭層はすべて北側からの流入と判断される。この炭層に伴って、土師器鍋（154）・土師器片（157）、須恵質鉢（158）、無釉陶器壺（159）が、また、最下層からは土師器鍋（155）・土師器片口鉢（156）、須恵質甕（160）がそれぞれ出土した。このうち下層の土師器鍋（154）、無釉陶器壺（159）、最下層の土師器鍋（155）・土師器片口鉢（156）はおよそ 15 世紀後半から 16 世紀後半代の年代が与えられており、およそ城活動期の遺物と判断してよい。

須恵質鉢（158）は 13 世紀代の東播系須恵器である。また最下層出土の須恵質甕（160）も東播系須恵器であるが、口縁部の形態に類例がない。年代については不明であるが、東播磨系の甕の生産は中世の比較的早い段階で終了しているので、城活動期の 15 世紀から 16 世紀に年代が下るものとは考えられない。158・160 はともに伝世品か混入品の可能性が高い。

第３節　７～10区の遺構

６区北半から９区南半にかけての内堀に挟まれた範囲が福中城跡本丸に想定されている地区であるが、この範囲内では７区、８区を含めて遺構は全く検出されなかった。前述のように大きく削平されたものと考えられる。７・８区間にも確認トレンチを入れているが、同様に削平が著しかった。

９区北半から10区南半で検出された大きな落ち込みを内堀北辺とし、10区北半で検出された北向きの落ち込みを北側の外堀の南肩とした。

内堀北辺（図版25・26、写真図版37・39）

９区で検出された北向きに下がる落ち込みを南肩に、10区南端で検出された南向きに下がる落ち込みを北肩として内堀の北辺と想定した。９・10区間には現在でも利用されている里道と水路が走っているため、掘削範囲外とした。この地区には昭和30年代後半頃には市営「本丸住宅」があり、その宅地造営に伴って溜池が埋められたと地元の方から伺った。

９区で検出された南肩は比較的急に落ち込んでおり、現地表面から約２ｍの深さ、黄褐色極細砂質のベース面肩からは1.5mの深さまで掘削したところ、現地表面から約1.5mまではコンクリート片などで埋められており、それ以下は植物の根が多くはる湿地状の堆積であった。この堆積にも近世以降の陶磁器片などが含まれている。締りの悪い壁面は、湧水によって崩壊が起こっており、更に掘り下げることが躊躇された。調査終了直前に機械によって、一部更に１ｍ以上掘り下げたが、やはり湧水が著しく堀底は検出できず、堆積物も上層から変化がなかった。近世から近代まで溜池として利用されていたことが、埋没状況からも判断できた。９区では約10.5ｍの幅で検出できた。

10区南端では、約２ｍの幅で検出された。埋土は砂礫である。これにより、掘削できなかった里道部分を含めて内堀北辺の幅は16.4mを測り、内堀南辺の約３倍の幅を有していることになる。溜池改修の影響であろうか。９区の内堀北辺は６区で検出された内堀南辺から約70m北側で検出された。この範囲が「本丸」に相当するのであろう。

北側外堀（図版26、写真図版40）

10区の北端で検出された。肩口から約4.5ｍ掘り下げたが、底面には至らず、安全上からこれ以上の掘削を中止した。埋土はすべて現代に埋められたもので、4.5ｍの深度に至ってもビニール傘の出土があった。なお、南肩口には肩口から1.5ｍ下がったところに幅3.5ｍのテラス状の段があるが、土層からみて城当時のものではなく、近現代の時期のものである。恐らく、堀の斜面を削って段を作り、畑地等に利用したと思われる。

北側外堀の北肩は本発掘調査時には道路として利用されていたため、掘削ができなかった。このため、平成18年度に本体工事に伴う立会調査としてトレンチを設定したが、配水管が埋設されており、堀底の検出はおろか北肩の明瞭な検出もできなかった。但し、この堀の北肩が東側ではやや南に向かっていることが判明した。北側外堀の幅は調査範囲内では最大で約11mとなる。

また、二の丸と想定されている内堀北辺と北側外堀とに挟まれた地区の幅は約23mを測る。この範囲内では遺構は検出されなかった。

第４節　11 区の遺構

11 区は福中城跡の北側外堀の北辺に位置する。現状では南の 10 区からは１ｍ近く高くなっているが、西半は２ｍ以上の段差をもって崖状に開析谷へと落ちている。この開析谷と北側外堀に挟まれて岬状に突き出した突端部が調査範囲となる。

11 区西半の崖下部は国道に伴う歩道部分である。平成 12 年度の確認調査では深さ 1.7m まで掘削し、0.9m までは撹乱されており、その下層では植物遺体を含む自然堆積層を検出した。遺物は全く出土しておらず、本発掘調査範囲から除外した。

11 区では上下２面で遺構が検出されたが、上面では南北方向の鋤溝数条や幅１ｍ、深さ 10 ㎝程度の浅い溝などが検出されたが、遺物は伴っていない。また、竪穴住居の上面でも 1.5 ～ 1.7 ｍ間隔で並ぶ３基の柱穴と直交する位置にも柱穴を検出したが、深さ 10 ㎝以下と浅く、遺物も出土しなかった。これらの遺構はおそらく近世以降の畑などに伴うものであろう。この面から 10 ㎝も掘削しないで地山面となり、第２面となる。以下に第２面で検出された遺構について記述する。

１．竪穴住居（図版 29・30 、写真図版 43 ～ 45）

SH04

11 区の調査で確認された円形竪穴住居である。調査区南端で検出されており、古墳時代前期の方形プランの竪穴住居 SH03 が上面に築かれており、北側は福中城跡の堀と思われる大溝によって切られている。

SH03 に切られており、また調査区南東部は調査不能であったため調査は実施していない。しかし、ほぼ全体像を復原することは可能である。やや歪ではあるが、径 6.5 ｍの円形プランを採っている。床面までの深さは最大 25 ㎝を測る。東側の方が残存状態が悪い。西側には幅 20 ～ 32 ㎝の壁溝が巡っている。検出面で焼土・炭ともに建築材が炭化した状況で確認されている。が、炭化材が放射状になるなどの規則性はなく、切り合い関係がある SH03 が焼失住居で、その痕跡であろうと思われる。床面では 5 基のピットを調査しているが、上屋構造を復原することは困難である。径 40 ㎝が検出したピットの最大径である。深さは 35 ㎝を最深とする。それ以外は径 20 ～ 30 ㎝と比較的小型の柱穴である。主柱穴を確定することは困難である。

出土遺物は弥生土器に限られている。図化した土器は２点である。甕底部、製塩土器各１点である。

SH03

古墳時代の方形プランの竪穴住居である。SH04 の上面に築かれている。１辺 4.4 ｍとやや小型の竪穴住居である。正方形でなく、南西部分は北側に偏っており、歪になっている。北辺は濠によって切られている。壁の残りは悪く 10 ～ 30 ㎝である。西側の方が低く、東側の方が残存度が高い。壁溝は検出されていない。焼失住居と思われ、炭化材が放射状に出土している。焼土・炭も検出されており、特に東壁には集中している。

床面中央には炉跡が存在する。南北方向に長径 74 ㎝、東西方向に短径 60 ㎝の卵形の平面プランで、深さ 22 ㎝を測る。西側から南西側に最大 60 ㎝の焼土・炭を掻き出した土坑が伴っている。ピット・土坑は 10 基検出している。上屋構造を想定する柱穴は確定できないが、南東部分の未調査部分に未検出

の柱穴があり、床面コーナー部に主柱穴のある４本柱かと思われる。

出土遺物は土師器に限られており、図化したのは高杯３点と図上で完形となった鉢１点である。精製土器で布留期に位置している。

２．掘立柱建物（図版 31 、写真図版 42）

SB04

溝 SD1101 の東側で検出された柱穴から復元した。南北４間（約 6.2m）、東西は更に東側に延びるものと考えられるが、３間分（約 5.9 m）を検出した。三方に小溝が走り、雨落ち溝の可能性がある。北西部分が少し突出する。この掘立柱建物の中央で SK1101 が検出された。

SB05

SB04 の北側で検出された南北３間（約 2.5m）、東西３間（約４m）以上の建物で、SB04 とはやや主軸方向を異とする。

３．堀状遺構（図版 32 、写真図版 45・46）

11 区の西側で東西方向に検出された溝状の大きな落ち込みで、竪穴住居 SH03・04 を切って掘削されている。また、直交して溝 SD1101 が合流する。西端で上幅約 3.6 m、深さ約 1.4 mの規模を測る。緩い U 字形を呈する底は東に向かって徐々に上がっており、検出された全長は約 9.7 mとなり、11 区の東端で消失する。西側は開析谷へと向かっており、確認トレンチの結果からも谷へ抜けているものと思われる。埋土は意図的に埋められた状況を示すものはないが、一部に礫や類地山のブロックを含んでおり、近接した構築物が崩れた可能性がある。埋土底からは土師器鍋（162 ～ 166）などが出土しており、16 世紀後半までの時期があてられる。

４．土坑

SK1101（図版 31 、写真図版 46）

掘立柱建物 SB04 内で検出された直径約 50 ㎝の平面形が円形の土坑で、深さは約 45 ㎝を測る。土層断面は掘方・柱根状にも観察でき、柱穴の可能性もあるが、他に建物として対応するものは見出せなかった。北 4.5m に同様の平面規模を有するものがあるが、深さは 15 ㎝程度と浅い。柱根状の埋土からは土師器椀（169）や塊石が出土した。

５．溝（図版 32 、写真図版 42・46）

SD1101

SD1101 は 11 区の西辺の崖面ラインの地形に沿って走る、幅１～２m、深さ約 15 ㎝を測る浅い溝である。この溝から西側の崖側では柱穴等は検出されていない。溝底は南流して堀状遺構に注ぐものと推測される。図化できなかったが土師器鍋破片が出土しており、堀状遺構と同時期のものである可能性が高い。

SD1102

SD1102は11区の北端で、SD1101に約50㎝の間隔で並行して検出された溝である。幅約1.2ｍ、深さ約0.3ｍを測り、南端部は細くなって終わる。南半の埋土中の一部には拳大の礫が集中していた。図化できなかったが土師器片が出土している。

第5節　12区の遺構

12区は今回本発掘調査を実施した中で、最も北側に位置する調査区である。福中城跡の北限とされる北側外堀から更に開析谷を挟んだ95ｍ北側にあたる。地形的には現標高約36.8ｍとなり、北側は徐々に上がっていく地形である。

12区は古い地形図から判断すると、東から西へと中央で大きく段をもって下がる地形となっていたが、調査直前の状況ではコンクリートやアスファルトによって平坦に整地されてあった。カッターなどを用いてアスファルト等を除去すると、砕石による盛り土が見られる。砕石を除去すると東半部では地山にあたる面が検出された。

西半部は撹乱土によって埋没した直線溝を挟んで一段低くなるが、旧耕土様の堆積土を除去するとやなり地山に当たる面となった。この平坦部の調査でも明瞭な遺構は全く検出されず、時期の判断されるような遺物は出土しなかった。おそらく大きく削平されているものと思われる。

調査区南端は水路によって限られるが、開析谷の北肩の落ちを約7ｍの幅で、約1.5ｍの深さまで検出した。部分的に大きく撹乱されており、遺物なども出土しなかった。斜面の途中に幅約1.5mの犬走り状の段が切られているが、時期的なことは不明である。谷部分を成形して、畑などに利用した際のものであろう。

更に北側300ｍ地点の玉津田中遺跡平野地区の範囲内まで確認調査を実施しているが、いずれも地盤改良が施されており、遺構・遺物は検出されていない。一連の国道拡幅工事に伴って、更に北側の一旦段丘から降りた大畑遺跡も確認調査を行っているが、工事予定範囲内では埋蔵文化財は確認されていない。

〔参考文献〕

岡　久雄、黒田義隆　1961『福中城と間嶋彦太郎』神戸市文化財調査報告　4　神戸市教育委員会
兵庫県教育委員会　1981『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』

第５章　遺　物

第１節　概要

福中城跡・芝崎遺跡からは、多くの遺物が出土しているが、福中城跡範囲内からの城跡関係の遺物はきわめて少ない。これはその範囲内が標高が最も高い位置にあり、後世の削平が著しかったことに起因する。また、堀と考えられる大きな落ち込みからも近世以前の遺物はほとんど出土しなかった。最下層まで掘削できなかったことにもよるが、後世に溜池などに利用され、大きく撹乱されたことに起因する。４・５・７・10・12 区からは図化できる近代以前の遺物は出土していない。

時期的には 11 区の弥生時代中期の竪穴住居が最も古い時代の遺構であり、同時代の遺物は他の地区でも散見される。また、１区の古墳時代の竪穴住居などからの遺物も多い。その他、中世前半から近世にかけての遺物が各地区から出土している。以下に、〔土器・土製品・瓦類〕、〔木器・木製品〕、〔石器・石製品〕、〔金属製品〕に分けて、１区から順に報告する。

第２節　１区の土器

１区からは弥生時代と思われる石鏃（S20）や、木棺墓 SK1006 出土の金属製品の他、竪穴住居や溝、土坑などから土器等が出土している。

１．SH01 出土土器（図版 35 、写真図版 50）

１～７は SH01 出土の土器である。１～３は土師器、４～８は須恵器で、１～６は竈周辺から出土している。また、図化できなかったが写真図版 50 の 180 も SH01 出土のものである。この他に包含層出土とした 60 ～ 62 の須恵器杯 H も SH01 の上層や周辺からの出土である。

土師器には杯（１）及び甕（２・３）がある。いずれも表面の風化が著しい。杯は丸底気味の底部から内湾して立ち上がる。甕は頸部から短く丸みをもって外反し、端部を丸くおさめる口縁部をもつ。外面には煤が付着する。

須恵器杯Ｈ蓋（４・５）はいずれも小片であるが、口縁の 1/6 以上の破片である。口縁端部内面に浅い凹線をもつ。４は天井部に回転ヘラケズリを施す。

須恵器杯 H（６・７）ではいずれも小片であるため、口径も不正確であるが、６のように立ち上がりの高さが 1.5 ㎝で、底部に回転ヘラケズリを広く施すものもある。口縁端部は丸くおさめる。

８は小型の短頸壷と思われる小片である。胴部下半にはヘラケズリとヨコナデの痕跡が見える。

SH01 出土の須恵器は播磨編年Ⅱ期２B・C 小期（永井 1994）に概ね該当しよう。

２．SD1002 出土土器・土製品（図版 35・36 、写真図版 50 ～ 53）

９～ 14 は溝 SD1002 から出土した。図化できたものはすべて土師器であるが、直径９㎝までヘラケズリを施す須恵器杯Ｈと考えられる底部（写真図版 51 の 182）や、カキメを施した提瓶と思われる須恵器破片（写真図版 51 の 183）も出土している。土師器には甕（９・10)、鍋（11)、蛸壺（12)、竈形

土器（14）、土馬（13）（巻頭カラー図版１）がある。

甕（９・10）の口縁部は頸部から緩やかに外湾し、端部は外傾或いは、上方にわずかに面をもつ。胴部最大径が口径を上回るものである。

鍋（11）は大型で、屈曲部の直径が約 40 ㎝となり、14 の竈で用いることが可能である。外面上方は縦方向のハケ、下方は横方向のハケで仕上げ、胴部内面は横方向のヘラケズリ、口縁部内面は横方向のハケ、口縁部外面と端部はヨコナデによって仕上げられ、斜め上方の端面をもつ。

12 は土師質の飯蛸壺で、釣り手部を欠失する。内面には強いイタナデを、外面の一部には黒斑が見られる。

竈形土器（14）は、断面方形の突帯と、上向けに屈曲する把手をもつもので、大きな庇の幅から掛口の口径を復元すると、32 ㎝近い大型のものとなる。鍋（11）や、SH02 出土の大型の甕（33）や鍋（34・35）であれば、掛けることが可能である。庇高は掛口高よりわずかに低くなる。外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリを施している。煤の付着は見られない。

SD1002 出土の土器の特徴は、甕や須恵器では SH02 出土のものよりも SH01 のものに近い。竈形土器は稲田編年の付け庇系の第二段階にあたり、７世紀初頭前後のものとされている。このことからこれらの土器は６世紀後半から７世紀初頭にかけての時期が当てはめられよう。

土馬（13）は頭部と左前脚（13-1）、右前脚（13-2）、右後ろ脚（13-3）、左後ろ脚（13-4）に分かれて出土しており、かろうじて右前脚と左前脚に接点が認められるが、胴部中央が大きく失われている。頭部は頸を斜め前方に伸ばし、顔面もほぼ正面を向く。目・鼻孔・口は円形の刺突によって表現している。耳と前髪、たてがみは粘土を貼り付けて表現するが、耳先端部とたてがみを欠失する。左耳には円形の刺突が見られる。極端に太い脚部は斜め外方に踏ん張り、脚部から胴部までは直線的である。

13-3 で見られるように胴部は中空であり、直径 3.5 ～ 3.7 ㎝の脚部も中空で円筒形を呈している。頭部は頸までは中空である。脚部と胴部は元々別作りで、脚部に通した棒状のものを利用して接合した際の、円筒状の粘土の盛り上がりが胴部内面に残される。

右後ろ脚（13-3）の腹部には穿孔が見られ、斜め前方を向く。棒を刺し立てるためのものか、性器を表現したものかはわからない。

馬具の表現は見られず、裸馬と思われるが、胴部のほとんどを失っているため装鞍馬であるかは判断できない。器表面はナデによって仕上げられるが、一部にはハケが残る。頭部には赤色顔料がよく残っており、全体に赤色を呈していたものと思われる。

３．SH02 出土土器（図版 37・38、写真図版 54 ～ 56）

15 から 42 は SH02 から出土した土器である。土師器を主として多量の土器が出土したが、前述のように遺構の一部のみの調査であったため接合は進展せず、多くは破片での資料化である。また、遺物の多くは二次的に火を受けたらしく、表面が剥離したものや、接合できる破片の色調が異なるものが見られる。須恵器はわずかしか出土しておらず、１点のみ図化できた。土師器には杯 A（16・17）、甕（18 ～ 33）、鍋（34・35）、鉢（36・37）、竈形土器（38 ～ 42）がある。また、図化できなかったが、写真図版 56 の 184 ～ 189 の竈形土器破片もこの遺構からの出土である。

15 は須恵器杯 G。底部はヘラ切り不調整。底面の一部に赤色顔料らしきものが観察できる。

16・17 は土師器杯 A。16 は底部から緩やかに立ち上がり外傾する口縁部へと続く。端部は内面を凹

線状に窪ませて丸くおさめる。体部外面には横方向のヘラミガキを施し、底部近くは横方向の砂粒の動きが見られヘラケズリの痕跡と思われる。内面には斜放射状の暗紋が観察できる。口縁端部はヨコナデによって仕上げられる。口径は 15.9 ㎝、復元できる器高を 5.5 ㎝として、径高指数 35 となる。

17 は底体部境外面には横方向のヘラケズリを施した後、体部にかけて横方向のヘラミガキを施す。底部には放射状のヘラミガキの後、不定方向のヘラミガキを施す。内面は約 2.5 ㎜間隔で、幅約 1 ㎜のヘラミガキを斜放射状に 1 段施し、暗紋とする。内面の一部には黒斑が見られる。口縁端部はヨコナデにより丸くおさめる。口径は 17.8 ㎝、器高 5.5 ㎝、径高指数 31 となる。

甕は小片が多いが、復元された口径が 20 ㎝までの小型のもの（18 ～ 28）、中型のもの（29 ～ 32）、口径が 40 ㎝近い大型のもの（33）がある。頸部は「く」字に屈曲し、中大型のものほど屈曲の度合いが大きくなる。SH01 や SD1002 出土の甕に見られるような大きく湾曲した頸部を持つものは見られない。胴部外面を縦方向のハケで調整し、内面に縦方向のヘラケズリを施している。口縁部内面にはハケ調整を施し、ヨコナデによって仕上げている。29 の頸部内面には横方向のヘラケズリが見られ、鍋と共通した調整である。19・23・25・26・32 には外面に煤が付着する。

小型の甕の口縁部は内湾して受け口状になるもの（18 ～ 23）と、直線的に外傾するもの（24 ～ 28）がある。口縁端部は丸くおさめるものが多く、面をもつものも見られる。全容がわかる 26 は球形の胴部に丸底を有し、甕 A に分類される。

中大型の甕の口縁部は外反気味に開くもので、端部は内外に突出させて面をもつ。全容がわかる 30 はやや下ぶくれの長胴に丸底をもち、甕 C に分類される。

34・35 は鍋で、ともに口縁端部を欠失するが、中大型の甕と同様に内外に突出させた端部をもつものであろう。外面の上半には縦方向のハケ、下半には横方向或いは放射方向のハケを施す。内面は斜め横方向のヘラケズリを施す。口縁部は横方向のハケの後、ヨコナデによって仕上げる。口縁部が最も肉厚で、丸底の底部の器壁は薄い。

36・37 の鉢も鍋と同様の器壁、調整をもつもので、口縁端部も同様にヨコナデによって内外に突出させて、面をもつものである。鍋の口縁部の屈曲をせずに、内湾させた器形となる。36 の外面には煤が付着する。

竈形土器は全容のわかるものはない。胎土・焼成や調整痕から見て複数個体存在するようである。

38 は庇の向かって左側の破片である。最大幅は約 8 ㎝となる。写真図版 56 の 184 ～ 186 も同一個体と考えられるが、接合できなかった。庇部の最大幅は 184 で 8.2 ㎝である。189 も庇部の破片であるが、胎土・焼成が異なり別個体である。下面に紋様状にハケを施す。39・40 は焚き口裾部の破片で、下面は黒斑となる。39 は向かって右、40 は向かって左の破片であろう。41・42 は掛口の破片である。41 は上から約 11 ㎝の位置に横帯の貼り付け突帯をもつ。外面は縦方向のハケ、内面は斜め横方向のヘラケズリを施す。42 も同様の調整が見られ、外面の一部に上から約 4 ㎝の位置に斜め方向の帯状の剥離痕跡が残り、庇右上部が外れたものと考えられる。また、写真図版 56 の 187 も口部の破片であり、突帯が剥離し、穿孔が見られる。これらの破片から想定できる竈はいずれも SD1002 出土の 14 に類した大型のものであろう。

4．北東土坑出土土器・土製品（図版 38 、写真図版 53）

43 ～ 45 は SH02・SD1002 より北側の東壁際で、重機掘削直後に排水・土層観察用の側溝を掘削した際に出土した。当初、土坑と考えていたが（北東土坑）、遺構検出時や東壁の土層確認の際にも遺構は

認められなかった。このため側溝の幅内に収まる浅い柱穴状の落ち込みであったと思われる。ここから土師器甕、土馬脚部・尻尾部が出土した。SD1002 出土の土馬には４脚がそろっており、焼成も異なることから別個体の土馬である。やはり中空の作りで指によるナデアゲで仕上げている。巻頭カラー図版１で復元した土馬ではこの尻尾部を利用した。43 の甕は口縁端部に面をもつ中型のものである。

５．SK1001 出土土器（図版 39 、写真図版 57）

46 は土師器皿である。ロクロ成形で、内外面とも回転ナデ調整が施される。底部外面は未調整で糸切痕が残る。

６．SK1002 出土土器（図版 39 、写真図版 57）

47 は須恵器皿である。ロクロ成形で内外面とも回転ナデ調整が施される。底部外面は未調整で糸切痕が残る。東播系須恵器魚住窯の製品で 13 世紀前半代の時期が考えられる。

７．SK1005 出土土器（図版 39 、写真図版 58）

SK1005 からは土師器甕と土師器羽釜が出土している。

49･50 はいずれも甕である。体部は僅かに内彎し､口縁部は大きく「く」の字状に屈曲し､外方にひらく。いずれも外面にハケ目調整が施される。

51・52 は羽釜である。51 は口縁部が内傾し、外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。内面はヨコ方向のハケ目調整、外面はヨコナデ調整が施される。52 は体部がほぼ直立し、断面台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。内面には横方向の細かいハケ目調整が､外面には縦方向のハケ目調整が施される。

８．SK1006 出土土器・瓦（図版 39 、写真図版 57）

SK1006 は中世墓で、土師器皿、須恵器椀、瓦のほかに銅鏡・鉄製鋤先なども出土している。

53･54･55 は土師器皿である。いずれも非ロクロ成形で、体部が直線的に斜め上方に延びるもの（53）とやや内彎気味に斜め上方に延びるもの（54・55）とがある。広義の京都系土師器と考えられる。

56・57 はいずれも須恵器椀である。平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整が施され、底部外面は糸切痕が残る。いずれも東播系須恵器魚住窯の製品で、56 は 12 世紀後半代、57 はやや新しく 13 世紀前半代の時期が考えられる。

58 は須恵質の平瓦である。凸面に残された痕跡は無紋のタタキのものかもしれない。凹凸面は縦方向のナデが施される。側面もナデによって仕上げる。一枚作りで、神出窯産か。

９．１区包含層等出土土器（図版 39 、写真図版 58）

１区における遺構検出時の人力掘削や側溝掘削の際にも遺物が出土しており、主に古墳時代後期の須恵器杯と中世前半の須恵器こね鉢・甕、白磁碗、青磁碗・皿が出土している。

59 ～ 64 は須恵器杯Ｈである。前述のように、60 ～ 62 は SH01 周辺からの出土で同住居址に属する可能性が高いものである。その他のものは側溝や住居址より低い南側から出土している。

66 は須恵器こね鉢である。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。東播系須恵器魚住窯の赤根川支群の製品で 13 世紀後半代に比定される。67 は須恵器甕の破片である。口縁部は

水平に折り曲げ、口縁端部上面に凹部をもつ。焼成は堅緻で、色調は灰白色を呈する。

68 は白磁碗である。高台は比較的厚く、高い。口縁端部は水平に外方に引き出す。横田・森田分類白磁碗Ⅴ類で、12 世紀後半代に比定される。

69 は青磁碗である。底部の器壁は非常に厚く、高台は比較的厚く低い。龍泉窯系青磁碗で 13 世紀前半代の時期が考えられる。70 は青磁皿である。平底で底部内面に櫛描き雷光文、ヘラ描きの草花文を描く。同安窯系青磁皿で 13 世紀前半代の時期が与えられる。

第３節　２区の土器

２区では中世前半、中世後半、近世の遺構が検出されており、土器・瓦の他に木器・石製品が出土している。

１．SB03 出土土器（図版 40 、写真図版 59）

71 は掘立柱建物 SB03 を構成する P2014 から出土した須恵器鉢である。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部外面には灰被りが見られる。東播系須恵器で 13 世紀代の所産である。同じく SB03 を構成する P2017 からは石硯（S22）や石鍋を加工したもの（S23）が出土している。いずれも 13 世紀代に属すると考えてよかろう。

２．SE02 出土土器・瓦（図版 40 、写真図版 59）

石組みをもつ井戸 SE02 からは、無釉陶器、瓦の他に、木器や井戸材として一石五輪塔などが出土している。

72 は無釉陶器の壷もしくは徳利である。平底で体部は直立する。色調は暗赤褐色を呈し、内外面とも胡麻状に灰被りが見られる。また、底部外面には火襷が認められる。16 世紀代の備前焼と考えられる。73 は上面から１M までに出土した平瓦である。灰色を呈した燻し瓦で、凹面にはコビキ A が残されている。また、側面に沿った部分には布目が観察でき、縦方向のナデが施される。端部には面取りが施され、中央部は大きく削っている。側面も小さく面取りを行う。凸面は縦方向の丁寧なナデが施されるが、凸面の一部と側面の一部に砂粒が観察できる。面取りは見られない。SE02 からは他に６片ほど平瓦・丸瓦が出土しており（写真図版 59 の 191・192）、丸瓦凹面にはコビキＢが認められる。

３．SE03 出土土器（図版 40 、写真図版 59）

74 は無釉陶器の香炉である。底部に脚を３箇所貼り付け、体部は直線的に斜め上方に延びる。色調は明赤褐色を呈する。近世の備前焼と考えられる。

４．SE05 出土土器・瓦（図版 40 、写真図版 60・61）

石組みをもつ井戸 SE05 からは土師器擂鉢・鍋、須恵器こね鉢、無釉陶器擂鉢・盤・甕、染付磁器碗、瓦が出土している。

75・76 は土師器擂鉢である。いずれも外面の口縁部と体部の界に浅い段をもつ。内面は横方向のハケ目調整の後、75 は縦方向の擂目を櫛描きで、76 はヘラ描きの擂目を施文する。いずれも、三田城跡

出土資料に類例が見られ、16 世紀代の時期が考えられる。77 は土師器鍋で口縁部内面に凹部をもつ。長谷川分類　鉄かぶと形Ⅰ類に相当し、15 世紀前半に位置づけられる。

78 は須恵器こね鉢である。口縁部は断面三角形状に肥厚する。東播系須恵器鉢で13 世紀代に比定される。

79 は無釉陶器擂鉢である。口縁部は上下に拡張する。色調は暗赤褐色を呈する。備前焼Ⅳ期の製品で 15 世紀代の時期が考えられる。80 は無釉陶器盤である。体部は内彎してほぼ直上に延び、口縁部上面は水平に端面をもつ。備前焼盤で 16 世紀後半代に比定される。81・82 はいずれも無釉陶器甕である。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。備前焼Ⅳ期で 15 世紀代の所産である。

83・84 は染付磁器碗である。83 は外面に、84 は内面に、それぞれ草花文を描く。いずれも明青花で、83 は 16 世紀代に、84 は 16 世紀後半から 17 世紀初頭にそれぞれ比定される。

85 は中層から出土した玉縁部の外れた丸瓦片である。表面の一部は暗灰色を呈すが、凸面の一部や断面は灰白色を呈している。凹面の一部には布目や抜き取り縄或いは吊り紐の痕跡が残るが、縦方向のナデにより消されている。側面は大きく面取りを行う。

86 は黄灰色を呈した平瓦である。凹面には縦方向のナデが施されるが、コビキＡとごく一部に布目が残されている。側面も小さく面取りを行う。凸面は縦方向の丁寧なナデが施される。面取りは見られない。

SE05 からはこの他にも 20 片ほど瓦が出土しており（写真図版 61）、丸瓦 195 では凹面にコビキＡと布目が残り、196・197 凹面にも布目が観察できる。上層礫層からは布目及びコビキＢの残る燻瓦の丸瓦片（198）も出土している。また、199 の平瓦凹面にはコビキＡ広端部面取りが観察できる。200 は鳥衾と思われ、端面の左端に突起が設けられている。凹面にはコビキＡ、布目が観察できる。

５．SE06 出土土器・瓦（図版 41 、写真図版 62）

結桶組の井戸 SE06 からは磁器・瓦が出土した。

87 は染付磁器瓶である・平底で体部は内彎してほぼ直上に延びる。外面に呉須で簡略化された草花文を描く。肥前系磁器で 18 世紀代の製品である。

88 は鳥衾の伏間（丸瓦部）であろう。表面が銀化した燻瓦で、中央部に直列して直径約 1.6 ㎝の円孔が約 5.7 ㎝間隔で穿たれている。穿孔は焼成前で、凸面側から施される。凹面には布目が残され、縦方向の条痕が施される。89 も燻瓦の平瓦で、桟瓦かもしれない。布目は観察できない。

６．SE07 出土土器（図版 41 、写真図版 62）

SE07 からは、土師器焙烙、施釉陶器椀、染付磁器碗・瓶が出土している。

90 は土師器焙烙である。平底で体部は内彎してほぼ直上に延びる。底型作りで、体部外面の下部に指おさえ痕が残る。18 世紀代の所産であろう。

91・92 は施釉陶器椀である。91 は全面に灰釉を施釉し器面に細かい貫入が入る。肥前系と考えられ、18 世紀前半代に比定される。92 は内外面とも透明釉を施釉した後、口縁部内外面に白濁釉を施釉する。肥前系陶器唐津椀で、17 世紀中頃～ 18 世紀前半代の製品である。

93 は染付磁器碗である。底部の器壁は非常に厚く、外面に簡略化された草花文を描く。肥前系波佐見焼の製品で 18 世紀後半代の時期が与えられる。94 は染付磁器瓶である。内面はロクロ目が明瞭に観察され、外面には界線が 1 条描かれる。肥前系の製品で 18 世紀代に比定される。

７．SX01 出土土器・瓦（図版 41 、写真図版 63）

SX01 からは施釉陶器椀、染付磁器蕎麦猪口、瓦が出土している。

96 は施釉陶器椀である。高台は細く低く、「ハ」の字状に外方にひらく。内外面とも透明釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。肥前系京焼風陶器椀で、17 世紀中頃～ 18 世紀前半代の製品である。

97 は染付磁器蕎麦猪口である。高台は形骸化し、細く低い。外面に松葉文、底部内面には五弁花文を描く。肥前系で 19 世紀前半代のものである。

98 ～ 100 は燻瓦である。98･99 は丸瓦で、玉縁を有し、広端部･側面凹面側に幅の広い面取りを施す。98 は全長 21.8 ㎝、玉縁長 3.0 ㎝の小型のものである。凹面にはコビキＢとなる横筋が見られる。凸面は縦方向の丁寧なナデを施す。99 は玉縁部を除く長さが 20.85 ㎝を測り、98 よりは少し大きい。凹面にはやはりコビキＢが認められる。凸面には縦方向のケズリ様のナデが施される。

100 は平瓦と考えるが､桟瓦かもしれない。一ヶ所､小さな窪みとその周囲に粘土の盛り上がりがあり、焼成前に穿孔しようとして中断したと思われる痕跡が認められた。SX01 からは他に桟瓦の破片も出土している。

８．SX04 出土土器・瓦（図版 41 、写真図版 63）

SX04 からは施釉陶器椀と壷あるいは土瓶及び瓦が出土している。

101 は施釉陶器椀である。器壁は全体に薄く、高台は比較的細く高い。内外面とも白濁釉を施釉し、底部外面は露胎である。京焼系陶器の可能性が考えられる。102 は施釉陶器の壷あるいは土瓶である。器壁は非常に薄い。外面に白泥をイッチン掛けで、簡略化された草花文を描き、その後、灰釉を施釉する。京焼系陶器で 19 世紀前半代の所産であろう。

103 は軒丸瓦瓦当部である。燻瓦で珠紋が残る。巴紋をもつものであろうか。

９．SD2004 出土土器（図版 42 、写真図版 64）

２区の南端を東西に横切る溝 SD2004 からは弥生土器、土師器鍋が出土している。

104 は SD2004 から出土した弥生土器底部である。壺の底部であろう。表面は摩滅している。SD2004 出土の他の土器と時期が異なることから、混入と思われる。

105 は土師器鍋である。外面の口縁部と体部の界に退化した断面三角形状の鍔を貼り付ける。体部外面には叩き目が残る。長谷川分類の播磨型ＩＢ類に相当し、15 世紀中頃に位置づけられる。

SD2004 からは図化できなかったが、他に須恵器の椀・鉢・甕の破片が出土しており、備前焼や瓦は出土していない。

10．SD2005 出土土器・瓦（図版 42 、写真図版 64・65）

SD2004 に並行して走る溝 SD2005 からは土師器鍋・皿・杯・擂鉢、須恵器壷、無釉陶器壷・甕・擂鉢、染付磁器皿、瓦などが出土している。

106・107 はいずれも土師器皿である。106 はロクロ成形で、底部外面には糸切痕が残る。107 は非ロクロ成形で、内外面ともヨコナデ調整が施される。108 は土師器杯である。平底高台で器壁は比較的厚い。底部外面には糸切痕が残る。109 は土師器擂鉢である。口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付け、口縁端部は斜め上方につまみ上げる。口縁部から体部内面は横方向のハケ目調整が施される。三田城か

ら類例が出土しており、16 世紀代に比定される。110 は土師器鍋である。すでに口縁部外面の鍔は無くなり、外面には格子目叩きが残る。長谷川分類の播磨型Ⅲ類に相当し、16 世紀末～ 17 世紀初頭に位置づけられる。

111 は須恵器壷である。口縁部は大きく外方にひらき、体部外面には斜め方向の叩き目が残る。東播系須恵器壷で 13 世紀代に比定される。

112 は無釉陶器壷である。口縁部は玉縁状に肥厚する。備前焼Ⅲ期の製品で 14 世紀前半代に比定される。113 は無釉陶器甕である。口縁部は「く」の字状に大きく屈曲し、口縁端部は内側に丸く折り込む。丹波焼と考えられる。114 は無釉陶器の擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線を２条施す。備前焼Ⅴ期の製品で 16 世紀代に位置づけられる。

115 は染付磁器皿である。口縁部は外方にひらく。内外面とも界線を描く。16 世紀代の明青花である。116 ～ 118 は瓦である。116 は灰白色の丸瓦で玉縁を有す。凹面には布目と横方向の紐の痕跡が認められる。側面を大きく削る。

117 は一枚作りの平瓦で、端部凹面側を面取りし、側面凸面側を大きく削る。

118 は凹面にはコビキＡと布目、縦横方向の粗いナデが観察できる。凸面には縦方向の丁寧なナデが施される。一部のみの残存であるが、広端面左部が突出しており、凹面側にもケズリが広く施されている。鳥衾であろう。

この他にも瓦片が出土している（写真図版 65）。201 は丸瓦玉縁部で、凹面にコビキＡ、布目が見られる。また、凸面に縄叩きと思われる痕跡を残した平瓦片も出土した。

11．SD2006 出土土器（図版 43、写真図版 66）

SD2005 が一旦途切れる西端で検出された溝 SD2006 からは弥生土器、土師器鍋・擂鉢・火舎、施釉陶器鉢が出土している。

119 ～ 123 は土師器鍋である。119・121・122 は口縁部が僅かに内傾し、口縁部外面に断面三角形状の短い鍔を貼り付けるタイプで、体部外面には斜め方向の叩き目が残る。119・121 は長谷川分類　播磨型ＩＣ類相当で 15 世紀後半から 16 世紀初頭に、122 は播磨型ＩＢ類相当で 15 世紀中頃にそれぞれ比定される。120 は口縁部外面の鍔が消滅し、体部と口縁部の界に段をもつタイプで、播磨型Ⅲ類に相当し、16 世紀末葉から 17 世紀初頭に比定される。123 は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は上面に水平に端面をもち、体部外面には横方向の叩き目が残る。長谷川分類　鉄かぶと形Ⅱ類相当で 15 世紀中頃の時期が考えられる。

124・126 は土師器擂鉢である。口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付け、口縁端部は斜め上方につまみ上げる。体部内面は横方向の粗いハケ目調整の後、縦方向に擂目を施す。三田城出土資料に類例が見られ、16 世紀代に比定される。

125 は土師器こね鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚し、体部内面には横方向の粗いハケ目調整を施す。形態的には 13 世紀後半代の東播系須恵器鉢に類似する。

127 は土師器火舎である。体部はほぼ直立し、口縁端部を内側に引き出す。

128 は弥生土器の小型の壺口縁部で混入である。頸部上半、口縁部下に３条の凹線を施す。弥生時代中期後半のものである。

129 は施釉陶器の鉢と考えられる。内外面とも灰釉を施釉し、体部下半および内面は露胎である。16

世紀代の美濃系陶器と考えられる。

SD2006 からは他に写真図版 66 の 202 の備前擂鉢なども出土している。

12．SD2009 出土土器（図版 43 、写真図版 66）

SD2009 からは土師器鍋・擂鉢、須恵器こね鉢、施釉陶器椀が出土している。130 は土師器鍋である。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔を貼り付けるもので、播磨型Ⅱ類に相当し、16 世紀中頃から後半の時期が考えられる。131 は土師器擂鉢である。内面は横方向のハケ目調整の後、擂目を施文する。三田城出土資料に類例が見られ、16 世紀代の時期が考えられる。

132 は須恵器こね鉢である。口縁部は斜め方向に切り、断面三角形状を呈する。東播系須恵器鉢で 13 世紀代に比定される。

133 は施釉陶器椀である。高台は幅が広く、比較的浅く削りだす。内外面とも灰釉を施釉し、底部内面に砂目跡が 3 箇所見られる。肥前系唐津焼で 17 世紀前半代のものである。

13．SD2011 出土瓦（図版 44 、写真図版 67）

２区の中央を東西に走る SD2011 の西半部からは桟瓦が敷かれたように出土した。いずれも暗灰色の燻瓦で、釘穴は見られない。136 は灰白色であり、生焼けかもしれない。いずれも凸面の周囲に段が見られ、凹型台による成形であろう。134 ～ 136 には切込みが見られ、尻の切込みは長さ 6.75 ～ 6.85 ㎝、幅 3.8 ～ 3.95 ㎝、頭の切込みは長さ 2.8 ～ 2.85 ㎝、幅 2.55 ㎝を測る。尻の切込みが大きい片二寸の深切桟瓦である。137 は尻の切込みが見られないが、該当部分の裏面約 5.5 ㎝の位置に小さな段が作られている。成形台にすでに切込み位置を示す目印が設けられていたものと考える。

138 は平瓦であり、SX01 出土の破片と接合できた。灰白色を呈している。SD2011 からは他にも丸瓦の破片も出土している。

この他に２区北半の遺構上面を覆う整地土からも近世以降の瓦が出土している。139 は軒丸瓦瓦当部で、巴紋の一部と３ヶ所の珠紋が残る。丸瓦との接合部分に櫛目を入れている。140 は桟瓦であろう。方形の釘穴が認められるものである。これらの近世に属する瓦は、窯状遺構（瓦焼成用達磨窯）に関連するものと考えられる。

第４節　３区の土器

１．甕倉２出土土器（図版 45 、写真図版 68）

柱穴状の浅い坑が密集しており、本来据え付けられたであろう甕は残存していなかったが、甕倉と判断した。甕は出土しなかったが、坑内から土器が出土した。P1 からは備前焼壺（146）、P3 からは土師器椀（142）、P4 からは土師器擂鉢（143）、白磁（148）、P5 からは陶器椀（147）、P11 からは土師器椀（141）、備前焼擂鉢（144）、白磁（149・150）、甕倉周辺から土師器鍋（145）が出土している。

141 は土師器椀である。ロクロ成形で底部外面には糸切痕が残る。須恵器椀の編年観から 12 世紀後半から 13 世紀前半代に比定できる。P11 出土。

142 も土師器椀である。器面の摩滅が著しいが、141 とほぼ同形の椀である。P3 出土。

143 は土師器擂鉢である。口縁部外面を強くナデて断面三角形状の鍔を作り出す。内面は横方向のハケ目調整の後、4 条 1 単位の擂目を施す。16 世紀代の時期が考えられる。P4 出土。

144 は無釉陶器擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯をつくる。口縁部外面には灰被りが見られる。備前焼Ⅳ期相当で、15 世紀代に位置づけられる。P11 出土。

145 は土師器鍋である。口縁部は若干内傾し、体部外面には格子目状の叩きが残る。播磨型Ⅲ類相当で、16 世紀末から 17 世紀初頭の所産である。甕倉 2 付近出土。

146 は無釉陶器壷である。体部は大きく内彎し、体部外面の上位に櫛描きの波状文を施文する。備前焼ⅢからⅣ期の製品と考えられ、14 ～ 15 世紀代の所産であろう。P1 出土。

147 は施釉陶器椀である。口縁部は若干屈曲して外方にひらき、内外面とも鉄釉を施釉する。瀬戸焼大窯期の製品で 16 世紀代に位置づけられる。P5 出土。

148 は白磁の碗もしくは皿で、口縁部は内外面とも透明釉を施釉し、白色に発色する。華南産白磁で 16 世紀代に比定できる。P4 出土。

149 は白磁皿である。口縁部は輪花状に整形し、内外面にヘラ状工具で蓮弁文を施文する。華南産白磁で 16 世紀代に比定される。150 は白磁碗で高台は断面台形状を呈し、低く細い。15 ～ 16 世紀代の華南産白磁と考えられる。P11 出土。

2．SX05 出土土器（図版 45 、写真図版 68）

151 は土師器椀である。平底で体部は斜め上方に立ち上がる。ロクロ成形で底部外面には糸切痕が残る。152 は土師器鍋である。丸底で体部・口縁部ともに内傾し、外面には平行叩き目が残る。播磨型Ⅱ類相当で、16 世紀中頃から後半に比定される。

3．Ｐ 3006 出土土器（図版 45 、写真図版 68）

153 は無釉陶器壷である。水挽きロクロ成形で、体部外面をおさえて窪ませる。全面に赤土部を塗布し暗赤褐色に発色する。18 世紀後半から 19 世紀前半代の備前焼と考えられる。

第５節　６・９区の土器

４区～ 10 区は福中城跡主郭部にあたるが、削平が著しく検出された遺構は外堀・内堀と想定される溝に限られている。中でも外堀と想定された大規模な落ち込みは底まで掘削が及ばず、また近代以降まで溜池などとして利用されていることから、遺物として採集されたものはほとんどない。９区の内堀北辺から近代以降のものと共に出土した丸瓦片 1 点を掲載できた。６区の内堀南辺からは比較的まとまって土器が出土している。

1．内堀南辺出土の土器（図版 45 、写真図版 69）

６区内堀南辺下層からは土師器鍋・器種不明品、須恵器鉢が出土している。154 は土師器鍋である。口縁部外面に強いナデにより鍔状の凸帯を作り出す。体部外面には平行叩き目が残る。播磨型Ⅱ類相当で、16 世紀中頃～後半の時期が考えられる。157 は土師器の容器の脚部と考えられる。158 は須恵器鉢である。口縁端部は上方につまみ上げる。東播系須恵器と考えられ、13 世紀代のものであろう。159 は

無釉陶器壷である。体部は大きく内彎する。外面には胡麻状に灰被りが見られる。備前焼船徳利と考えられ、16 世紀代の時期が考えられる。

内堀最下層からは、土師器鍋・片口鉢、須恵器甕が出土している。155 は土師器鍋である。丸底で体部はほぼ直立する。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付け、体部外面には平行叩き目が残る。播磨型ＩＣ類相当で、15 世紀後半から 16 世紀初頭に位置づけられる。156 は土師器片口鉢である。体部は僅かに内彎し、口縁端部は外方につまみ出す。体部内面はハケ目調整の後、櫛描きの擂目を施文する。三田城出土資料に類例が見られ、16 世紀代のものであろう。160 は須恵器甕である。体部は内彎し、口縁部は大きく「く」の字状に屈曲して外方にひらく。口縁部側面に端面をもち、上端と下端とを僅かにつまみ出す。

２．内堀北辺出土の瓦（図版 46 、写真図版 69）

９区の内堀から出土したが、この遺構は大きく攪乱されており、この瓦も近代以降の廃棄物とともに出土したものである。161 は燻瓦の丸瓦で、凹面には粗い布袋の痕跡と、縦方向の条痕が観察できる。凸面はヘラミガキ状のナデが縦方向に施される。

第６節　11 区の土器

１．堀状遺構出土土器（図版 46 、写真図版 70）

11 区堀状遺構からは土師器鍋と無釉陶器の壷が出土している。162・163・164・165・166 はいずれも土師器鍋である。162・163・165・166 は口縁部外面の鍔が段状に退化しており、長谷川分類　播磨型Ⅱ類相当で、16 世紀中頃～後半に位置づけられる。164 は口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付けるもので、播磨型ＩＣ類に相当し、15 世紀末葉～ 16 世紀初頭の時期が考えられる。167 は無釉陶器壷である。平底で体部は直線的に斜め上方に延び、色調はにぶい赤褐色を呈する。備前焼と考えられる。

２．SK1101 出土土器（図版 46 、写真図版 70）

169 は土師器椀である。ロクロ成形で、内外面とも回転ナデ調整が施される。底部外面には糸切痕が残る。

３．11 区包含層出土土器（図版 46 、写真図版 70）

11 区第２面上からは土師器擂鉢、無釉陶器甕、青磁碗が出土している。170 は土師器擂鉢である。口縁部外面に断面三角形状の鍔をもち、体部内面には粗いハケ目調整を施す。三田城出土資料に類例があり、16 世紀代に比定される。171 は無釉陶器甕である。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。色調は灰褐色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で 15 世紀代に比定される。172 は青磁碗である。体部外面に線描きの細蓮弁文を施文し、剣頭と体部はほぼ一致する。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で 15 世紀後半から 16 世紀代の時期が考えられる。

173 は青磁碗である。172 と同様に外面に細蓮弁文を施文する龍泉窯系青磁細蓮弁文碗である。

４．SH03 出土土器（図版 46 、写真図版 71）

高杯が複数個体出土しており、3点図化した。174 は SH03 中央部で 177 の鉢とともに出土した高杯である。

内湾する椀形の杯部に緩やかに大きく広がる脚部をもつ。杯底部を充填して作られており、脚柱は中空となる。杯部は外面を横方向のヘラミガキ後、ヨコナデを施し、内面は放射状や横方向のヘラミガキが残る。4方に円孔をもつ脚部は端部に細い凹線を1条巡らせる。脚柱外面には縦方向のヘラミガキを施し、脚部内面には横方向のハケが残る。175・176も同様の作りであるが、175は脚部が屈曲して広がり、脚内面にもヘラミガキを施すものである。176は脚柱を杯部に挿入して接合しており、脚柱部が中実である。

177はSH03中央部から出土した大形の鉢である。小さな底部から大きく内湾して立ち上がり、屈曲して短く広がる口縁部へと続く。端部には面をもつ。外面はハケの後、縦方向のヘラミガキが残り、内面は横方向のハケとヘラミガキが残る。口縁部はヨコナデで仕上げる。

5．SH04出土土器（図版46、写真図版71）

178はSH04の焼失面上から出土した底部である。上げ底気味の小さな底部から直線的に立ち上がる。内面にはイタナデ状の痕跡が残る。甕の底部か。179は周辺の遺構面精査時に出土した。外面にタタキを残した裾広がりの底部で、製塩土器と思われる。

第7節　木器・木製品（図版47～53、写真図版72～77）

木製品はすべて2区から出土したものである。W1・2はSE02、W3はSE03、W4～13はSE05、W14はSE07、W15は粘土採掘坑SX01，W16・17はSE06から出土している。

1．SE02出土木器・木製品（図版47～49、写真図版72～74）

W1は石組み井戸SE02の底付近から、出土した箱釣瓶である（巻頭カラー図版3）。把手は外れていたものの他の部位はすべて組み合わさった状態で出土している。組みあがった釣瓶は、器高約19.1㎝、把手部上までの高さ約21.7㎝、内法口径16.3㎝×16.7㎝、内法底径12.9㎝×12.4㎝となる（図版47）。組み合わさった際に露出する部分は角が丸くなっており、かなり使用されていたものと思われる。

4枚の側板と底板、把手からなっており、木釘によって接合されていたものと考えられるが、木釘本体は残存していなかった。また、内部には細い植物繊維が束になって残存しており、後に入り込んだ木の根の可能性はあるものの、接合部の目止め或いは棕櫚縄の可能性を考えている。図版48の展開図ではW1-1及び1-3は側面の状態を表現するため、外側の面を実測している。

側板はスギの柾目材を用いており、そぎ溝を彫ったW1-2･-4と側面を斜めに削ったW1-1･-3とを「そぎ欠き打付け接ぎ」として、目釘によって「Ⅱ」字形に組み合わさる。W1-2・-4のそぎ溝内とW1-1・-3の側面には各々5～7ヶ所の目釘孔が穿たれている。W1-1・-3の厚さは1.0～1.3㎝であり、W1-2・-4の厚さは1.35～1.5㎝とやや厚い。W1-2・-4の上面には把手固定のための目釘孔と罫描き線が認められる。W1-4の内面には斜め方向に刃幅約2.5㎝の斜め方向の加工痕が認められ、手斧を用いて表面を整えたものと思われる。下側木口はわずかに斜めに削って、底板との密着に備えている。

ヒノキを用いた底板は0.9㎝と比較的薄い板目材を用いており、現状では4枚に割れ、目釘孔部分が破損するなど最も傷みの著しい状態であった。側板はこの底板の上に載せて下から目釘で固定されていたものである。各辺には目釘孔が3ヶ所と側板位置を表す罫描き線が認められる。W1-2と接合する部分のみ目釘孔が2ヶ所となる。

スギの角材を加工した把手は「渡り欠き接ぎ」と栓（木釘）によってW1-2・-4の上面に固定される。中央下面には釣瓶縄固定のための抉りをもつが、中央に細溝が残ることから、鋸などで溝を刻んだ後、両側から鑿などで切り込んだものであろう。抉り内面から続く側面や上面の角は著しく摩耗しており、釣瓶縄による擦痕と思われる。

各部材の接合には一部仕口と目釘が用いられており、目釘孔はその口径が1.5～3㎜の方形をなすものである。深さは深いところで3㎝以上あり、把手の接合されるW1-4では3.6㎝の深さまで穿孔されている。目釘本体は失われており、目釘孔内も探ったが残存していなかった。鉄釘を窺わせる錆などが観察できなかったことから、錐によって穿孔された後、断面方形の木釘を用いたものと想定される。

大阪府西ノ辻遺跡第9次発掘調査の際に井戸6から12世紀後葉頃～13世紀前葉頃の土器とともに同じ作りの箱釣瓶が出土している（東大阪市1995）。全体的にわずかに大きく、鉄釘を用いているなどの違いはあるが、側板の仕口などは、所属時期の隔たり以上に似通っており、この手の箱釣瓶の仕様がすでに完成されていたことが窺われる。

また、同様の仕口をもつ箱釣瓶は兵庫県篠山城からも出土しており、江戸末期から明治初期の遺物とともに出土している。これは把手の中央に円孔を穿って棕櫚縄を通している（篠山市1991）。この形態・製作技法の箱釣瓶は長期間にわたって作り続けられていたことがわかる。

この他、兵庫県内では篠山市の内場山城跡の井戸2からも箱釣瓶が出土しており、15世紀後半～16世紀前半の時期の可能性が考えられている。これは側板を「二枚組み接ぎ」或いは「枡組み」に組んで木釘で留めるものである。これもヒノキの柾目材が用いられていた。（兵庫県1998）

W2もSE02の石組み底から出土した。マツ（二葉）の心持ち材の底面を平らに削り、他の面にも削りを施している。両小口部は欠損しているが、その部分と中央には上面から直線的に溝が掘られており、底面まで約0.5㎝まで切り込んでいる。あまり鋭利な切断面ではなく、鋸による加工の可能性がある。また、上面から斜めに目釘孔が1ヶ所穿たれている。当初木錘と考えていたが、用途不明。SE02からは他に長さ47㎝ほどの板材や、曲物側板と思われる薄板などが出土している。

2．SE03出土木器・木製品（図版49、写真図版77）

W3はSE03の下層近くから出土した曲物底板である。ヒノキの柾目材を直径約12㎝の円形に加工し、両面を平滑に削っている。削りは上下2回に分けて各々7～8回程度施しており、刃の進行方向に対して約40°の角度に刃の痕跡が残っている。周縁部分はわずかに盛り上がる。側面にも工具痕が認められ、下面の角は面取りを施す。少なくとも直角方向の3ヶ所に非常に細かい目釘孔が穿たれており、1ヶ所には木釘が一部残存している。

3．SE05出土木器・木製品（図版49～52、写真図版75・76）

大型の井戸SE05では根太材（W9～12）、底から出土した桶材（W13）の他に石組み内の埋土中からも木製品が出土している。

W4は大半を失うが、直径約8.8㎝の円形の曲物底板である。表面にはW3と同様、同一方向に二段にわたって削りが施されている。裏面にも不明瞭ながら痕跡が認められる。目釘孔は残存範囲では認められない。

W5 は石組み内底から出土した曲物の底板である。大半を失うが、直径約 20 ㎝の円形が復元できる。針葉樹板目材を用いており、表面の加工は顕著ではない。折損部には方形の目釘孔が２ヶ所残っており、補修したものと思われる。

W6 は石組み内から出土した漆器椀である。（巻頭カラー図版４）口縁端部はすべて失われていたが、残存器高 9.3 ㎝、底径約 6.8 ㎝を測る大振りの椀である。クリ材から横木取りしており、口縁部側に樹芯がくる。高台は高く裾部がわずかに広がる。高台裏の削り込みは浅く、高台自身は中実となる。大きく張った腰部からわずかに広がりながら内湾する口縁部へと続く。全面に黒漆が塗られていたものと考えられ、更に口縁部内面と底部裏側の中心部にのみ赤色の漆が塗り重ねられていることが確認できた。全面に赤色漆が施されていたかは不明である。水漬けの際に黒い汁が染み出てきたことから、墨下地の可能性がある。

W7 は石組み内の上層から出土した漆器椀である。（巻頭カラー図版４）口縁端部を欠損するが、現存高 2.9 ㎝、底径約 5.0 ㎝の小振りのものである。横に張った腰部から内湾して立ち上がる。高台は低くわずかに外傾する。トチノキの木胎の全面に黒漆を塗った後、外面に赤色の漆でモミジなどの秋草を筆によって描いている。筆使いから見て、モミジの葉脈は塗り残して下地の黒漆が現れているものと思われる。

W8 は石組み内底から出土した針葉樹板目材を加工した楔である。３方に割れ面を残し、１面を手斧様の工具で斜めに削り落としている。木口面には加工痕は認められないが、平らである。幅約 3.8 ㎝、長さ約 10.5 ㎝、厚さ約 2.2 ㎝。

W9 から 12 は石組みの下部に井桁に組まれた根太（土居桁）で、W10 と W12 を、湾曲面を内側にして平行に置き、その上に W9 と W11 を「相欠き接ぎ」に組んでいる。すべてマツ（二葉）材を用いている。

W9 は長さ約 95.2 ㎝、幅約 15.5 ㎝、厚さ約 13.6 ㎝の芯持ちの角材の両端を、厚さの 1/3 まで切り欠いて仕口を設けている。更に先端部は斜めに削っている。この部分に残された手斧様の刃の幅は約３㎝である。組みあがった際に下面となる面や側面には刃幅が９㎝に及ぶ手斧様の痕跡が残されており、刃こぼれが見られる。上面には節を落とした部分などの一部以外には加工痕は認められない。両端部は平らであり、加工痕は不明である。

W11 も同様の形態であるが、全長が約 102.6 ㎝と長いため、両端の切り欠きが長くとられている。幅約 12.5 ㎝、厚さ約 10.3 ㎝の芯持ち材で、各面にはやはり刃こぼれのある工具で削った痕跡が残るが、角の部分は節を落とす以外はあまり加工していない。

W10 、W12 はともに湾曲した幹の根元付近を用いており、両端部は粗く斜めに削り落とされている。表面の削りは全面には及んでおらず、一部には樹皮が残されている。W12 には刃こぼれのある道具による痕跡が認められる。ともに木の幹の上方、細い側に溝状の切り欠きが施されており、W11 が組み合わさる。樹根に近い位置には「コ」字形の切り欠きを設け、W9 を受けている。W10 は長さ約 122.1 ㎝、幅約 19.1 ㎝、厚さ約 17.1 ㎝を測る。W12 は長さ約 125.5 ㎝、幅は中央部で約 14.1 ㎝、厚さ約 12.8 ㎝を測る。W13 は石組み底から出土したスギを用いた板材で、他に同様の板材が２点出土していることから、桶を構成するものと思われる。幅約 6.9 ㎝、厚さ約 1.2 ㎝で、端部に目釘孔が１ヶ所認められる。ごくわずかに湾曲しており、外側の端部から約３㎝と約 20 ㎝付近の位置に横方向の数条の圧痕が認められ、たがの痕跡と思われる。内面には斜めに刃をあてて、縦方向に削る工具痕が残されている。側面は結桶に備えて平らに削り、わずかに内傾する。

SE05 からは他に竹なども出土している。

４．SE07 出土木器・木製品（図版 52 、写真図版 77）

W14 は SE07 から出土したイスノキを用いた横櫛である。現存幅は 10.25 ㎝、厚さは 0.85 ㎝を測る。長方形を呈し、肩部が角張るＡＩ型式（辻 2000）であり、背は丸く盛り上がる。歯の挽きだし位置は、背の上縁に平行して曲線を描く。歯はほとんど失われているが、9 ～ 10 本／㎝の歯が削り出されている。表面には漆等は認められない。イスノキを用いた横櫛は比較的一般的で、神戸市上脇遺跡からも鎌倉時代のものが出土している。

５．SX01 出土木器・木製品（図版 52 、写真図版 77）

W15 は粘土採掘坑 SX01 から出土した柾目材に近い部分を用いた板材である。下面は平らであり、上面は不均等に丸くなる。２ヶ所に概方形の目釘孔が偏った位置に穿たれており、一方には木釘が残存していた。一部に節が残る部位を用いている。幅約 2.45 ㎝。

６．SE06 出土木器・木製品（図版 53 、写真図版 77）

W16 ～ 22 は SE06 内に組まれていた桶材である。12 枚で組まれていた内の２点を図化している。

W16 は長さ約 58.4 ㎝、下幅約 13.6 ㎝、上幅約 12.1 ㎝、厚さ約 1.9 ㎝の板目材で、外側の面には下から 15 ㎝の位置の上下が傷みによって窪んでおり、上から約 15 ㎝の位置にも横方向のあたりが認められる。たがの痕跡であろうか。この面には手斧様の工具で表面を削った痕跡が残されている。側面は結桶に備えて平滑に削り、内傾する。

W17 は長さ約 59.6 ㎝、下幅約 17.4 ㎝、上幅約 15.4 ㎝、厚さ約 1.8 ㎝の板目材で、W16 と同様、外側の面には下から 15 ㎝の位置の上下が傷みによって窪んでいる。外面には細かい擦痕が認められる。側面は結桶に備えて平滑に削り、内傾する。

第８節　石器・石製品（図版 54 ～ 58 、写真図版 78 ～ 81）

出土した石器・石製品には２区の中世後半に構築された井戸の構築材に用いられた一石五輪塔・五輪塔・宝篋印塔のほか、同じく２区から砥石・石硯・石鍋・石臼が出土している。また、石鏃（S20）は１区から、すり石（S24）は 11 区から出土した。

１．SE02 出土石製品（図版 54・55 、写真図版 78）

S1 ～ S5 は２区の井戸 SE02 の石組みの構築材として用いられていた一石五輪塔である。最下段付近に下面や側面を内側に向けて用いられており、S1・2・4 は三段に積み上げられていた。すべて花崗岩製で黒雲母が多く含まれている。またその中で、S2･3 は長石と思われるピンク色の粒子が顕著である。S1・2・4 はほぼ完形に接合できたが、風輪と火輪の間で折損しており、S3 も空風輪を欠失している。S5 も完形に復元できたが、水輪部で折損しており、S6 も水輪以下を失っている。

S1 は空輪の頂部を一部欠損するが、全高 47.1 ㎝、地輪の幅は 16.15 ～ 16.3 ㎝、地輪の高さは 14.1 ㎝。地輪の下部は粗いが中央をわずかに窪ませて平らに加工している。

S2 は全高 52.2 ㎝、地輪の幅は 17.5 ～ 17.6 ㎝、地輪の高さは 15.4 ㎝。地輪の下部は粗いが中央部をわずかに窪ませて平らに加工している。他の五輪塔よりも空輪の下部や水輪の下部の成形が精緻である。

S3 は空風輪を欠損するが残存高 35.15 ㎝、地輪の幅は 18.0 ～ 18.45 ㎝、地輪の高さは 16.5 ㎝。地輪の下部は粗いが平らに加工している。

S4 は全高 49.55 ㎝、地輪の幅は 17.15 ～ 17.6 ㎝、地輪の高さは約 14.5 ㎝。地輪の下部は粗く加工している。全体的にいびつで上下で捻れが見られる。空風地輪の同一方向の角は自然面が残ったものか平滑に磨滅している。

S5 はわずかに空輪頂部を欠損するが全高 46.45 ㎝、地輪の下部は丸く尖り、自然面を残している。また、図上の背面も扁平で自然石の円礫を加工している。他のものと異なり、安置できないため下部を土に埋め込むタイプのものである。地輪の幅は 15.7 ～ 16.0 ㎝、最大幅は火輪部の 16.5 ㎝。地輪の高さは 18.6 ㎝。

S6 は水地輪を欠損し、残存高 28.7 ㎝、最大幅は 16.9 ㎝以上、厚さは 16.1 ㎝。

２．SE05 出土石製品（図版 56 ～ 58 、写真図版 79 ～ 81）

S7 ～ 19・21 は 2 区の井戸 SE05 から出土している。このうち S15・16 は井戸底の根太上に積み上げられ、S8・9・11・14 も石組みを構成していた。S7・10・17・18 も石組み内部から出土しており、石組み井戸の構築材の一部である可能性が高いものと思われる。S19 の石臼と S21 の砥石は上層の礫埋土に混じって出土した。石材はすべて花崗岩で黒雲母やピンク色の長石粒が顕著に見られるものである。S7・12・14 は全体的に白く、粒子が粗く脆い。

S7 ～ 14 は一石五輪塔及びその断片である。S 7 は全高 44.6 ㎝、地輪の幅・厚さは 14.7 ～ 15.7 ㎝、地輪の高さは 11.3 ㎝。地輪の下部は平らだが、粗割りの状態である。火輪の上部で欠損している。

S8 は空風火水輪の一部が残る。残存高 28.1 ㎝。断面は隅丸長方形を呈している。風輪が著しく短く扁平である。

S9・10 は空風輪部残欠である。S9 は丁寧に丸味をもって作られており、四材構成の五輪塔空風輪の可能性も残すが、風輪の断面がやや方形を成すことから一石五輪塔とした。S9・10 とも全体に火を受けたためか黒化しており、脆い。

S11 は空輪の残欠である。全体に丸味を有し、頂部も丁寧に作り出しているが、断面がやや方形を成すことから一石五輪塔とした。

S12 は火輪と水輪の一部の残欠である。表面が剥離するほど風化が著しく、図上背面も欠失する。

S13・14 は水輪から地輪にかけての残欠である。表面は火を受けたためか黒化しており、図上背面は欠失している。

S15・16 は四材構成五輪塔の地輪である。これらに伴う空風火水輪は出土しなかった。ともに根太材の上に上面を内側にして積まれていた。S15 は一辺が 24.2 ～ 24.6 ㎝、高さ 19.75 ㎝を測り、下面は粗割りのまま磨いていない。

S16 は一辺が 28.8 ～ 28.9 ㎝、高さ 24.6 ㎝を測り、やはり下面は粗割りのまま磨いていない。また、下半部の一隅が大きく欠けるが、他面より平滑であり、おそらく割り成形以前の面を残すものである。上面は中央部が緩やかに膨らむ形状を示している。

S17・18 はともに粒子の粗いピンク色の長石や雲母を含んだ花崗岩を用いており、同一個体である可能性が高い。残存状態は悪いが、丁寧な加工が成されており、宝篋印塔の笠の断片と思われる。S17 には直径約 5 ㎝の円孔が穿たれており、一辺が 20 ㎝程の小型のものが復元できる。

S19 は上層から出土した石臼の上臼断片である。上縁は縁を残して一段下がり、直径約 4 ㎝のものく

ばりの円孔が穿たれている。円孔内部や縁の内面には斜め方向の幅約 0.5 ㎝の鑿の痕跡が残されている。下面は平滑に磨滅しており、擂目もほとんど消滅している。側面の下部は元々突出していたらしく、その部分を打ち欠いた痕跡が残されている。上縁と下面は平行ではなく、一方が薄くなる。

S21 は SE05 上層から出土した砥石。平面は不整な四辺形を呈するが、図の上方は欠損している。下方は磨滅した自然面となる。砥面は断面概五角形の各面にみられることから、置砥ではなく手に持って用いたものであろう。３面には深く鋭い刃物で刻まれた溝が数条残る。2.5Y8/2 灰白色の比較的肌理の細かい砂岩系の石材であり、粗砥或いは中砥であろう。現存長は 8.3 ㎝、幅 8.7 ㎝、厚さ 3.9 ㎝、重さ 388.5g を測る。

３．SB03 出土石器・石製品（図版 58 、写真図版 81）

S22 は 2 区の掘立柱建物 SB03 の南西隅の柱穴Ｐ 2017 から出土した石硯である。灰色（N4/0）を呈し、一部青灰色をした線状の石紋が入った固く緻密な石材を用いている。縦半分と硯頭と硯尻の縁帯上面を欠失する。平面形は楕円形で硯尻の幅がやや広い卵形を呈し、外面・内面とも四隅が入角になったいわゆる「四葉硯」と称されるものである。

縦約 13.85 ㎝、厚さ約 1.4 ㎝を測り、器高は約 2.15 ㎝となる。硯面は、硯頭部縁帯下から始まる海部から、緩やかに陸部にかけて上がり、陸部の硯尻端縁帯下も少し下がり気味となる。非常に平滑であるが、海部から陸部にかけて側面に沿った擦痕が見られる。墨痕は観察できない。海部と陸部に樹根状の石紋が入る。縁帯は内面が傾斜し、根元になるほど厚くなり、側面の上面で 0.4 ㎝、根元で 0.6 ㎝を測る。縁帯の根元の厚さは硯頭では 1.1 ㎝と厚い。側面は、特に硯頭と硯尻側で裏面から表面にむかって広くなり、傾斜する。側面は加工に伴なうと思われる横方向の擦痕を残すが平滑に仕上げられている。入角は丸みをもって切れ込み、奥も細く丸くなるが、縦方向の擦痕が残る。裏面は、表面の海部から陸部への傾斜に平行するように、硯尻にむかって徐々に楕円形に抉りを施しており、硯尻部は縁をもたずに抜けている。抉り内は縦方向の細かい擦痕が観察でき、硯頭・硯尻部は横方向の擦痕が見られ、他の面に比べて粗い仕上げとなる。この形態の石硯は楕円形Ⅱ Ab タイプに分類され、12 世紀から 14 世紀にかけてのもので、中国製の可能性があるものと考えられている。（水野 1984）

S23 も SB03 のＰ 2017 から出土した。滑石製の石鍋を再加工したものである。灰白色（2.5Y7/1）に赤褐色の部分のある滑石を用いている。復元すると口径が 40 ㎝以上になる大型の石鍋の口縁部付近を楕円形に成形して作られており、一方の短辺を後に欠損する。残存幅約 8.8 ㎝、最大厚 1.9 ㎝を測る。周囲の加工は雑であるが、角の面取りは行っている。石鍋としての表面には煤が付着しているが、一部帯状に削られている部分があり、2.5 ㎝幅の鍔を 0.6 ㎝幅の鑿状の工具で削り落とした痕跡と考えられる。湾曲して窪む裏面は平滑に仕上げられており、中央部がわずかに黒ずんでいる。温石或いは硯として利用されたものかもしれない。

４．その他の石器・石製品（図版 58 、写真図版 81）

S20 はサヌカイト製の打製石鏃である。１区 SH01 内西側土坑（SK1009）埋土中上層から出土したが、遺構に伴うものではない。平基式石鏃で基部はくぼませてある。現存長 26.4 ㎜、最大幅 18.5 ㎜、厚さ 3.0 ㎜、重さ 1.0g を測る。

S24 は 11 区の第 1 面から出土したすり石である。一方の短辺に使用痕が認められる。長さは 84.0 ㎜、幅 63.5 ㎜、厚さ 37.6 ㎜、重さ 274.4g を測る。SH04 の時期に伴うものであろうか。

S25 は 2 区北端部で表採された茶磨下臼である。黒い粒子を含んだ 10Y5/1 灰色を呈した凝灰岩質砂岩と思われる固く緻密な石材を用いている。受皿の周縁は全周にわたって欠損しており、磨り面の縁も欠損している。下部の周縁は残存する。下面は大きく抉り、中央部に直径約 5 ㎝の円孔を穿っている。この芯棒穴は上半部で一辺約 1.5 ㎝の方形孔となる。磨り面には 7 分割・4 溝単位の擂目が刻まれているが、各々の溝幅は 0.5 ㎝と茶磨としては広く、後刻されたものであろう。

第 9 節　金属製品（図版 59 、写真図版 82）

金属製品の出土は比較的少なく、1 区の中世墓、3 区の土坑、11 区の堀状遺構などから出土したものに限られる。

1．1 区出土の金属器（図版 59 、写真図版 82）

M1・2 は 1 区の SK1006 から出土している。

M1 は銅製の和鏡である。（巻頭カラー図版 2 ）木棺墓に伴う副葬品で、須恵器椀や土師器皿とともに出土しており、下面の鏡面には木質が付着していた。出土時には著しい錆のためすでに一部を失っており、鏡背の紋様も当初はレントゲン写真でも看取できなかったが、顕微鏡下におけるクリーニング処置により図化できるようになった。直径 9.1 ㎝、厚さ約 0.1 ㎝、周縁高約 0.2 ㎝を測り、非常に薄い鏡胎、蒲鉾式の低い縁の特徴をもつ。鏡背の紐は幅約 0.4 ㎝、長さ約 0.8 ㎝の楕円形を呈し、高さ約 0.3 ㎝で、約 0.1 ㎝の円孔を通す。紐座をもたない素紐である。鏡背には無界圏で、羽を広げた尾の長い双鳥と、斜め方向から見た菊花と思われる楕円形の花紋を配している。和風の紋様をもちながら、宋鏡（湖州鏡）の影響を受けた作りのものである。保存処理を実施しているが、脆弱であるため拓本は採っていない。

M2 も 1 区 SK1006 出土の犂先片である。墓壙底から出土したもので他の副葬品とは性格の異なるものであろう。風呂部上側面から中心部にかけての破片で、側面は鋭角に折り返し、台木に固定する直径約 2 ㎝の円孔が残されている。

2．3 区出土の金属器（図版 59 、写真図版 82）

M3・4 は 3 区 SK3001 底から出土している。

M3 は釘の座金具と思われる金銅製品で、縦横約 1.6 ㎝、厚さ 0.3 ㎜の銅薄板に塗金を施したものである。四葉形を呈しており、中央に六角形の孔をもつ。M4 と錆着して出土している。玉津田中遺跡辻ヶ内地区 SK85006 からも鉄製の類品が出土している。

M4 は断面が 0.6 × 0.45 ㎝の長方形を呈する角釘で、頭部は叩き広げた後折り曲げている。錆の状態もあるが、現状では太すぎて M3 には装着できない。

3．11 区出土の金属器（図版 59 、写真図版 82）

M5・6 は 11 区から出土した。

M5 は 11 区遺構面上出土の鉄釘である。断面一辺が約 0.45 ㎝の角釘で頭部と先端部を欠失する。

M6 は 11 区堀状遺構底から出土した厚さ約 0.75 ㎝の板状の鉄片である。鋤先などの破片であろうか。

〔参考文献〕

稲田孝司 1978「忌の竈と王権」『考古学研究』25 巻第 1 号

兵庫県教育委員会　1991『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告第 104 冊

永井信弘　1994「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡第 6 次』加西市文化財調査報告 27　加西市教育委員会

西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

古代の土器研究会　1998『古代の土器 5-2　7 世紀の土器（近畿西部編）』

小森俊寛　2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7 ～ 19 世紀－』京都編集工房

百瀬正恒、近江俊秀 1995「各地の土器様相　近畿」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

岡田章一、長谷川眞 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第 3 号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

森田　稔　1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編　真陽社

森田　勉　1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№ 2　日本貿易陶磁研究会

上田秀夫　1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』№ 2　日本貿易陶磁研究会

伊野近富　1995 「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』 日本中世土器研究会

横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館論集』4　九州歴史資料館

間壁忠彦・葭子　1966・1968・1994「備前焼研究ノート⑴～⑷」『倉敷考古館集報』1 ・ 2 ・ 5 ・18

兵庫県教育委員会　2004 『兵庫津遺跡Ⅱ』

兵庫県教育委員会　2000 『三田城跡発掘調査報告書』

大橋康二　1993 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社

森田克行　1984『近世瓦成立の諸段階』第 2 回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会

高槻市教育委員会　1983『摂津高槻城　本丸跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第 14 冊

岸本一宏　1997「まとめと考察」『禿山遺跡他発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告　第 177 冊　兵庫県教育委員会

多賀茂治　1995「弥生時代後期～古墳時代前期の土器」『玉津田中遺跡』第 6 分冊　兵庫県文化財調査報告第 135－6 冊　兵庫県教育委員会

鳥海義之助　1980『図解　木工の継手と仕口』理工学社

鐘方正樹 2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧　㈱同成社

財団法人　東大阪市文化財協会 1995『西ノ辻遺跡第 9 次発掘調査報告』

兵庫県教育委員会 1998『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告第 126 冊

篠山町教育委員会 1991『篠山城旧三の丸跡－ 11 次・13 次・14 次調査－』篠山町文化財資料第 21 集

奈良国立文化財研究所　1985 『木器集成図録　近畿古代篇』

辻　裕司 2000「横櫛　－横櫛の分類と生産遺跡－」『研究紀要』第 7 号　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

和歌山県教育委員会・高野山文化財保存会『高野山奥之院の地寶』和歌山県文化財学術調査報告書第 6 冊

水野和雄 1984「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第 70 巻第 4 号

甲斐昭光 2000「兵庫県出土の中世滑石製品」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

大阪市立博物館　1988『日本の古鏡』

久保智康 1998「中世・近世の鏡」『日本の美術 3』第 394 号

第10節　芝崎遺跡出土木製品の樹種

京都大学名誉教授
伊　東　隆　夫

神戸市西区平野町に所在する芝崎遺跡は弥生時代末～近世に至る複合遺跡である。

今回の調査地点の北側には、中世の城館である「福中城（15世紀中頃～16世紀後半）」がある。この城は、羽柴秀吉の播磨攻めで破却を命じられた別所方の「平野城」にあたるとされている。調査でも福中城と同時期の遺構が多数検出された。

木器は井戸から出土しており、樹種同定を行った13点は、横櫛1点を除いて、福中城とほぼ同時期の井戸から出土している。

木器の内、釣瓶は指物製品で、側板、底板、把手のそれぞれを資料とした。また、根太は石積み井戸の基礎として太い角材を井桁状に組んだ部材である。

今回、井戸内から出土した13点の木製品の樹種を同定した。

定法にしたがい、安全カミソリで三断面の切片を切り出し、顕微鏡用標本を作製し、通常の光学顕微鏡で以下の顕微鏡的特徴を観察し、写真を撮影してコンピュータに記録した。

マツ（二葉）（*Pinvs* spp. Diploxylon）（写真：３）

樹脂道が存在する。樹脂細胞はみられない。分野壁孔は典型的な窓状。放射仮道管が存在し、仮道管内壁に鋸歯状突起がみられる。

スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）（写真：１）

樹脂道を欠く。樹脂細胞は晩材部にまばらにかつ接線状にならぶ。分野壁孔は典型的なスギ型。

ヒノキ（*Chamaecyparis obuse* Endl.）（写真：２）

樹脂道を欠く。樹脂細胞は接線状に点在。分野壁孔はヒノキ型。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）（写真：４）

環孔材。孔圏道管は非常に大きく、複列となる。単穿孔。孔圏外道管は火炎状となる。放射組織は単列。

トチノキ（*Aesculus turbinate* Blume）（写真：５）

散孔材。やや小さい道管が単独ないし2-3個放射複合。単穿孔。放射組織は単列で、層階状に配列。

イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）（写真：６）

散孔材。道管径はやや小さい。階段穿孔。らせん肥厚。放射組織は異性で、1-4列。

樹種同定の結果を表１に示す。樹種別に利用数をまとめると、以下の通りになる。

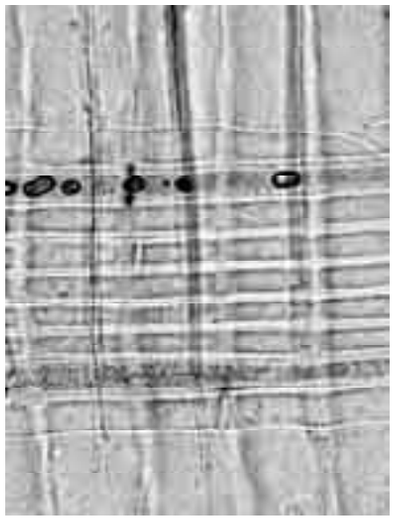
スギ　３点、ヒノキ　２点、二葉松　５点、クリ　１点、トチノキ　１点、イスノキ　１点

前述のように、すべて井戸から出土した木製品である。釣瓶にはヒノキ、スギ、木錘にマツ（二葉）、曲物や板にはヒノキ、スギ、漆器椀にはクリやトチノキ、横櫛にイスノキ、根太にマツ（二葉）が用いられた。全体に点数が少ないので、結果のみに留める。

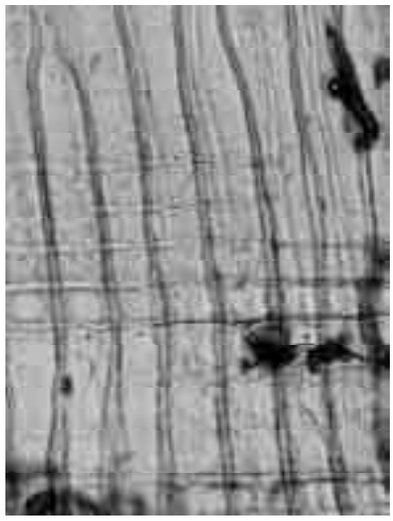
表２　芝崎遺跡　樹種同定一覧表

サンプル番号	報告番号	遺物名	遺構	時代	樹種	同定者
1	W1-1	釣瓶側板	井戸2（SE02）	16世紀	スギ	伊東隆夫
2	W1-5	釣瓶底板	井戸2（SE02）	16世紀	ヒノキ	伊東隆夫
3	W1-6	釣瓶把手	井戸2（SE02）	16世紀	スギ	伊東隆夫
4	W2	木錘？	井戸2（SE02）	16世紀	マツ(二葉)	伊東隆夫
5	W3	曲物底板	井戸3（SE03）	16～17世紀	ヒノキ	伊東隆夫
6	W13	板材	井戸5（SE05）	16世紀	スギ	伊東隆夫
7	W6	漆器椀	井戸5（SE05）	16世紀	クリ	伊東隆夫
8	W7	漆器椀	井戸5（SE05）	16世紀	トチノキ	伊東隆夫
9	W14	横櫛	井戸7（SE07）	18世紀	イスノキ	伊東隆夫
10	W10	根太	井戸5（SE05）	16世紀	マツ(二葉)	伊東隆夫
11	W9	根太	井戸5（SE05）	16世紀	マツ(二葉)	伊東隆夫
12	W11	根太	井戸5（SE05）	16世紀	マツ(二葉)	伊東隆夫
13	W12	根太	井戸5（SE05）	16世紀	マツ(二葉)	伊東隆夫

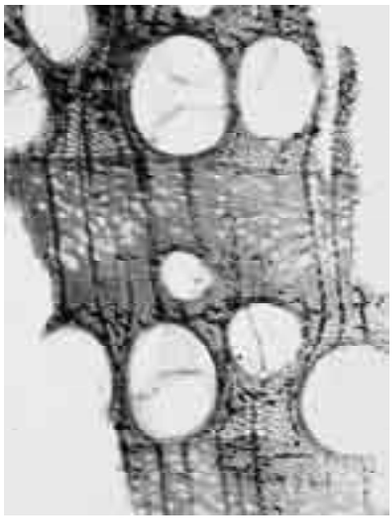
1．W1-1　スギ　x300



2．W1-5　ヒノキ　x300

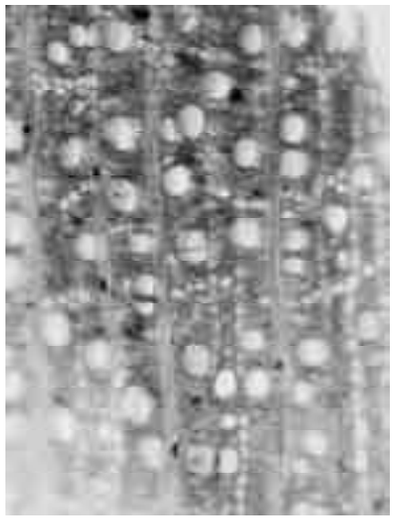


3．W2　マツ（二葉）　x300



4．W6　クリ　x30

5．W7　トチノキ　x75



6．W14　イスノキ　x75

図１　芝崎遺跡出土木製品の樹種

表３　福中城跡・芝崎遺跡出土土器等観察表

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
1	35	50	1	SH01	土師器	杯	(10.00)	4.40		1/3残存。丸底に近い底部。		竈出土。
2	35	50	1	SH01	土師器	甕	(18.60)	(4.00)		大きく外反する口縁部1/6残存。端部は丸く収める。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ残るも、ヨコナデで仕上げる。	焼土層出土。
3	35	50	1	SH01	土師器	甕	(27.60)	(3.00)		大きく外反する口縁部1/12残存。端部は丸く収める。	ヨコナデ。頸部内面はヘラケズリか。	焼土層(竈)出土。
4	35	50	1	SH01	須恵器	杯蓋	(16.00)	(2.95)		杯H蓋。1/6残存。口縁端部内面に凹線をもつ。	天井部回転ヘラケズリ。	竈出土。
5	35	50	1	SH01	須恵器	杯蓋	(14.15)	(3.25)		1/4残存。口縁端部内面に浅い凹線をもつ。		竈出土。
6	35	50	1	SH01	須恵器	杯H	(16.70)	(3.40)		1/10残存。端部は丸く収める。	底部回転ヘラケズリ。	竈周辺出土。
7	35	50	1	SH01	須恵器	杯H	(14.40)	(2.50)		1/18残存。端部は外側に尖らせて収める。		
8	35	50	1	SH01	須恵器	短頸壷		(4.10)		小片。口縁端部は丸く収める。	下半はヘラケズリ後、ヨコナデか。	
9	35	50	1	SD1002	土師器	甕	(17.40)	(6.40)		大きく湾曲した頸部から外反する口縁部。端部は四角く収める。		土馬と共伴。
10	35	51	1	SD1002	土師器	甕	(19.60)	(5.70)		大きく湾曲する頸部から尖り気味の口縁端部へと続く。		
11	35	51	1	SD1002	土師器	鍋	(45.20)	(8.15)		口縁の1/15残存。内湾する体部から屈曲して大きく開く口縁部。端部は面をもち、内外に突出する。	外面は下半が横方向、頸部付近が縦方向のハケ。口縁部はヨコナデ。内面は横方向のヘラケズリ。口縁部は横方向のハケ。	
12	35	51	1	SD1002	土師器	飯蛸壷	(6.15)	(8.80)		釣鐘状を呈し、釣部を欠損する。	外面には指頭圧痕が残る。内面には強いイタナデを施す。	一部黒斑。
13	35	52	1	SD1002	土馬	頭部 左前脚		(13.75)	3.45	脚柱から斜め前方に伸びる頭部。脚は円柱状、頭部も途中までは中空。顔面表現は前髪をもち、目鼻口耳を円孔で表現。右耳孔なし。耳・鬣は欠損。	頭部は一部にハケメを残し、部分的にヘラミガキし、ナデで仕上げる。	赤色顔料塗布。脚端に黒斑。
	35	53	1	SD1002	土馬	右前脚		(9.00)	3.50	円柱状を呈す。	指頭圧痕を残しナデで仕上げる。円柱内面の調整は不明。	内面と下端の一部に黒斑
	35	53	1	SD1002	土馬	右後脚		(14.30)	3.60	円柱状の脚柱から中空の胴部へと続く。胴部下面に斜め前方を向く直径１㎝程度の穿孔が見られる。	体部外面から脚外面は接合部に指頭圧痕を残して縦方向から多方向のハケ。脚内面はナデ。	
	35	53	1	SD1002	土馬	左後脚		(11.10)	3.90	円柱状を呈す。下端の一部が突出する。	指頭圧痕・ナデが残る。	
14	36	51	1	SD1002	土師器	竈	(31.70)	30.40	(43.00)	掛口付近まで斜め上方につき出る付け庇、上向きの角状把手、把手横から派生する突帯をもつ。	外面は縦方向のハケ。内面はケズリか。	
15	37	54	1	SH02	須恵器	杯G	(9.80)	(3.35)	(6.90)	1/4残存。底部はヘラ切りのまま不調整。		底面に赤色顔料か。
16	37	54	1	SH02	土師器	杯A	(15.90)	(4.30)		1/4残存。斜めに立ち上がる体部から丸く収める口縁部へ続く。	外面は体部上半まで横方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。内面は放射状のヘラミガキを施す。	

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
17	37	54	1	SH02	土師器	杯A	17.80	5.50		1/2残存。斜めに立ち上がる体部からわずかに外傾する口縁部へ続く。	外面は底部から体部上半まで横方向のヘラケズリ後、横方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。内面は底部から体部まで放射状のヘラミガキを施し、暗紋としている。	
18	37	55	1	SH02	土師器	甕	(13.50)	(7.90)		1/8残存。頸部から屈曲する口縁部は内湾気味で、端部は四角く収める。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	
19	37	54	1	SH02	土師器	甕	(15.20)	(8.70)		1/6残存。頸部から緩く屈曲する口縁部は内湾気味で、端部は四角く収める。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	
20	37	55	1	SH02	土師器	甕	(14.70)	(6.15)		1/5残存。頸部から屈曲して広がる口縁部は内湾気味で、端部は四角く収める。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	口縁部一部黒斑。
21	37	55	1	SH02	土師器	甕	(15.00)	(4.50)		1/12残存。頸部から屈曲して広がる口縁部は内湾気味で、端部は四角く外方に突出する。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。内面は指頭圧痕を残して縦方向のヘラケズリ。	
22	37	54	1	SH02	土師器	甕	(16.70)	(14.60)		1/4残存。頸部から屈曲して広がる口縁部は内湾気味で、端部は四角く外方に突出する。	胴部外面縦から斜め方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	
23	37	55	1	SH02	土師器	甕	(16.10)	(3.85)		1/4残存。頸部から屈曲して広がる口縁部は内湾気味で、端部は四角く外方に突出する。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面は横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	外面に煤付着。
24	37		1	SH02	土師器	甕	(14.25)	(3.80)		1/6残存。緩く屈曲して広がる口縁部から、端部は丸く外方に突出する。	内外面にハケが観察できる。	
25	37	55	1	SH02	土師器	甕	(14.50)	(4.70)		1/4残存。緩く屈曲して広がる口縁部となる。端部は四角く収める。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げ、内面頸部には横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	
26	37	54	1	SH02	土師器	甕	15.80	(16.25)		1/2残存。丸底の底部から湾曲して立ち上がり、緩く屈曲して広がる口縁部となる。端部は四角く収める。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は縦方向のヘラケズリ、下半には指頭圧痕。頸部には横方向のハケが残る。	外面に煤付着。
27	37	55	1	SH02	土師器	甕	(17.40)	(3.30)		1/12残存。屈曲して広がる口縁部から端部は丸く収める。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は縦方向のヘラケズリ。	
28	37	55	1	SH02	土師器	甕	(19.30)	(5.60)		1/16残存。屈曲して広がる口縁部で、端部は小さな面をもって外に突出する。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。上面は横方向のハケが残る。内面は縦方向のヘラケズリ。	

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
29	37	55	1	SH02	土師器	甕	(24.80)	(9.70)		1/8残存。屈曲して広がる口縁部で、端部は面をもって上下に突出する。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。上面は横方向のハケが残る。内面は横方向のイタナデか。	
30	37	54	1	SH02	土師器	甕	(26.20)	(33.80)		2/5残存。丸底の底部から真直ぐに立ち上がる長胴へ続き、屈曲して広がる口縁部となる。端部は面をもって上下に突出する。	胴部外面上半は縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。上面はハケが残る。内面下半は斜め方向のヘラケズリ。上半は指頭圧痕を残す。	
31	37	55	1	SH02	土師器	甕	(28.00)	(3.60)		1/10残存。口縁端部は面をもち、内外に拡張。	ヨコナデで仕上げるが、内面下半には細かい横方向のハケが残る。	
32	37	55	1	SH02	土師器	甕	(28.40)	(6.70)		1/12残存。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。上面は横方向のハケが残る。	煤付着。
33	37	55	1	SH02	土師器	甕	(40.00)	(5.50)		大型の甕。口縁部がわずかに残る。屈曲して少し外反する口縁部。端部は面をもち、内面が突出する。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。上面は横方向のハケが残る。内面は横方向のハケあるいはイタナデ。	
34	38	55	1	SH02	土師器	鍋	(34.00)	(8.70)		小片。内湾する胴部から大きく屈曲して広がる口縁部へと続く。	胴部外面縦方向のハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。上面は横方向のハケが残る。内面は横方向のハケの後、斜め方向のヘラケズリかイタナデ。	
35	38	54	1	SH02	土師器	鍋		(9.30)		大きく内湾して立ち上がる胴部。	外面上半は縦方向のハケ、下半は横方向のハケ。内面は横方向のハケの後、斜め方向のヘラケズリ。	口縁部欠損。
36	38	54	1	SH02	土師器	鉢	(29.00)	(10.05)		大きく内湾して立ち上がり、わずかに内傾する口縁部へ続く。端部は内外に突出して端面を作る。	外面上部はハケの後、ヨコナデ。中程は縦方向のハケ。下半は横方向のハケ。内面下半は横方向のヘラケズリ。	
37	38		1	SH02	土師器	鉢	(29.60)	(3.80)		端部は内外に突出して端面を作る。	外面はハケの後、ヨコナデ。	
38	38	56	1	SH02	土師器	竈		幅(9.30)		庇向かって左半部。断面は大きくそる。左端部は下垂する。		
39	38	56	1	SH02	土師器	竈				焚口向かって右裾部。庇裾と前口部。	外面縦方向のナデ。内面縦方向のヘラケズリ。下部黒斑。	
40	38	56	1	SH02	土師器	竈				焚口向かって左裾部。庇裾と前口部。	外面縦方向のナデ。内面縦方向のヘラケズリ。下半黒斑。	
41	38	56	1	SH02	土師器	竈	(60.00)			掛口部。幅約1㎝の断面台形の鍔を貼り付ける。	外面は縦方向のハケ。内面は横方向のヘラケズリ。一部黒斑あり。	
42	38	56	1	SH02	土師器	竈	(53.00)			掛口部。鍔或いは庇の剥離痕あり。	外面は縦方向のハケ。内面は横方向のヘラケズリ。	
43	38		1	北東土坑	土師器	甕	(21.80)	(5.70)		「く」字に屈曲した頸部。口縁部はヨコナデによって端部を拡し、端面を有す。	肩部外面ハケ。内面は指頭圧痕。	
44	38	53	1	北東土坑	土馬	脚		(10.20)	(3.65)	脚筒と胴部の一部。内面に粘土付加。脚部の長さは6.8㎝。	指頭圧痕残る。脚端の一部に黒斑。	

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
45	38	53	1	北東土坑	土馬	尻尾	長5.95	幅3.05		扁平な板状を呈し、基部は大きく広がる。粘土のしわが見られる。		
46	39	57	1	SK1001	土師器	皿	(8.00)	1.20	(6.00)	器壁は全体に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切痕が残る。	色調　赤褐色。器面の磨耗が著しい。
47	39	57	1	SK1002	須恵器	皿	(8.00)	1.35	(5.00)	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	ロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。底部外面は未調整。糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕あり。	東播系須恵器魚住窯の製品。13c 前半代。
48	39		1	SK1005	須恵器	こね鉢		(4.00)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	口縁部外面　灰被り　東播系須恵器　13c 代。
49	39	58	1	SK1005	土師器	甕	(26.30)	(7.65)		体部は僅かに内彎。体部と口縁部の界は大きく「く」の字状に屈曲。口縁部は外方にひらく。	粘土紐巻上げ成形。口縁内外面　ヨコナデ調整。外面　ハケ目調整。内面　ハケ目調整。	器面の磨耗が著しい。外面全面に煤附着。
50	39	58	1	SK1005	土師器	甕	(32.40)	(8.70)		体部は内彎。体部と口縁部の界は大きく「く」の字状に屈曲。口縁部は外方にひらく。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面　ハケ目調整。	器面の磨耗が著しい。外面全面に煤附着。
51	39	58	1	SK1005	土師器	羽釜	(26.70)	(5.25)		口縁部は内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。	内面　ヨコ方向のハケ目調整。外面ヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。
52	39	58	1	SK1005	土師器	羽釜		(11.10)	(32.20)	体部はほぼ直立。断面台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。	内面　横方向の細かいハケ目調整。外面　タテ方向のハケ目調整。	内面に一部煤附着。色調　にぶい黄橙色
53	39	57	1	SK1006	土師器	皿	8.15	1.65	7.30	全体に器形は大きく歪む。平底。やや丸底気味。体部は短くほぼ直立する。	非ロクロ成形。口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内外面　指押さえ。指頭圧痕が残る。	色調　浅黄橙色。広義の京都系土師器。
54	39	57	1	SK1006	土師器	皿	8.25	1.70	7.65	器形は全体に大きく歪む。平底。体部はやや内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	非ロクロ成形。口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部から底部内面多方向のナデ調整。体部から底部外面　指押さえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	色調　浅い黄橙色。広義の京都系土師器。
55	39	57	1	SK1006	土師器	皿	8.20	1.75		器形は全体に歪む。平底。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	非ロクロ成形。内面～口縁部外面ナデ調整。底部外面　指押さえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	色調　浅い黄橙色。広義の京都系土師器。
56	39	57	1	SK1006	須恵器	椀	16.30	4.60	6.20	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。底部内面　やや窪む。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切痕が残る。	口縁端部に重ね焼痕。東播系須恵器　魚住窯の製品。12c 後半。
57	39	57	1	SK1006	須恵器	椀	(17.10)	4.75	7.45	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。底部内面　やや窪む。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切痕が残る。	器面は著しく磨耗する。口縁端部に重ね焼痕。東播系須恵器　魚住窯の製品。12c 後半～13c 前半。
58	39	57	1	SK1006	瓦	平瓦	長(8.45)	幅(5.55)	厚1.20	端部欠損。凸面無紋タタキか。	凹面縦ナデ。側面ナデ。	須恵質
59	39	58	1	包含層	須恵器	杯Ｈ蓋	(15.00)	3.90		1/4残存。天井部明瞭な稜線もたず。端部は丸い。	ヘラケズリ。一部火表。	1区南側出土。
60	39		1	包含層	須恵器	杯Ｈ蓋	(14.45)	(3.30)		1/10残存。端部は丸い。	ヨコナデ。	1区中央部精査中出土。
61	39		1	包含層	須恵器	杯Ｈ蓋	(14.20)	(2.85)		1/7残存。端部は丸い。	ヨコナデ。灰被り。	SH01北側出土。
62	39	58	1	包含層	須恵器	杯Ｈ	(14.00)	(3.30)		1/6残存。立ち上がりは1.5cm。端部は丸い。	底部回転ヘラケズリ。	西側側溝出土。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
63	39		1	包含層	須恵器	杯H	(11.80)	(2.65)		1/9残存。立ち上がりは0.9cm。	ヨコナデ。外面灰被り。	
64	39		1	包含層	須恵器	杯H	(13.10)	(2.60)		1/10残存。端部は外傾する。	ヨコナデ。	側溝出土。
65	39		1	包含層	須恵器	椀		(2.35)	(6.60)	平底高台。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切痕が残る。	東播系須恵器。12c 前半代。
66	39	58	1	包含層	須恵器	こね鉢	(25.10)	(4.30)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	内面～口縁部外面　灰被り。重ね焼き痕。	焼成はやや軟質。酸化炎焼成のため、色調は淡赤褐色を呈する。東播系須恵器魚住窯赤根川支群の製品。13c 後半。
67	39		1	包含層	須恵器	甕		(2.90)		口縁部は水平に折り曲げ。口縁端部上面に凹部をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　灰白色。
68	39	58	1	包含層	白磁	碗	(16.30)	6.70	(6.05)	高台は比較的厚く高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は水平に外方に引き出す。	内面の体部と底部の界付近に沈線1条。内面～外面の高台脇まで透明釉施釉。外面の高台脇以下	大宰府分類　白磁碗Ⅴ類。12c 後半。
69	39	58	1	包含層	青磁	碗		(3.10)	(5.70)	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的厚く低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。	内外面とも青磁釉施釉。高台畳付、高台裏は露胎。	色調　灰オリーブ色。龍泉窯系青磁碗。13c 前半。
70	39	58	1	包含層	青磁	皿		(1.05)	(5.40)	器壁は比較的厚い。平底。	底部内面に櫛描き雷光文。ヘラ描き草花文を施文。内面　青磁釉施釉。黄色味を帯びた淡い緑色に発色。底部外面　露胎。	同安窯系青磁皿。13c 前半。
71	40	59	2	P2014	須恵器	こね鉢	(25.80)	(7.55)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	粘土紐巻上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。	口縁部外面　灰被り　東播系須恵器　13c 代。
72	40	59	2	SE02	無釉陶器	壷		(8.85)	(16.60)	平底。体部は直立。	粘土紐巻き上げ成形。体部内面　回転ナデ調整。体部外面　ヘラケズリの後、回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。	内外面とも胡麻状に灰被り。底部外面　火襷状に発色、墨書。色調暗赤褐色。備前焼。16c 代。
73	40	59	2	SE02	瓦	平瓦	長28.20	幅(10.70)	厚1.75	凹面端部面取り。	凹面コビキA、布目、縦ナデ。凸面縦ナデ。	燻瓦。
74	40	59	2	SE03	無釉陶器	香炉	(6.30)	3.20	(4.80)	平底。脚を3箇所貼り付け。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干水平方向につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　明赤褐色。備前焼か？。
75	40	60	2	SE05	土師器	擂鉢	(26.00)	(5.40)		外面の口縁部と体部の界に浅い段をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ナデ調整。体部内面　横方向のハケ目調整の後、縦方向の擂目をクシ描きで施文。	色調　橙色。三田城に類例。16c 代。
76	40	60	2	SE05	土師器	擂鉢		(4.50)		体部は斜め上方に延びる。外面の体部と口縁部の界に段をもつ。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　横方向のハケ目調整の後、ヘラ描きの擂目を施文。	外面に煤附着。16c 代。三田城に類例あり。
77	40	60	2	SE05	土師器	鍋	(31.60)	(5.15)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部内面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	内外面とも煤附着。長谷川分類鉄かぶと形Ⅰ類。15c 前半。
78	40	60	2	SE05	須恵器	こね鉢	(34.80)	(4.40)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。	東播系須恵器　魚住窯の製品。13c 代。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
79	40	60	2	SE05	無釉陶器	擂鉢	(29.20)	(6.10)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、	粘土紐巻上げ成形。体部内面　櫛描きで、7条1単位の擂目を施文。内外面とも回転ナデ調整。	色調　暗赤褐色。外面　胡麻状に灰被り。備前焼Ⅳ期。15c代。
80	40	60	2	SE05	無釉陶器	盤	(30.00)	(4.80)		体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部上面は水平に端面をもつ。	粘土紐巻上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。口縁部～体部外面　自然釉が掛かる。	色調　にぶい赤褐色。胎土　精良。焼成　堅緻。備前焼16c代。
81	40		2	SE05	無釉陶器	甕	(44.60)	(6.10)		口縁部は断面楕円形状に肥厚。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼Ⅳ期。15c代。
82	40	60	2	SE05	無釉陶器	甕		(6.00)		口縁部は断面楕円形状に肥厚。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　暗赤灰色。備前焼Ⅳ期。15c代。
83	40	60	2	SE05	染付磁器	碗	(14.00)	(2.65)		体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	外面　呉須　界線2条　草花文。内面　界線2条	明青花磁器　16c代。
84	40	60	2	SE05	染付磁器	碗		(1.70)	(4.50)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　界線1・2条。内面　界線　2条　草花文。	色調　白色。明青花磁器　16c後半～17c初頭
85	40	60	2	SE05	瓦	丸瓦	長(9.35)	幅(10.10)	厚(2.20)	玉縁部剥離。	凸面縦ナデ。凹面布目、紐痕。縦ナデ。側面面取り。	
86	40	60	2	SE05	瓦	平瓦	長(23.80)	幅(13.40)	厚2.30	凹面端部・側面面取り。	凹面コビキA、布目、縦ナデ。凸面縦ナデ。	表面砂粒顕著。
87	41	62	2	SE06	染付磁器	瓶		(6.90)	(4.50)	器壁は全体に厚い。平底。高台は比較的幅が広く、高い。体部は内彎してほぼ直上に延びる。	外面　呉須で簡略化された草花文を描く。内面　露胎。	器面は低火度焼成のため、乳白色に発色する。肥前系。18c代。
88	41	62	2	SE06	瓦	丸瓦	長(18.20)	幅(8.00)	厚1.60	玉縁をもつ。穿孔2ヶ所、鳥衾等に用いられたものか。	凸面縦ナデ。凹面コビキBか。条痕。側面面取り。	燻瓦。
89	41	62	2	SE06	瓦	平瓦	長(9.30)	幅(11.50)	厚1.45		凹面広端部・側面面取り。平瓦B、布目なし	燻瓦。
90	41	62	2	SE07	土師器	焙烙	(29.40)	(4.75)	(26.60)	平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は丸みをもって収める。	底型作り。内外面ともヨコナデ調整。体部外面下部　指抑え。	焼成は比較的堅緻。器面は磨耗する。外面全体に煤附着。18c代。
91	41	62	2	SE07	施釉陶器	椀	(9.30)	6.40	4.20	器壁は比較的厚く、特に底部は厚い。高台は比較的幅が広く、高い。体部は僅かに内彎して、ほぼ直上に延びる。	内外面とも全面に厚く灰釉を施釉。にぶい黄緑色に発色。高台畳付の釉は拭き取る。	器面に細かい貫入。肥前系？。18c前半。
92	41	62	2	SE07	施釉陶器	椀	(10.65)	7.25	4.60	器壁は比較的厚く、特に底部は厚い。高台は比較的幅が広い。体部は直線的に、ほぼ直上に延びる。	内外面とも透明釉施釉の後、口縁部内外面に白濁釉を施釉。外面は全面に灰被り。内面の色調は褐灰色。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。唐津椀。17c中頃～18c前半代。
93	41	62	2	SE07	染付磁器	碗	(9.80)	5.95	(3.65)	高台は比較的細い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。内面　無文。外面　簡略化され草花文。界線1・2条。底部内面　圏線1条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18c後半。
94	41	62	2	SE07	染付磁器	瓶		(9.50)	(6.65)	高台は幅が広く低い。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	内面　ロクロ目明瞭。露胎。外面呉須　界線1条。生掛けでかつ焼成不良のため、磁器質とならず、陶質になる。	肥前系染付磁器。18c代。
95	41	62	2	SE07	無釉陶器	甕	(30.80)	(5.90)		口縁部は断面楕円形状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。胎土　精良。焼成　堅緻。備前焼Ⅳ期。15c代。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
96	41	63	2	SX01	施釉陶器	椀		(3.50)	3.30	高台は比較的細く低い。「ハ」の字状に外方に開く。器壁は比較的薄い。体部は内彎して斜め上方に延びる。形態は全体に端正。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	肥前系京焼風陶器椀。17c 中頃～18c 前半。
97	41	63	2	SX01	染付磁器	蕎麦猪口		(5.60)	(5.60)	器壁は全体に比較的薄い。平底。高台は形骸化し、細く低い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。	外面　松葉文・界線　2条。内面菱形文。底部内面　五弁花文？。	肥前系。19c 前半代。
98	41	63	2	SX01	瓦	丸瓦	長21.80	幅12.20	厚1.30	凹面広端部・側面面取り。	凸面縦ナデ。凹面コビキB。	燻瓦
99	41	63	2	SX01	瓦	丸瓦	長(22.45)	幅(7.50)	厚1.35	玉縁部欠損。凹面広端部・側面面取り。	凸面縦ナデ。凹面コビキB。	燻瓦。
100	41	63	2	SX01	瓦	平瓦	長(23.00)	幅(18.40)	厚1.25		コビキBか。ヨコナデ	燻瓦。穿孔未遂。
101	41	63	2	SX04	施釉陶器	椀	(9.00)	5.05	4.00	器壁は全体に薄い。高台は比較的細く高い。若干「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも白濁釉施釉。底部外面は露胎。	焼成は軟質で酸化炎焼成。京焼系？。
102	41	63	2	SX04	施釉陶器	壷 or 土瓶	(8.10)	(5.85)		器壁は非常に薄い。体部は大きく内彎する。口縁部は短く直立。	外面　白泥をイッチン掛けで、簡略化された草花文を描く。その後、灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。内面露胎。露胎部　ロクロ目明瞭。	京焼系　19c 前半代。
103	41	63	2	SX04	瓦	軒丸瓦					珠文2残存。丸瓦凸面縦ナデ。内面ヨコナデ。	巴紋か。燻瓦。
104	42	64	2	SD2004	弥生土器	底部		(2.30)	7.60			壺
105	42	64	2	SD2004	土師器	鍋		(7.20)		体部は内彎。口縁部はやや内傾。口縁端部は尖り気味。外面の体部と口縁部の界に退化した断面三角形状の鍔を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　叩き目が残る。体部内面　板ナデ調整。	色調　明赤褐色。長谷川分類　播磨型ⅠB類。15c 中頃。
106	42	64	2	SD2005	土師器	皿	10.30	2.20	5.60	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切痕が残る。	色調　浅黄橙色。器面は著しく磨耗。
107	42	64	2	SD2005	土師器	皿	(10.20)	(2.60)	(6.70)	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は屈曲して斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	非ロクロ成形。内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	器面は著しく磨耗する。口縁部内外面に煤附着。
108	42	64	2	SD2005	土師器	杯	(9.60)	(2.90)	(6.80)	底部の器壁は厚い。平底高台。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	ロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　にぶい黄橙色。
109	42	64	2	SD2005	土師器	擂鉢	(25.40)	(5.80)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付け。口縁端部は斜め上方につまみ上げる。	口縁部内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内面～体部内面　横方向のハケ目調整。	体部外面は磨耗。三田城に類例あり。16c 代。
110	42	64	2	SD2005	土師器	鍋	(27.00)	(9.50)	(30.00)	丸底。体部はほぼ直立。口縁部は内傾。	口縁部内面　横方向のヘラ削り調整。口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面　格子目状の叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　橙色。長谷川分類　播磨型Ⅲ類。16c 末葉～17c 初頭。
111	42	64	2	SD2005	須恵器	壷	(17.00)	(4.80)		口縁部は大きく外反する。口縁部内面に沈線1条。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　斜め方向のタタキ目が残る。	東播系須恵器。13c 代。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
112	42	64	2	SD2005	無釉陶器	甕	(21.00)	(4.70)		口縁部は玉縁状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　灰白色。備前焼Ⅲ期　14c前半。
113	42	64	2	SD2005	無釉陶器	甕	(45.50)	(6.25)		口縁部は「く」の字状に大きく屈曲する。口縁端部は内側に丸く折り込む形。	内外面とも強いヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。丹波焼。
114	42	64	2	SD2005	無釉陶器	擂鉢	(39.60)	(5.85)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。縁帯の外面に凹線2条。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内面　赤土部塗布。外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色　備前焼Ⅴ期　16c代。
115	42	64	2	SD2005	染付磁器	皿	(10.70)	(2.60)		平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内面　呉須　太い界線1条。界線1条。外面　太い界線1・1条。	色調　やや青味を帯びた灰白色。生掛けのため釉のノリは悪い。粗製の明青花　16c代。
116	42	65	2	SD2005	瓦	丸瓦	長(14.60)	幅(9.00)	厚2.70	玉縁部。側面大きくケズリ。	凹面布目、紐痕	
117	42	65	2	SD2005	瓦	平瓦	長(11.70)	幅(7.60)	厚2.55	凸面側側面の大きなケズリ。凹面狭端部の面取り。		
118	42	65	2	SD2005	瓦	鳥衾	長(22.35)	幅(16.40)	厚2.50	平瓦の広端面の左端一部が突出。	凹面コビキA,布目、縦横方向の粗いナデ。凸面縦方向の丁寧なナデ。	
119	43	66	2	SD2006	土師器	鍋	21.85	(12.50)	24.50	丸底。体部と低部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直上に延びる。口縁部は僅かに内傾。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔を貼り付け。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の叩き目が残る。底部外面　叩きの後、叩き目をナデ消す。体部内面上面　ヨコ方向のハケ目調整。底部内面　多方向のナデ調整。	色調　浅い黄橙色。長谷川分類　播磨型ⅠC類。15c後半～16c初頭。
120	43	66	2	SD2006	土師器	鍋	(23.40)	(5.60)		体部はほぼ直立。口縁部は僅かに内傾。外面の体部と口縁部の界に段をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	色調　灰黄褐色。長谷川分類　播磨型Ⅲ類。16c末葉～17c初頭。
121	43	66	2	SD2006	土師器	鍋	(25.90)	(5.90)		口縁部は僅かに内傾。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	体部外面に煤附着。色調　にぶい橙色。長谷川分類　播磨型ⅠC類　15c後半～16c初頭。
122	43	66	2	SD2006	土師器	鍋	(29.00)	(7.10)		体部・口縁部とも内傾する。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面　横方向のハケ目調整。	色調　にぶい橙色。長谷川分類　播磨型ⅠB類。15c中頃。
123	43	66	2	SD2006	土師器	鍋	(30.10)	(10.80)		底部と体部の界は屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ヨコ方向の叩き目が残る。内面　ナデ調整。	体部外面の下半部　煤附着。色調　にぶい黄橙色。長谷川分類　鉄かぶと形Ⅱ類。15c中頃。
124	43	66	2	SD2006	土師器	擂鉢	(30.80)	(4.60)		口縁部外面に断面三角形状の鍔を作り出す。口縁端部は斜め上方につまみ上げる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整。体部内面横方向の粗いハケ目調整の後、縦方向に擂目施文。	色調　明赤褐色。三田城に類例。16c代。
125	43	66	2	SD2006	土師器	こね鉢	(22.70)	(4.40)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整。体部内面横方向の粗いハケ目調整。	色調　浅黄橙色。口縁部の形態は東播系須恵器鉢に類似。須恵器の年代観からは13c後半代。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
126	43	66	2	SD2006	土師器	擂鉢		(4.35)		口縁部外面に凸帯を作り出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整。体部内面横方向の粗いハケ目調整の後、縦方向の擂目施文。	色調　浅黄橙色。三田城に類例あり。16c代。
127	43	66	2	SD2006	土師器	火舎	(19.00)	(6.60)		体部はほぼ直立。口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁端部を内側に引き出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　橙色。
128	43	66	2	SD2006	弥生土器	直口壷	(10.80)	(3.25)		口縁部1/8残存。緩く内湾して立ち上がる口縁。端部は丸く収める。	口縁下に2条の凹線。	
129	43	66	2	SD2006	施釉陶器	鉢？		(2.40)	(6.10)	平底。底部に棒状で両端を押さえた形の脚を貼り付ける。体部はほぼ直立。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面灰釉施釉。淡黄緑色に発色。体部下半および内面は露胎。	美濃系。16c代。
130	43	66	2	SD2009	土師器	鍋		(3.40)		口縁部外面に断面三角形状の短い鍔を貼り付け。	内外面とも強いヨコナデ調整。	色調　にぶい橙色。長谷川分類播磨型Ⅱ類。16c中頃～後半。
131	43	66	2	SD2009	土師器	擂鉢		(3.50)			外面　ヨコナデ調整。内面　横方向のハケ目調整の後、擂目施文。	色調　明赤褐色。三田城に類例。16c代。
132	43	66	2	SD2009	須恵器	こね鉢		(3.90)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切り、断面三角形状を呈する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　多方向のナデ調整。	口縁部外面　重ね焼き痕。東播系須恵器　13c代。
133	43	66	2	SD2009	施釉陶器	椀		(1.40)	4.60	高台は幅が広く、比較的低く削りだす。	内外面とも灰釉施釉。にぶい黄橙色に発色。底部内面に砂目跡3箇所。	肥前系唐津。17c前半。
134	44	67	2	SD2011	瓦	桟瓦	長26.20	幅24.00	厚1.30	尻の切込みが大きい片二寸の深切桟瓦。	ナデ。	燻瓦。
135	44	67	2	SD2011	瓦	桟瓦	長26.20	幅23.75	厚1.55	尻の切込みが大きい片二寸の深切桟瓦。	表面に砂粒。ナデ。	燻瓦。
136	44	67	2	SD2011	瓦	桟瓦	長26.55	幅21.20	厚1.40	尻の切込みが大きい片二寸の深切桟瓦。		生焼けか。
137	44	67	2	SD2011	瓦	桟瓦	長26.20	幅23.20	厚1.00	尻の切込み部に型の痕跡はあるが切っていない。	表面に砂粒。ナデ。	燻瓦。
138	44		2	SD2011	瓦	平瓦	長(18.00)	幅(24.60)	厚1.70		コビキBか。摩滅。	粘土採掘坑1出土と接合。
139	44	67	2	整地土	瓦	軒丸瓦	径(14.00)			巴紋の尻尾と珠紋3残存。裏面の丸瓦接合部には櫛目が見られる。		燻瓦。
140	44		2	整地土	瓦	桟瓦	長(17.40)	幅(13.50)	厚1.40	尻部中央近くに一辺0.3cmの釘孔。		燻瓦。
141	45	68	3	甕倉2 P11	土師器	椀		(1.20)	3.40	平底。底部を浅く削って、僅かに平底高台を作り出す。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	ロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切痕。	色調　浅黄橙色。12c後半～13c前半代。
142	45	68	3	甕倉2 P3	土師器	椀		(2.00)	(4.00)	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰黄褐色。器面は著しく磨耗。
143	45	68	3	甕倉2 P4	土師器	擂鉢		(3.90)		口縁部外面を強くナデて、若干断面三角形状の段を作る。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。内面　横方向のハケ目調整の後、4条1単位の擂目施文。	焼成　堅緻。色調　外面　灰褐色。内面　橙色。16c代か？。
144	45	68	3	甕倉2 P11	無釉陶器	擂鉢		(5.00)		体部は僅かに内彎。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面にクシ描きの擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。口縁部外面灰被り。備前焼Ⅳ期。15c代。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
145	45	68	3	甕倉2付近	土師器	鍋	(23.10)	(7.05)	(26.00)	体部は僅かに内彎。口縁部は若干内傾。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　ヘラ磨き状のヨコナデ調整。体部外面格子目状の叩き目が残る。	色調　にぶい橙色。長谷川分類播磨型Ⅲ類。16c 末～17c 初頭。
146	45	68	3	甕倉2 P1	無釉陶器	壷		(8.50)	(26.20)	体部は大きく内彎。	粘土紐巻上げ成形。内外面とも回転ナデ調整。体部外面上面にクシ描きの波状文施文。	外面　胡麻状に灰被り。色調　褐灰色。備前焼壷。14c ～15c 代。
147	45	68	3	甕倉2 P5	施釉陶器	椀	(11.00)	(3.05)		体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して外方にひらく。	内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。	瀬戸系天目茶碗。16c 代。
148	45	68	3	甕倉2 P4	白磁	碗ｏｒ皿		(1.50)		口縁部は外反する。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	華南産白磁。16c 代。
149	45	68	3	甕倉2 P11	白磁	皿	(8.80)	(1.80)		口縁部は輪花状に整形。内外面にヘラ状工具で蓮弁文(草花文)を施文。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。	華南産白磁。16c 代。
150	45	68	3	甕倉2 P11	白磁	碗		(1.30)	(6.90)	高台は断面台形状で低く細い。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	高台畳付に砂附着。15c ～16c 代の華南産白磁。
151	45		3	SX05	土師器	椀		(1.25)	(3.80)	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	ロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	色調　浅黄橙色。
152	45	68	3	SX05	土師器	鍋	(31.60)	(11.90)	(36.00)	丸底。体部・口縁部とも内傾。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部外面に凹部を形成。体部外面斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面　ナデ調整。	色調　橙色～灰褐色。体部外面に煤附着。長谷川分類　播磨型Ⅱ類。16c 中頃～後半。
153	45	68	3	P3006	無釉陶器	壷		(13.50)	(10.20)	平底。体部は直立。	水挽きロクロ成形の後、体部外面を押さえて窪ませる。外面　赤土部塗布。暗赤褐色に発色。	備前焼。布袋徳利か？。18c 後半～19c 前半。
154	45	69	6	内堀下層	土師器	鍋	(20.10)	(5.80)		体部は内傾。口縁部外面に強いナデにより、若干鍔状の凸帯を作り出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。僅かに鍔状の凸帯を作り出す。体部外面　平行叩き目が残る。体部内面板ナデ調整。	色調　褐灰色。長谷川分類　播磨型Ⅱ類。16c 中頃～後半。
155	45	69	6	内堀最下層	土師器	鍋	(28.70)	(14.90)	(30.80)	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲し、体部はほぼ直立する。口縁部直立。口縁部の外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	色調　にぶい橙色。長谷川分類播磨型ＩＣ類。15c 後半～16c 初頭。
156	45	69	6	内堀最下層	土師器	擂鉢	(24.30)	9.20	(11.40)	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部外面下位ケズリの後回転ナデ調整。内面　ハケ目調整の後、クシ描きの擂目施文	焼成は比較的堅緻で陶質に近い。色調　赤褐色。三田城に類例あり。16c 代。
157	45	69	6	内堀下層	土師器	不明		(2.40)	(28.80)	なんらかの容器の脚部か。	外面　ヨコナデ、内面　板ナデ調整。	色調　浅黄橙色。
158	45	69	6	内堀下層	須恵器	鉢		(4.40)		口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。	酸化炎焼成のため、鈍い橙色に発色。東播系須恵器　13c 代。
159	45	69	6	内堀下層	無釉陶器	壷		(9.70)	(11.10)	平底。体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも、赤土部を塗布。	色調　暗赤灰色。外面　胡麻状に灰被り。備前焼。船徳利。16c 代。
160	45	69	6	内堀最下層	須恵器	甕	(43.60)	(17.00)		体部は内彎。口縁部は大きく「く」の字状に屈曲して外方にひらく。口縁部は側面に端面をもち、上端と下端とを僅かにつまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　不定方向の叩き目が残る。体部内面　当具痕あり。	色調　灰色。

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
161	46	69	9	内堀北辺	瓦	丸瓦	長(13.0)	幅(9.0)	厚1.6	玉縁部。凹面玉縁部、側面削り。	凹面布袋痕。条痕。凸面ヘラミガキ状の縦ナデ。	燻瓦。
162	46	70	11	堀状遺構上層	土師器	鍋	(20.50)	(6.80)		体部はほぼ直立。口縁部は僅かに内傾。口縁部外面にナデによる段状の鍔を作る。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面　平行叩き目と指おさえ痕が残る。	色調　灰黄褐色。長谷川分類　播磨型Ⅱ類。16c 中頃～後半。
163	46	70	11	堀状遺構下層	土師器	鍋	(21.80)	(6.30)	(25.20)	体部は内彎。口縁部は僅かに内傾。口縁部外面の鍔は段状に退化する。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面　横方向の叩き目が残る。	体部外面に煤附着。長谷川分類播磨型Ⅱ類　16c 中頃～後半。
164	46	70	11	堀状遺構下層	土師器	鍋	(24.00)	(4.05)		口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　浅黄橙色。長谷川分類　播磨型ⅠC類。15c 末葉～16c 初頭。
165	46	70	11	堀状遺構下層	土師器	鍋		(4.90)		口縁部外面に強いヨコナデ調整により、段状の鍔を作り出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　粗いハケ目調整。	色調　にぶい橙色。長谷川分類播磨型Ⅱ類。16c 中頃～後半。
166	46	70	11	堀状遺構上層	土師器	鍋		(4.00)		口縁部外面に強いヨコナデ調整により、段状の鍔を作り出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　粗いハケ目調整。	色調　明赤褐色。長谷川分類　播磨型Ⅱ類。16c 中頃～後半。外面煤附着。
167	46	70	11	堀状遺構下層	無釉陶器	壷		(9.30)	(10.00)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面ともヨコナデ調整。内外面とも粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察される。底部外面　未調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼？。
168	46	70	11	堀状遺構上層	施釉陶器	皿		(0.95)	(6.50)	高台は断面U字状の低い貼り付け高台。	内面　灰釉施釉。外面　露胎。	色調　オリーブ黄色。美濃焼大窯期の製品。黄瀬戸皿。16c 代。
169	46	70	11	SK1101	土師器	椀	(11.80)	4.60	(7.70)	平底。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	ロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。体部外面には粘土紐の単位が明瞭に認められる。	色調　にぶい褐色。底部外面　未調整。糸切痕が残る。
170	46		11	第2面検出	土師器	擂鉢		(3.50)		口縁部外面に断面三角形状の凸帯をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　粗いハケ目調整。体部外面　ヨコナデ調整。	色調　橙色。三田城に類例あり。16c 代。
171	46	70	11	第2面溝？	無釉陶器	甕		(4.65)		口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ描きあり。	色調　灰褐色。備前焼Ⅳ期。15c 代。
172	46	70	11	第2面検出	青磁	碗	(11.50)	(3.60)		体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁部は直口する。	体部外面に線描きの細蓮弁文を施文。剣頭と体部とはほぼ一致する。内外面とも青磁釉施釉。	色調　オリーブ灰色。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。15c 後半～16c 代。
173	46	70	11	包含層	青磁	碗	(14.20)	(3.80)		体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁部は直口する。	体部外面に線描きの細蓮弁文を施文。剣頭と体部とは一致する。内外面とも青磁釉施釉。	色調　くすんだ灰緑色。全面に灰被り。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。15c 代。
174	46	71	11	SH03	土師器	高杯	(15.30)	(11.35)	14.60	脚柱から緩やかに直線的に広がる裾部には4円孔。裾端部には凹線を施す。中空の脚部に椀状の杯部がのる。底部充填。	裾端部はヨコナデ。内面は横方向ハケ。絞り痕。脚柱外面は縦方向ヘラミガキ。杯部外面は横方向のヘラミガキ後、ヨコナデ。内面は放射状や横方向のヘラミガキ後、ナデか。	裾部2ヶ所に黒斑。低床部中央。
175	46	71	11	SH03	土師器	高杯		(9.70)		脚柱部から屈曲して直線的に広がる裾部には円孔。中空の脚部に椀状の杯部がのる。底部充填。	裾端部はヨコナデ。内面には絞り痕。脚柱外面は縦方向のヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	低床部

番号	図版	写真図版	地区	出土場所	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
176	46	71	11	SH03	土師器	高杯		(8.60)		脚柱から緩やかに広がる裾部には円孔。	脚部内面には横方向のハケ。絞り痕。外面は縦方向のヘラミガキ。杯部外面はヘラミガキか。	床面
177	46	71	11	SH03	土師器	鉢	(32.70)	(23.70)	5.40	小さな底部から湾曲して立ち上がり、屈曲して短く広がる口縁部へと続く。端部には面をもつ。片口をもつか。	外面はハケの後、縦方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。内面は横方向にハケとヘラミガキが残る。	体部中央に黒斑。低床部中央。
178	46	71	11	SH04	弥生土器	底部		(3.85)	2.80	少し上げ底の小さな底部。	内面にはイタナデ状の痕跡が残る。	焼失面上
179	46	71	11	面精査	弥生土器	製塩土器		(2.10)	4.65	裾広がりの底部。内面中央に突出部。	外面にタタキ。	
180		50	1	SH01	須恵器	杯蓋				杯H蓋。小片。口縁端部内面に凹線をもつ。		竈周辺出土。
181		51	1	SD1002	須恵器	杯				回転ヘラケズリ。		
182		51	1	SD1002	須恵器	杯				回転ヘラケズリ。		
183		51	1	SD1002	須恵器	提瓶？					外面カキメ。	
184		56	1	SH02	土師器	竈		幅(8.30)		庇。断面は大きくそる。		38と同一個体か。接点なし。
185		56	1	SH02	土師器	竈		幅(8.30)		庇。		38と同一個体か。接点なし。
186		56	1	SH02	土師器	竈		幅(3.80)		庇。		38と同一個体か。接点なし。
187		56	1	SH02	土師器	竈				掛口部か。突帯剥離痕。直径0.5cmの焼成前穿孔あり。		38とは焼成等が異なる。
188		56	1	SH02	土師器	竈				庇裾か。		38とは焼成等が異なる。
189		56	1	SH02	土師器	竈		幅(7.00)		庇。	下面にハケを鋸歯紋状に施す。上面はハケとナデ。	38とは焼成等が異なる。
190		59	2	SE02	無釉陶器	擂鉢				平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。内面に10条1単位の擂目を櫛描きで施文。	色調　暗赤褐色。備前焼。
191		59	2	SE02	瓦	丸瓦	長(10.10)	幅(8.60)	厚1.40	広端部。	凹面コビキB。条痕。広端部凹面ケズリ。側面凹凸面面取り。	燻瓦。
192		59	2	SE02	瓦	平瓦	長(15.20)	幅(11.50)	厚1.90		凹面コビキA。	
193		60	2	SE05	無釉陶器	甕				平底。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　明赤褐色。備前焼。
194		61	2	SE05	瓦	丸瓦	長(8.40)	幅(10.20)	厚1.80	広端部。	凹面広端部ケズリ。側面面取り。	燻瓦。
195		61	2	SE05	瓦	丸瓦	長(7.50)	幅(10.20)	厚2.20	玉縁剥離。	コビキA。布目。	
196		61	2	SE05	瓦	丸瓦	長(11.60)	幅(10.60)	厚1.80	玉縁部。	凸面縦方向ナデ。凹面布目。玉縁部ケズリ。側面ケズリ。	
197		61	2	SE05	瓦	丸瓦	長(11.70)	幅(8.10)	厚1.70		凸面縦方向ナデ。凹面布目。側面ケズリ。	燻瓦。
198		61	2	SE05	瓦	丸瓦	長(10.30)	幅(13.60)	厚2.20	玉縁部。	凸面ナデ。凹面コビキB．布目か。ナデ。側面ケズリ。	上層礫中。燻瓦。
199		61	2	SE05	瓦	平瓦	長(10.20)	幅(11.30)	厚1.90	広端部。	凹面コビキA。凹面端部中央ケズリ。	燻瓦。
200		61	2	SE05	瓦	鳥衾	長(12.70)	幅(9.70)	厚1.80	平瓦の端部の左端が突出。	凸面ナデ。凹面コビキA。布目。縦方向ナデ。	
201		65	2	SD2005	瓦	丸瓦	長(8.60)	幅(11.20)	厚2.40	玉縁部大きくケズリ。	凹面コビキA、布目。	燻瓦。
202		66	2	SD2006	無釉陶器	擂鉢				平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。内面に9条1単位の擂目を櫛描きで施文。	色調　淡赤褐色。備前焼。使用痕顕著。

第６章　中世後半期、福中城跡・芝崎遺跡の景観

はじめに

福中城跡は明石の市街地から北西約８㎞に位置し、明石川を望む中位段丘端部に立地する中世城郭である。主郭は段丘頂部の字「本丸」周囲とされ、かつては１辺 80 m前後の方形の区画が存在したという。構造的には西側を正面として、いくつかの曲輪を配した複郭構造の城館という評価がなされている。

主郭は標高 38m 前後を測り、西側段丘下の沖積地との標高差は約 10 mを測る。今回の調査範囲は、この城跡主郭を南北に縦断する国道 175 号線の拡幅に伴うものである。福中城跡の範囲では４～12 区、城跡南側の芝崎遺跡の範囲に１～３区がある。福中城跡と芝崎遺跡は南側外堀とされる幅 50 m開析谷によって大きく分かたれるが、この位置には４・５区を設けた。

１．福中城跡の現況と調査

1960 年代に福中城跡の調査を行った岡久雄・黒田義隆(1)によれば、「遺址の全体には、竹藪、松、その他雑木、雑草が一面に繁っているが、その中にいまなお歴然として、空濠址、水濠址及び各郭址が比較的原形を保って残っている。」と記しており、同城はかつて良好に景観が残された城郭であった。同書には当時の写真などが掲載され、詳細な遺構写真が当時の様子を伝えてくれる。特に第 18 図東北隅土塁・第 20・21 図上の丸、第 22 図大手口、第 26 ～ 28 図の内堀、第 29 図本丸北側土塁などは現在では不明となった城郭遺構の様子を伝えてくれる資料として価値も高い。

この調査の当時には、すでに城跡主郭を貫通して国道 175 号線が通り、北側の市営住宅は建設されていたが、まだ城館の景観は良好に残されていたようである。しかし、現在では遺跡地周辺が城郭跡であることを思わせるような景観は、一見したところでは見出しにくくなっている。わずかに主郭東南側の堀状の窪みが国道脇に確認できる点や、主郭北東隅の林の中に土塁の痕跡が残される点(2)にかつての城跡の姿を偲ぶことができる。しかし、これらは一見しただけではもはや城跡の痕跡とは判別しがたいものとなっている。さらに、西側工場敷地の脇には稲荷社の祠が残されるが、これは中世城館調査にも記載がある。調査当時はこの祠の周囲に堀が確認されたようであるが、現在は削平されまったく遺されていない。

２．福中城跡の構造

発掘調査の成果

出土遺物からすると福中城跡の年代は 16 世紀後半段階まで存続することが、内堀出土の鍋（154）などから明らかになったが、この点は先の構造の検討とも一致する。ただし、遺物には 13 ～ 15 世紀前後の鍋（155）・須恵器鉢（158）・甕（160）なども含まれるため、古い段階から集落などの遺跡が存在した可能性も残された。さらに、城跡北側に当たる６区の遺構面周辺や堀でも 16 世紀後半代の（162・163・170 など）遺物が出土しており、広く当該時期の遺跡の広がりが推測される。ただし、６区堀遺構の南側谷地形を堀と評価できるかどうかは今後の検討が必要であろう。また、未掲載資料には在地産の糸切り手法を用いた土師器皿が２点含まれるが、手づくね皿が出土していない。これは、三木から三田にかけての地域的様相に近似するもので、この時期、糸切り皿が主流を占める地域の広がりが福中城跡

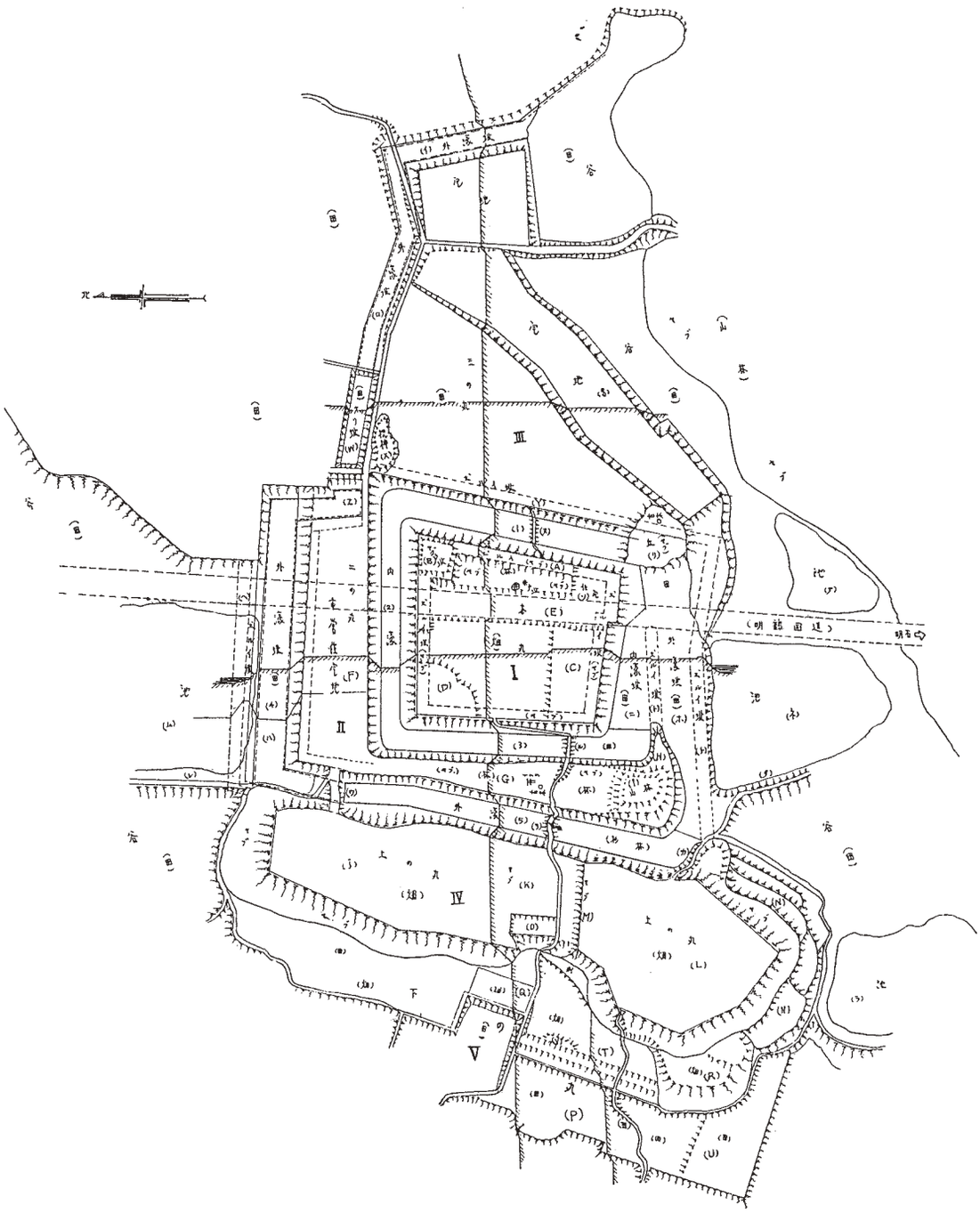


図２　縄張り図１

周辺まで広がっていたことを示唆した。

今回の調査で検出された城跡関係の遺構は、内堀（南・北辺）と南側外堀の北肩部と北側外堀の南肩部がある。内堀南辺は幅 4.5 ～ 5.0 m、深さ 2.1 mを測るが、基本的に底は水平で、箱堀となるが、主郭の堀としては中規模である。一方、内堀北辺については位置が確認できたのみで、大きく撹乱を受けていたため構造などの詳細は不明である。

北側外堀は縄張図にある西側の外郭から続く堀である。肩部の落ち込みを検出したが全体規模など不明な部分が多い。また、南側外堀についても開析谷の肩部との関係など不明な部分が多いため今後の検

討を待って結論する必要があろう。さらに、主郭内部については前述のとおり、大きく削平が行われ遺構面が切り下げられた可能性が高い。このため残念ながら遺構の検討はまったくできなかった。このように、城跡の成果については限られた資料しか得ることができなかったが、内堀の検出や出土遺物によって、僅かながらでも考古学的な検証ができた意義は大きいといえるだろう。

縄張図から

以上のように、福中城跡の現状は周囲の市街地化が著しく、地表面観察からその構造を分析することは困難になっている。さらに、発掘調査においても判明したことは限られたものであった。そこで、次にはこれまでの現況調査の成果から検討を行ってみたい。縄張図としては前掲の岡久雄氏(3)および宮本博氏(4)の各氏のものがある。

岡久雄氏（縄張り図１）の縄張図は昭和1960年代のものである。これによれば主郭は４方を内堀で囲み、南東部分に突出部をもち、北東隅に櫓台が表現される。さらに、城跡東側から北側・西側にかけて本丸・二の丸を囲んで外堀が存在したという。同図の推定では南側にも外堀が存在したとするが、地形としては当時すでに残っていなかったようである。郭はⅠ郭（主郭）と東側にⅢ郭（三の丸）、北側にⅡ郭（三の丸）、西側にⅣ（上の丸）・Ⅴ郭（下の丸）の５郭で構成され、西側の沖積平野に向けて下りながらⅠ・Ⅳ・Ⅴの三段構成になる。さらに大手は主郭から下る畦道を考察している。また、Ⅲ郭周辺は南側を谷地形、北側を外堀が囲う。この外堀は地形として顕著に残されていたようで、西側には土塁も観察された。

以上であるが、状況からすると主郭の面積が優越し（実際のⅣ郭は図よりも狭く、前述大手道を挟んで２つの独立した郭の可能性がある）、下位に中小規模の郭を配した構造と評価できる。また、主郭の郭取りでは、地形的には拡張の余地を持ちながら、あえて１辺80ｍ前後の規模を設定し、方形を意識した選地となる。さらに、城下には三木街道が南北にとおり、これに面して集落が形成されている。集落の起源は江戸初期まで遡ることができるが､城郭に付随して形成された可能性が高いといえるだろう。方形を意識することで居館的な構造を持つことが想定されるが、そのことを前提とすれば、館城的な在地に根ざした遺構と評価できる。

これに対してⅢ郭は不定形な郭取りで、内部にいくつかの段差を持つ。平面プランに企画性がなく粗放に広域を囲い込んだ印象が強い。このため、駐屯地的機能を担った郭と推測され、戦時に臨時的な拡張が行われた可能性が高い。また、南東隅に突出部を持つ点や、北東隅に櫓台が存在することは、軍事的に発達した構造を読み取ることができ、16世紀後半の遺構と評価できる。つまりⅢ郭は西側を正面とする城郭構造に後から駐屯地的な機能を持たせて構築されたと考えられる｡これらを合わせ考えると、基本構造は主郭から西側を向く地域の城館であるが、Ⅲ郭が構築されることによって、より軍事的な機能を付加されたことを読み取ることができる。そして、主郭規模（１辺80ｍ）からは土豪層よりは大規模な領主層の城郭を推測できるが、このことについては後述する。

一方、宮本図によれば（縄張り図２）本丸周囲は南辺を除く３方に内堀が囲み、西側にのみ明確な外郭の堀が存在していたという。前者よりも国道沿いに宅地化が進み、内堀の様子が東辺ではわかりにくくなっていたのだろう。だが、まだ北側の谷には溜池も残され、西側の外堀も残されている。岡図にくらべ大手道の表現が明確となるが、これは大手を強調した表現の差と捉えられる。

一方主郭に関しては南東側の突出部や土塁・櫓台などが表現されない。現在、この突出部は今回の調査地（６区）の東側藪地周辺と推定されるが、改変を受けてしまい今では判別がつかなくなっている。

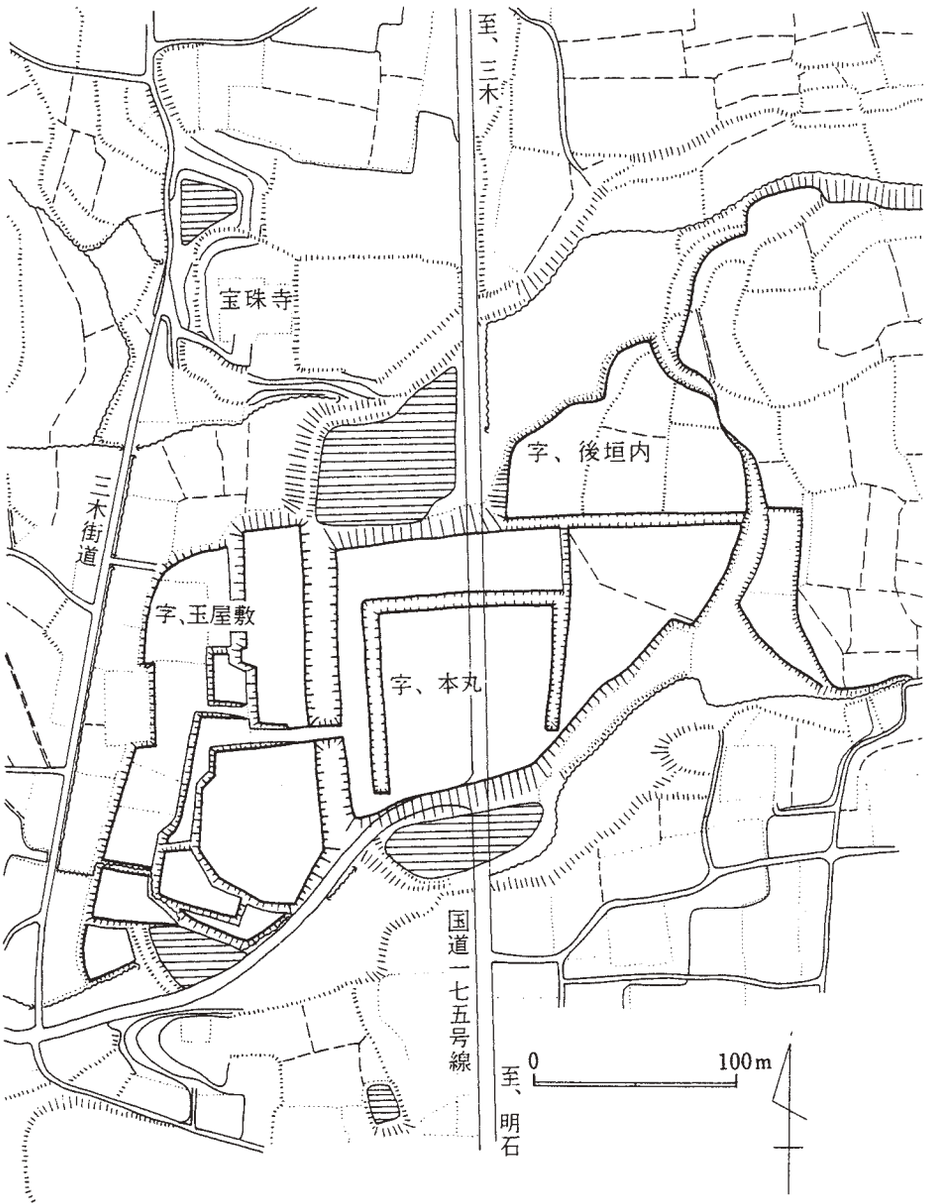


図３　縄張り図２

このように２者の違いは作成年代の違いであるが、相違点はあっても大きな点では共通するが、後者の段階では地形の読み取りがより困難になってきている。さらに、縄張図を観察しての印象は、①丘陵端に選地し、西側を大手とする館城的な構造を持つこと。②主郭周囲に櫓台・突出部など軍事的な発達が見られ、東側に駐屯地的な郭を構築する点に戦国末期の特徴が見られる。③、②の状況より館城的な構造からさらに発展がみられ、より軍事的な機能を担った城郭となった、などである。

福中城跡城下について

両氏も指摘するとおり城跡の周囲には城関連の字名が多い。主郭は字「本丸」、この北東側は字「後垣内」、西北隅の郭は字「玉屋敷」と呼ばれる。また、北側には城主の菩提寺といわれる曹洞宗宝殊寺があって墓碑（五輪塔･写真図版 49 中段）や位牌が伝わる。そのほか、北西側の沖積地にあたる字「平瀬」は家臣平瀬氏に由来するともいう。さらに、城郭の正面（写真図版 48 上段参照）は西側眼下の沖

積地を向くもので、膝下を明石から三木に通う通称「三木街道」が通い、街道の周囲には小規模な城下集落が形成されたという。

この城下にあたる福中村の集落は、宝殊寺も含め南北道に通る三木街道に沿って並ぶ。福中は江戸期には尺之内村（元禄郷帳）(5)と称し、慶長国絵図の「しゃくノ内」に比定され、南側の芝崎村よりも小規模であるが、江戸初期にはすでに独立した村として存在する。芝崎と異なる点は、背後の丘陵上、城郭域には民家が及ばず、街道が丘陵裾を通過する点である。この点、芝崎が街道とともに丘陵上に展開することとは大きく異なるが、村が古城を忌避し開発を避けた可能性も考えられ、2つの村の成り立ちが中世後半に大きく規定されていることを推測させる。ただし、城郭が存在する割には集落が小さく、城下集落として発展したという形跡は見られない。おそらく、城郭に付随する程度の施設群で、経済的な便益はむしろ芝崎遺跡に頼ったのではないだろうか。

主郭の規模

主郭は一辺80 m前後であることが確認できたが、前述のとおり、主郭規模については、方形を意識することや、領主の主郭規模に対する意識などが働いた結果、決定されていると考えられる。このため主郭の規模はその城の社会的位置を反映して、意図的に設定された可能性が高いといえるだろう。そこで、周辺の城郭の主郭について検討し、福中城跡の位置付けを考えてみたい。

東播磨や北摂津で大規模な主郭を持つ城郭は枝吉城跡（明石市）・三木城跡（三木市）・淡河城跡（神戸市北区）・三田城跡（三田市）などがある。

枝吉城跡(6)は明石氏の本城で、明石川を見下ろす段丘端部に築城される。主郭は広い台地頂部に構築されていたが、現在は大半が宅地造成で削平されてしまった。航空写真などによると縦横150 m前後の規模を持っていたようであるが、内部には段差が存在するため、何区画かに細分されていた可能性がある。しかし、そのことを考慮に入れても主郭の面積はかなり広いものと推定される。

三木城跡は別所長治が籠城したことで知られ、戦国末期には東播磨の中核になった城である。伝本丸と南構・新城の3郭が中核をなす。ただし、新城は駐屯曲輪と推定され、軍事的緊張時に使用された可能性が高い。このため、同城の中核機能を担ったのは前2者のであろう。本丸の規模は南北120 m、東西130 m前後であるが、平成18年度の発掘調査によって東西方向に幅9 m級の大規模な堀が見つかっている。従って、主郭中枢部は南北70 m前後と推定される。淡河城跡は有馬氏が居城とした城郭で、やはり主郭南・西面を大規模な土塁・堀が囲う。主郭の規模は南北90 m、東西60 mで面積は4000 ㎡前後になる。三田城跡は現在の有馬高校が建つ天神の段丘上に築城された。段丘の尾根線上に3～4箇所の郭が並ぶ構造で、主郭は1町半ほどの規模を持つ。この南側で平成6年に発掘調査(7)が行われ、礎石建物・井戸・竈などが検出されている。この調査によって郭内部の北東隅に堀が検出されため、主郭はさらに区画されている可能性があるが、少なくとも1町規模程度はあったと推定される。

これらの城郭は枝吉城跡が不明であるが、三木合戦後も城郭として機能し、改修によって主郭規模が拡大した可能性が大きい。現に、三木城跡の主郭は織豊期に堀が埋められ、規模が拡大しており、戦国末期の主郭は南北70 mとやや小規模となる。このため、他のものについても、戦国末期の主郭はさらに細分されて小規模であった可能性が残される。しかし、種々に問題点は残すものの、大まかには70～100 m規模前後といったところが拠点城跡郭の主郭規模と考えられるのではないだろうか。

これに対して、中小規模の城跡館では萩原城跡（神戸市北区淡河町）・脇村構居（神戸市西区）・下津橋砦（神戸市西区）福谷城跡（神戸市西区）などがあるが、これらは在地土豪が領主であるものが多い。

萩原城跡は淡河城跡に関連して三木合戦の舞台となった城郭であるが、主郭は北向きに虎口をもち、周囲を土塁と横堀で囲む。規模は南北 30 m、東西 30 m前後を測る。脇村構居は 1 辺 50 mの方形を呈した居館(8)で、周囲には最大幅 10 mという大規模な堀を巡らす。下津橋砦の規模は明確ではない点が残されるが、土塁が囲む範囲は東西 60 m、南北 50 m前後と推定される。土塁は高さ 3 m、幅 10 m前後を測り、堀も幅 10 m前後が推定され、通常の居館に比べ大規模となる。

このように、主郭規模を比較すると大きく 2 極に分けられることがわかる。そして、地域の拠点である前者の拠点城郭群と後者の土豪クラスの群ではやはり規模の点で 1 線を画すると考えるのが妥当なようである。

以上からすると福中城跡の主郭は、拠点城郭の主郭に相当する可能性が高い。80 m級前後の居館は近年の研究では地域内に多数存在するわけではなく、国人クラスの居館にのみ採用されるという。明石川の周辺域でも 80 m以上の主郭に持つ城跡は、枝吉城跡を除くと確実なものは見当たらない。つまり、福中城跡跡は主郭規模からすると明石周辺の拠点城跡郭の 1 つであった可能性が高い。内堀が中規模という点には疑問が残るものの、16 世紀後半段階には周辺の拠点として、機能していたと考えられる。

3．芝崎遺跡周辺

一方、城郭跡南側の芝崎遺跡にも字「南垣内」・「鴨垣内」・「北垣内」・「居屋敷」・「的場」が知られ、中世以来の集落が存在したことを想起させるが、今回報告の 1 ～ 3 区や昭和 60 年度の調査区(9)においても広く集落遺跡に関係する遺構・遺物が確認された。1 ～ 3 区では 16 世紀後半段階と考えられる屋敷地群、昭和 60 年度調査区では 14 ～ 15 世紀代の堀跡が検出された。さらに、出土遺物から見るとこれらの集落の痕跡は 13 世紀ごろから近世にいたるまで継続する可能性が高く、長期間にわたるようである。さらに、近世には 2 区で瓦窯が築窯されるが、これらも村の存続を裏付けるものであろう。

芝崎遺跡周辺も福中と同じく慶長国絵図に村名が確認され、芝崎村と向井村(10)（ただし、向井村の一部は福中城跡にもかかる。）に分かれる。芝崎村は「明石記」（享保年間）では東西 2 町 50 間、南北 1 町 18 間、田方 304 石、家数 32 軒、人数 170 人を数えた。規模からすると福中よりもやや大きな村で、南北に長い構造は三木街道に沿って形成されたことに起因するのだろう。この基本的な構造は現在と変らない。さらに、字「南垣内」から北東側は向井村となる。この村は享保年間（1716 ～ 36）人 142 人・家数 24 で、規模は東西 1 町 40 間、南北 1 町 6 間（「明石記」）を数えたという。田方は 149 石（延享 3 年）で芝崎村・福中村よりもやや小さいが、いずれも概して小規模な村である。

ここで注意されるのは 16 世紀後半の検出遺構が縦割りの屋敷地を南北方向に並べる点である。写真図版 49 下段に示したように三木街道はこの芝崎の周辺のみ段丘上に登り集落内を縦走する。検出された屋敷地は東西に縦長で、この街道に方向を一致させる。また、昭和 60 年調査の堀は 14 ～ 15 世紀に機能したが、この堀は 16 世紀を待たず廃絶している。つまり、まず 14 世紀段階に段丘上にブロック型屋敷地割ないし居館的な構造のものが出現し、芝崎遺跡の原形となる集落を形成し、16 世紀後半になると街道に面した街村状の集落が小規模ではあるが成立し、町的な様相を呈したと推定される。さらに、この集落の屋敷地には甕倉が何箇所かに建つが、これは畿内の都市部で発達したもので、この技術の浸透は、町的な様相が畿内の都市形成の動きに連動して起こっていることを示唆する。一方、このような構造や甕倉といった遺構は今のところ伊川谷や櫨谷などの周辺の集落には見つかっていない。唯一、明石南部の枝吉城跡の山麓には城跡下の存在が指摘され、今後都市的な構造が解明される可能性をもって

いるが、ほかの明石川流域の集落には可能性が少ない。これらのことを見ると、芝崎が街道の拠点として都市的な場となりつつあったことは重要である。

次に福中と芝崎の関係であるが、近世以降の村の規模では常に福中村にくらべ芝崎村のほうが大きいが、立地などの状況からすると中世においてもその関係は変化がなかったと推定される。芝崎・福中の集落は現代では小規模で目立たない存在であるが、福中城跡が押部谷で唯一の城跡であることや、芝崎遺跡が町的な様相を持った集落であることからすると、中世後半段階では押部谷地域の中核的な場所になっていたと推測される。つまり、福中城跡・芝崎遺跡は１つの地域として成立するが、慶長期以降、それぞれが独立した村として分離したのであろう。ここで問題となるのが、城郭と集落の関係である。どちらも 13 世紀ごろから集落が形成されたことが推測されるが、小規模であるはずの福中が城郭に取り立てられている点が注意される。経済拠点としてより発展した芝崎遺跡側に城郭が存在せず、北背後のやや奥まった場所が選地されている。芝崎遺跡側にも 14 世紀頃には居館的な遺構が存在するが、その後は発展せず集落としての道を歩むので、城館が並立する可能性は低い。このことから考えると福中城跡は芝崎遺跡の集落から、経済的な便益を利用する目的で、より容易に乗り込み易い地を選んで、築城したと考えると理解しやすいのではないだろうか。

これまでの城下町のイメージでは戦国末期になって領主の城郭を中核に城下町が形成されたり、城郭を中心とする広い意味での城下空間の中に経済的拠点（市場など）が散在するなどとされてきた。しかし、福中城跡の場合、城郭を中核として形成された空間はあくまで福中村の範囲であるので、むしろ芝崎遺跡周辺の経済的な場の有利性に城郭が擦り寄った形を想定するほうが妥当ではないかと思われる。

４．明石周辺の城郭と福中城跡

明石川流域の城郭と福中城跡

明石の北部地域には押部谷・櫨谷・伊川谷の３つ谷が南東に向かって開口する。この３つの谷の内、櫨谷には多数の中小城郭跡の存在が知られているが、伊川谷や押部谷には少ない。一方、南側の明石川下流域でも中世城郭は下津橋砦や枝吉城跡が知られるものの数は限られているので、櫨谷の突出は目立つ存在である。

伊川谷では太山寺裏山の大山寺城跡や櫨谷との境の丘陵頂部にある高畑城などの山城と、脇村構居・小寺城跡などの平城が存在する。この中では高畑城跡が横堀などを持ち、軍事的な発達が見られる。しかし、他の城郭には発達したものは認められない。また、太山寺城跡は太山寺の城郭とされ、押部谷の西盛城跡（性海寺）と同じく寺院に関連する城郭といわれ、武家の城とは性格が異なる。

櫨谷(11)には福谷城跡（神戸市北区）・池谷城跡（神戸市西区）・端谷城跡（神戸市西区）(12)など多くの城郭が知られる。このうち谷奥の端谷城跡では、礎石建物・塼列建物が検出され、大型の堀や横矢効果をねらった防御施設がみられた。主郭では中心櫓台の脇から塼列建物が検出され、内部に甲冑 10 数領が置かれていた。また、横堀に突出させた小郭にも礎石建物が設けられるなど、多彩な縄張りを持つことが判明した。一方、福谷城跡は２郭を中心として周囲を横堀で囲む館城的な構造を持つ、平均的な中世城郭である。さらに、池谷城跡は陣城ともいわれ駐屯地をもつなど発達した要素が見出される。

このように櫨谷には多数の城郭が見られが、中世城郭の縄張りを持つものと、発達した構造を持つもの、陣城などが混在した状況となっている。ただし、主郭の規模はどれも半町未満にとどまり、中小規模の城郭群という印象が強い。

これらに対して押部谷では、前述の西盛城跡・細田城跡[13]を除くと福中城跡のみが存在を知られ、他に城郭が存在した形跡が見られない。つまり、谷の口に当たる場所に唯一の城郭が存在するわけである。

このことは谷の内部では領主の自立性が抑制され、小さいながら福中城跡にその権力が集約されたことを物語る。つまり、押部谷では福中城跡が優越する主郭を持つ規模に発達することによって、地域の全体的な築城が抑制されたと推定される。この点でいえば、櫨谷では優越する領主の存在がないため、城館が分立し、個々の城館の主郭規模が拡大しなかったと考えられる。また、伊川谷では太山寺という宗教勢力によって城郭が抑制され、谷の口に居館が構築されるにとどまったことが推定される。つまり、これら３つの谷ではそれぞれに異なった様相の地域構造の展開が見られた。このために、城郭群の様相が異なったと思われる。

以上からすると、福中城跡は押部谷を押さえる唯一の領主の城郭として発展し、明石川流域では枝吉城跡に次ぐ、内容･規模をもった城郭であったと推定される。ただし、主郭に突出部や櫓台を持つこと、２重堀の構造や東側の駐屯郭の存在から見ると、広域的機能を持った城郭の印象も持つ。東側の駐屯郭の存在が確実ならば、福中城跡の最後の姿は単なる在地領主の城館から発展して、広域の軍事的緊張に対応した構造に変化した可能性が高い。16 世紀後半段階の軍事的緊張では三木合戦が大きいが、前述の端谷城跡の構造などからすると明石川流域においてもこの合戦の影響で城郭構造が大きく変化した可能性が推測される。

播磨九城城割り

天正８ないし９年に出されたとされる、秀吉の城割文書（一柳文書）には播磨の主要な城郭九城の破却命令[14]が記されている。この文書に「平野の城」が登場し、福中城跡に比定する意見がある。本城を考える上で重要な問題であるので、先に見た評価を絡めてこの問題について触れておきたい。これまで見てきたように、福中城跡は明石郡域では枝吉城跡についで大規模な城で、櫨谷などの中小規模の城郭よりは大規模である。城下は付属的な施設は持つが小規模で、南側の芝崎遺跡と密接な関係を持ちながら経済的な便益を計っている。このため、豊臣政権の城郭整理令の上では上がるべき城郭と考えてもおかしくはない。また、平野という地名も、城跡を含む押部谷周辺の地名であるが、近隣で知られている城郭遺構は福中城跡のみである。また、播磨の別の場所においても有力な候補は見つかっていない。このため、平野の城を福中城跡と考えるのが有力と判断される。

そうだとすると、豊臣政権期に湯ノ山街道が整備され、有馬・淡河城跡・三木城などが改修されることと比べると、三木街道ルートとは大きな開きがあるように思える。この点、政策上の相違が窺えて興味深い。距離的に近い明石・三木間では城郭や経済拠点を点在させるよりも、むしろ明石周辺の経済的集中をこそ優先した結果かもしれない。このために、このルートに関しては街道の整備は行うものの、街道上の都市形成は放棄されたのであろうか。そのせいか福中・芝崎の周辺には戸数 20 ～ 30 戸ほどの村が多く、大規模に集住した村落や、都市的景観を持つような場所が存在しないのも興味深い。

註）

⑴　岡久雄・黒田義隆 1961『福中城と間嶋彦太郎』神戸市文化財調査報告４　神戸市教育委員会

⑵　前掲文献１による。図版 26 に土塁の状況が紹介される。

⑶　前掲文献１掲載図による。

⑷　兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』　浅岡俊夫「福中城跡」掲載図による。

⑸　平凡社 1999『兵庫県の地名Ⅰ』による。

⑹　木村英昭 1985『史料明石の戦国史』による。

⑺　兵庫県教育委員会 1999『三田城跡発掘調査報告書』による。

⑻　兵庫県教育委員会 2005『上脇遺跡Ⅱ』による。

⑼　兵庫県教育委員会 1988『芝崎遺跡』による。

⑽　前掲５文献による。

⑾　櫨谷の城館の概要については多田暢久 1994「縄張りについての考察」『大都市の中の農村』和泉書院による。

⑿　神戸市教育委員会 2005『端谷城跡発掘調査現地説明会資料』および黒田恭正氏のご教示による。

⒀　兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』による。

⒁　小林基伸 2006「播磨の破城令について」『播磨置塩城跡発掘調査報告書』夢前町教育委員会　による。

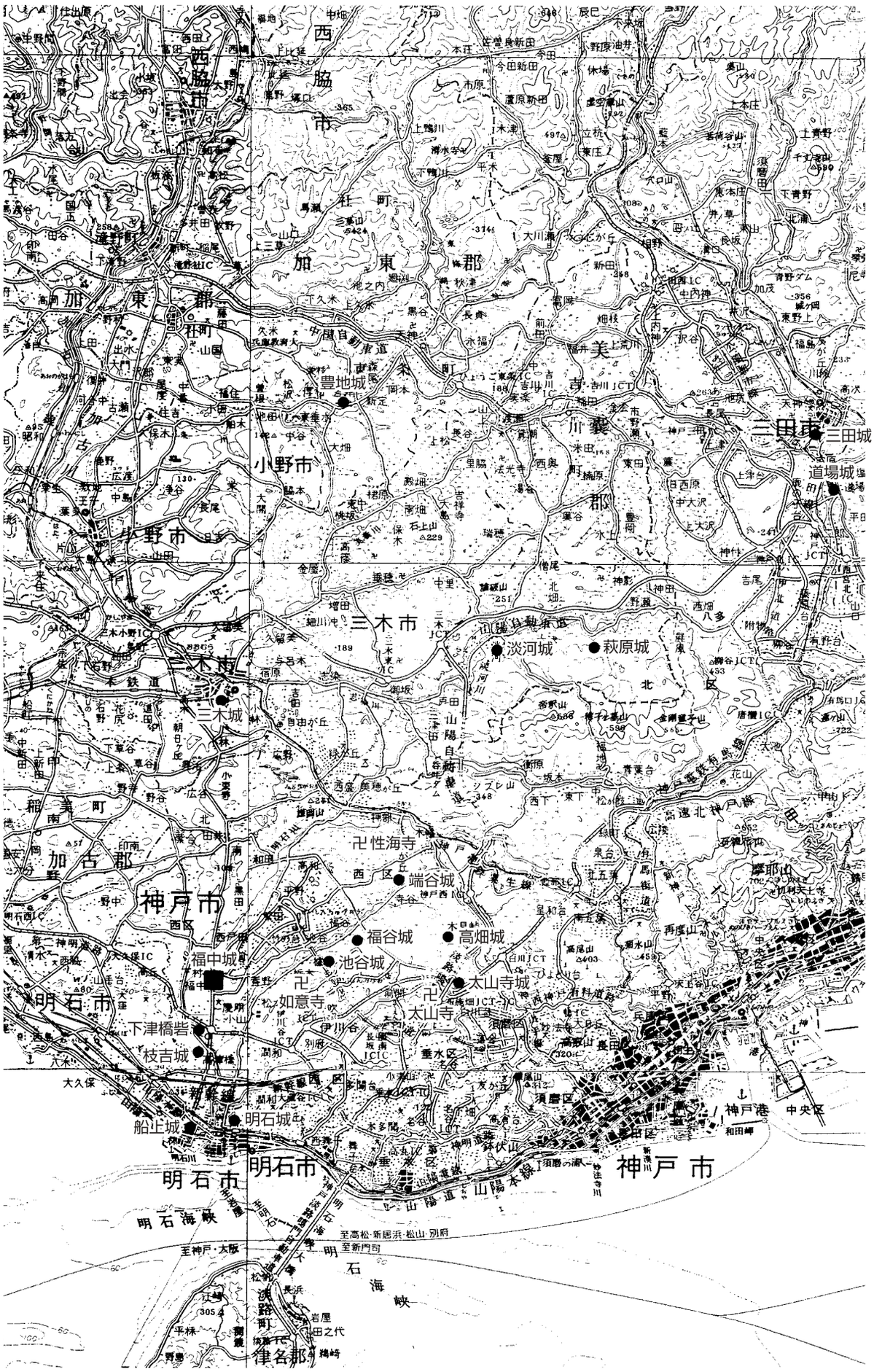


図４　周辺の城跡（Ｓ＝１：200,000）

第７章　まとめ

１　弥生時代

本遺跡において検出された主な時期の遺構・遺物について概観したい。本遺跡では弥生時代中期、古墳時代前期、古墳時代後期～奈良時代初頭、中世前半、中世後半、近世の遺構･遺物が検出されている。この中で中世後半に関しては、第６章に詳述されているため、一部の遺構についてのみ記述する。

弥生時代中期

弥生時代中期に属する遺構は、11 区の竪穴住居 SH04 のみであり、そこからの遺物はきわめて少ない。他には、２区の包含層出土の土器や、１区出土の石鏃がこの時期のものであろう。弥生時代中期前半には南西にある玉津田中遺跡竹添地区などで多数の竪穴住居、掘立柱建物や方形周溝墓群、水田などが検出されている。ここでは水田耕作の他、出土した遺物から、蛸壺などによる漁業、機織、大形原材料獲得によるサヌカイト製石器の製作、砂岩製石包丁の生産、農工具や容器など多種多様な木製品の生産などがおこなわれており、明石川流域における中核集落のひとつと考えられているが、中期後半に大洪水に見舞われており、水田や周溝墓などが完全に砂で埋没し、居住区にも大きな被害を与えたものと考えられる。洪水後の時期の集落は、段丘上の玉津田中遺跡南大山地点や居住・小山遺跡などが、また、背後の丘陵上には西神ニュータウン 48・50・65 地点や青谷遺跡などに集落が見られるようになる。芝崎遺跡・福中城跡周辺に存在する同時期の集落もこの一連の集落移動の一端を示している。

弥生時代後期から古墳時代前期

玉津田中遺跡平野地区の、下村字中町で第１次調査（1989）に弥生時代後期の円形住居や古墳時代前期から５世紀後半の方形住居が検出されている。字出口で実施された第６次調査（1995）で、弥生時代後期の円形住居址、庄内式期・布留式期それぞれの方形住居址が検出されている。これらは段丘下の沖積微高地上に営まれている。1987 年度調査の芝崎遺跡では弥生時代後期の竪穴住居が検出されており、この時期には段丘の上下で集落が営まれているようである。

２　古墳時代後期から奈良時代

古墳時代後期から奈良時代初頭には、１区で竪穴住居 SH01 や SH02 、溝 SD1002 などが見られる。この時期の集落はあまりよく分かっていないが、1986 年度に調査した芝崎遺跡でも遺物が出土しており、また、神戸市教育委員会による北東側の確認調査では古墳の周溝状の遺構が確認されており、近辺に同時代の遺跡が広がっていることがわかる。

出土した土器から SH01 は、須恵器による編年では播磨永井編年のⅡ２Ｂ・Ｃ小期、陶邑田辺編年の高蔵 10 型式新段階頃と考えられ、６世紀中頃のものと推測される。続く SD1002 は図化できた須恵器はなかったが、土師器甕の特徴は SH01 に近く、竈も７世紀初頭前後のものとされることから、６世紀後半から７世紀初頭頃のものと判断される。SH02 は、土師器杯などの特徴から、飛鳥Ⅱ、７世紀の中

頃にかけての時期が与えられる。

土馬について

土馬は首をやや低く伸ばし、円筒状の脚に中空の胴部をもち、一部にハケ調整を残すもので、古式の様相を示すが、残存する範囲内では飾り馬の特徴は見られない。共伴した土器から６世紀後半から７世紀初頭頃のものと考えられる。顔面の表現は目鼻口ともに円形の刺突によって表されており、特に口の表現が通例では横線の切れ込みによって表されているのと異なる。装飾須恵器に見られる動物の口の表現と共通する。

同じく明石川流域の上脇遺跡では中空の胴部下に穿孔がある飾り馬が出土している。また、明石川下流の吉田南遺跡からも中空の土馬が出土しており、古式の土馬が比較的多く出土する地域である。この地域的な特色の背景には、上脇遺跡や出合遺跡などから出土した韓式土器などからも知られる渡来系の人々の動静が関わっているのではなかろうか。芝崎遺跡の土馬は溝からの出土とはいえ、あまり水に関係しない段丘上から竈などとともに出土した。上脇遺跡の土馬も旧河道の近くではなく、山裾から出土している。土馬祭祀は主として水に関連した水霊祭祀に用いられたものとされるが、古式の土馬は異なった用いられ方をしていた可能性がある。

このほかに周辺では、字平瀬の玉津田中遺跡平野地区 1989 年度の第２次調査トレンチ７から土馬が出土している。

3　中世前半

中世前半の時期には１区の墓址 SK1006 、２区の掘立柱建物 SB03 等が見られるにすぎない。

今回の調査区の北西約 500m にある玉津田中遺跡平野地区の北端部、字下村の明石川に近い地区で大規模な掘立柱建物群が検出され、16 点もの陶硯が出土している。また、多くの鉄器や漆の付着した須恵器などの出土も見られる。平安時代末期（11 世紀後半頃）の時期があてられており、この遺構群の性格は荘館の存在を窺わせ、そこに属する工房などの雑舎域と考えられている。（神戸市 2000）

また、玉津田中遺跡辻ヶ内地区では、12 世紀後葉後半頃の堀で囲まれた池や瓦葺き建物が検出され、居館が存在したと報告されているが（兵庫県 1994・1996）、この地が浄土教寺院跡であった可能性も示されており、東約１㎞にある二ツ屋遺跡の仏堂を備えた居館と対の存在であったとされている。（上原 2001）この両地点の遺跡はともに、北に存在する神出窯の製品を多量に出土し、窯業生産物の流通に深く関わっていたことが考えられる。芝崎の段丘上の遺構はこれらよりも遅れて出現している。

木棺墓について

SK1006 は小型の木棺墓で、銅鏡・須恵器・土師器を供献してあり、数珠や鉄製鋤先も出土している。同じように鏡を副葬する中世の土壙墓（木棺墓を含む）は兵庫県内での検出例はきわめて限られており、いずれも 12 世紀後半から 13 世紀前半にかけてのものである。

芝崎遺跡と同じく神戸市西区の上脇遺跡は、明石川の支流の伊川右岸に位置する遺跡である。この遺跡の木棺墓 SX52101 からは土師器皿・数珠玉・鉄製紡錘車・刀子とともに和鏡が出土している。後述するようにこの遺跡からは石製硯も出土しており、同時期の芝崎遺跡との共通項が多い。また、中世後

半には脇村構居・脇村砦に伴うとされる大規模な堀が設けられる点でも似通っている。

三木市の宿原寺ノ下遺跡では木棺墓 SX205 から鉄製毛抜き・刀子・銅銭・漆器・須恵器皿とともに荒磯紋双禽鏡が出土している。この木棺は底板に釘を用いており、埋土上面には板石を並べて内側に礫や土器・瓦を入れている。掘立柱建物群で構成される屋敷内に、建物群の最終段階で築かれたものであり、有力農民層が被葬者であると考えられている。（兵庫県 2003）

たつの市の福田天神遺跡 SX4 では青白磁合子・瓦器皿・滑石製温石とともに草花蝶鳥鏡が出土している。温石は石鍋を再加工したものであるが、内面が楕円形に窪んでいることから、一旦硯に転用したものかもしれない。大型の掘立柱建物群の一角で検出され、他に土坑墓が数基存在するが、この土坑墓は掘立柱建物を挟んで単独で存在する。

丹波市春日町の多利・前田遺跡では土壙墓 SX-1 から和鋏・毛抜き状鉄製品・刀子・玉状金属製品・青白磁蓋付小壺・青白磁合子・白磁皿・土師器皿・漆箱とともに瑞花鴛鴦鏡が出土している。掘立柱建物群とは溝を挟んで隔てられたこの土壙墓は、質的に他遺跡のそれを凌駕する副葬品を持っており、鎌倉幕府開府に伴う新興勢力の領主層などが被葬者として考えられている。（兵庫県 1986）

これらの墓址は、同時期の館の一角に単独或いは２～３基が散在して築かれており、墓地として集中するものではない。また、鏡を持つ墓が同一の集落内で複数基存在することもない。この傾向は兵庫県内のみならず、周辺の地域でも言えそうである。周辺の集落を含めた頂点に位置する者の一族が被葬者として考えられる。

鏡を墓に副葬する行為は、日本においては弥生時代から見られ、古墳時代前期・中期に最も盛行し、多量の鏡を副葬するものも見られる。これは被葬者の権威の象徴として、また、呪術的な意味合いが強いものとして考えられている。古墳時代後期や飛鳥時代までは鏡の副葬は見られるが、大量の副葬はなくなる。奈良時代には火葬が広まるためか、火葬址以外の墓があまり見つかっていないためか、鏡の副葬は見られなくなる。再び墓に鏡が副葬されることが盛んになるのは 12 世紀から 13 世紀頃で、経塚に鏡が伴う時期に符合する。但し、墓に鏡を副葬することは経塚以前の 10 世紀前半には確実に存在することから、末法思想によるものではなかろう。大陸や韓半島においては被葬者一人に対して１～２点の副葬が通例で、他の道具が伴う点からも化粧道具としての生前の日常品を死後の世界にも随伴させたものであろう。日本の中世墓においても、鏡は和鋏や毛抜きとともに出土することがあり、やはり化粧道具の一部として副葬されたものであろう。青白磁の合子も化粧薬や香などを入れていたものかもしれない。仮に化粧道具をもつことから被葬者が女性であるとすれば､彼女は初代当主の妻あるいは母であり、またその一族としても母的な存在であったのではなかろうか。

石硯について

石硯は、２区の掘立柱建物 SB03 の柱穴 P2017 から、再加工が加わった滑石製の石鍋とともに出土した。楕円形の四隅を入角しており、四葉形や木瓜形とも呼ばれる。材質も緻密で石紋をもつもので、中国製の可能性が高いものと考える。同形のものは兵庫県内でも数点が出土している。

神戸市の上脇遺跡では、13 世紀前半のコの字形配置をもつ５棟以上の掘立柱建物群が伴う池跡から２点出土している。池は中世後半には埋没している。また、たつの市の福田片岡遺跡では井戸（SE11）から出土している。この井戸は字満願寺の北縁にあたり、14 世紀から 15 世紀前半にかけての居館の一部或いは寺院に伴うものであるとされる。また、宝塚市旧清遺跡でも平安後期から鎌倉時代前期のもの

とされる楕円形石硯が出土している。ここは寺院跡であり、石製の硯も寺院における僧侶の地位を示すものであろう。

以上のように、中世前半期に石製の楕円形硯を所有できる施設は、居館や寺院であり、所有者の地位もかなり高かったことが窺われる。

今回の調査では検出された中世前半の遺構は乏しいが、12 世紀後半から 13 世紀頃にこの地に根付いた人々は石製の硯を用い、墓には銅鏡を副葬している。これらの出土遺物からは調査地点が居館や寺院に関連した地区の一部であったことが推測される。

周辺の遺跡の動向から見ると、時間的には断続的ではあるが、玉津田中遺跡の平野地区下村の荘館から辻ケ内地区の居館或いは寺院と繋がり、芝崎遺跡は次の段階にあたる。この時期はその次の段階の福中城とを繋ぐ位置を占めており、また、神出窯が衰退する時期にも一致する。この地域の中核をなす施設の移動或いは分岐の状況を知ることができる。

4　中世後半

福中城に関しては第 6 章に詳しいため、ここでは一部の遺構・遺物についてのみ述べる。

甕倉について

甕倉とした遺構は２区と３区の２ヶ所で検出された。この地区はともに福中城外の南辺に位置している。２区の甕倉１では６列×６列で、一部を欠いて 20 基の据え付け穴が検出された。３区の甕倉２では４列×４列と北西部に２基の合計 18 基の甕を据え付けた痕跡が見出せたが、いずれも甕本体が元位置に残るものはなかった。掘り方が甕倉１では約 20 ㎝、甕倉２では約 40 ㎝とあまり深くないことから、甕の底部だけを埋設したもの或いは、胴部中程まで埋設したものであろう。甕倉１は周辺より若干低く、平地式或いは半地下式の可能性があるが、甕倉２は検出状況からは平地式であろう。

甕倉２の据え付け穴掘り方埋土からは 16 世紀代を中心とした時期の遺物が出土している。甕倉１からは時期が判明する遺物は出土しなかったが、周辺には同時期の井戸や溝が見られ、これらの遺構とともに 16 世紀末までに埋没したものと考えられる。

この種の遺構は埋甕遺構とも呼称されているが、単独埋置ではなく、複数基が単列或いは複数列に配置され、しかも斜めや倒立ではなく正立しているもので明らかに墓址などではないものは、貯蔵を目的とした倉の一部として、甕倉と呼ばれている。

和歌山県の根来寺坊院跡では 20 ヶ所以上確認されており、福井県一乗谷朝倉氏遺跡や広島県草戸千軒町遺跡などでも複数地点で見つかっている。一乗谷では 28 基もの甕を据えた施設が見つかっている。近隣では大阪府刀根山城跡や、大阪城跡などでもみつかっており、兵庫県内では三木城跡（三木市）、三田城跡（三田市）、感状山城跡（相生市）等で検出されている。

草戸千軒町や一乗谷の町屋で検出されたこの施設は、紺屋・油屋・酒屋などの諸職に伴うものとされており、根来寺坊院跡のものは油倉と推測されている（菅原 1992）。城下町ではなく城内で検出された例のうち、感状山城跡では脂肪酸分析により大甕内にイノシシ等の塩蔵肉が貯蔵されていたと推測され（相生市 1989）、また、三木城跡では炭化した麦粒が出土している（三木市 1986）。やはり籠城などに備

えた食料等の貯蔵が主目的となろう。

今回検出された甕倉は２基とも、想定される福中城域の外に存在し、感状山城や三木城のような城郭内における兵糧などの貯蔵施設とは異なる性格のものかもしれない。正長元年（1428）の「源則真燈油田寄進状」（裏端書）間島殿御寄進状には、間嶋氏が平野庄の燈油田を押部谷の性海寺に寄進したことが見られる。字「本丸」の西に見られる字「正カイヂ」は性海寺を表すと言われており、この近辺に燈油田があったことが推測されている。このことから根来寺坊院跡のような油倉が近くに作られたとも考えられるが、食料貯蔵用の倉の可能性も残される。

甕倉１では井戸 SE05 や周辺の近世以降の遺構から備前焼と思われる大甕の破片が出土しており、中には厚さ３㎝を超える底部の小破片も見られる。これは意図的に破砕されたものと考えるのが妥当であろう。

同様の埋甕遺構を多数検出している和歌山県根来寺坊院跡では、15 世紀後半から 16 世紀初頭までのものについては、同じく甕の抜き取り穴のみで甕本体は残っておらず、移設されて新たな場所に作られた可能性が高いと考えられている。これに対して、16 世紀初頭から天正 13 年（1585 年）の時期のものは意図的に破壊されたような状況を呈しているとされる。特に厚い底部を粉々に砕いていた例が見られる。軍事集団としての根来寺の経済的基盤を徹底的に破壊したものであろう。（村田 1989 、菅原 1992）

井戸について

今回の調査では合計９基の井戸が検出された。その中には浅く桶などを埋め込んだ水溜状のものもあるが、多くは湧水層まで掘りぬいており、実際調査中にも常に湧水が見られたものがほとんどである。段丘上に立地しているが、水量は豊富である。かえって最も標高の低い地点にある SE01 からは湧水はあまり見られなかった。この井戸は深さが 2.1 ｍの素掘りの井戸であるが、湧水点は深さ約 1.5m にある。その他の井戸も湧水点は 0.5 ～ 1.1m と非常に浅い。最も深い井戸であった SE05 では、深さ 2.2 ｍ中、0.5m と 1.1m の２層から湧水が見られた。

井戸の構造は素掘りのものが最も多い。時期の判明したものには SE07 があり、18 世紀後半までのものが出土している。他の素掘りの井戸（SE01･03･04･08･09）も 18 世紀後半以降の時期のものであろう。井側に結桶をもつものに SE06 がある。結桶組みの井戸は 11 世紀後半に北部九州に出現し、15 世紀になって西日本でも構築されるといわれるが、今回検出された SE06 は 18 世紀のものである。SE05 からも桶材と思われる板が出土しており、集水施設に桶を用いた可能性があるが、確実なものではない。

石組みをもつ井戸は２区で２基検出された。ともに石組みに一石五輪塔や五輪塔の石材を再利用している。SE02 では一石五輪塔を６点、底に近い位置で用いている。この井戸からは箱作りの釣瓶がほぼ完形で出土した。箱釣瓶の出土例は非常に少ないが、12 世紀後葉から 13 世紀前葉頃の大阪府西ノ辻遺跡出土例、江戸末期から明治初期の篠山市篠山城旧三の丸跡出土例とも形態や仕口が一致しており、四方転びの箱作りの釣瓶は、指物技術として完成した形で数百年間にわたって受け継がれていったものであろう。

SE05 も石組みをもつ井戸であるが、太いマツ材を加工した根太を井桁状に組み、その上に石積みをしている。五輪塔地輪が直接根太上に乗せられ、その他一石五輪塔片・宝篋印塔片などが石積みに転用されていたものと考えられる。

このような石造物部材転用の井戸は京都府勝龍寺城跡や三田市の三田城跡でも検出されている。井戸

や石垣、礎石などに墓石などを転用することは16世紀代に盛んに行われており、織豊政権前後における宗教観の大きな変化を示すものと考えられる。

この石組みをもつ井戸のうち、SE05は石組みを一部崩し、礫を用いて埋められている。甕倉も破壊された状況が窺われるし、内堀南辺の埋土には炭層や礫が多く含まれている。また、1987年度調査の芝崎遺跡の堀状遺構も多量の礫で埋没しており、これらの状況は天正八年の福中城（平野之城）破却に際しての行為を表わすものかもしれない。

瓦について

出土した瓦のほとんどが丸平瓦で、軒瓦は破片のみの出土であり、時期を決定できるものではない。

中世墓SK1006出土の平瓦は須恵質で、神出窯など近隣で作られた12～13世紀頃のものであり、出土した瓦の中では最も古いものである。他にはほとんど出土しておらず､建物に伴うものではなかろう。

SE02、SE05、SD2005出土の平瓦は凹面にコビキAや布目を認めることができる。これは天正前半期までの特徴と言われる。（森田1984）SD2005やSE05からは鳥衾も出土している。また、丸瓦も凹面に布袋や紐の痕跡が認められるものである。

SE06、SX01、SX04出土の瓦凹面にはコビキBが認められる。SE05の上層からもコビキBをもつ丸瓦片が出土している。コビキBは天正後半期に出現したといわれるが、SE05を除く他の遺構からは19世紀前半までの遺物が出土しており、瓦の利用としては前代からは断絶がある。

更にSD2011、窯状遺構1からは桟瓦が出土している。達磨窯によって焼成された瓦はこの桟瓦であろう。SD2011からは1点コビキBが認められる平瓦が出土し、SX01出土のものと接合できた。土器が出土していないためこれらの遺構の時期は不明だが、やはり19世紀前半以降のものであろう。

このように遺跡からは大きく4時期の瓦が出土しているが、このうち比較的多く出土しているのが2番目の時期のものである。この時期はちょうど福中城が破却される以前の時期に当たる。前述のように石組み井戸や溝がこの時期に存在したが、その他に甕倉もこの時期に属するものと考えられる。この倉の上屋に伴うものかもしれない。また、出土した地点は福中城外であることから、城に伴うものではなく小規模のお堂などが近くにあったものかもしれない。

その後、ここには瓦を焼く達磨窯が築かれる。

〔参考文献〕

兵庫県教育委員会　1987『芝崎遺跡』

岡　久雄・黒田義隆　1961『福中城と間嶋彦太郎』神戸市文化財調査報告４　神戸市教育委員会

兵庫県教育委員会　1981『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』

神戸市教育委員会　1987「芝崎遺跡」『昭和 59 年度神戸市埋蔵文化財年報』

多賀茂治　1996「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡』第６分冊　兵庫県教育委員会

木村泰彦　1997「乙訓出土の土馬集成」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会

神戸市教育委員会 2000『玉津田中遺跡発掘調査報告書　第８・10・12・13・15 次調査－宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』

兵庫県教育委員会 1994『玉津田中遺跡－第４分冊－（辻ヶ内・居住地区の調査）』兵庫県文化財調査報告第 135-4 冊

兵庫県教育委員会 1995『玉津田中遺跡－第６分冊－（総括編）』兵庫県文化財調査報告第 135-6 冊

水野和雄 1984「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第 70 巻第４号

旧清遺跡発掘調査調査団　1973『摂津旧清遺跡』宝塚市文化財調査報告第５集　宝塚市教育委員会

兵庫県教育委員会　1991『福田片岡遺跡』兵庫県文化財調査報告書第 94 冊

兵庫県教育委員会　2001『上脇遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第 233 冊

兵庫県教育委員会　2001『上脇遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第 232 冊

兵庫県教育委員会　2003『宿原寺ノ下遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 264 冊

兵庫県教育委員会　1986『多利遺跡群発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 46 冊

西口圭介 2006「兵庫県」『中世墓資料集成－近畿編⑵－墳墓遺跡及び葬送墓制研究の観点からみた中世』中世墓資料集成研究会

上原真人　2001「平安京周辺の平安時代後期瓦の様相－生産地認定法と在地消費をめぐって－」『第４回摂河泉古代寺院フォーラム　中世寺院の幕明け』摂河泉文庫・摂河泉古代寺院研究会

村田　弘　1989「根来寺坊院跡発掘調査の成果」『中世末から近世のまち・むらと都市』第 27 回埋蔵文化財研究集会実行委員会

菅原正明　1992「甕倉出現の意義－中世経済の一側面－」『国立歴史民俗博物館研究報告第 46 集』国立歴史民俗博物館

兵庫県教育委員会　1999『三田城跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 194 冊

三木市教育委員会　1986『三木市埋蔵文化財調査概報－昭和 50 年度～昭和 59 年度－』

相生市感状山城跡調査委員会　1989『感状山城跡発掘調査報告書』　相生市教育委員会

鐘方正樹　2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧　㈱同成社

財団法人東大阪市文化財協会　1995『西ノ辻遺跡第９次発掘調査報告』

篠山町教育委員会　1991『篠山城旧三の丸跡－ 11 次・13 次・14 次調査－』篠山町文化財資料第 21 集

奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代篇』

森田克行　1984『近世瓦成立の諸段階』第２回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会

高槻市教育委員会　1983『摂津高槻城　本丸跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第 14 冊

山崎信二　1999『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第 59 冊　奈良国立文化財研究所

坪井利弘　1976『日本の瓦屋根』　理工学社

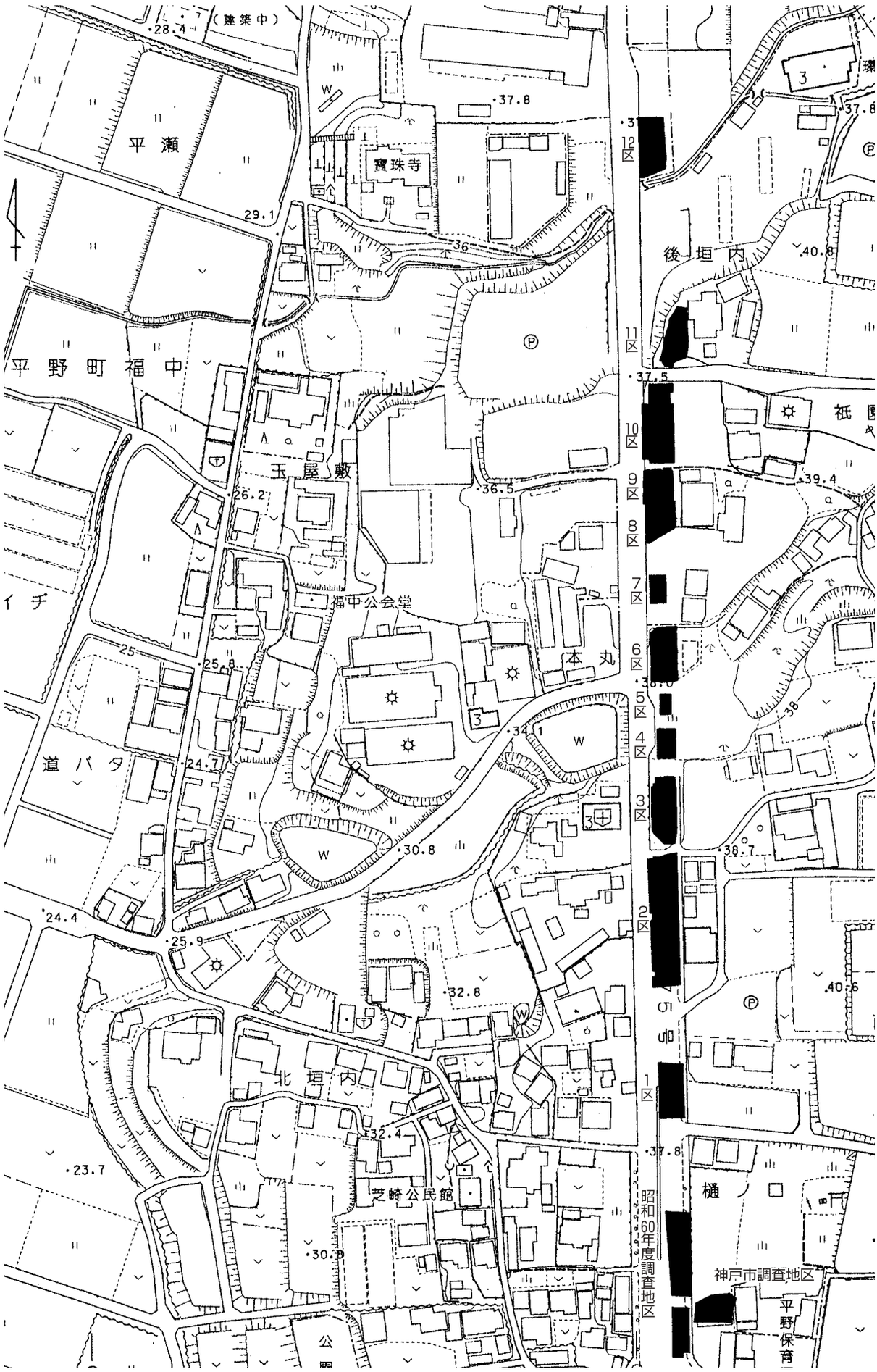
藤原　学　2000「織豊期における達磨窯と瓦生産」『織豊城郭』第７号　織豊期城郭研究会

図　　版

遺跡の位置（S＝1：25,000）

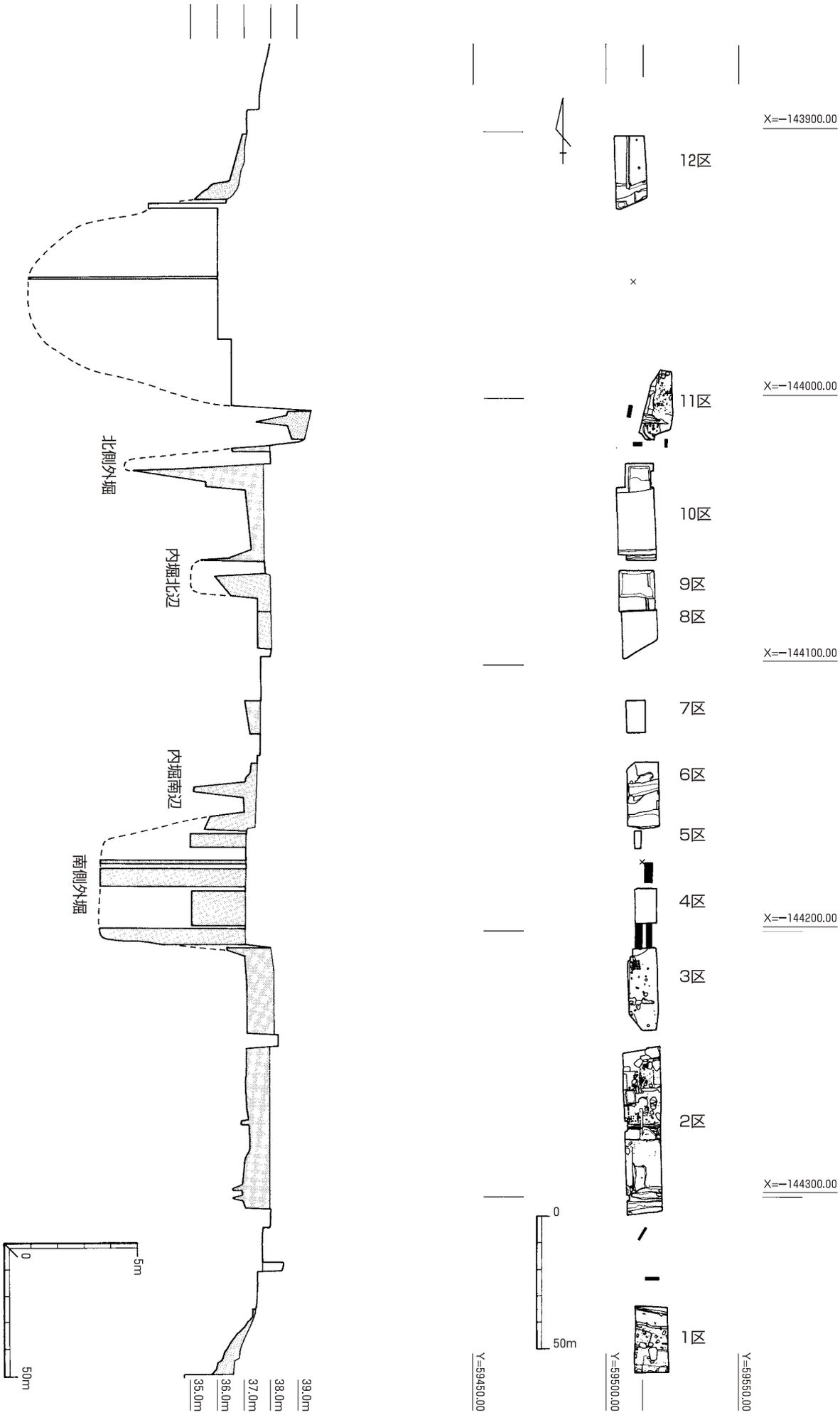
図版２

周辺の地形（Ｓ＝1：5,000）

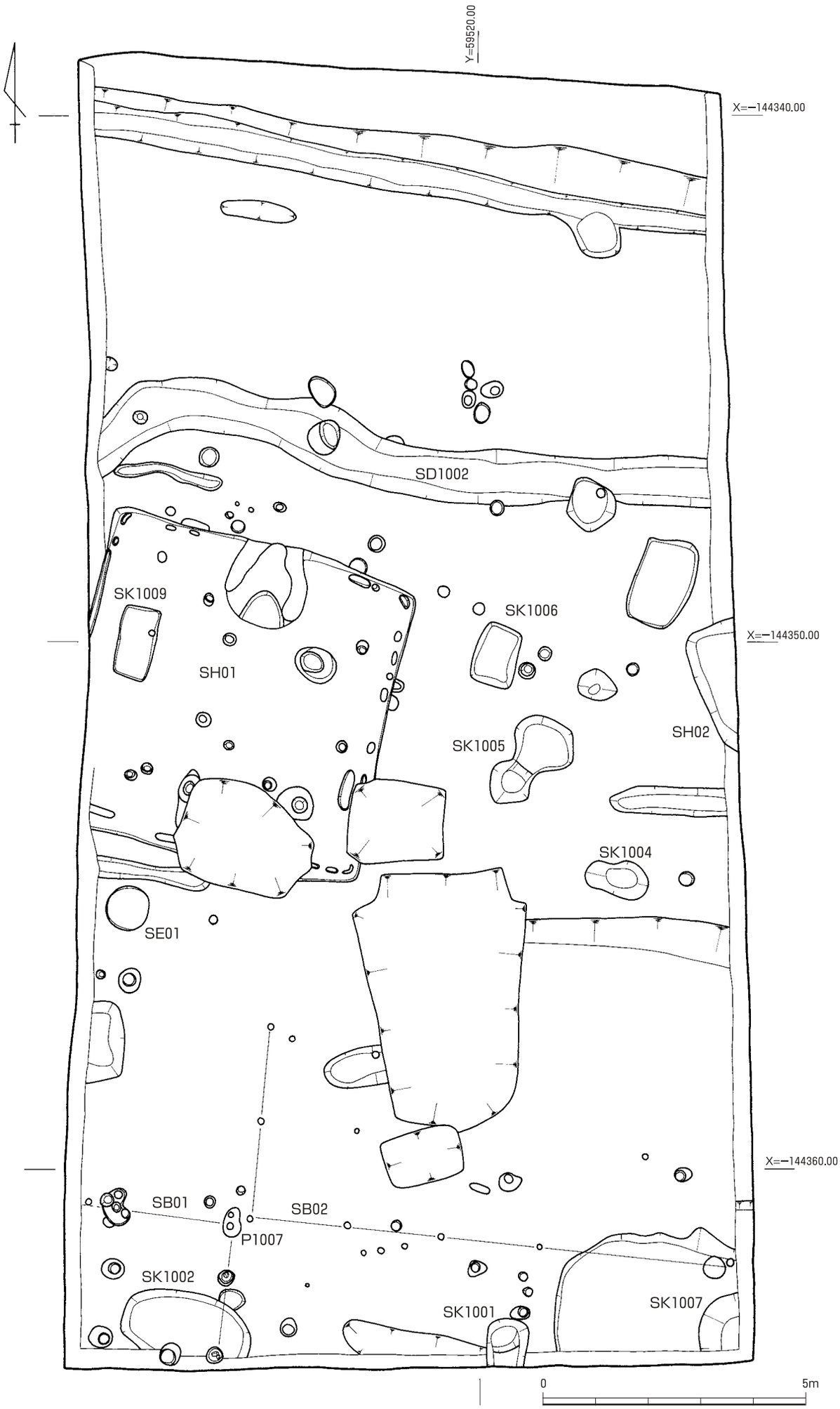


調査区の配置（S＝1：2,500）

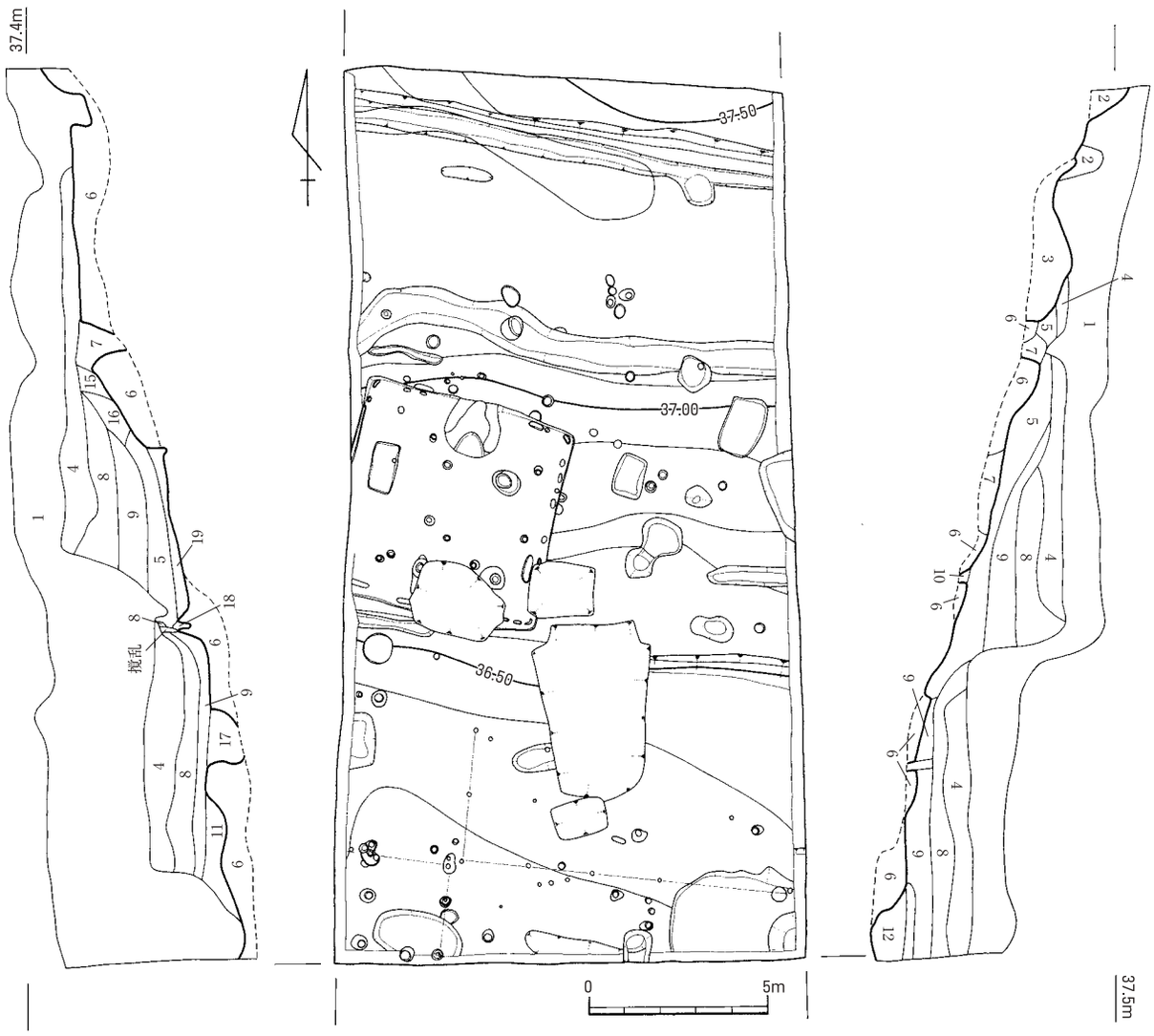
図版４

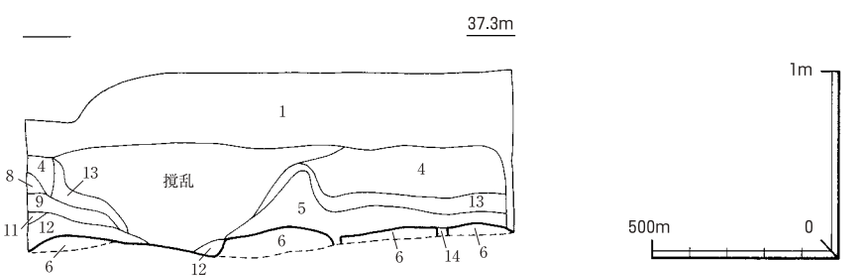


調査地区断面模式図


Y=59520.00
X=−144340.00
X=−144350.00
X=−144360.00
SD1002
SK1009
SH01
SK1006
SK1005
SH02
SK1004
SE01
SB01
SB02
P1007
SK1002
SK1001
SK1007
0
5m

１区　遺構配置図

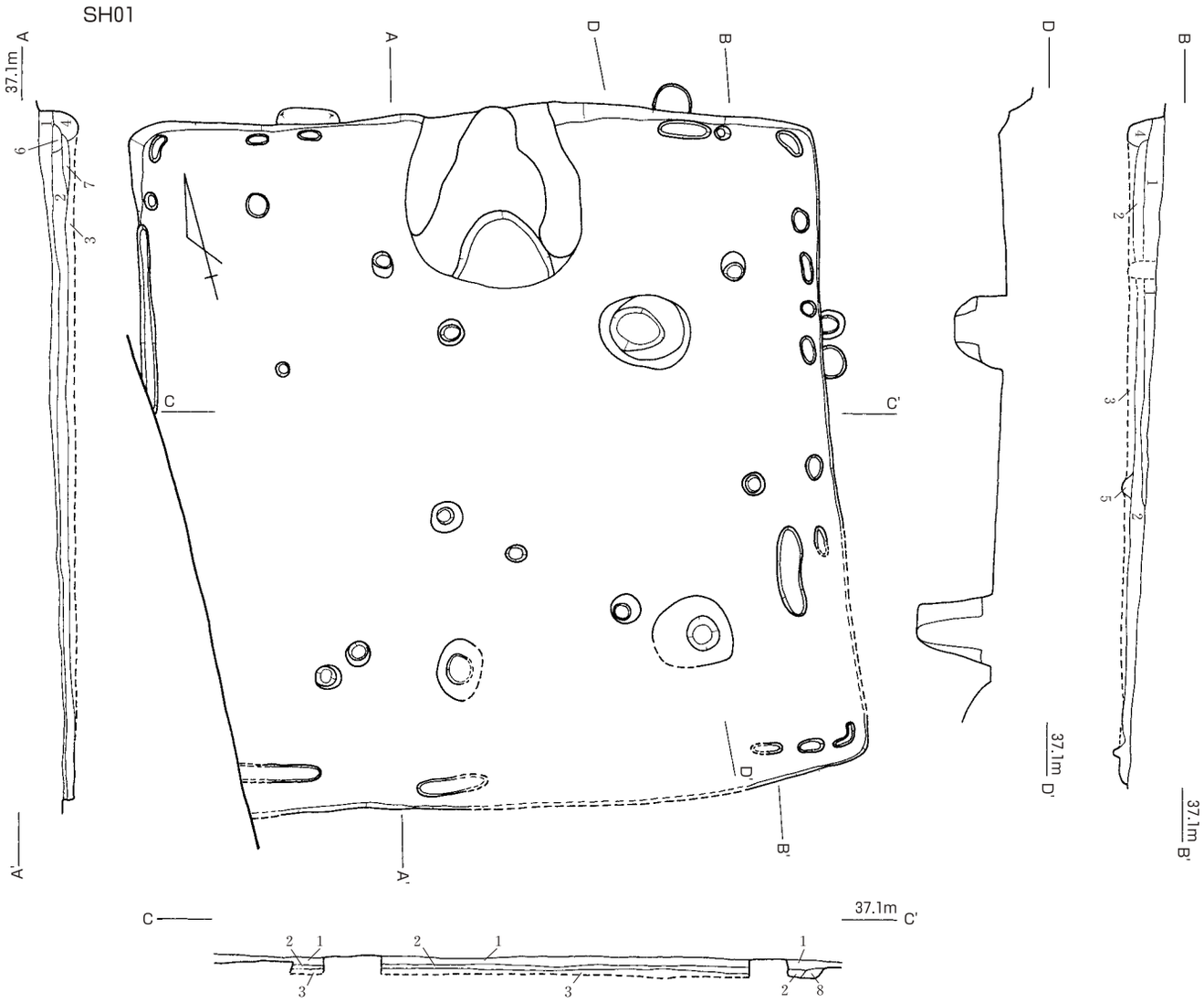




1	表土			
2	2.5Y7/6	明黄褐色	シルト質極細砂	
3	2.5Y7/4	浅黄色	砂礫	
4	2.5Y6/8	明黄褐色	中砂～細砂	(5mm～1cmの礫含む)
5	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗砂～中砂	(マンガン大量に含む)
6	2.5Y6/6	明黄褐色	シルト質細砂	
7	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質中砂	
8	10YR6/4	にぶい黄橙色	中砂	(5mm～1cmの礫含む)
9	10YR5/8	黄褐色	シルト質細砂	(マンガン含む)
10	10YR7/3	にぶい黄橙色	細砂	
11	2.5Y5/2	暗灰黄色	中砂	(マンガン含む)
12	10YR4/4	褐色	細砂	(マンガン含む)
13	10YR5/6	黄褐色	中砂	
14	10YR4/6	褐色	細砂～中砂	
15	2.5Y8/2	灰白色	中砂～細砂	
16	10YR6/8	明黄褐色	中砂	
17	10YR5/8	黄褐色	シルト質極細砂	
18	10YR5/6	明黄褐色	シルト質細砂	
19	10YR6/6	明黄褐色	シルト質細砂	

１区　基本土層図

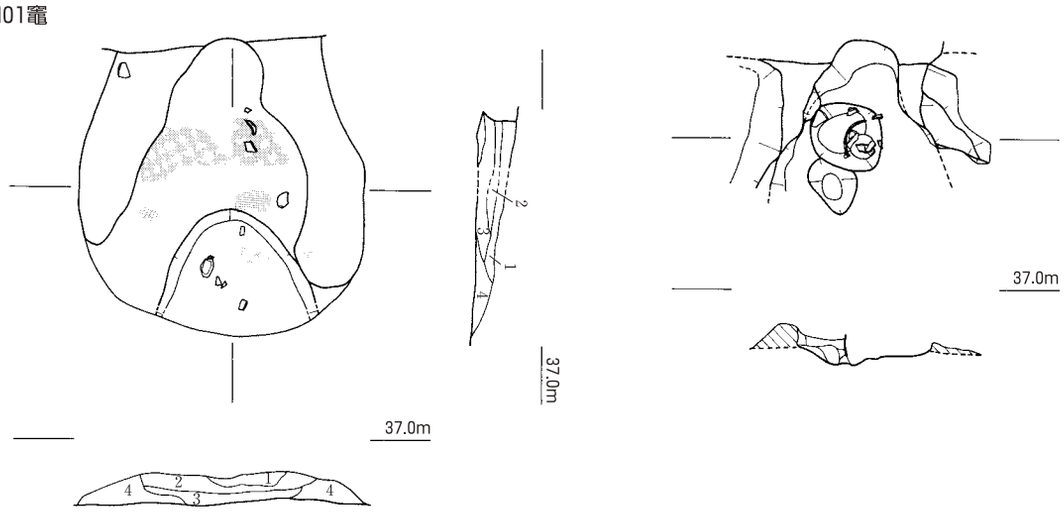
SH01



1 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂～中砂
2 10YR6/6 明黄褐色 シルト質細砂
3 2.5Y6/6 明黄褐色 シルト質細砂
4 10YR5/6 黄褐色 細砂
5 2.5Y7/3 浅黄色 細砂
6 2.5Y8/8 黄色 中砂
7 10YR4/4 褐色 中砂～細砂 （マンガン多量に含む）
8 10YR7/2 にぶい黄橙色 シルト質細砂

0 3m

SH01竈

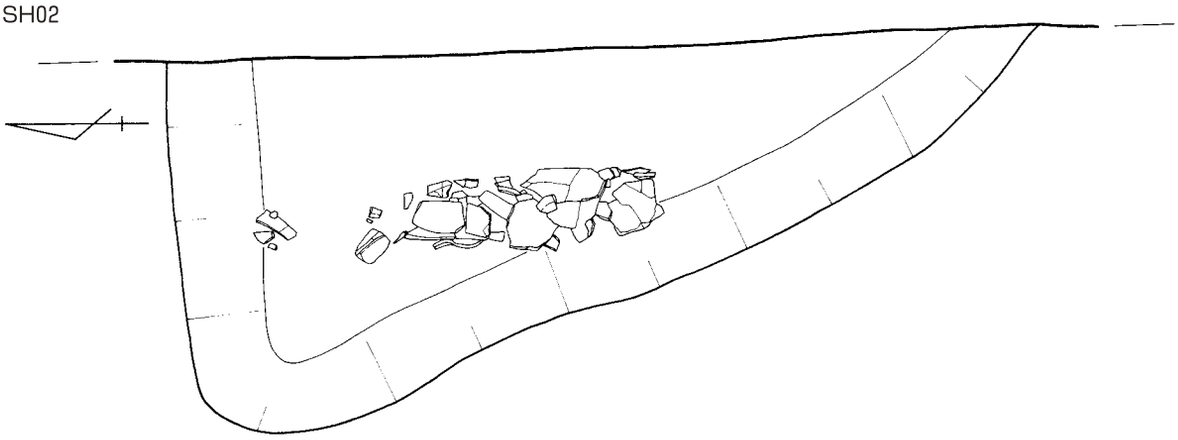


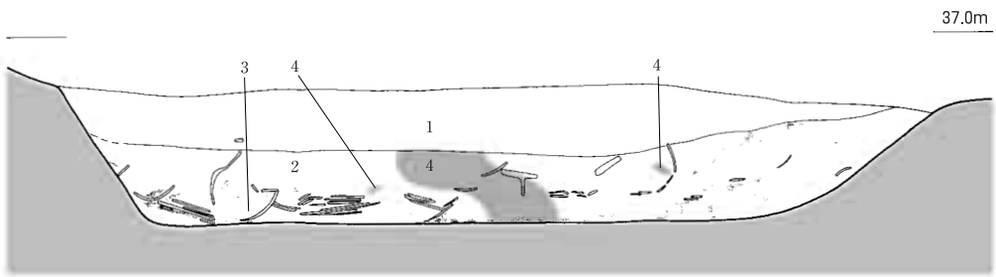
1 10YR7/4 にぶい黄橙色 中砂～細砂
2 焼土
3 炭
4 2.5Y6/8 明黄褐色 中砂～細砂

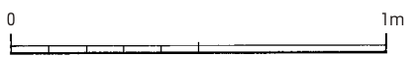
0 2m

1区 SH01、SH01竈

SH02

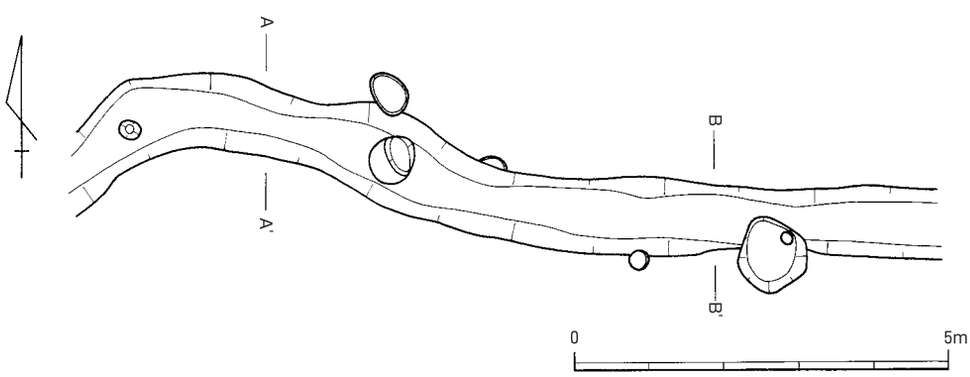


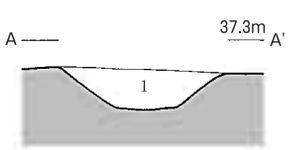


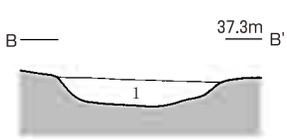


1 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質中砂
2 炭混じり焼土
3 炭・灰層
4 焼土

SD1002



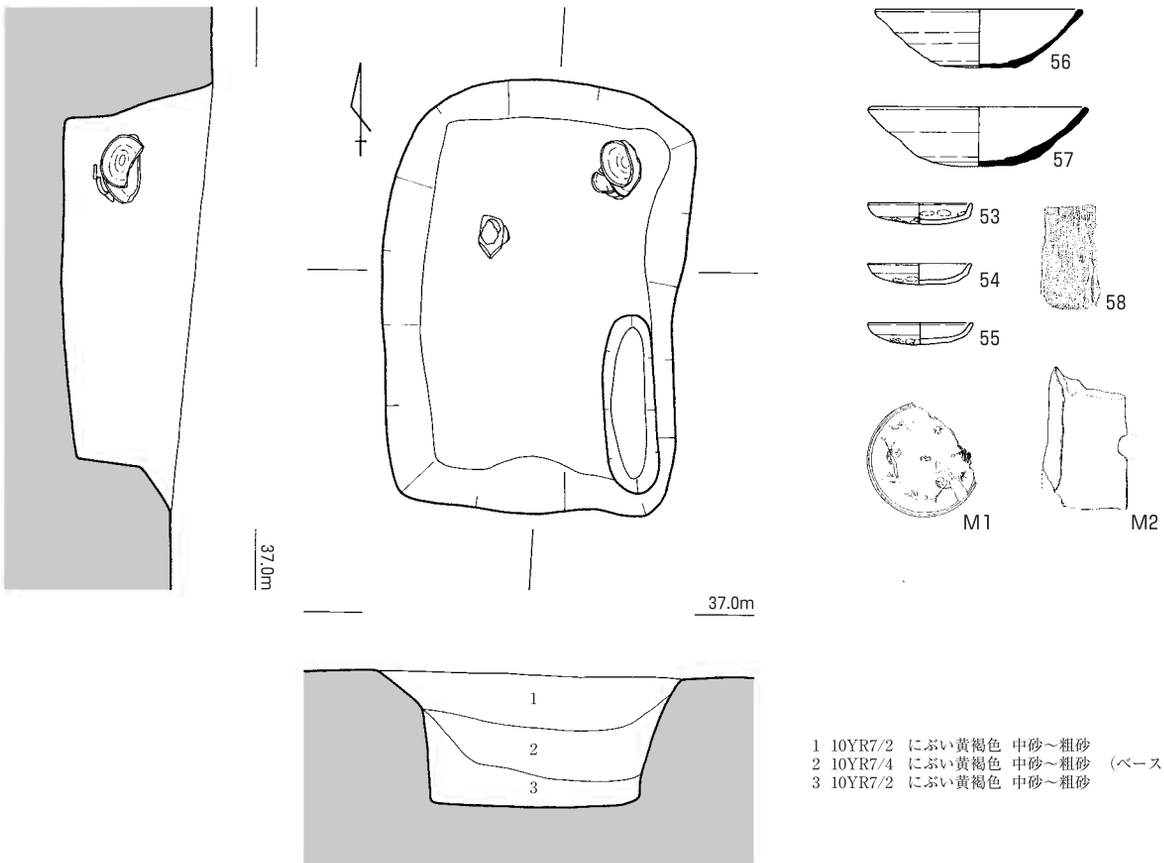




1 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質中砂

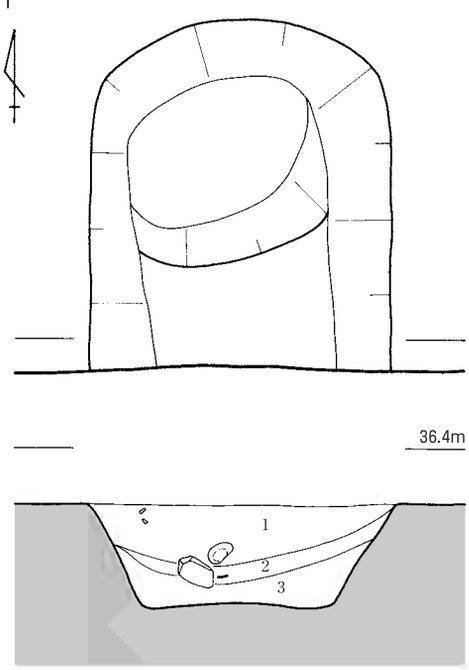
1区　SH02、SD1002

SK1006



1 10YR7/2 にぶい黄褐色 中砂～粗砂
2 10YR7/4 にぶい黄褐色 中砂～粗砂 （ベース土を多少含む）
3 10YR7/2 にぶい黄褐色 中砂～粗砂

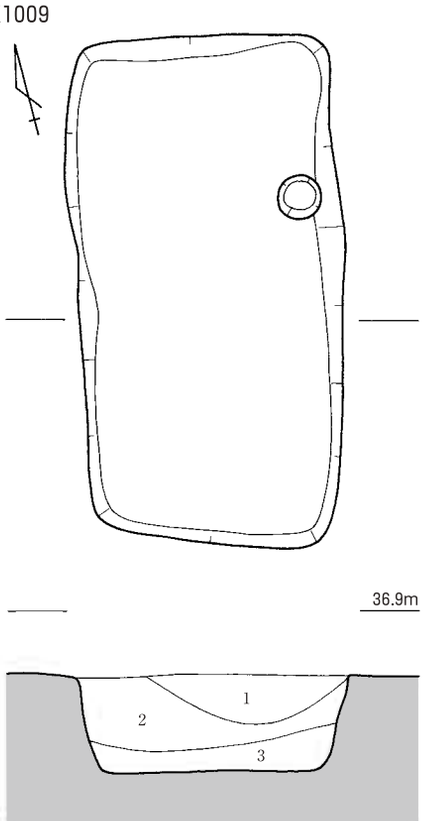
SK1001



1 10YR4/6 褐色 細砂～中砂 （土師器含む）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂 （土師器含む）
3 10YR5/8 黄褐色 シルト質極細砂

0 1m

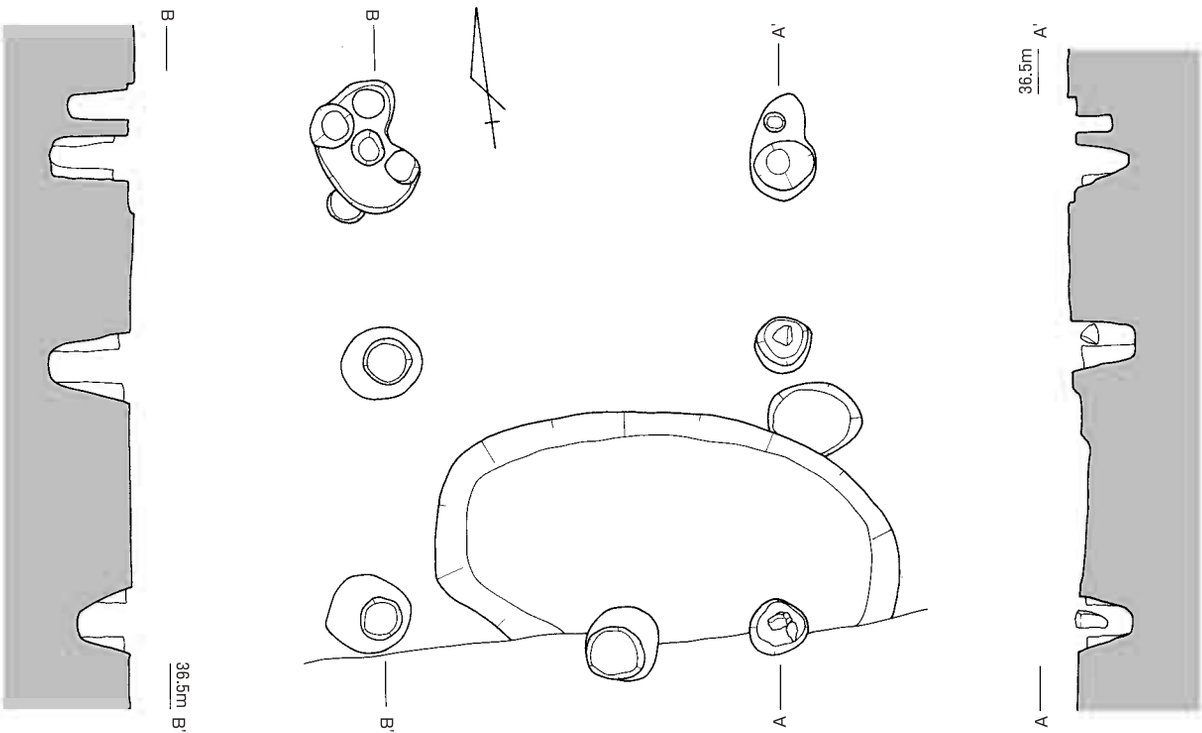
SK1009



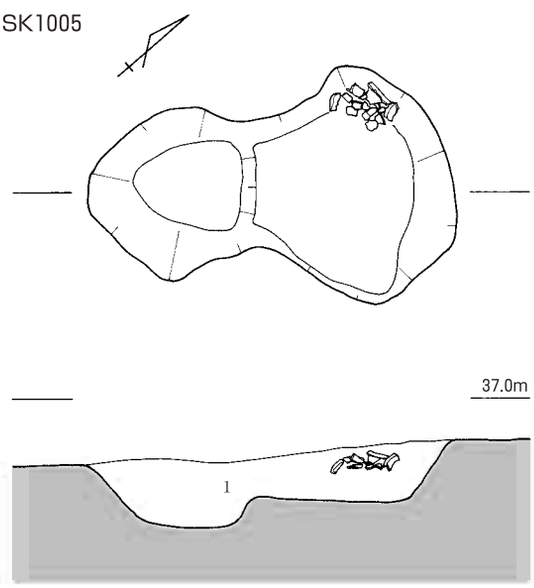
1 10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂
2 10YR4/4 褐色 中砂 （土師器含む）
3 10YR6/5 にぶい黄褐色 中砂

1区 SK1006、SK1001、SK1009

SB01

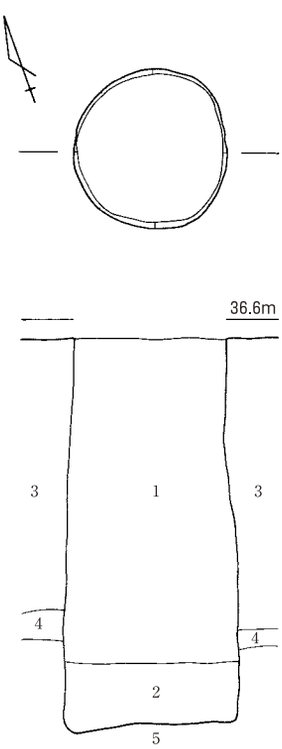


SK1005



1 10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂

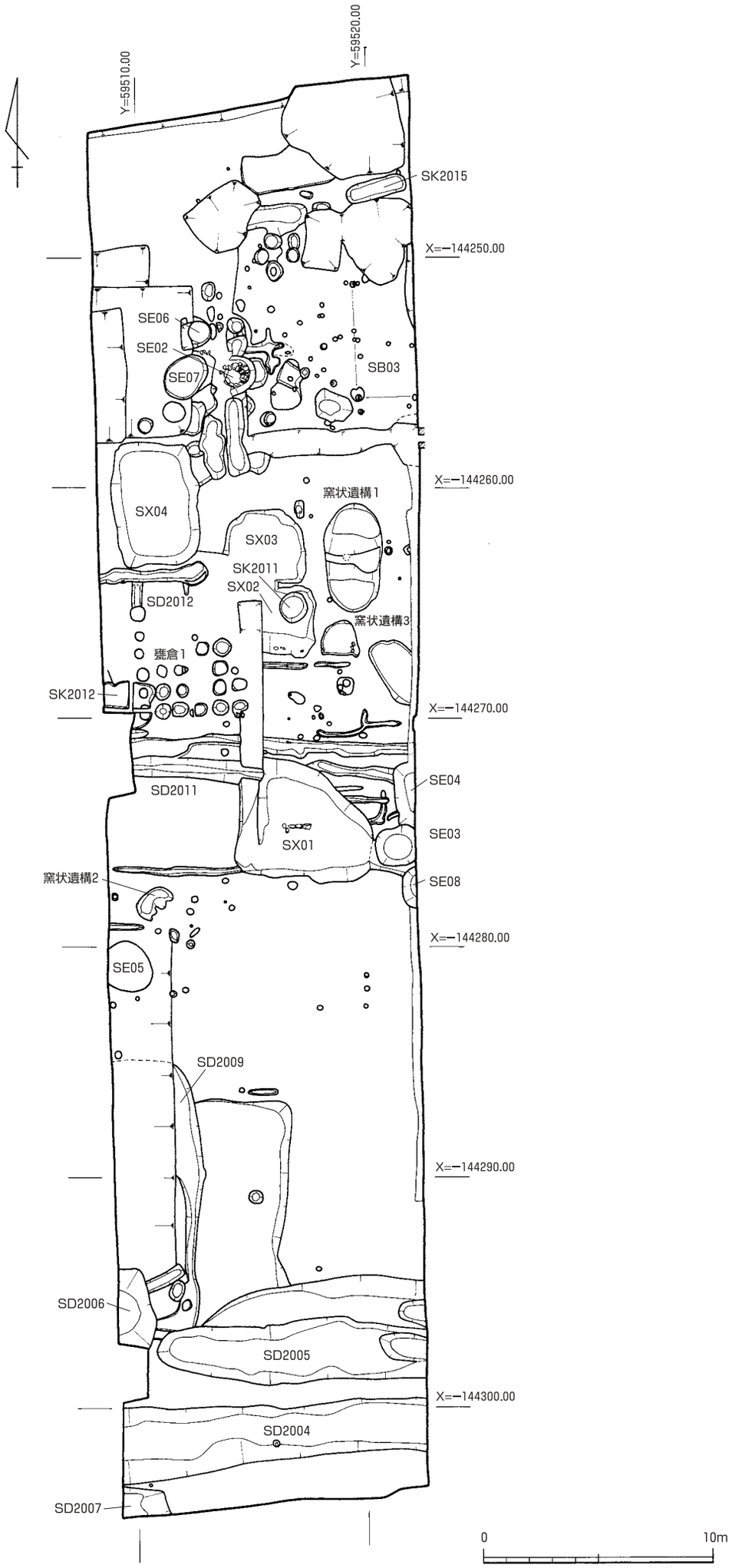
SE01



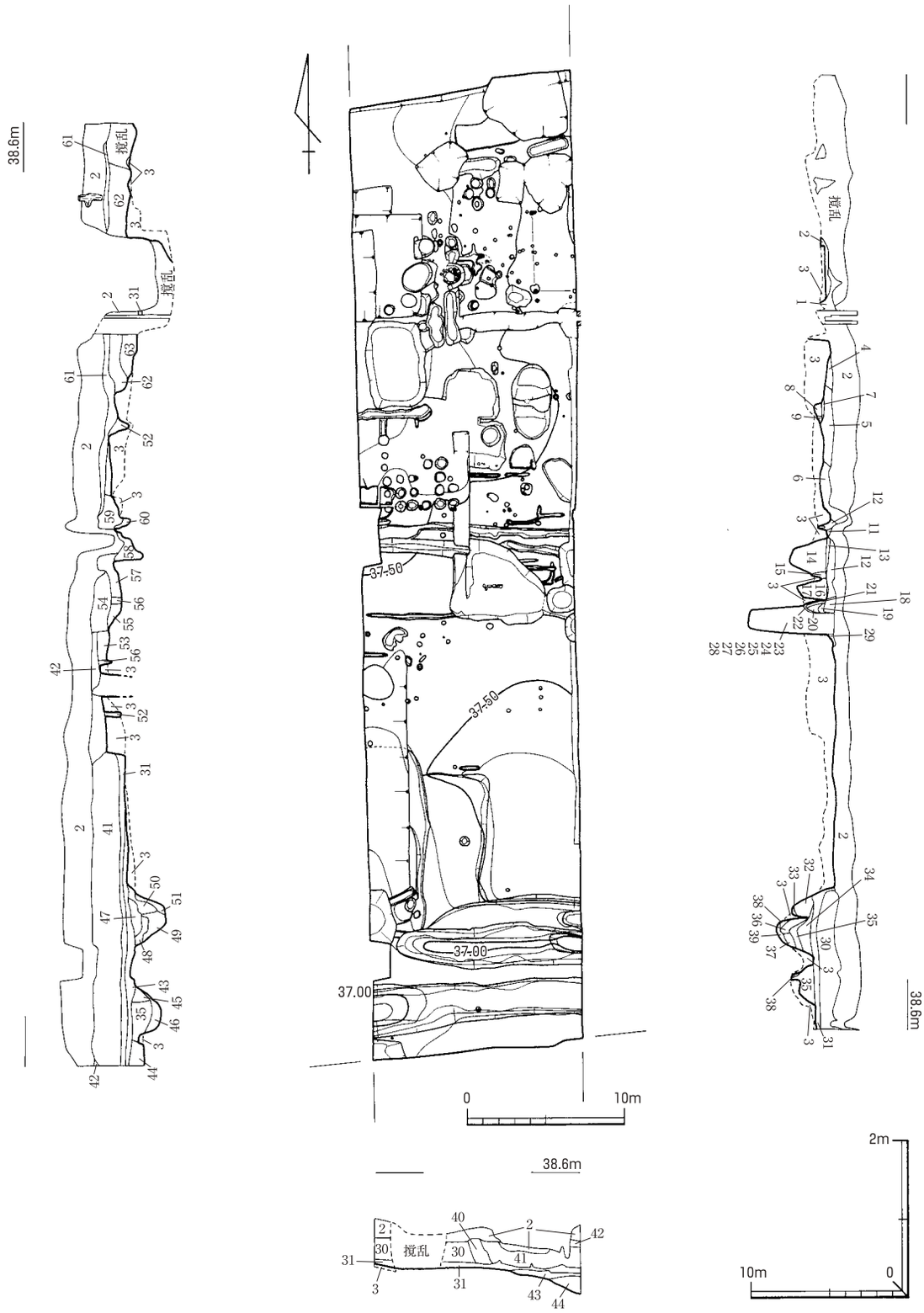
1 2.5Y6/1 黄灰色 粗砂 (1～5cmの礫含む)
2 5Y5/1 灰色 シルト (5～10cmの礫少量含む)
3 2.5Y6/6 明黄褐色 シルト質細砂
4 10YR6/8 明黄褐色 中砂～細砂 (湧水層)
5 10YR6/8 明黄褐色 シルト質中砂 (5mmの礫含む)

0 2m

1区 SB01、SK1005、SE01


Y=59510.00
Y=59520.00
SK2015
X=−144250.00
SE06
SE02
SE07
SB03
X=−144260.00
窯状遺構1
SX04
SX03
SK2011
SX02
SD2012
窯状遺構3
甕倉1
SK2012
X=−144270.00
SD2011
SE04
SE03
SX01
窯状遺構2
SE08
X=−144280.00
SE05
SD2009
X=−144290.00
SD2006
SD2005
X=−144300.00
SD2004
SD2007
0
10m

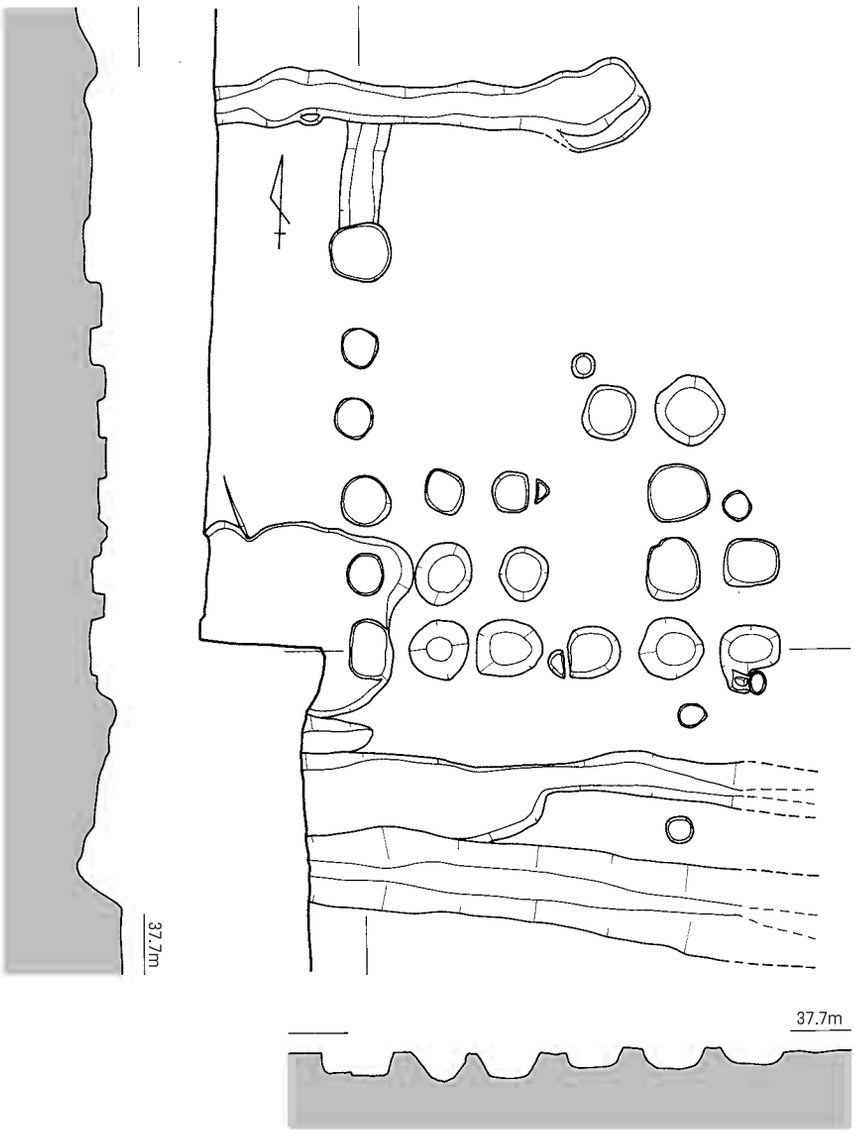
2区　遺構配置図



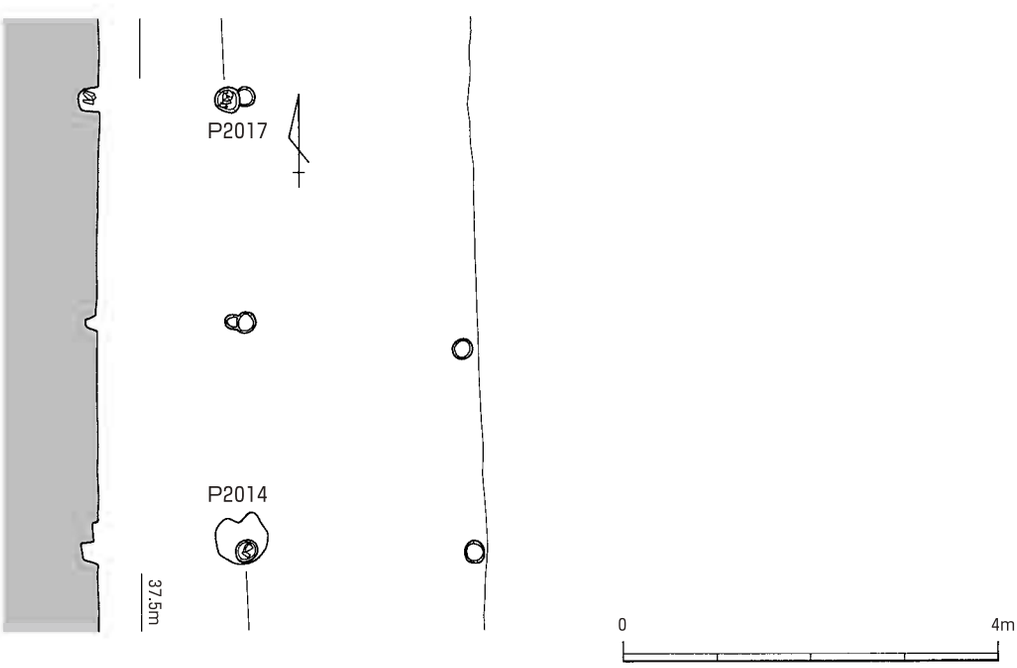
1	表土			
2	耕土			
3	10YR6/8	明黄褐色	細砂～極細砂	
4	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質中砂	(鉄分含む)
5	2.5Y7/1	灰白色	細砂～中砂	(鉄分含む)
6	2.5Y7/4	浅黄色	中砂～粗砂	(鉄分含む)
7	2.5Y6/1	黄灰色	中砂	
8	5Y7/1	灰白色	極細砂	
9	10YR6/6	明黄褐色	細砂	
10	2.5Y7/2	灰黄色	中砂～粗砂	(鉄分含む)
11	10YR6/1	褐灰色	細砂	(マンガン含む)
12	7.5YR7/6	橙色	中砂	(マンガン含む)
13	10YR6/2	灰黄褐色	中砂～細砂	(マンガン含む)
14	5Y7/4	浅黄色	粗砂	(1～10cmの礫多量に含む)
15	2.5Y5/4	黄褐色	中砂	(1～2cmの礫含む)
16	10YR3/4	暗褐色	中砂	(1～6cmの礫多量に含む)
17	2.5Y4/4	オリーブ褐色	中砂～細砂	(礫含む)
18	10YR5/6	黄褐色	中砂～粗砂	
19	10YR6/6	明黄褐色	粗砂	(3mm程度の礫含む)
20	10YR4/4	褐色	中砂	(礫含む)
21	5Y7/1	灰白色	中砂～粗砂	(3cm程度の礫含む)
22	2.5Y7/1	灰白色	極細砂	
23	10YR4/6	褐色	中砂	(マンガン含む)
24	2.5Y6/2	灰黄色	中砂～粗砂	(5mm程度の礫含む)
25	2.5Y7/6	明黄褐色	中砂	
26	2.5Y6/4	にぶい黄色	細砂～粗砂	(1～5mmの礫含む)
27	10YR5/8	黄褐色	中砂	
28	5Y5/1	灰色	シルト	
29	2.5Y5/1	黄灰色	細砂～中砂	(マンガン含む)
30	2.5Y6/8	明黄褐色	中砂	(マンガン含む)
31	2.5Y6/2	灰黄色	細砂～中砂	(マンガン含む)
32	10YR5/8	黄褐色	中砂	(マンガン含む)
33	10YR7/1	灰白色	シルト質細砂	
34	10YR7/6	明黄褐色	中砂	(マンガン含む)
35	2.5Y6/3	にぶい黄色	細砂～中砂	
36	7.5Y7/1	灰白色	中砂	(鉄分含む)
37	7.5Y8/1	灰白色	シルト質極細砂	(鉄分含む)
38	5Y7/2	灰白色	シルト質中細砂	(鉄分含む)
39	5Y5/1	灰色	シルト	
40	10YR6/6	明黄褐色	中砂	(1～3cmの礫含む)
41	10YR5/8	黄褐色	中砂～粗砂	(マンガン含む)
42	2.5Y7/3	浅黄色	中砂～粗砂	
43	7.5YR5/6	明褐色	細砂	
44	2.5Y7/2	灰黄色	シルト質細砂～極細砂	(マンガン・鉄分含む)
45	5Y7/2	灰白色	中砂～細砂	(マンガン・鉄分・炭含む)
46	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質極細砂	(鉄分含む)
47	2.5Y6/3	にぶい黄色	細砂	(マンガン・鉄分含む)
48	2.5Y5/2	暗灰黄色	細砂～極細砂	(シルト質混じり　マンガン含む)
49	5Y7/1	灰白色	シルト質極細砂	
50	10YR4/3	にぶい黄褐色	中砂～細砂	(マンガン・鉄分含む)
51	10YR4/4	褐色	中砂	(1～5cmの礫含む)
52	10YR7/3	にぶい黄橙色	粗砂	(マンガン・鉄分含む)
53	10YR6/1	褐灰色	粗砂	(マンガン・鉄分含む)
54	10YR6/4	にぶい黄橙色	粗砂～礫	
55	10YR7/1	灰白色	細砂～極細砂	
56	10YR6/3	にぶい黄橙色	粗砂	
57	10YR5/4	にぶい黄褐色	中砂～細砂	
58	2.5Y8/1	灰白色	粗砂	(鉄分含む)
59	2.5Y6/2	灰黄色	中砂～粗砂	(鉄分・土師器含む)
60	2.5Y6/1	黄灰色	中砂～細砂	
61	7.5YR5/8	明褐色	中砂～粗砂	
62	5Y7/3	浅黄色	中砂	(マンガン・鉄分含む)
63	2.5Y7/1	灰白色	中砂	(鉄分含む)

2区　基本土層図

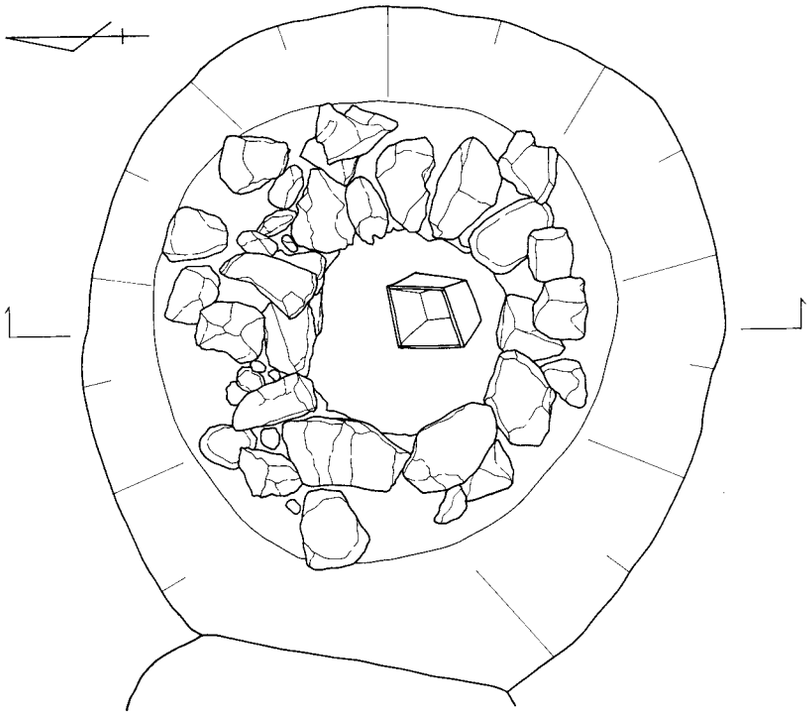
甕倉1

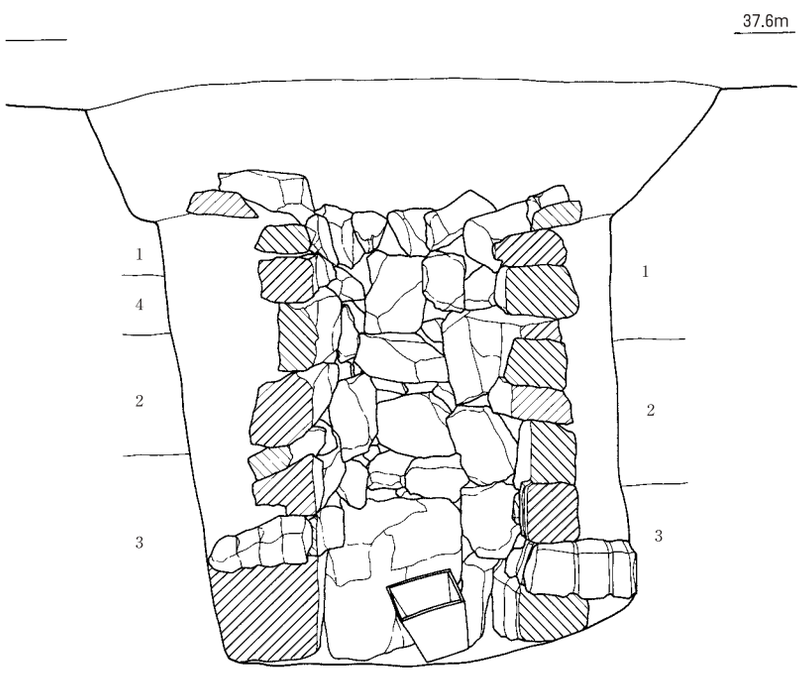


SB03



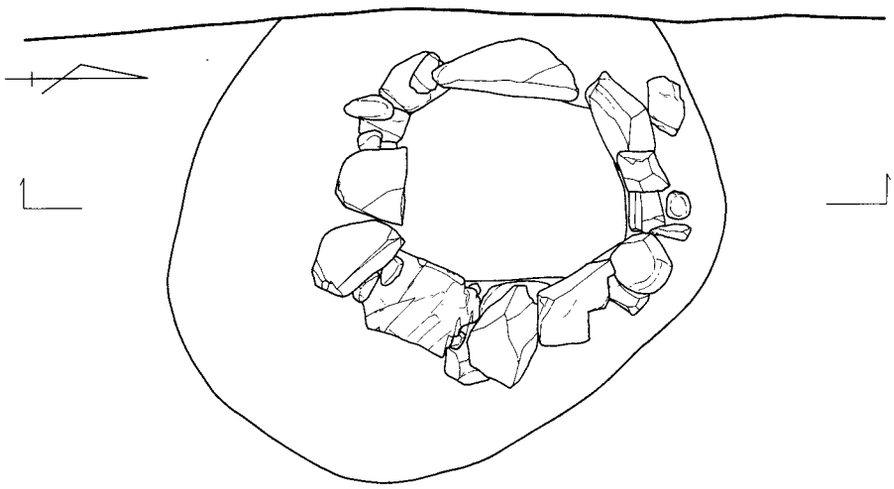
2区　甕倉1、SB03

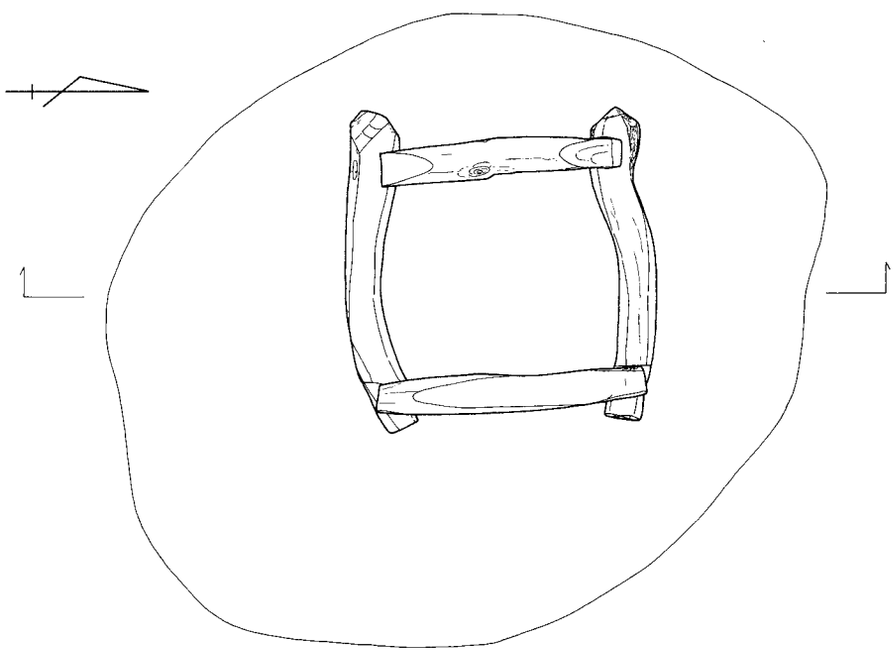


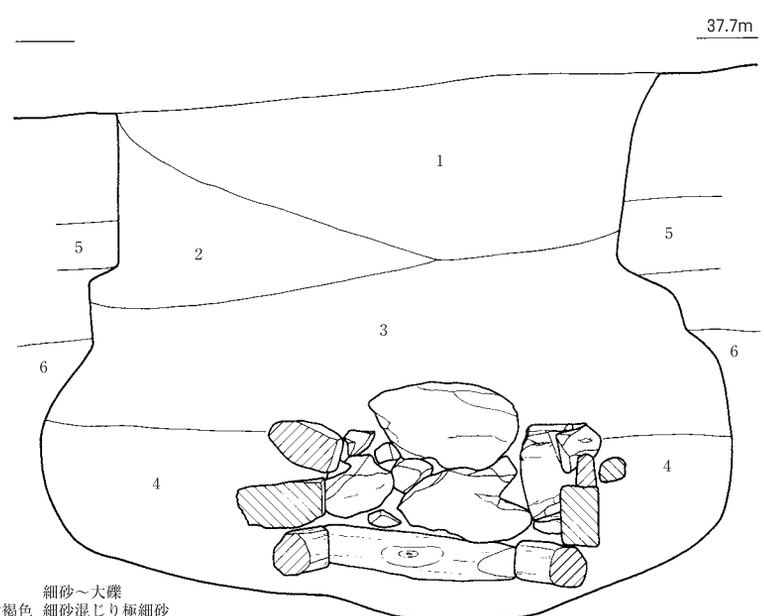


1 10YR7/8 黄橙色 細砂～中砂
2 10YR5/8 黄褐色 シルト質極細砂
3 10Y8/1 灰白色 砂礫 （湧水層）
4 5Y8/1 灰白色 中砂

2区 SE02





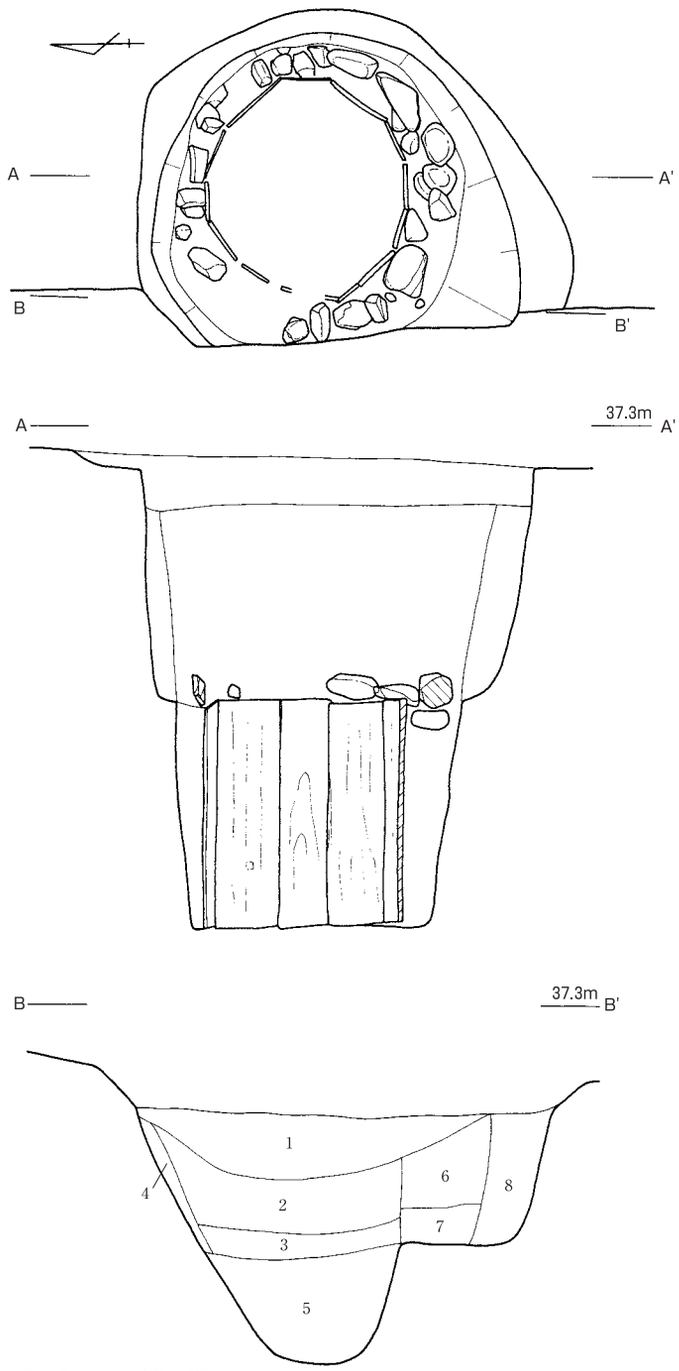


1		細砂～大礫	
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	細砂混じり極細砂	
3		粘土混じり礫	
4		10cmまでの礫	（裏込め）
5		礫	（湧水層）
6		礫	（湧水層）

0 1m

2区　SE05

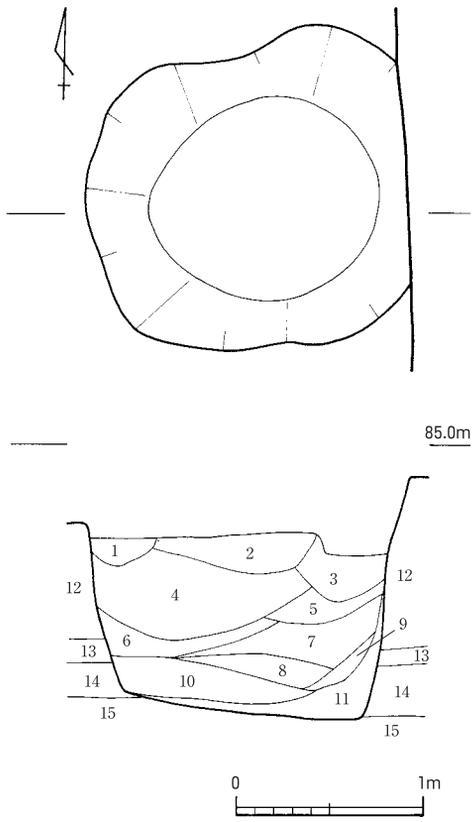
SE06



1 10YR5/2 灰黄褐色　シルト質極細砂
2 10YR3/2 黒褐色　シルト質極細砂（中礫～大礫・木質含む）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト
4 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂（大礫含む、下層は礫）
5 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質粘土
6 10YR4/4 褐色　中砂混じり細砂
7 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂
8 10YR6/6 明黄褐色　極細砂　（ベースブロック含む）

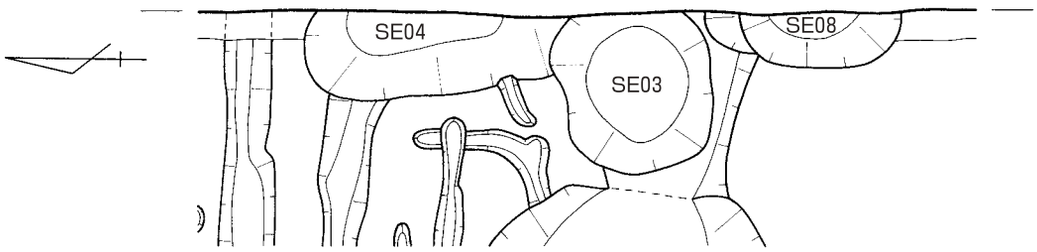
0　50cm

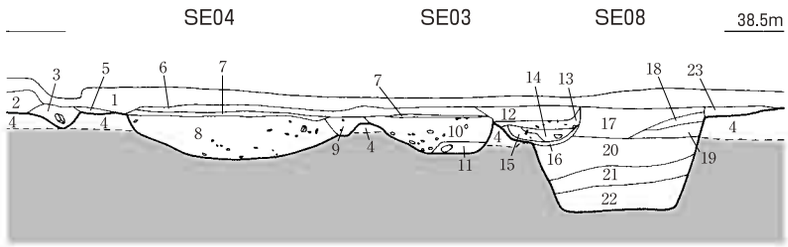
SE03



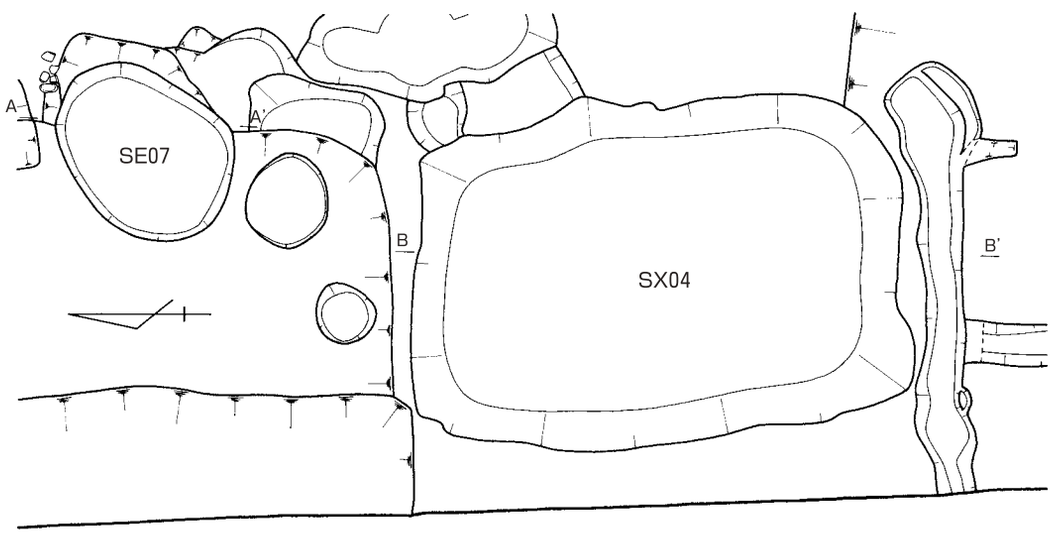
1 10YR4/4 褐色　シルト質極細砂
2 10YR5/2 灰黄褐色 中砂～中礫混じりシルト（中礫多し）
3 10YR5/6 黄褐色　中砂～中礫混じりシルト（中礫多し）
4 10YR5/1 褐灰色　中砂～中礫混じりシルト（炭含む）
5 10YR5/1 褐灰色　シルト
6 10YR5/1 褐灰色　シルト質極細砂
7 10YR4/1 褐灰色　シルト質極細砂　（炭・地山ブロック含む）
8 2.5Y4/1　黄灰色　中砂混じり極細砂　（中礫多し）
9 2.5Y4/1　黄灰色　中砂混じりシルト　（中礫多し）
10 2.5Y4/1　黄灰色　中砂混じりシルト　（中礫多し）
11 10G6/1　緑灰色　粘土
12 2.5Y5/6　黄褐色　シルト　（ベース）
13 5Y7/3　浅黄色　極細砂～中砂　（ベース）
14 5Y7/3　浅黄色　シルト質極細砂　（ベース）
15 5Y7/3　浅黄色　中砂～大礫　（ベース）

2区　SE06、SE03

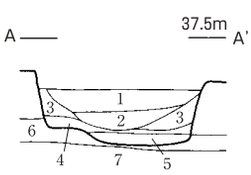




1 耕土
2 2.5Y7/4 浅黄色 中砂～粗砂 （鉄分含む）
3 2.5Y7/2 灰黄色 中砂～粗砂 （鉄分含む）
4 10YR6/8 明黄褐色 細砂～極細砂
5 10YR6/1 褐灰色 細砂 （マンガン含む）
6 7.5YR4/6 褐色 中砂 （マンガン含む）
7 10YR6/2 灰黄褐色 中砂～細砂 （マンガン含む）
8 5Y7/4 浅黄色 粗砂 （1～10cmの礫多量に含む）
9 2.5Y5/4 黄褐色 中砂 （1～2cmの礫含む）
10 10YR3/4 暗褐色 中砂 （1～6cmの礫多量に含む）
11 2.5Y4/4 オリーブ褐色 中砂～細砂 （礫含む）
12 10YR5/6 黄褐色 中砂～粗砂
13 10YR6/6 明黄褐色 粗砂 （3cm程度の礫含む）
14 10YR4/4 褐色 中砂 （礫含む）
15 5Y7/1 灰白色 中砂～粗砂 （3cm程度の礫含む）
16 2.5Y7/1 灰白色 極細砂
17 10YR4/6 褐色 中砂 （マンガン含む）
18 2.5Y6/2 灰黄色 中砂～粗砂 （5mm程度の礫含む）
19 2.5Y7/6 明黄褐色 中砂
20 2.5Y6/4 にぶい黄色 細砂～中砂 （1～5mmの礫多量に含む）
21 10YR5/8 黄褐色 シルト質中砂
22 5Y5/1 灰色 シルト
23 2.5Y6/1 黄灰色 細砂～中砂 （マンガン含む）

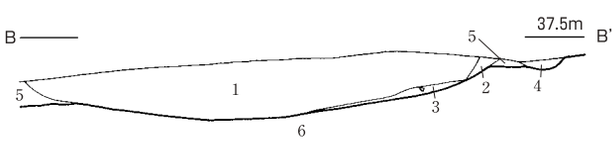


SE07



1 10YR6/6 明黄褐色 シルト質極細砂
2 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 （中礫～大礫・木質含む）
3 10YR6/1 褐灰色 シルト質極細砂
4 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト
5 10GY5/1 緑灰色 粘土
6 粘土混じり細砂
7 礫

SX04



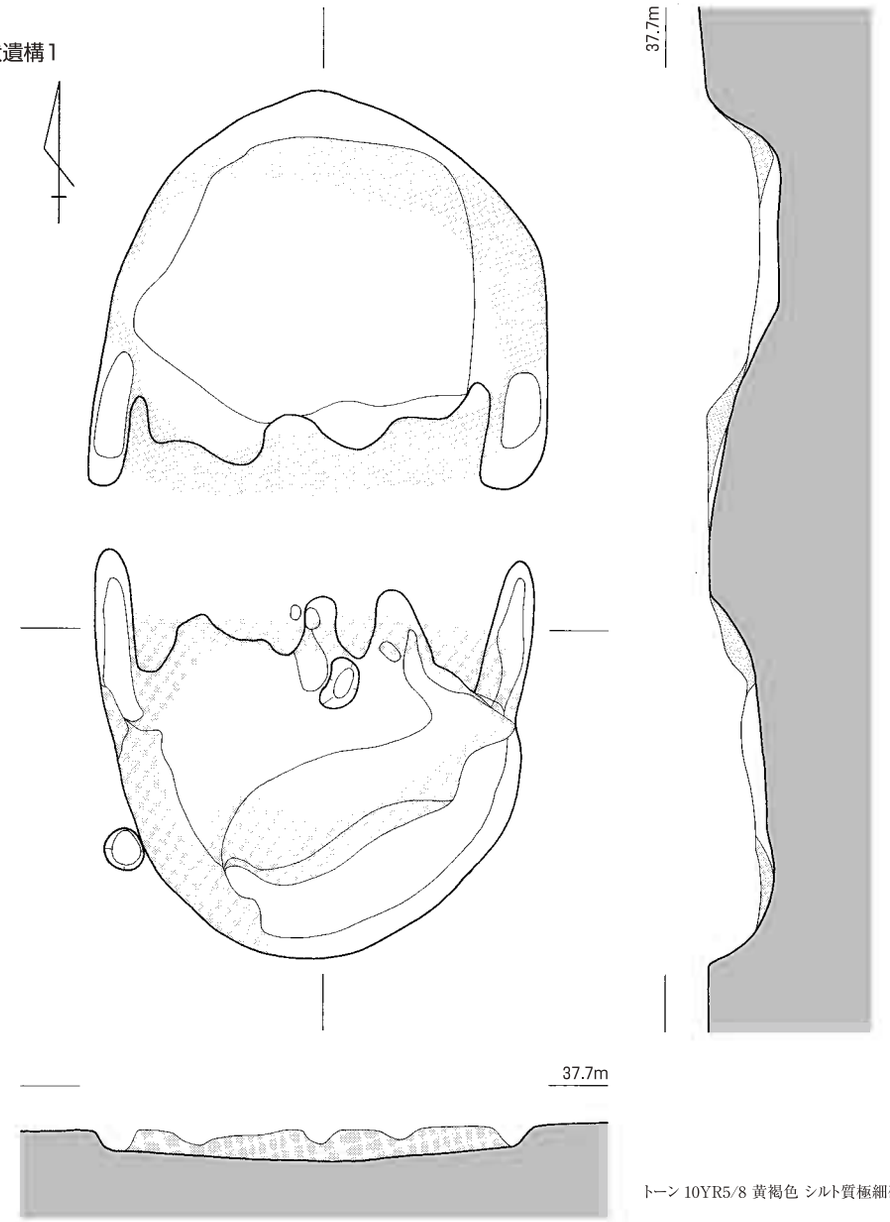
1 2.5Y7/3 浅黄色 シルト質極細砂
2 5Y7/1 灰白色 細砂～中砂 （中礫含む）
3 5Y5/1 灰色 シルト質細砂
4 10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂
5 10YR6/8 明黄褐色 シルト質極細砂 （ベース）
6 中礫 （ベース）

0 4m

2区　SE04・03・08、SE07、SX04

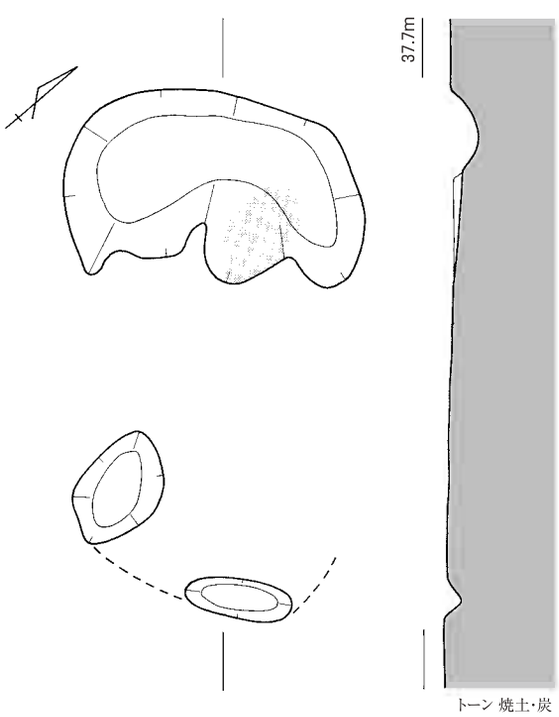
図版18

窯状遺構1



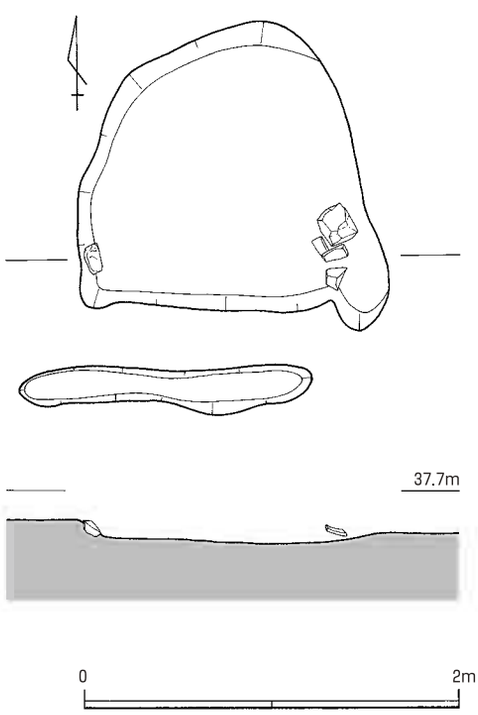
トーン 10YR5/8 黄褐色 シルト質極細砂（貼り床）

窯状遺構2



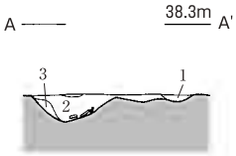
トーン 焼土・炭

窯状遺構3



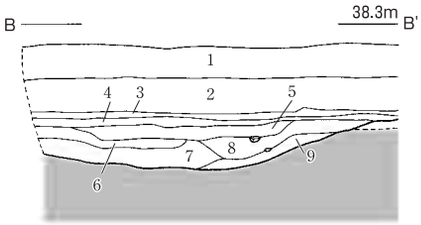
2区　窯状遺構

SD2011

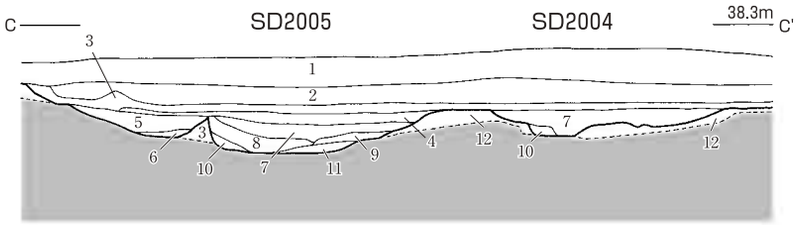


1 10YR5/2 灰黄褐色 中砂混じり細砂
2 10YR4/4 褐色 中砂混じりシルト質極細砂
3 10YR5/6 黄褐色 極細砂

SD2006

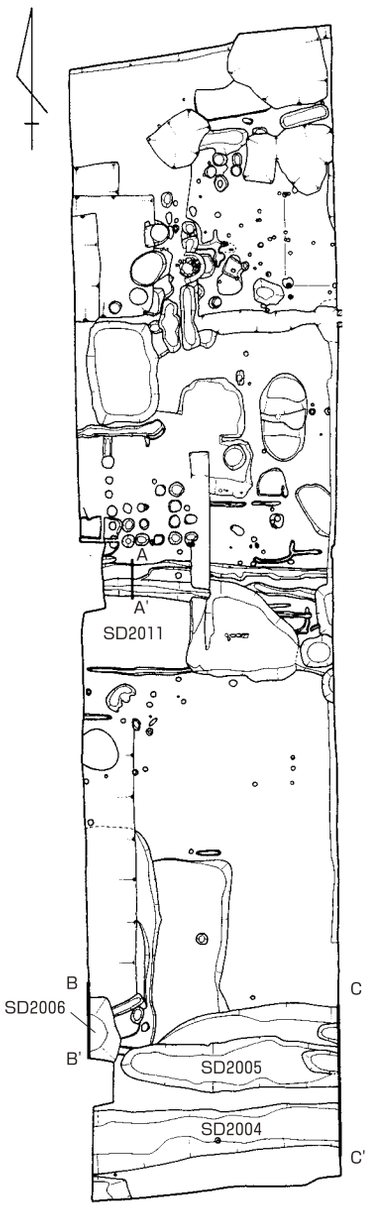


1 耕土
2 10YR5/8 黄褐色 中砂 (1～3cmの礫含む)
3 2.5Y6/2 灰黄色 細砂～中砂 (マンガン含む)
4 7.5YR5/6 明褐色 細砂
5 2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂 (鉄･マンガン含む)
6 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～極細砂 (マンガン含む)
7 5Y7/1 灰白色 シルト質極細砂
8 10YR4/3 にぶい黄褐色 中砂～細砂 (鉄･マンガン含む)
9 10YR4/1 褐灰色 中砂 (1～5cmの礫含む)

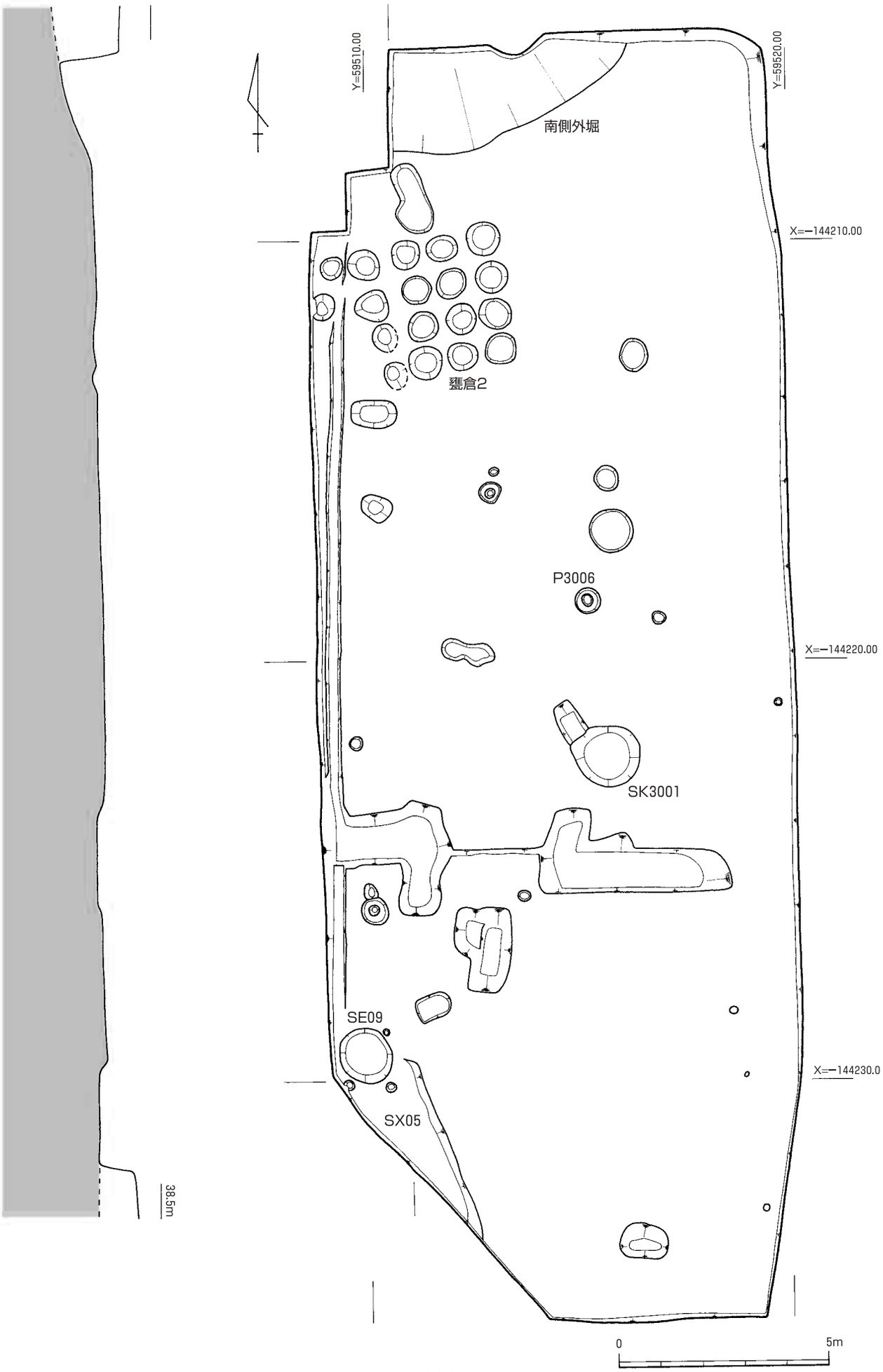


1 耕土
2 2.5Y6/8 明黄褐色 中砂 (マンガン含む)
3 2.5Y6/2 灰黄色 細砂～中砂 (マンガン含む)
4 10YR7/6 明黄褐色 中砂 (マンガン含む)
5 10YR5/8 黄褐色 中砂 (マンガン含む)
6 10YR7/1 灰白色 シルト質細砂
7 2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂～中砂
8 7.5Y7/1 灰白色 中砂 (鉄分含む)
9 7.5Y8/1 灰白色 シルト質極細砂 (鉄分含む)
10 5Y7/2 灰白色 シルト質中砂 (鉄分含む)
11 5Y5/1 灰色 シルト
12 10YR6/8 明黄褐色 細砂～極細砂

0 4m

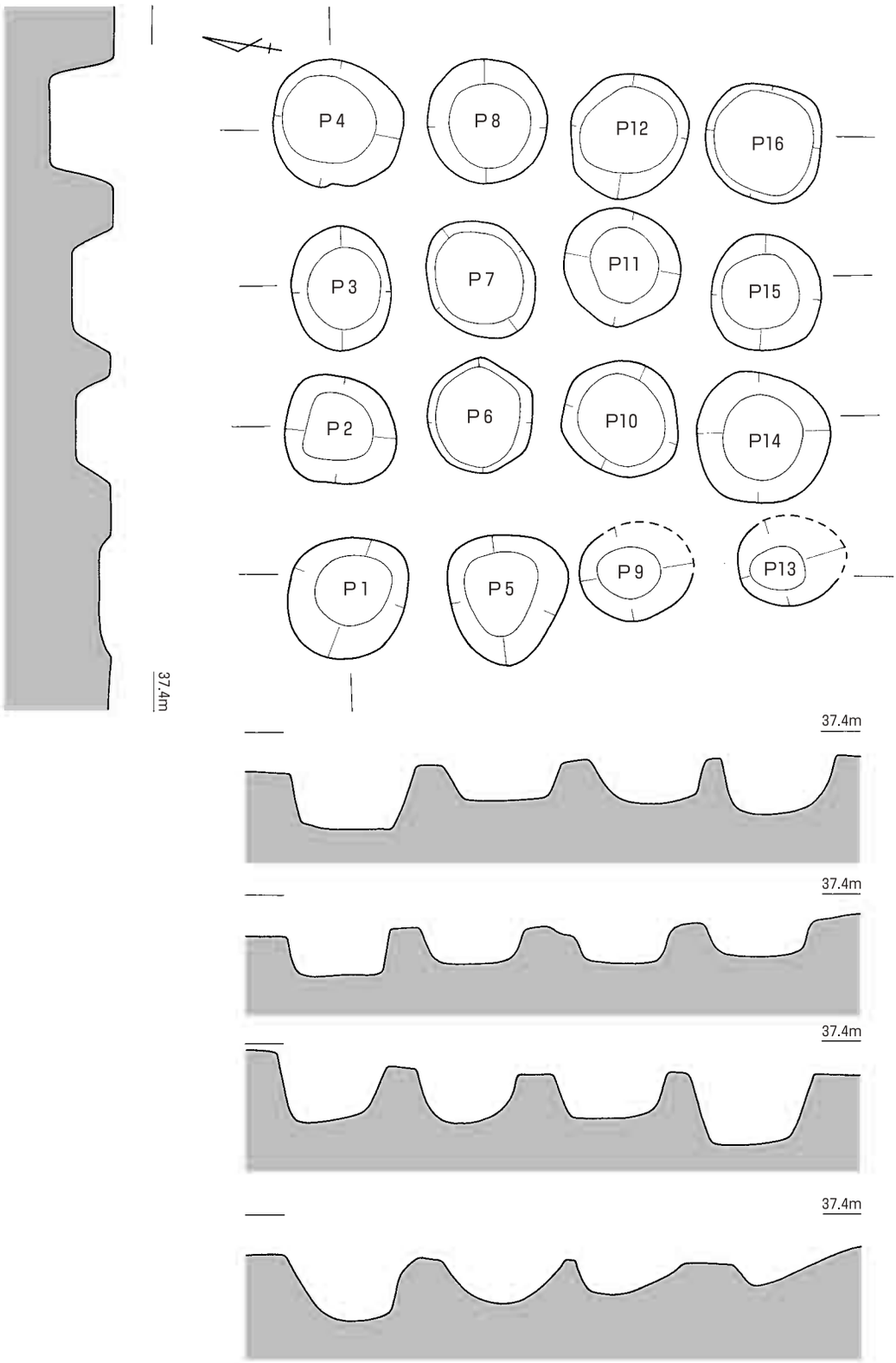


2区 SD2011・2006・2004・2005

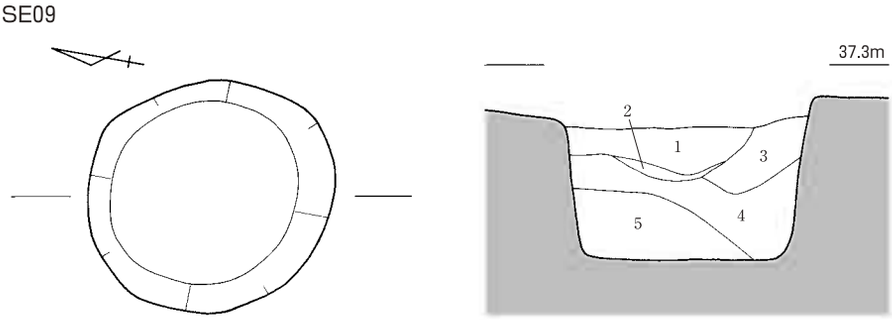

Y=59510.00
Y=59520.00
南側外堀
X=−144210.00
甕倉2
P3006
X=−144220.00
SK3001
SE09
X=−144230.0
SX05
38.5m
0
5m

3区　遺構配置図

甕倉2



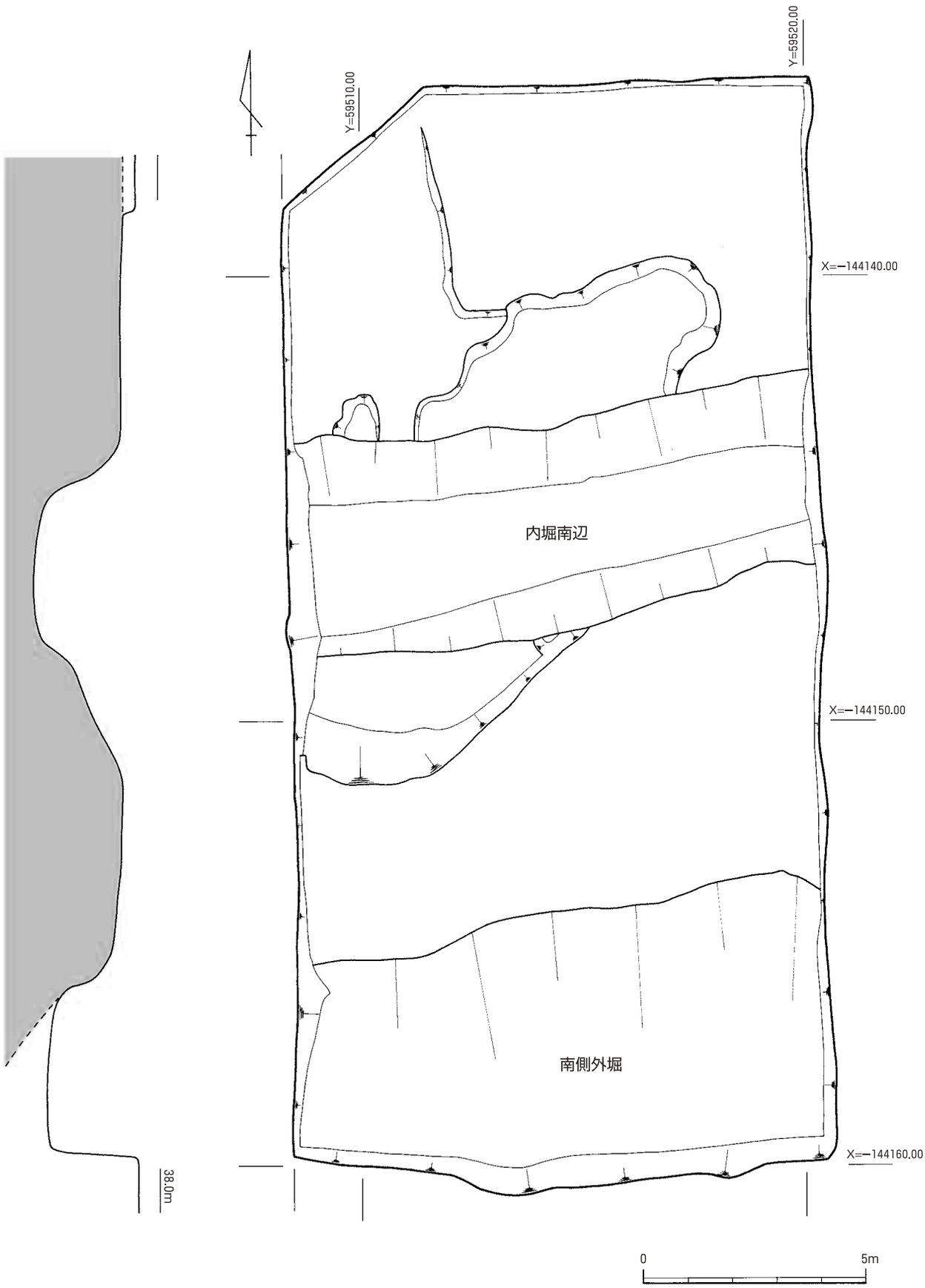
SE09



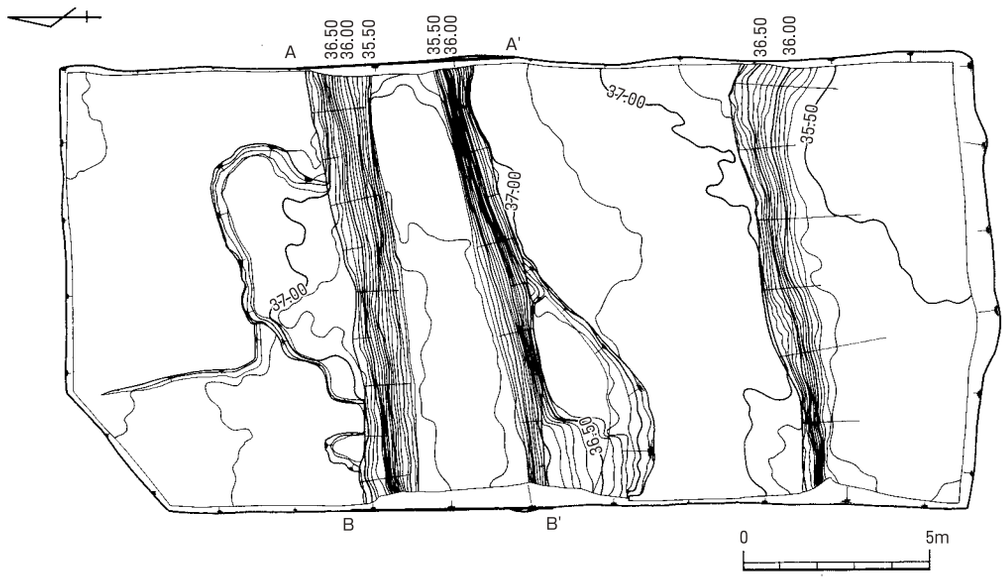
1 暗灰褐色細砂（黄褐色砂質シルトのブロック含む）
2 黒色砂質シルト（炭層）
3 褐灰色シルト質細砂（直径10cm以下の礫混じり　人為的埋土）
4 灰褐色シルト質細砂（直径2cm以下の礫を散漫に含む　人為的埋土）
5 暗黄褐色シルト質細砂（人為的埋土）

0　1m

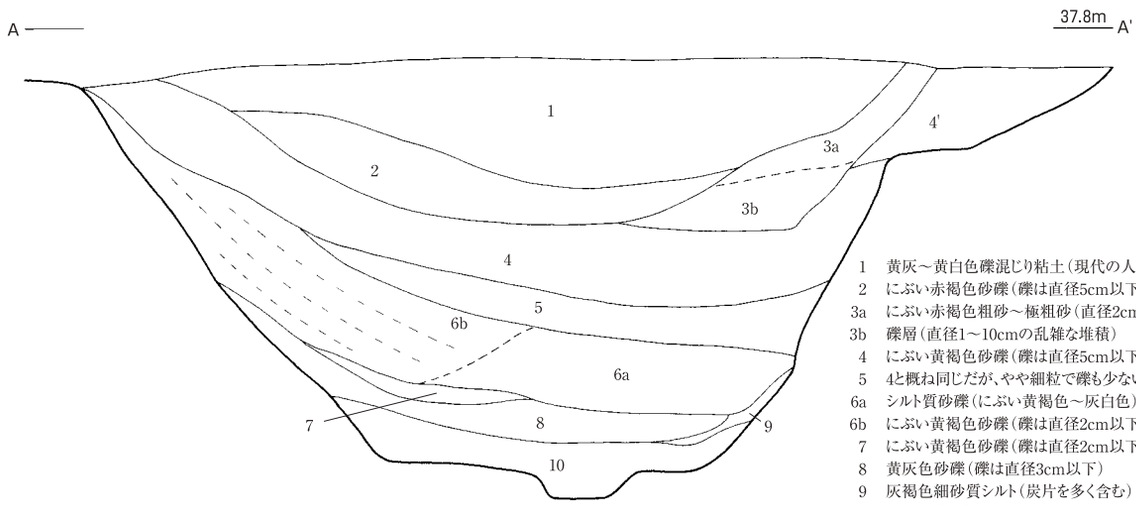
3区　甕倉2、SE09


Y=59520.00
Y=59510.00
X=−144140.00
X=−144150.00
X=−144160.00
内堀南辺
南側外堀
38.0m
0
5m

6区　遺構配置図

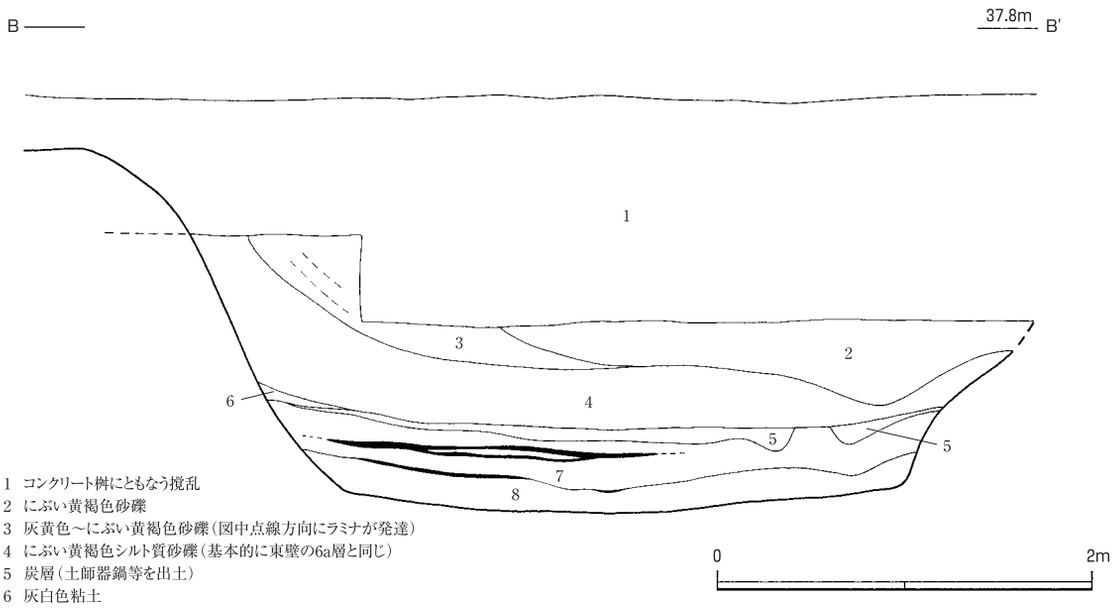


内堀南辺　東壁



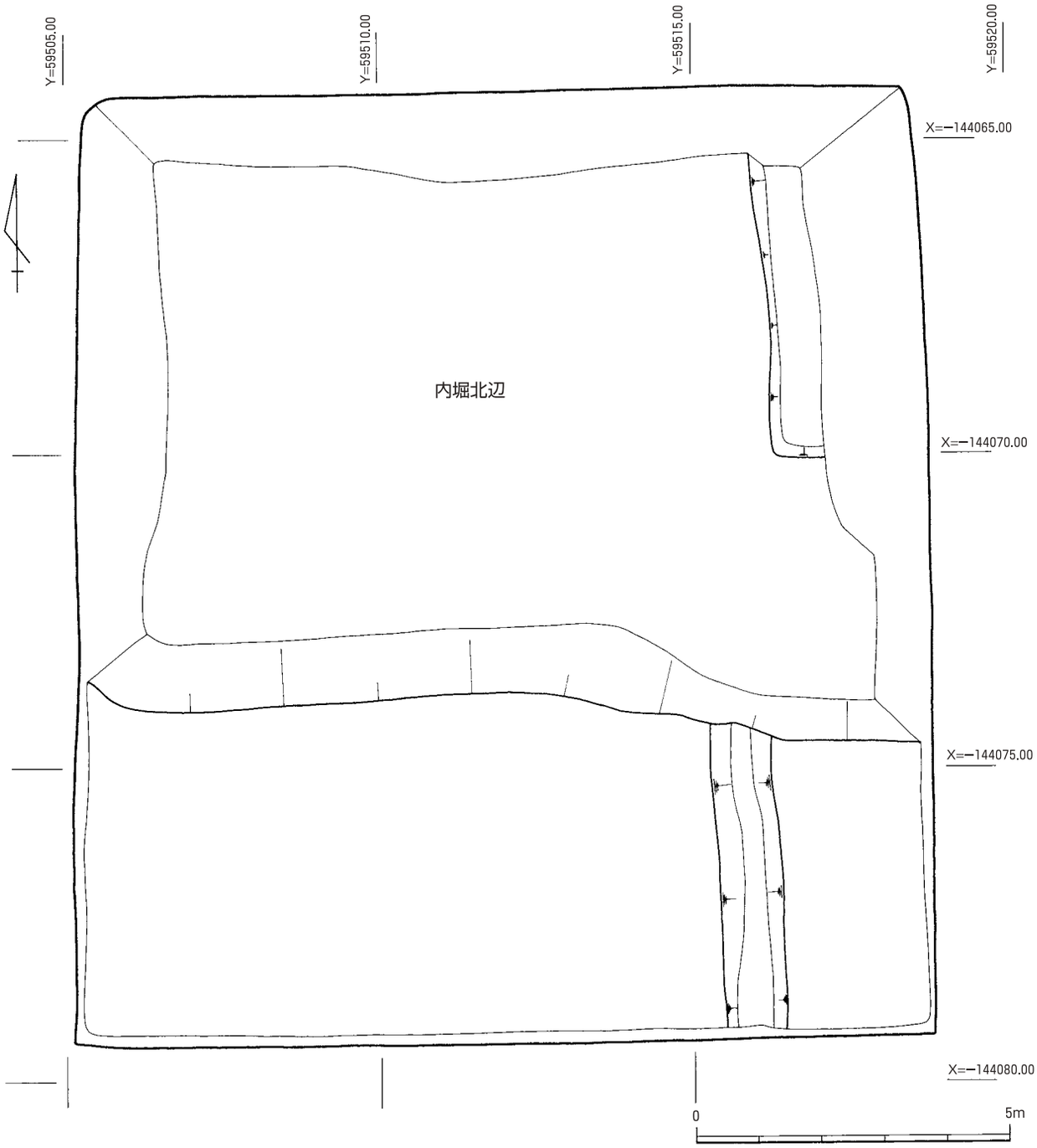
1　黄灰～黄白色礫混じり粘土（現代の人為的埋土）
2　にぶい赤褐色砂礫（礫は直径5cm以下）
3a　にぶい赤褐色粗砂～極粗砂（直径2cm以下の礫を少量含む）
3b　礫層（直径1～10cmの乱雑な堆積）
4　にぶい黄褐色砂礫（礫は直径5cm以下　灰白色シルト～粘土のブロックを含む）
5　4と概ね同じだが、やや細粒で礫も少ない（粘土ブロックは含む）
6a　シルト質砂礫（にぶい黄褐色～灰白色）
6b　にぶい黄褐色砂礫（礫は直径2cm以下　図中点線方向にラミナが発達）
7　にぶい黄褐色砂礫（礫は直径2cm以下）
8　黄灰色砂礫（礫は直径3cm以下）
9　灰褐色細砂質シルト（炭片を多く含む）
10　灰色砂礫（礫は直径3cm以下）

内堀南辺　西壁

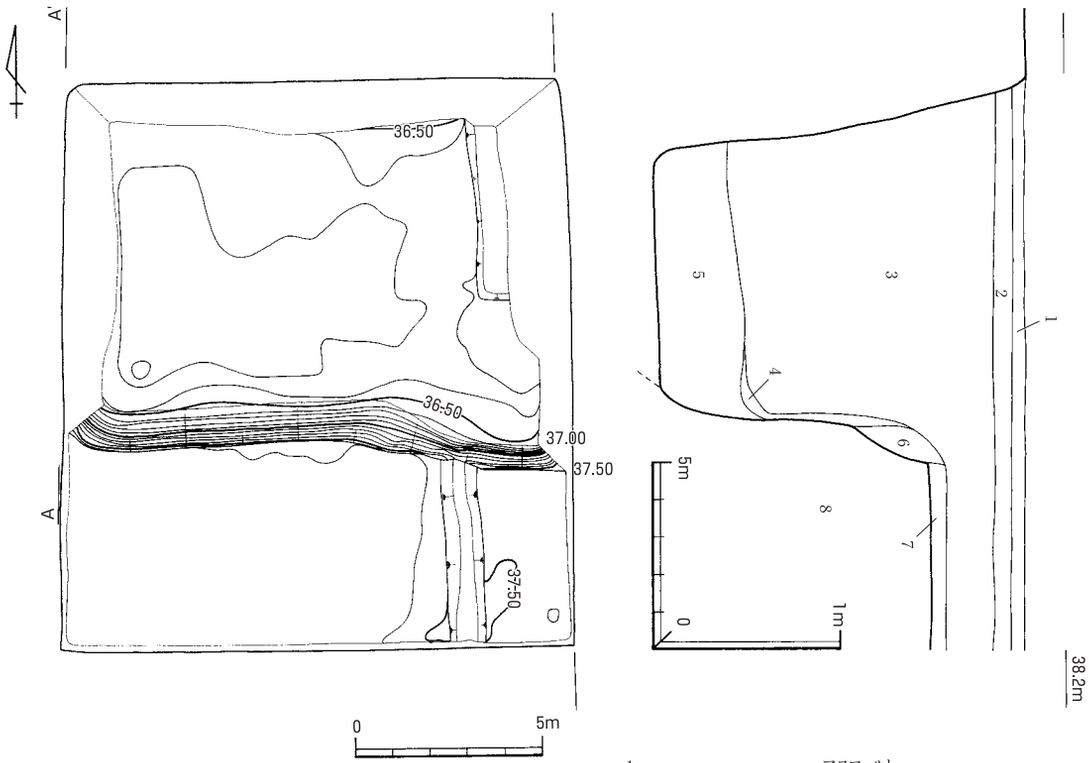


1　コンクリート桝にともなう撹乱
2　にぶい黄褐色砂礫
3　灰黄色～にぶい黄褐色砂礫（図中点線方向にラミナが発達）
4　にぶい黄褐色シルト質砂礫（基本的に東壁の6a層と同じ）
5　炭層（土師器鍋等を出土）
6　灰白色粘土
7　灰黄色礫混じりシルト（3枚の炭化物層を挟む）
8　灰黄色砂質シルト（炭化物片を含む）

6区　内堀南辺東西断面

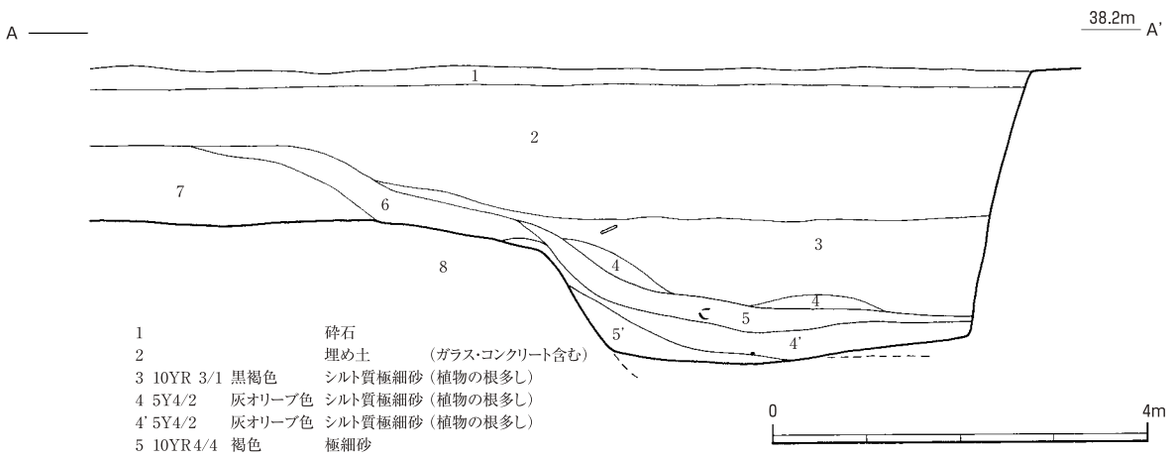

Y=59505.00
Y=59510.00
Y=59515.00
Y=59520.00
X=−144065.00
X=−144070.00
X=−144075.00
X=−144080.00
内堀北辺
0
5m

9区　遺構配置図



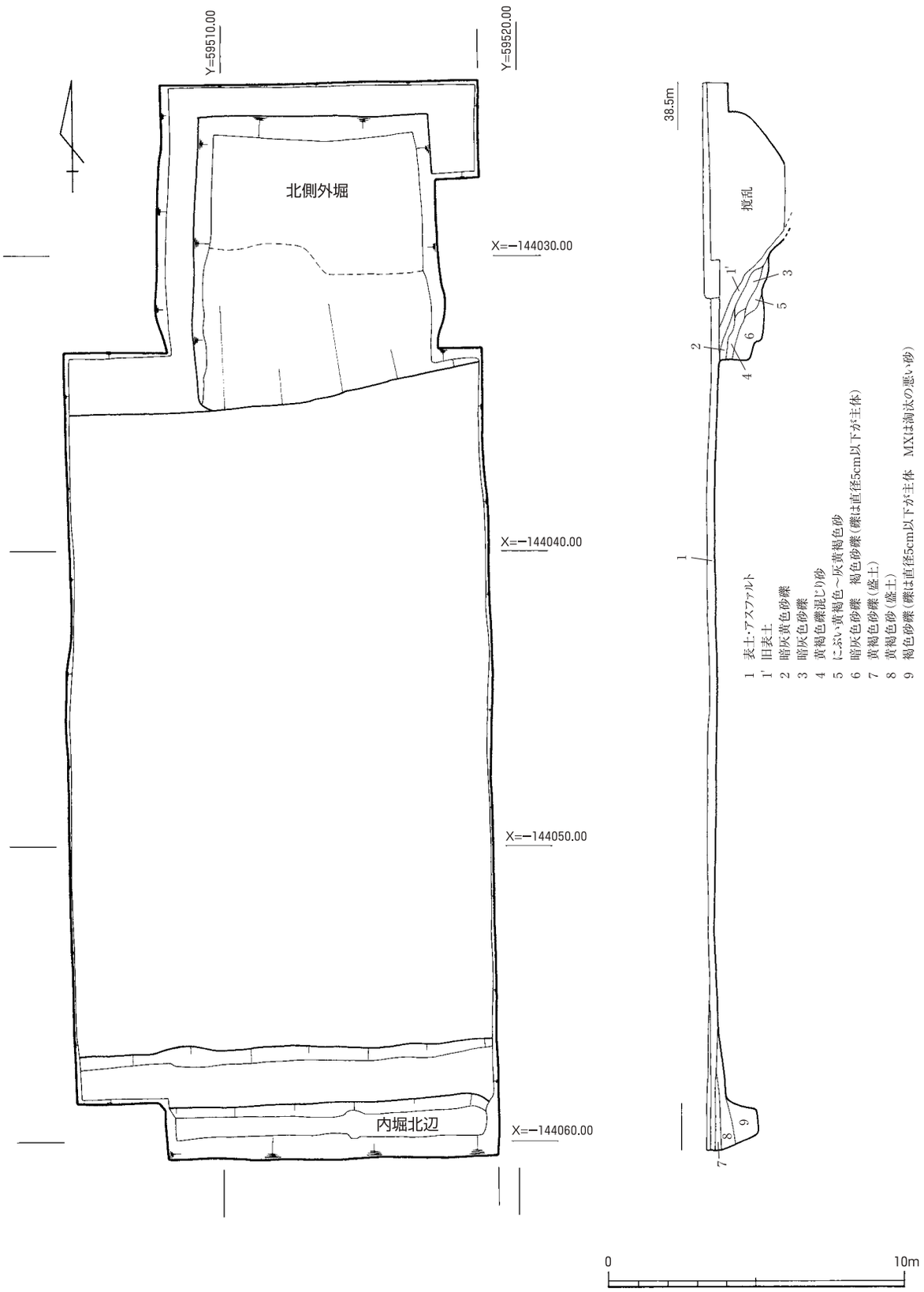
1			アスファルト	
2			砕石	
3			埋め土	（ガラス･コンクリート含む）
4	10YR 3/1	黒褐色	シルト質極細砂	（植物の根多し）
5	5Y 4/2	灰オリーブ色	シルト質極細砂	（植物の根多し）
6	10YR 4/4	褐色	極細砂	
7	10YR 5/6	黄褐色	シルト質極細砂	
8	10YR 5/6	黄褐色	極細砂～中礫	（4cmまでの礫）

内堀北辺

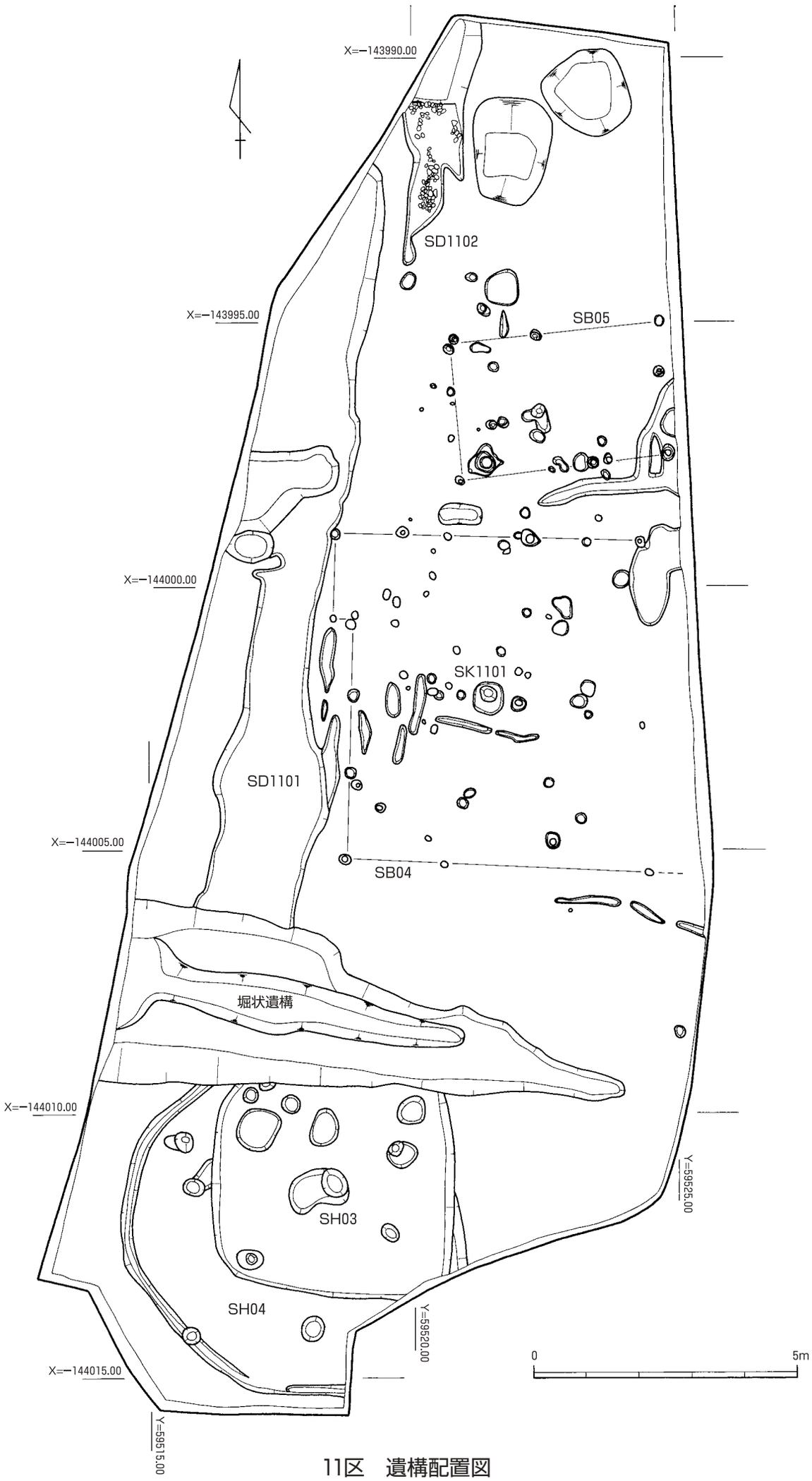


1		砕石	
2		埋め土	（ガラス･コンクリート含む）
3	10YR 3/1 黒褐色	シルト質極細砂	（植物の根多し）
4	5Y4/2 灰オリーブ色	シルト質極細砂	（植物の根多し）
4'	5Y4/2 灰オリーブ色	シルト質極細砂	（植物の根多し）
5	10YR4/4 褐色	極細砂	
5'	10YR4/4 褐色	極細砂	
6	10YR4/2 灰黄褐色	極細砂	
7	10YR 5/6 黄褐色	シルト質極細砂	
8	10YR 5/6 黄褐色	極細砂～中礫	（4cmまでの礫）

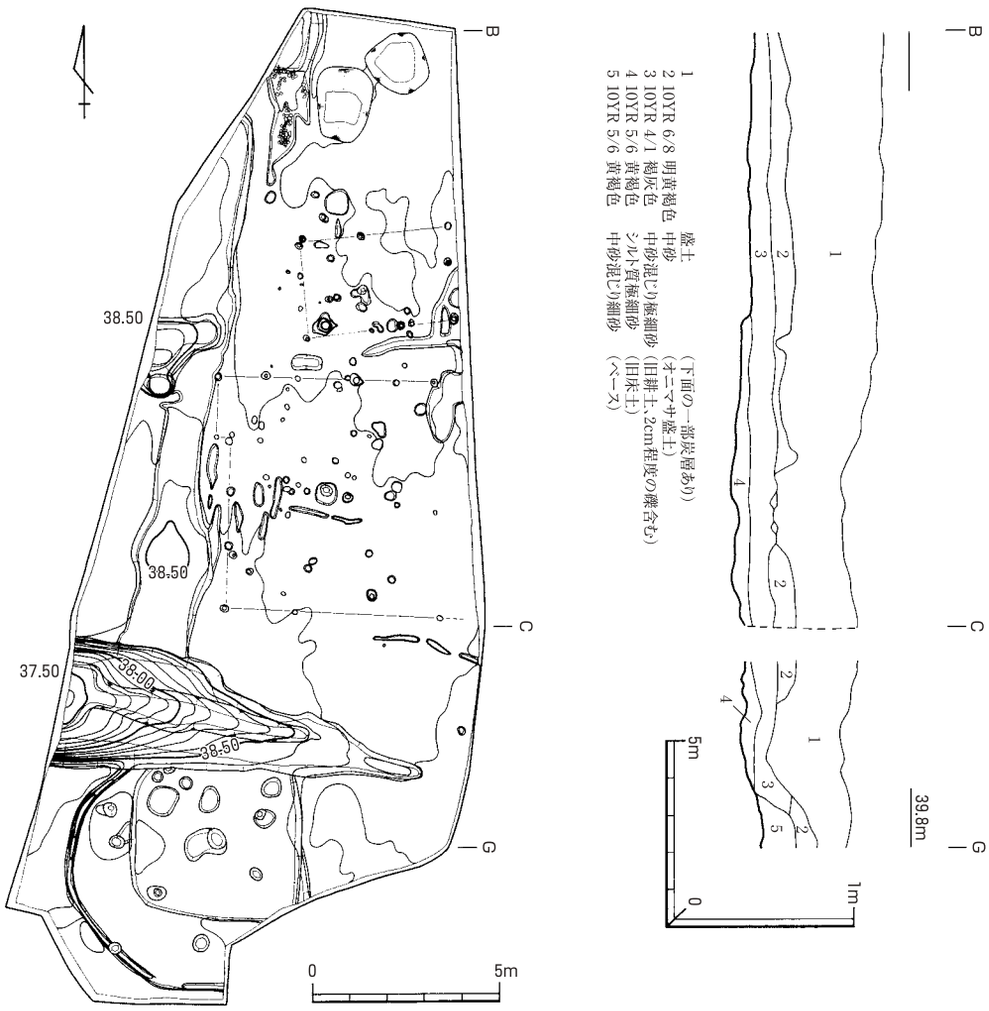
9区　基本土層図、内堀北辺土層図



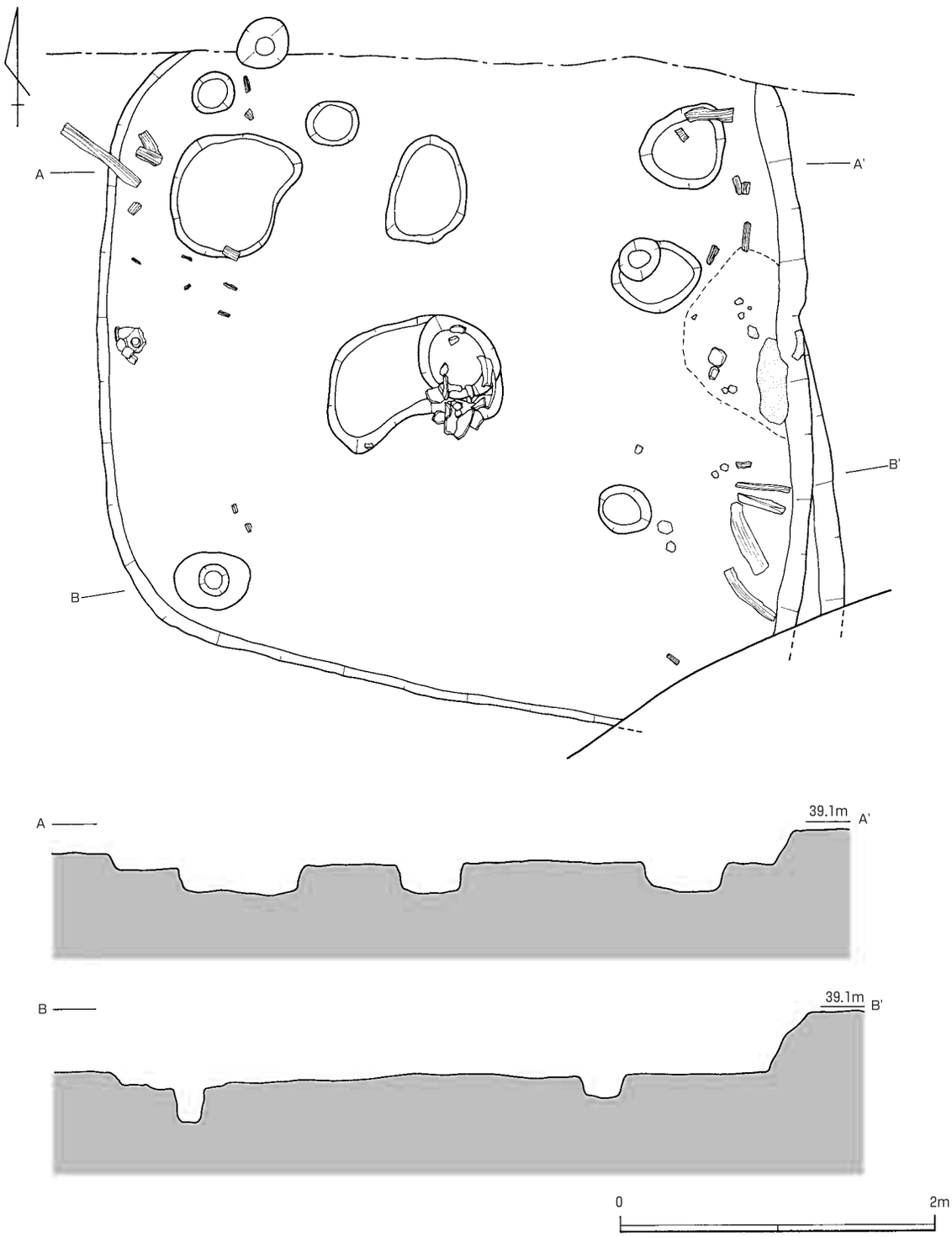
10区　遺構配置図、基本土層図


X=−143990.00
X=−143995.00
X=−144000.00
X=−144005.00
X=−144010.00
X=−144015.00
Y=59525.00
Y=59520.00
Y=59515.00
SD1102
SB05
SK1101
SD1101
SB04
堀状遺構
SH03
SH04
0
5m

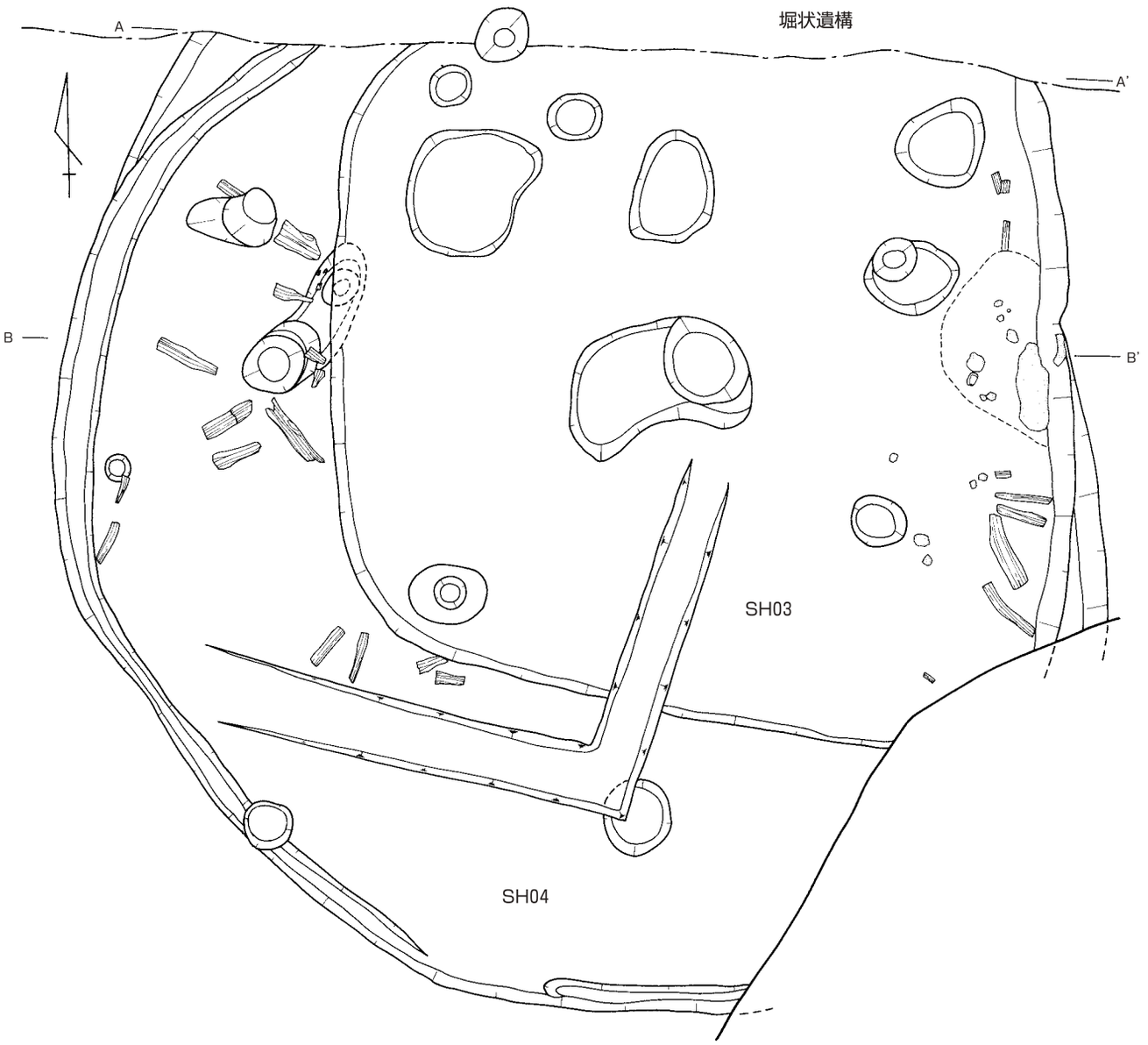
11区　遺構配置図

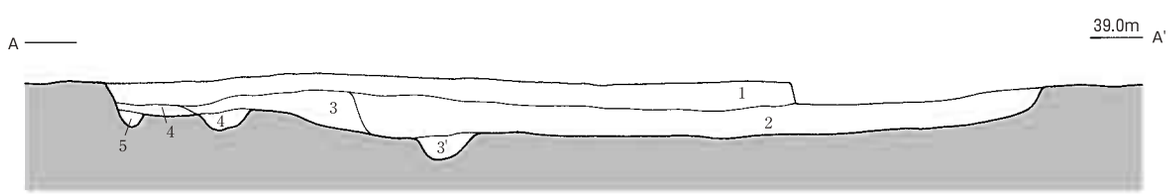

B
C
G
39.8m
1
2
3
4
5
1m
0
5m
1 盛土 （下面の一部炭層あり）
2 10YR 6/8 明黄褐色 中砂 （オニマサ盛土）
3 10YR 4/1 褐灰色 中砂混じり極細砂 （旧耕土、2cm程度の礫含む）
4 10YR 5/6 黄褐色 シルト質極細砂 （旧床土）
5 10YR 5/6 黄褐色 中砂混じり細砂 （ベース）
38.50
38.50
37.50
38.00
38.50

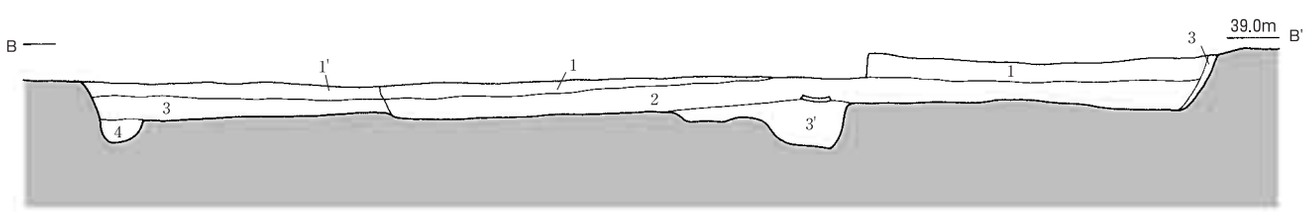
11区　基本土層図



11区　SH03





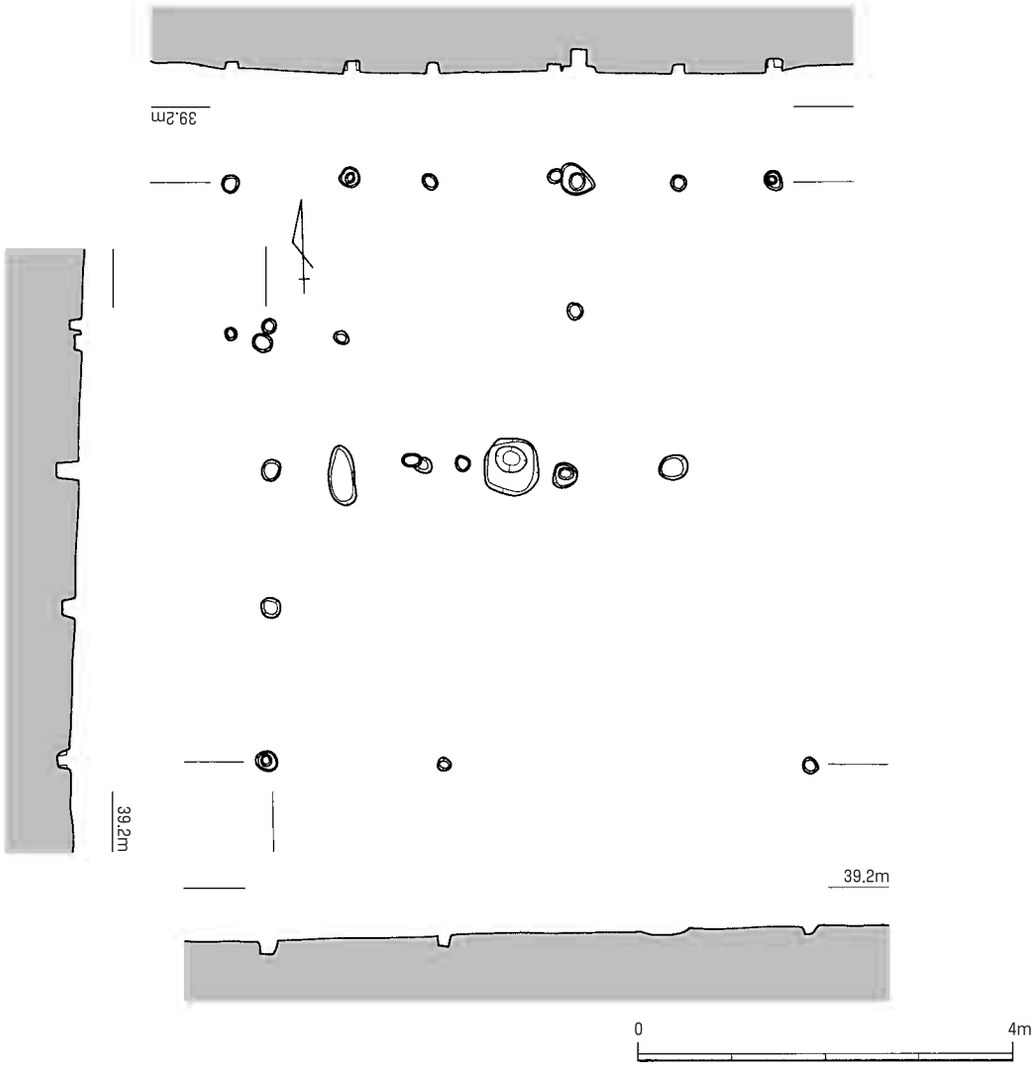


1 10YR 4/2 灰黄褐色細砂に小礫（円礫）多く混じる（マンガン含む）
1' 10YR 4/2 灰黄褐色細砂に小礫（円礫）多く混じる（マンガン少ない）
2 10YR 3/2 黒褐色細砂　炭・焼土・円礫含む（1層より円礫少ない）
3 10YR 3/3 暗褐色細砂に10YR4/2灰黄褐色シルト質細砂ブロック混じる（8:2くらい）
3' 10YR 3/3 暗褐色細砂（ブロックなし　炭含む）
4 2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト質極細砂（炭・焼土多く混じる）
5 2.5Y5/4　黄褐色シルト

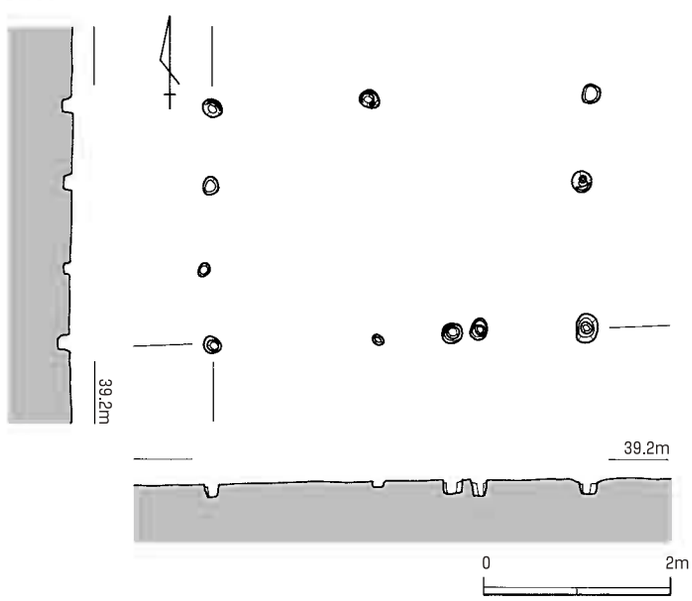
0　2m

11区　SH03・04

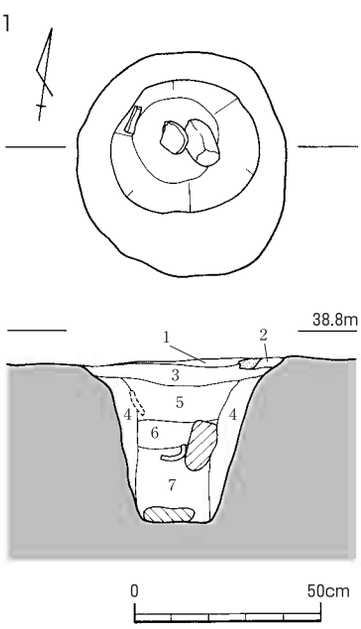
SB04



SB05



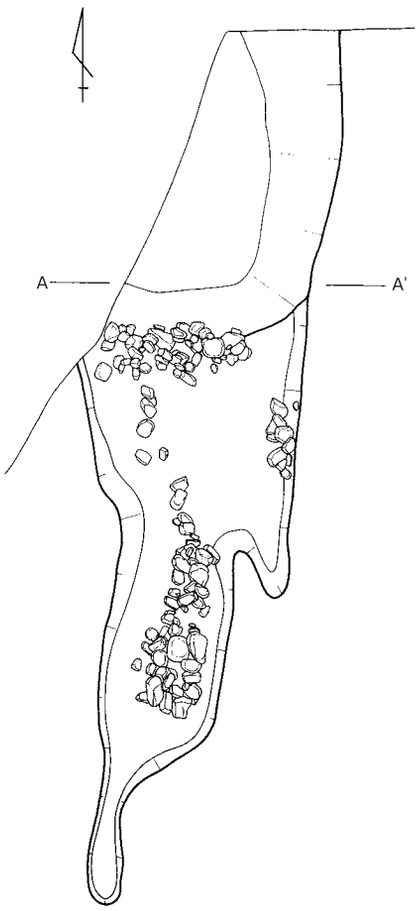
SK1101

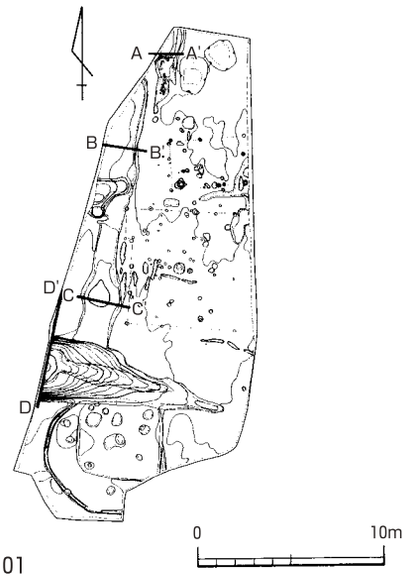


1	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト質細砂	（炭少量含む）
2		焼土層	
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	（炭・焼土多量に含む）
4	10YR5/1 褐灰色	礫混じりシルト	（10YR5/2灰黄褐色シルトブロック含む）
5	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	（炭含む）
6	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	
7	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	（5層よりやや炭多い）

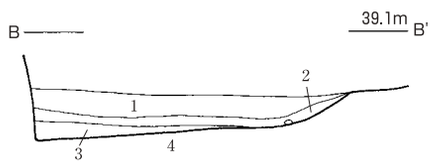
11区　SB04、SB05、SK1101

SD1102

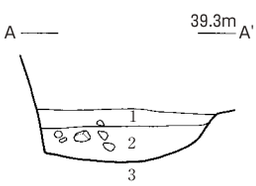




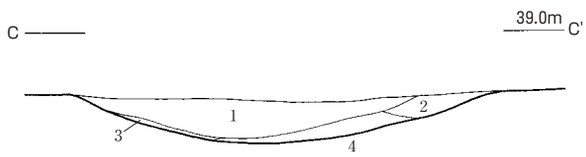
SD1101



1 10YR5/6 黄褐色 シルト
2 2.5Y5/4 黄褐色 中砂混じりシルト（3cm程の礫含む）
3 2.5Y5/3 黄褐色 細砂質シルト
4 2.5Y5/4 黄褐色 中礫混じり中砂 （ベース）

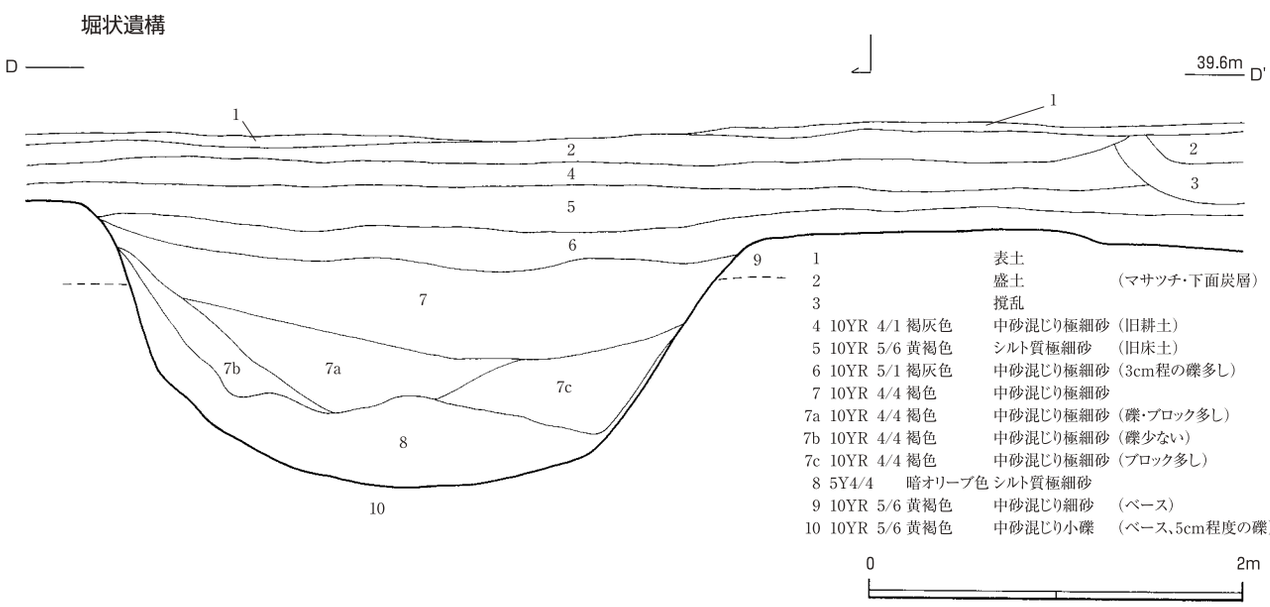


1 10YR5/6 黄褐色 シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂混じり中砂（5cm程の礫多し）
3 2.5Y5/4 黄褐色 中礫混じり中砂 （ベース）



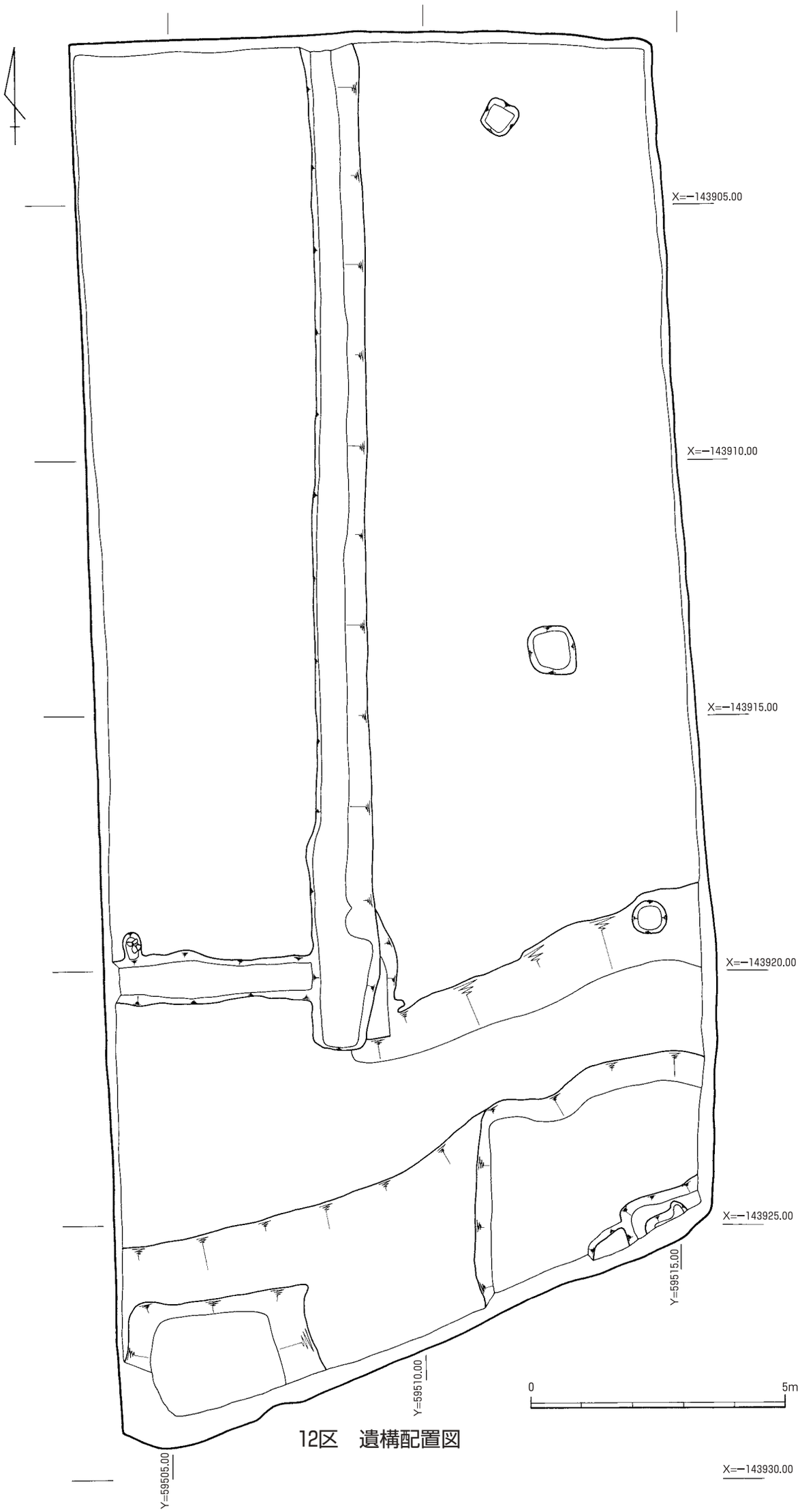
1 10YR5/6 黄褐色 シルト
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色 中砂混じりシルト
3 2.5Y5/4 黄褐色 シルト
4 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト混じり中砂
5 2.5Y5/4 黄褐色 中礫混じり中砂（ベース）

堀状遺構

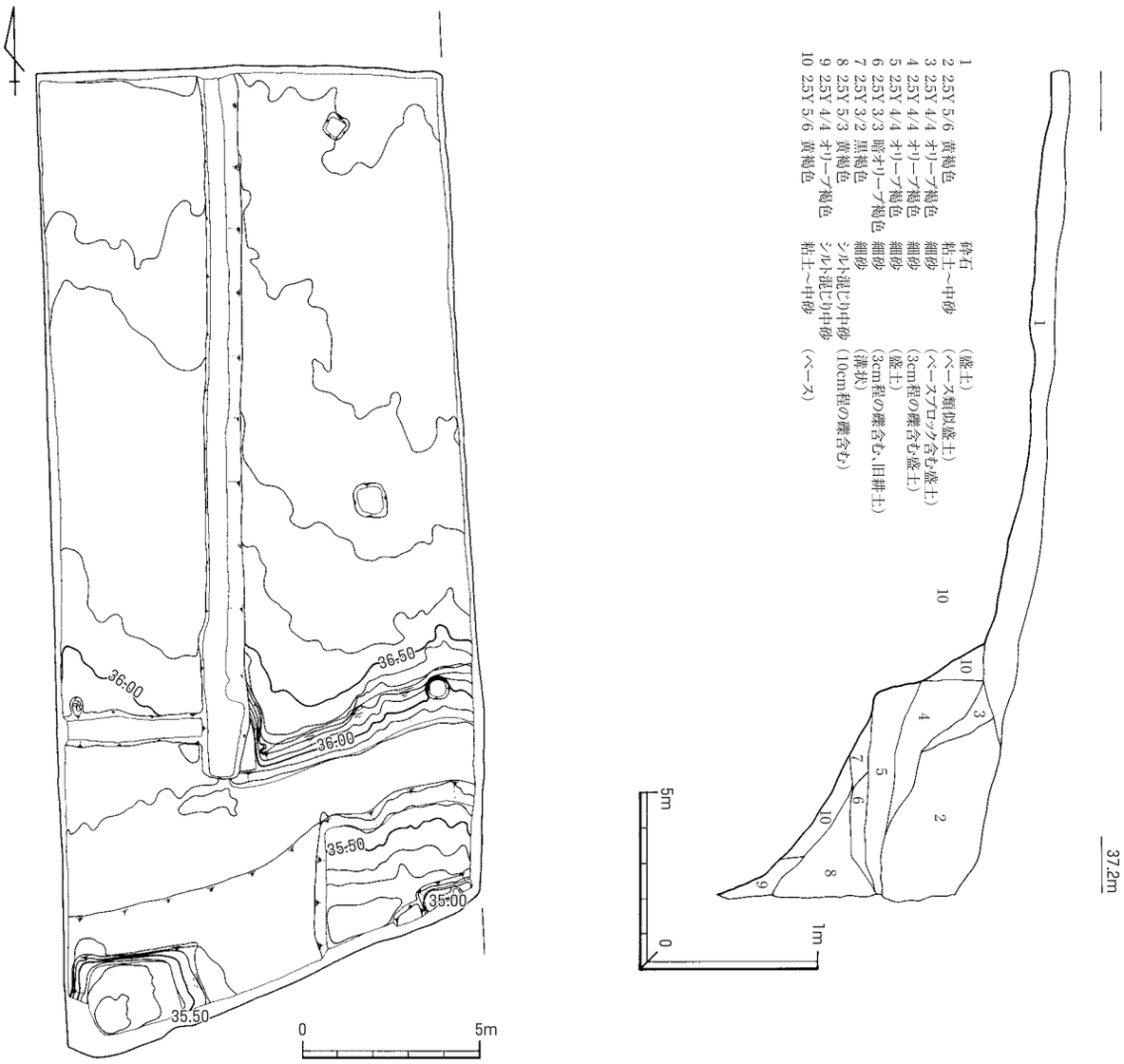


1		表土	
2		盛土	（マサツチ・下面炭層）
3		撹乱	
4	10YR 4/1 褐灰色	中砂混じり極細砂	（旧耕土）
5	10YR 5/6 黄褐色	シルト質極細砂	（旧床土）
6	10YR 5/1 褐灰色	中砂混じり極細砂	（3cm程の礫多し）
7	10YR 4/4 褐色	中砂混じり極細砂	
7a	10YR 4/4 褐色	中砂混じり極細砂	（礫・ブロック多し）
7b	10YR 4/4 褐色	中砂混じり極細砂	（礫少ない）
7c	10YR 4/4 褐色	中砂混じり極細砂	（ブロック多し）
8	5Y4/4 暗オリーブ色	シルト質極細砂	
9	10YR 5/6 黄褐色	中砂混じり細砂	（ベース）
10	10YR 5/6 黄褐色	中砂混じり小礫	（ベース、5cm程度の礫）

11区 SD1102、SD1101、堀状遺構

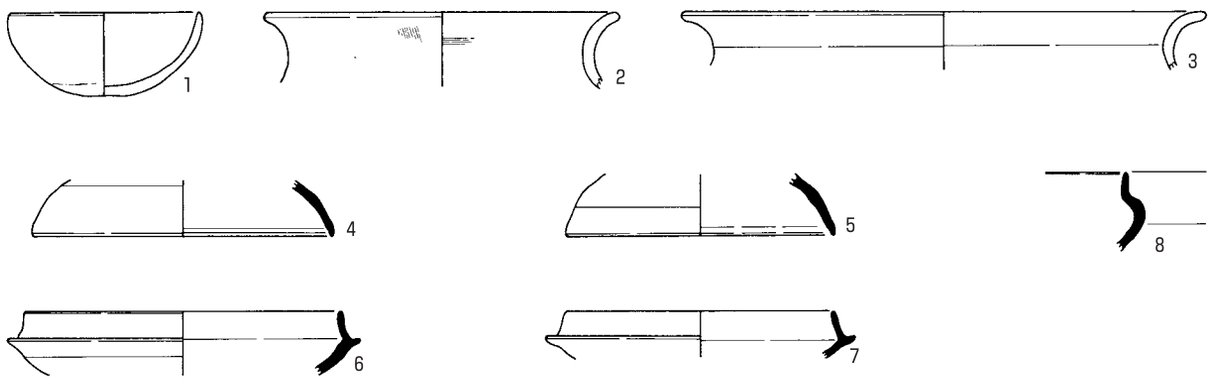

X=−143905.00
X=−143910.00
X=−143915.00
X=−143920.00
X=−143925.00
X=−143930.00
Y=59505.00
Y=59510.00
Y=59515.00
0
5m

12区　遺構配置図

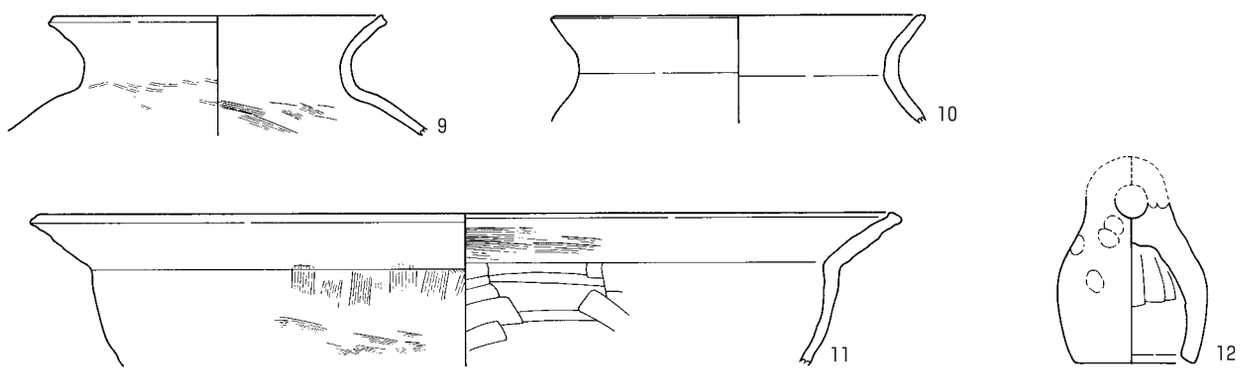

1 2.5Y 5/6 黄褐色 砕石 (盛土)
2 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 粘土～中砂 (ベース類似盛土)
3 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 細砂 (ベースブロック含む盛土)
4 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 細砂 (3cm程の礫含む盛土)
5 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 細砂 (盛土)
6 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 細砂 (3cm程の礫含む、旧耕土)
7 2.5Y 3/2 黒褐色 細砂 (溝状)
8 2.5Y 5/3 黄褐色 シルト混じり中砂 (10cm程の礫含む)
9 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト混じり中砂
10 2.5Y 5/6 黄褐色 粘土～中砂 (ベース)
37.2m
36.00
36.50
36.00
35.50
35.00
35.50
0
5m
0
5m
0
1m

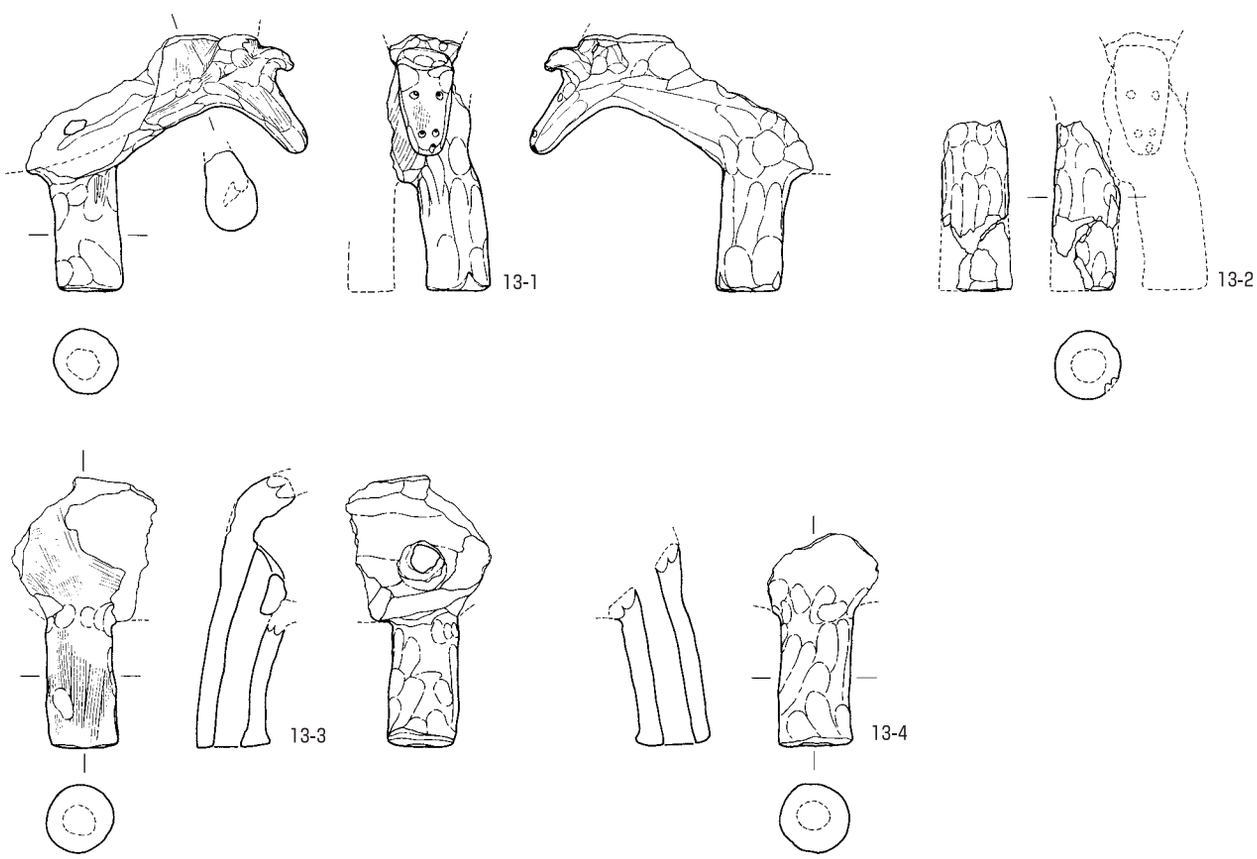
12区　基本土層

SH01

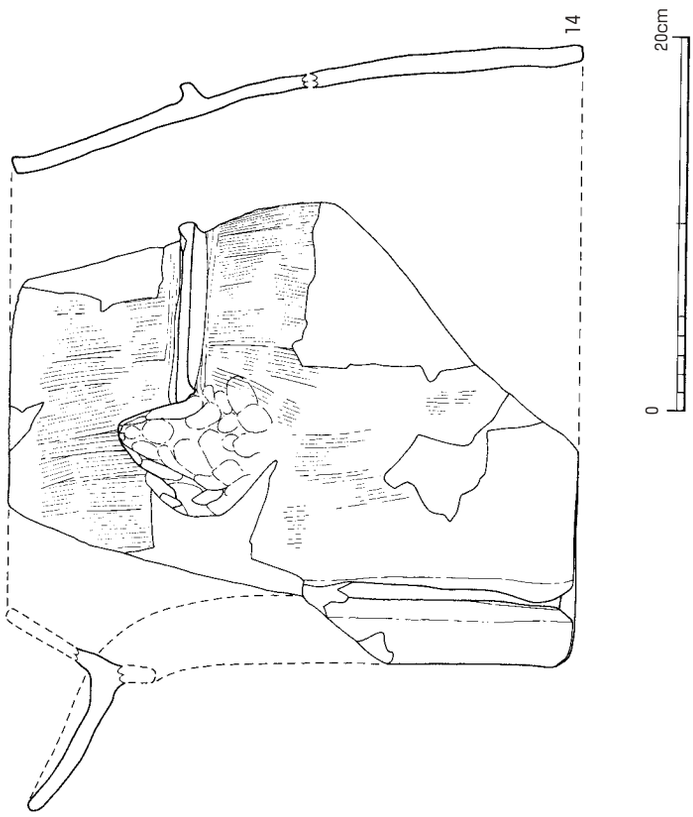


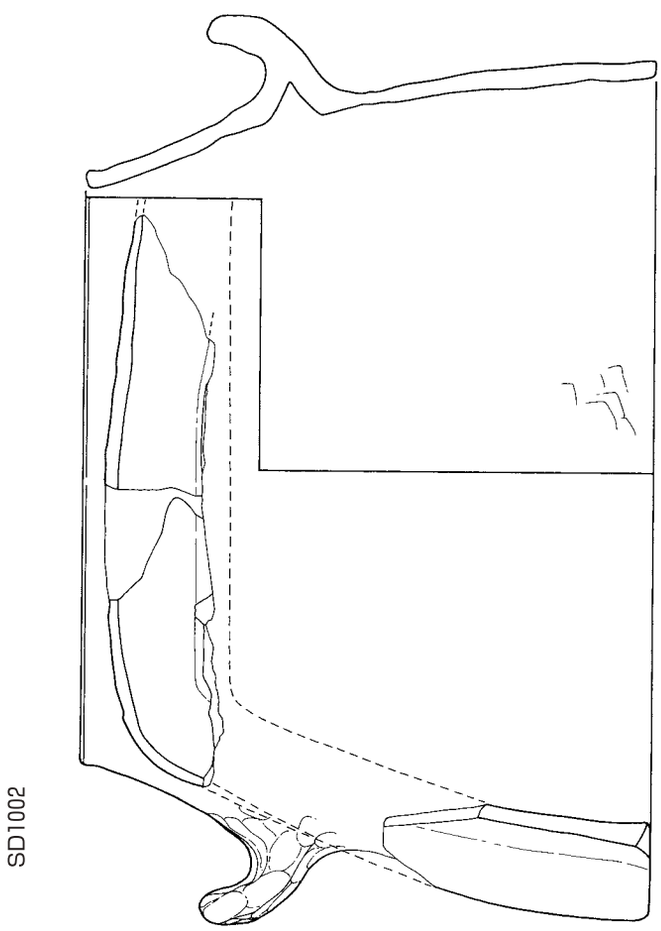
SD1002





1区の土器・土製品1（SH01、SD1002）



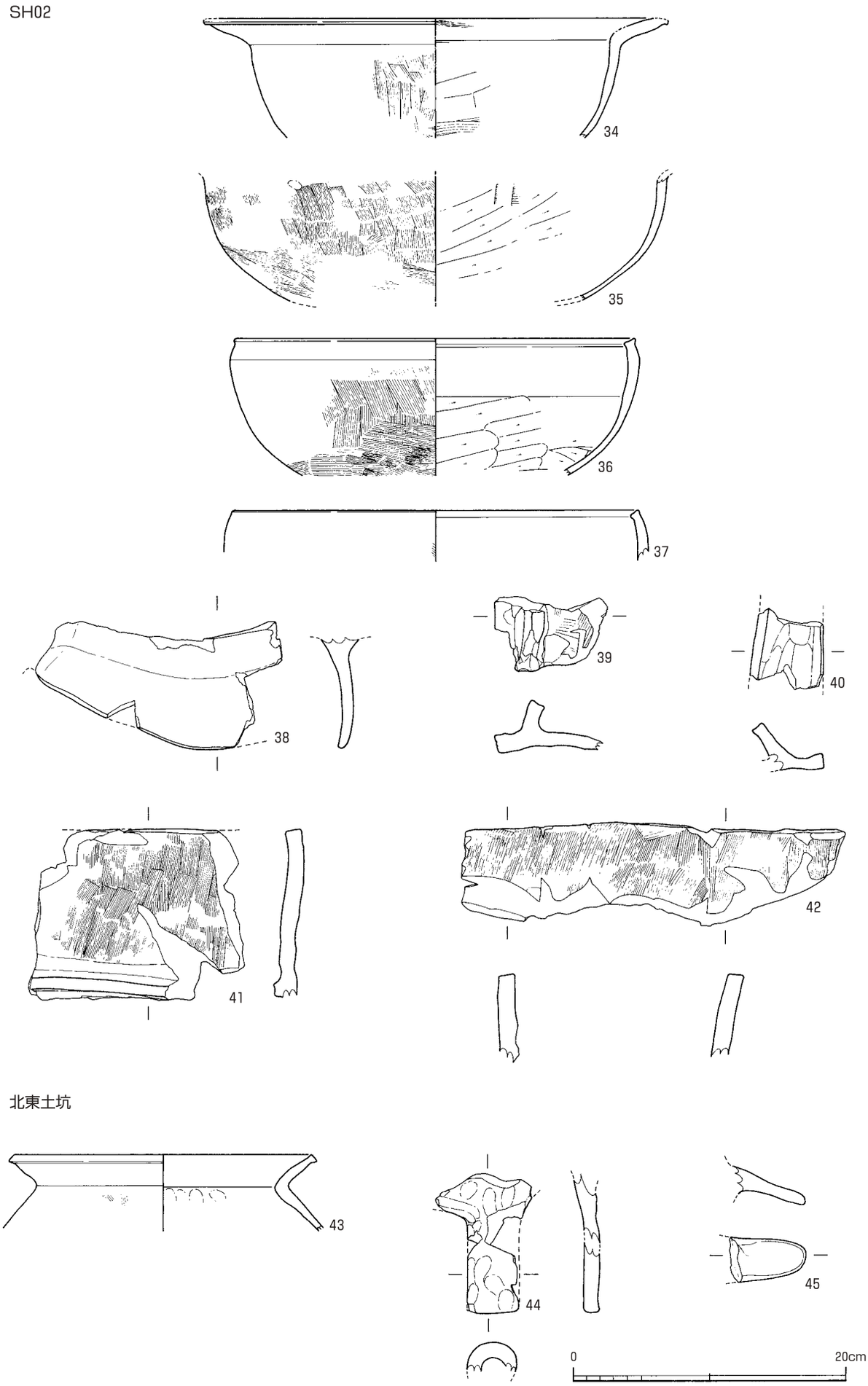


1区の土器・土製品2（SD1002）

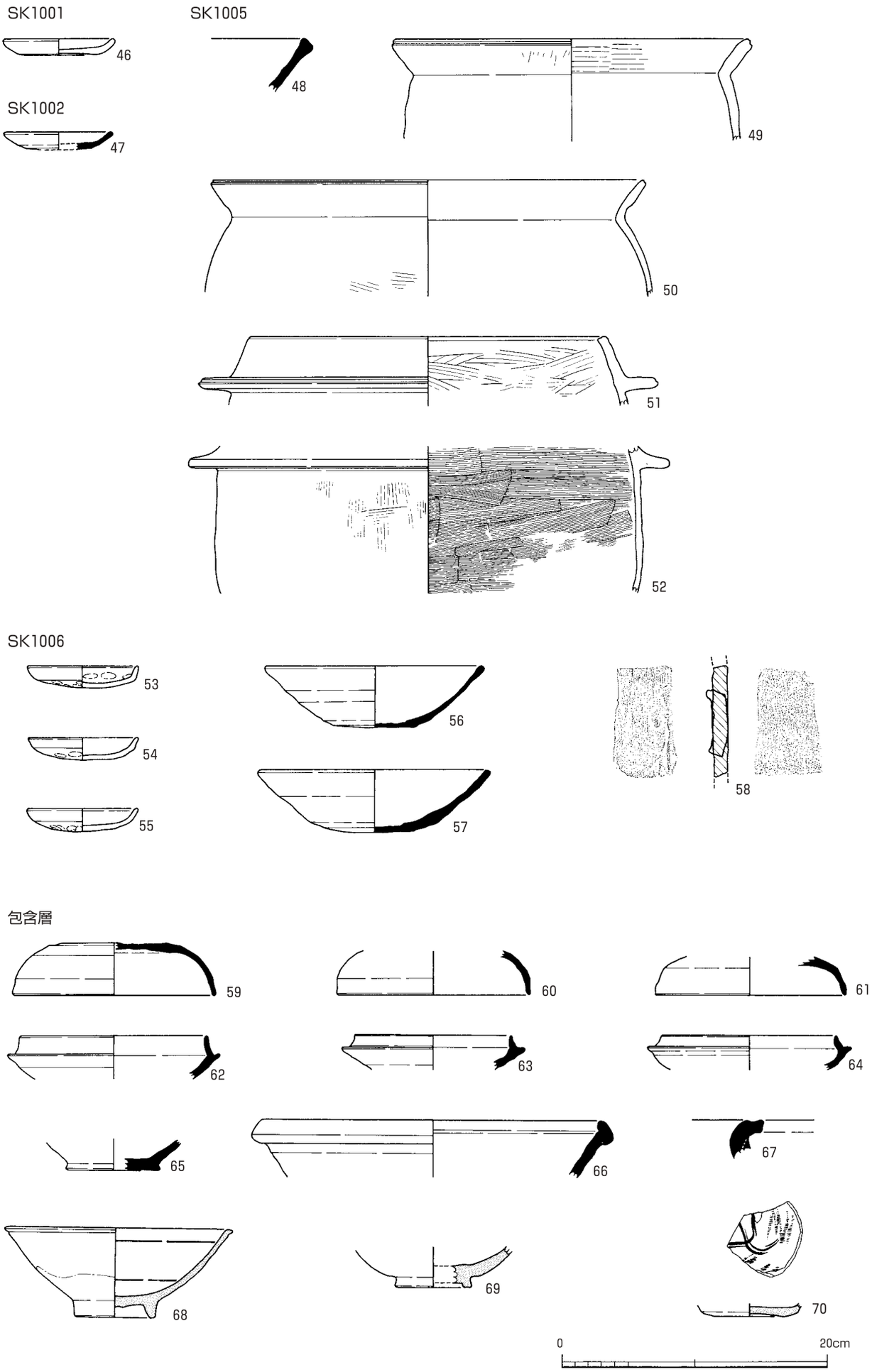
SH02

1区の土器・土製品3（SH02）

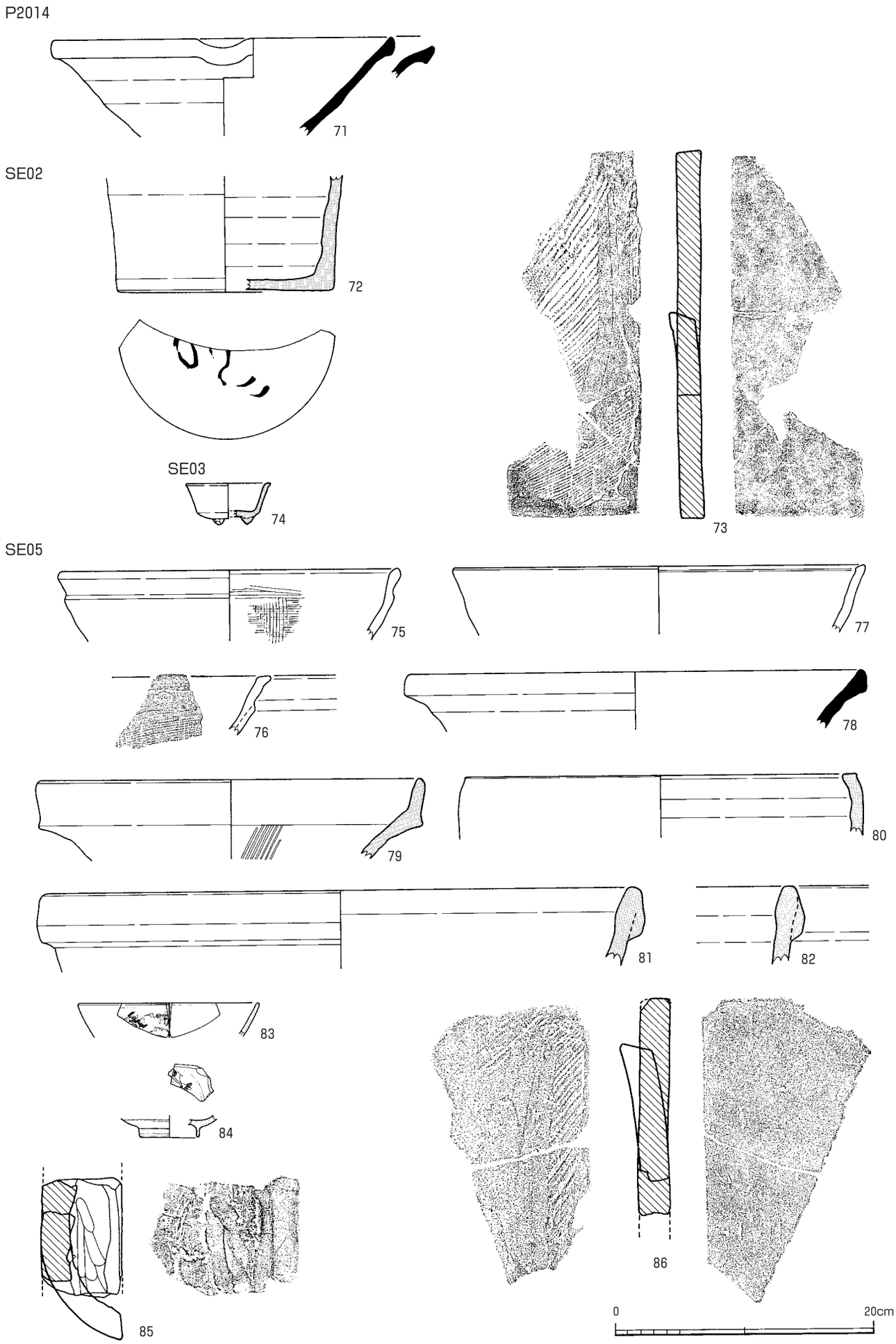
SH02



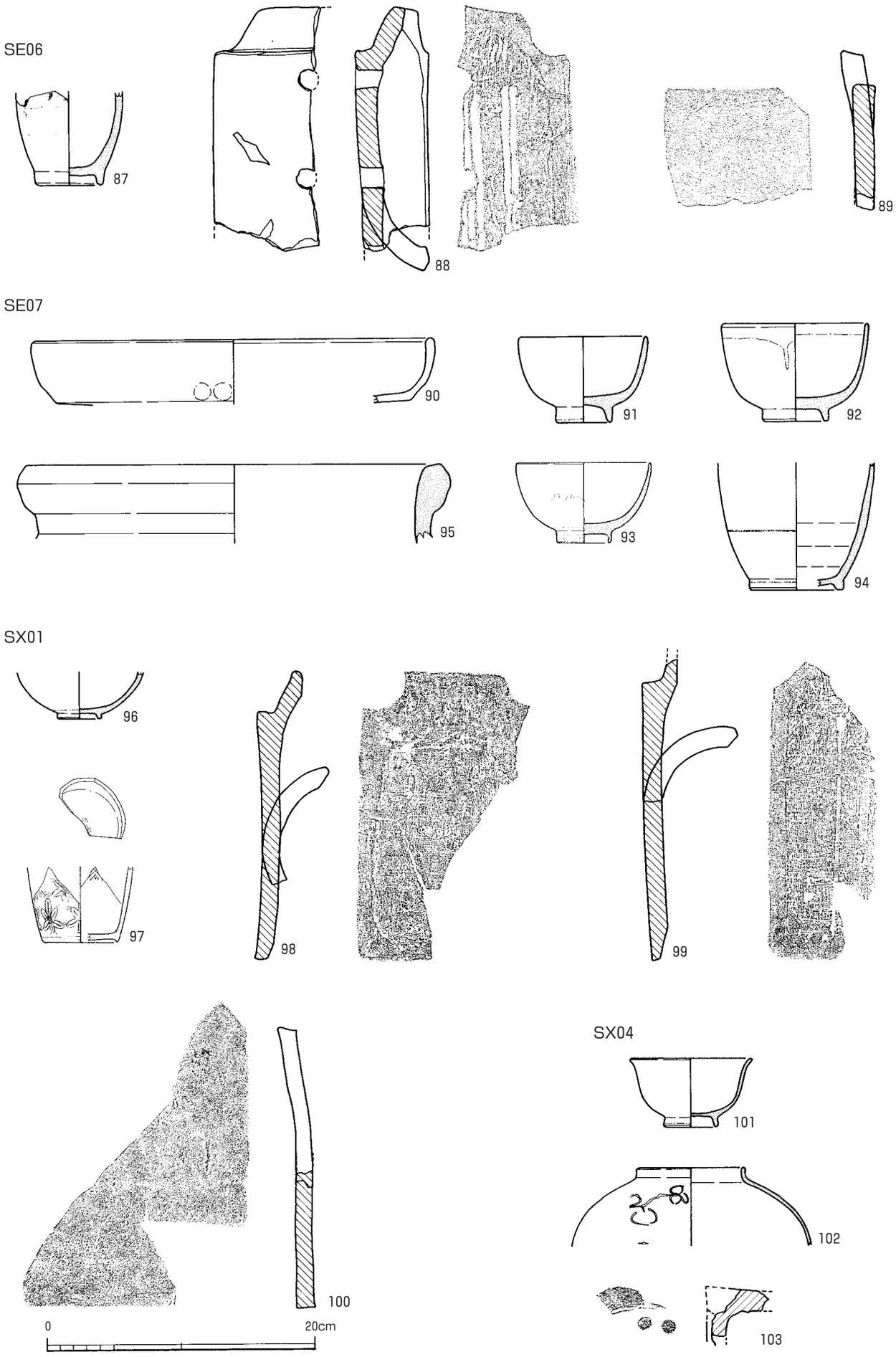
1区の土器・土製品4（SH02、北東土坑）



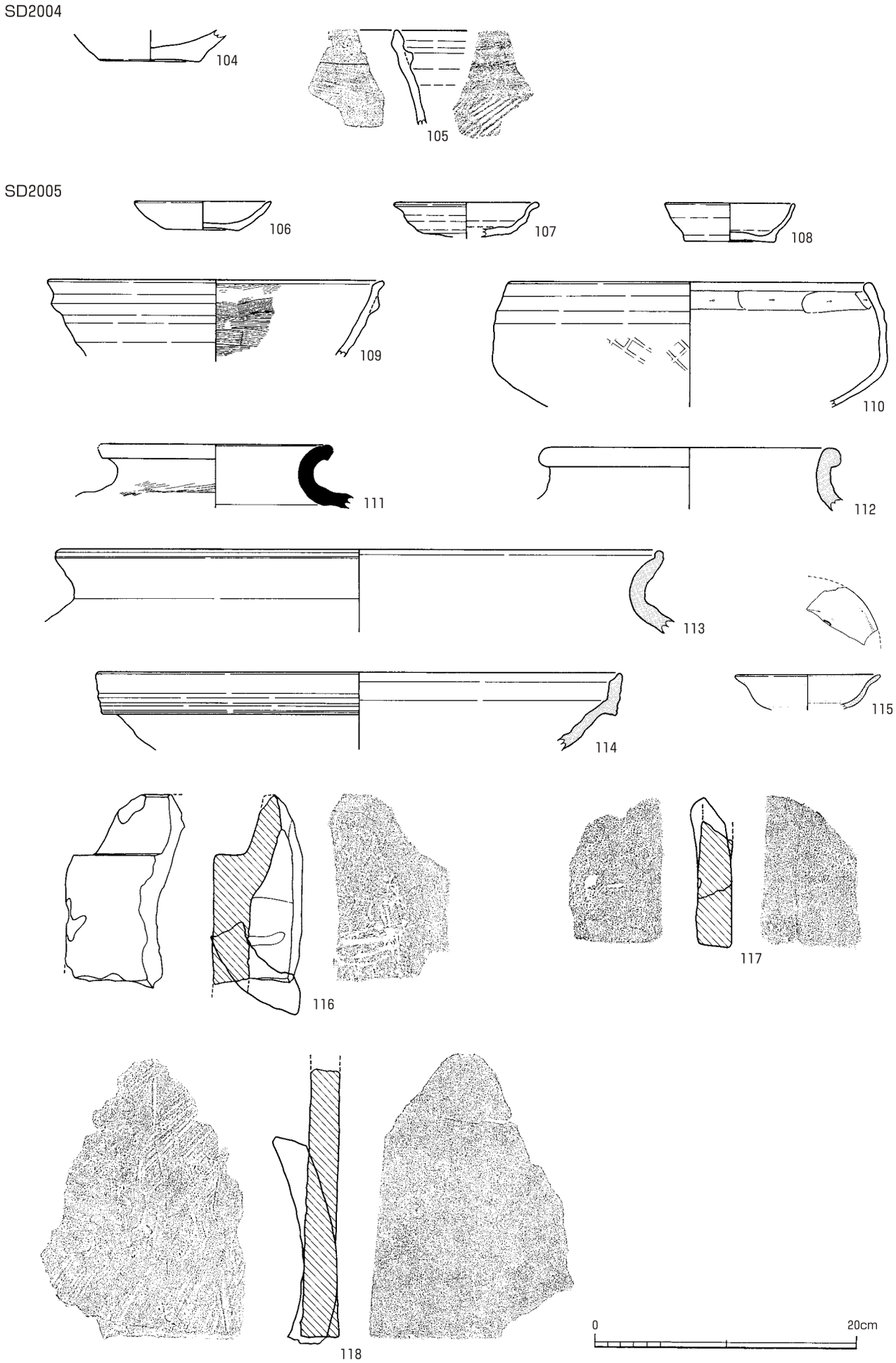
１区の土器・土製品５（SK1001、SK1002、SK1005、SK1006、包含層）



２区の土器・土製品１（P2014、SE02、SE03、SE05）

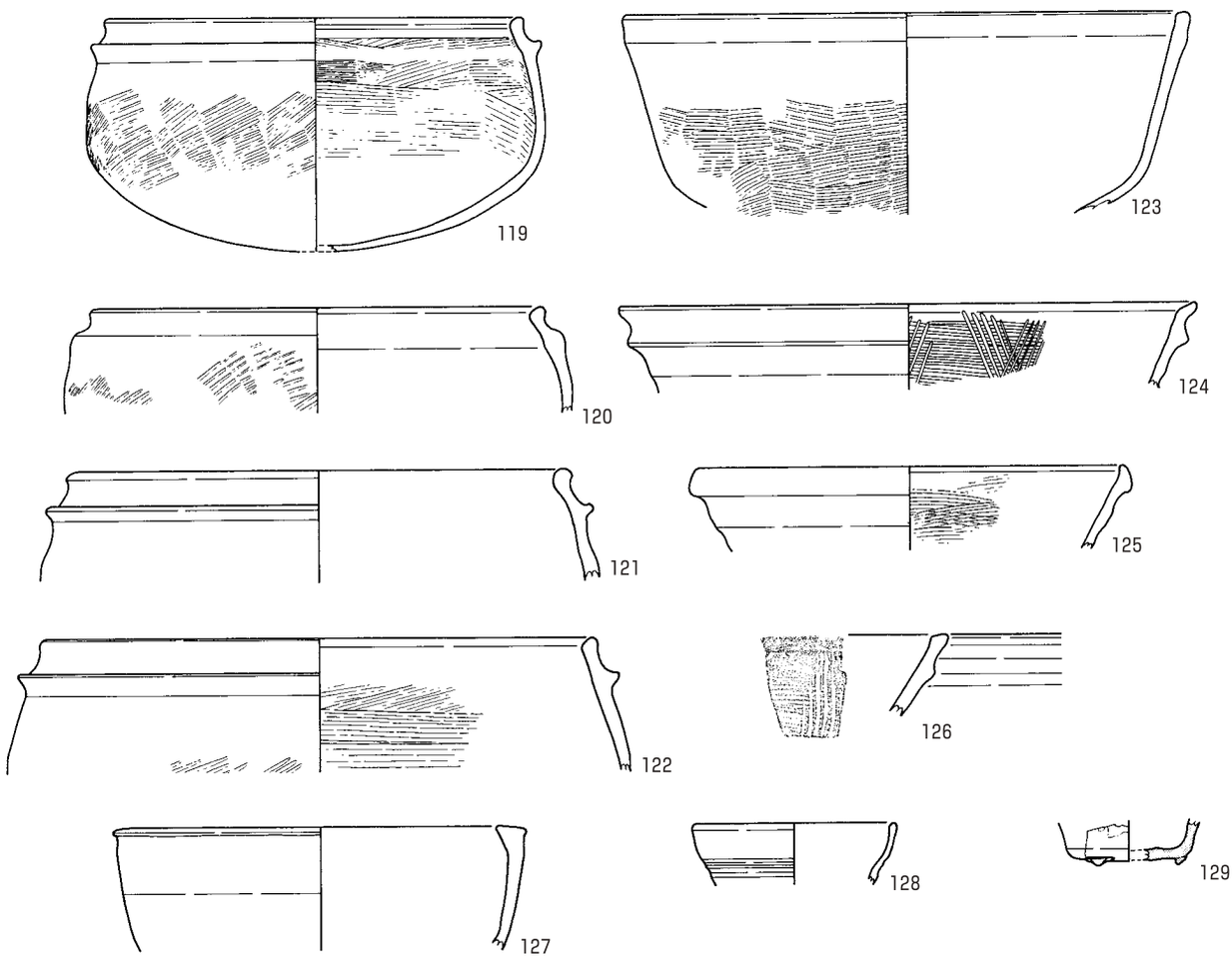


２区の土器・土製品２（SE06、SE07、SX01、SX04）

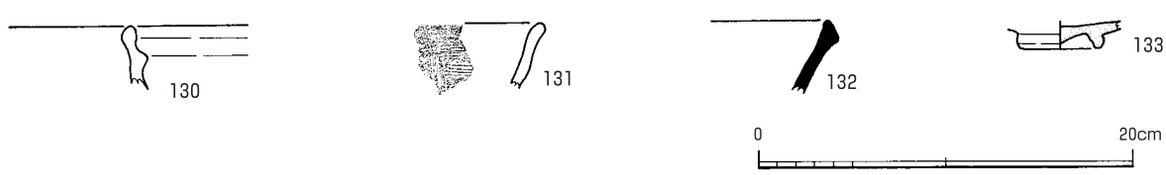


２区の土器・土製品３（SD2004、SD2005）

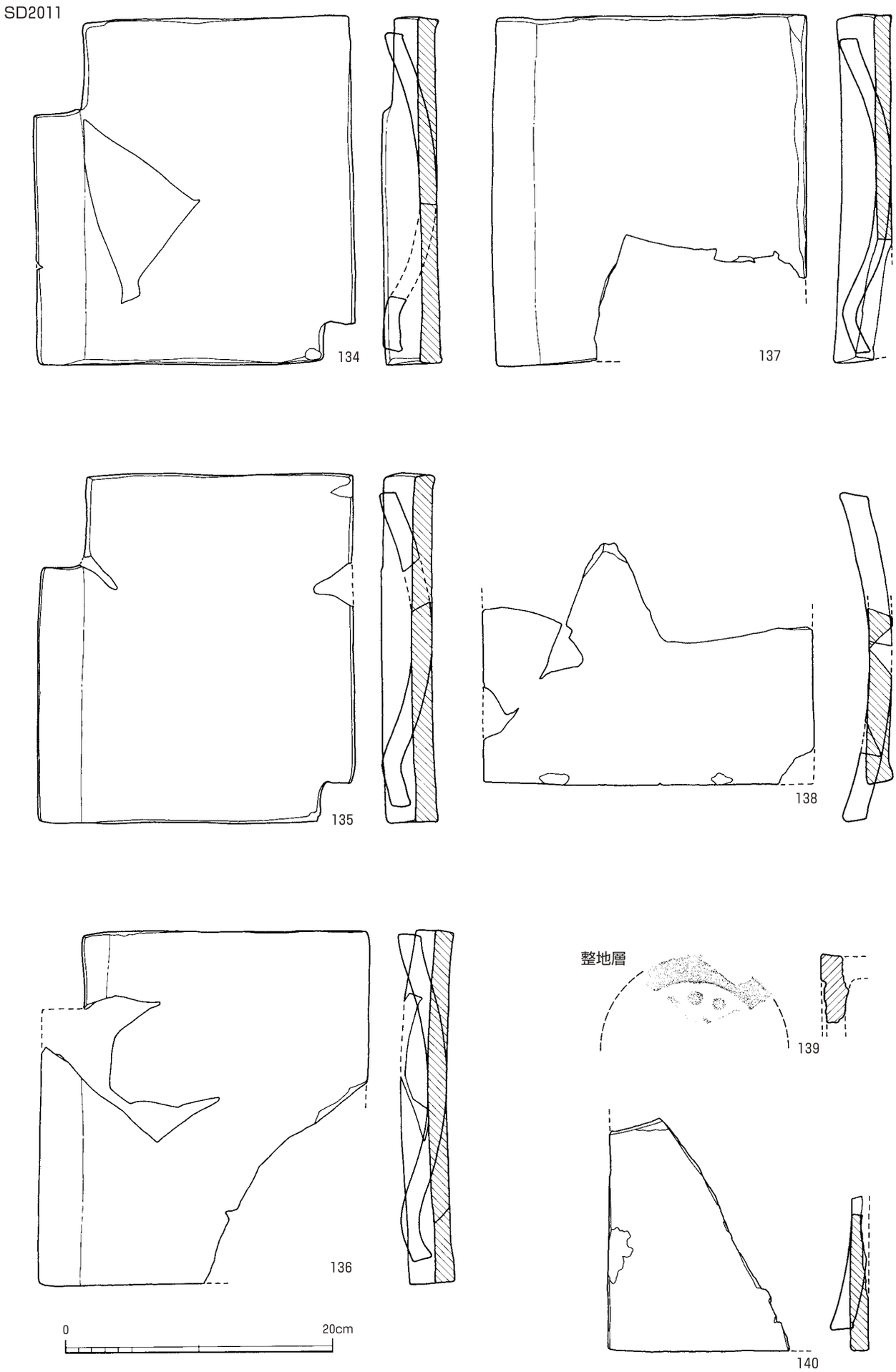
SD2006



SD2009

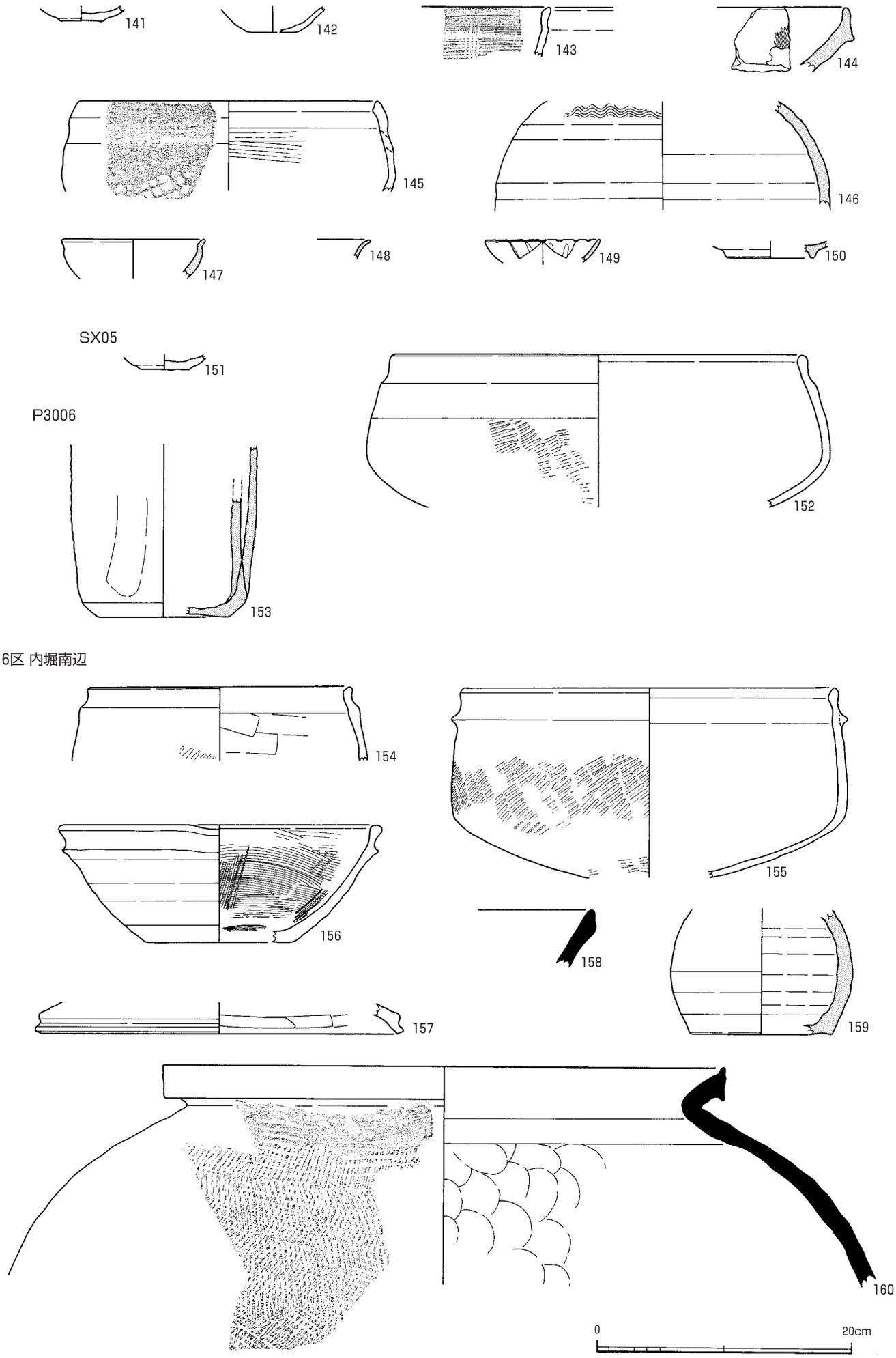


２区の土器・土製品４（SD2006、SD2009）



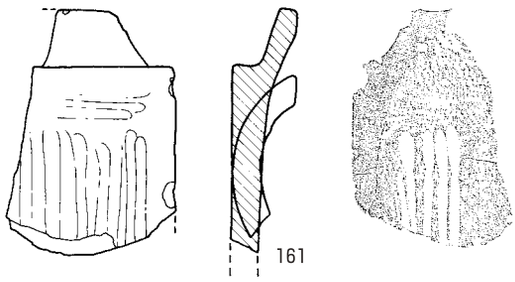
２区の土器・土製品５（SD2011、整地層）

3区 甕倉2

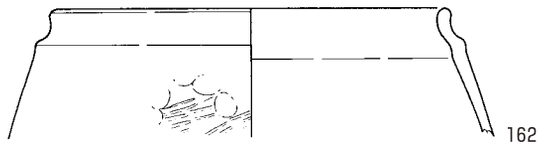


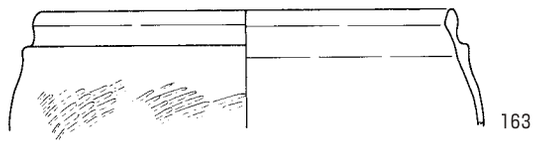
3～6区の土器・土製品（甕倉2、SX05、P3006、内堀南辺）

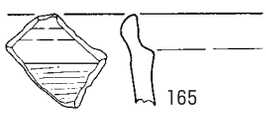
9区 内堀北辺

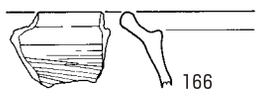


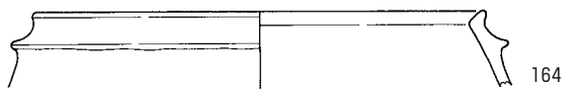
11区 堀状遺構

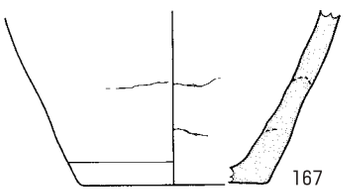


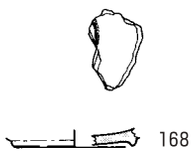




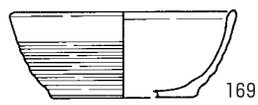




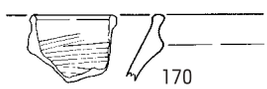


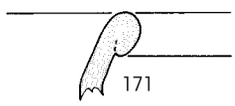


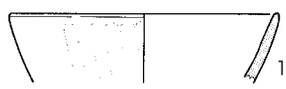
SK1101



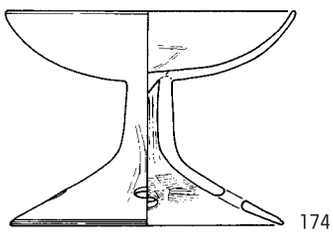
11区 包含層

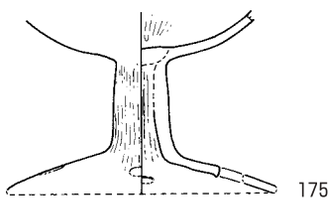


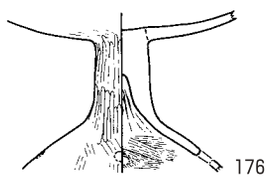




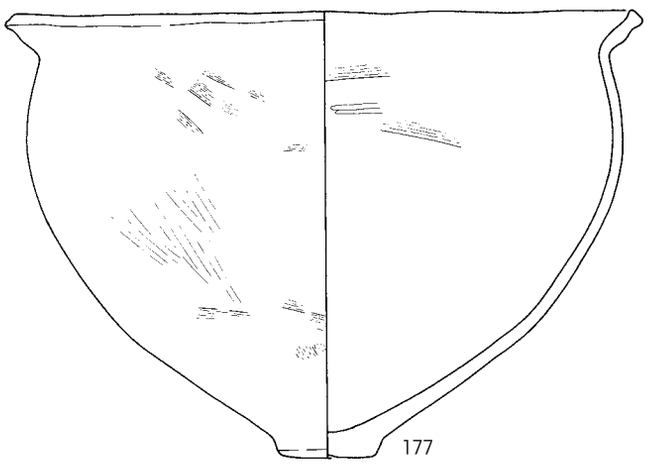
SH03



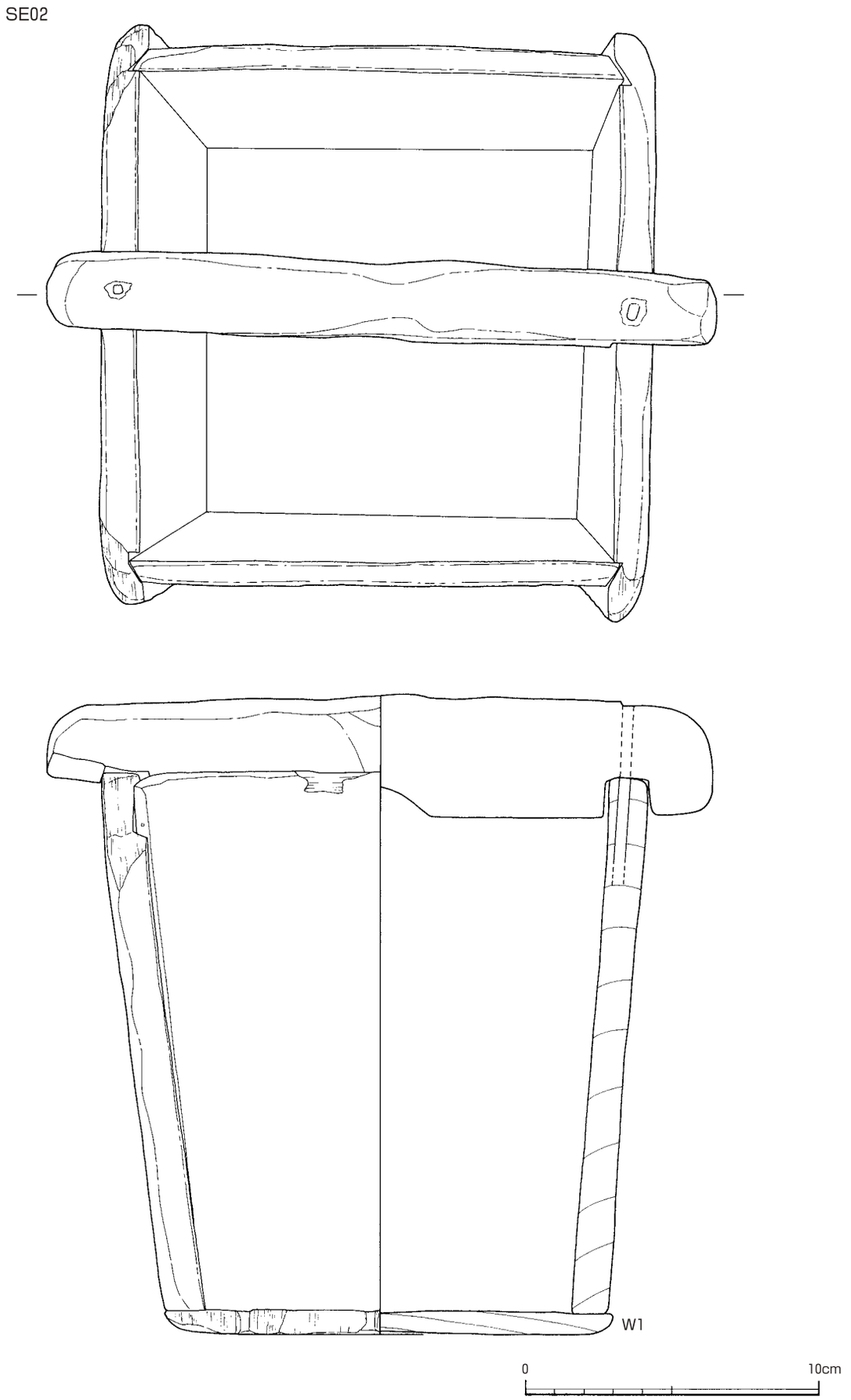




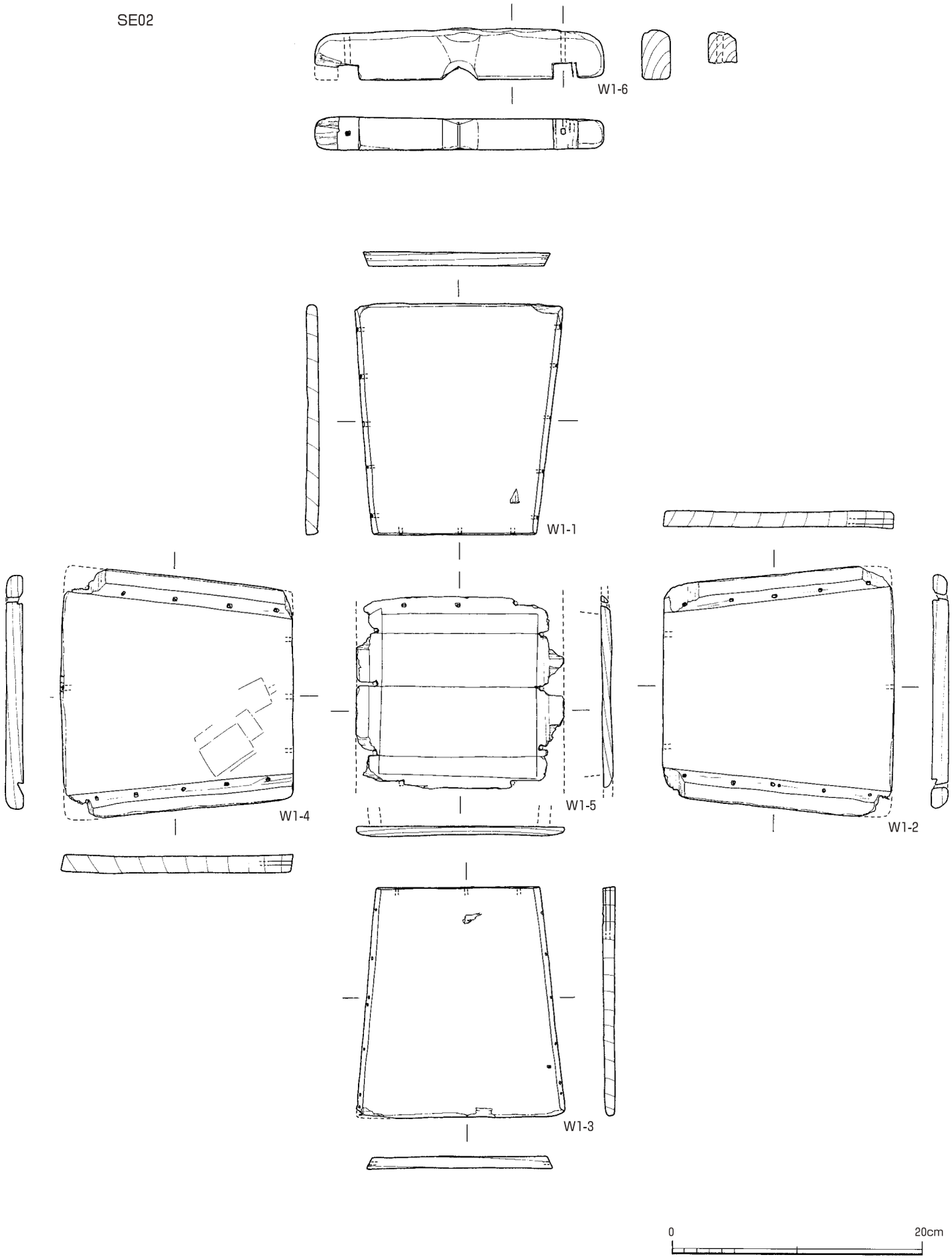
SH04



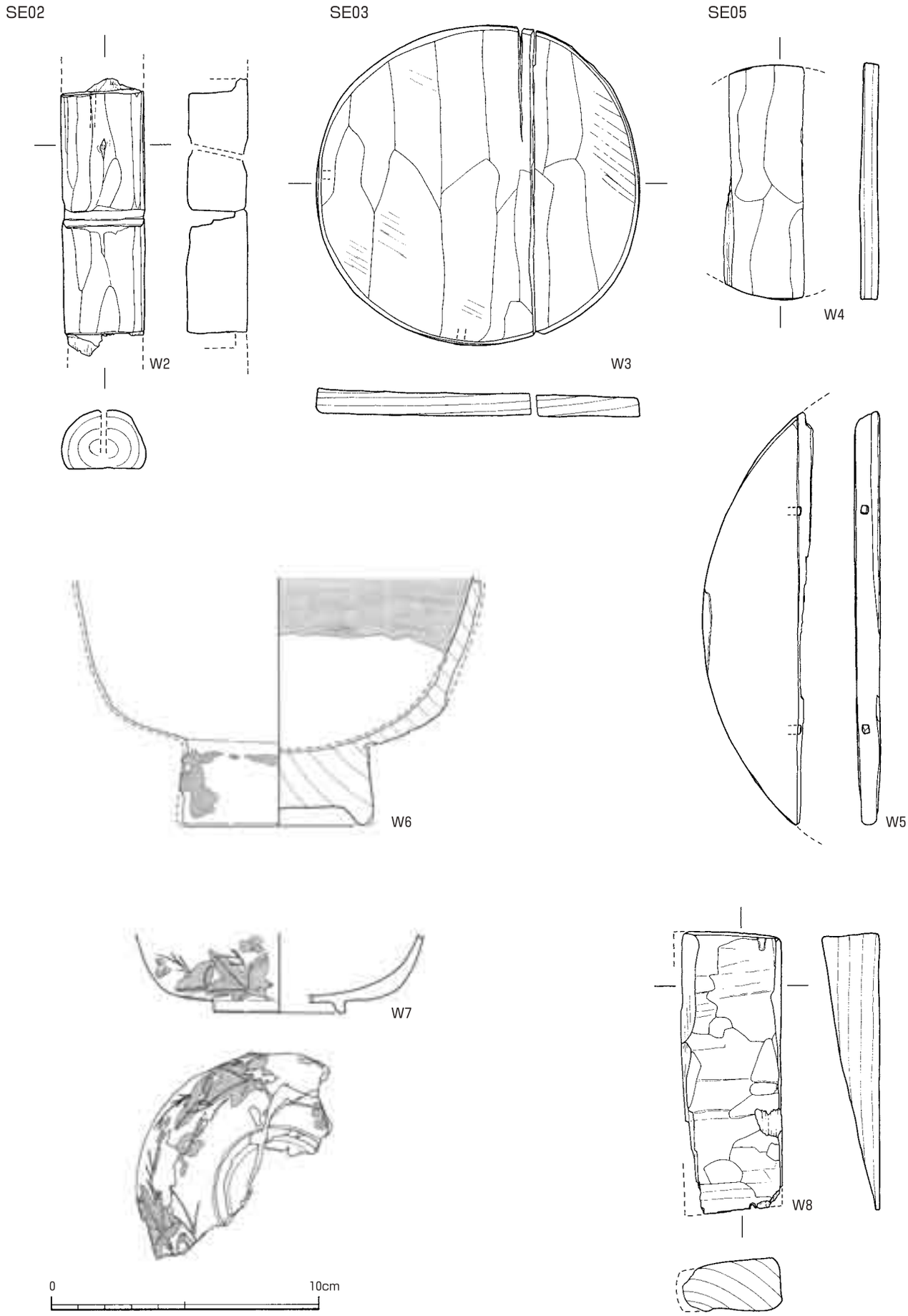
9～12区の土器・土製品（内堀北辺、堀状遺構、SK1101、包含層、SH03、SH04）



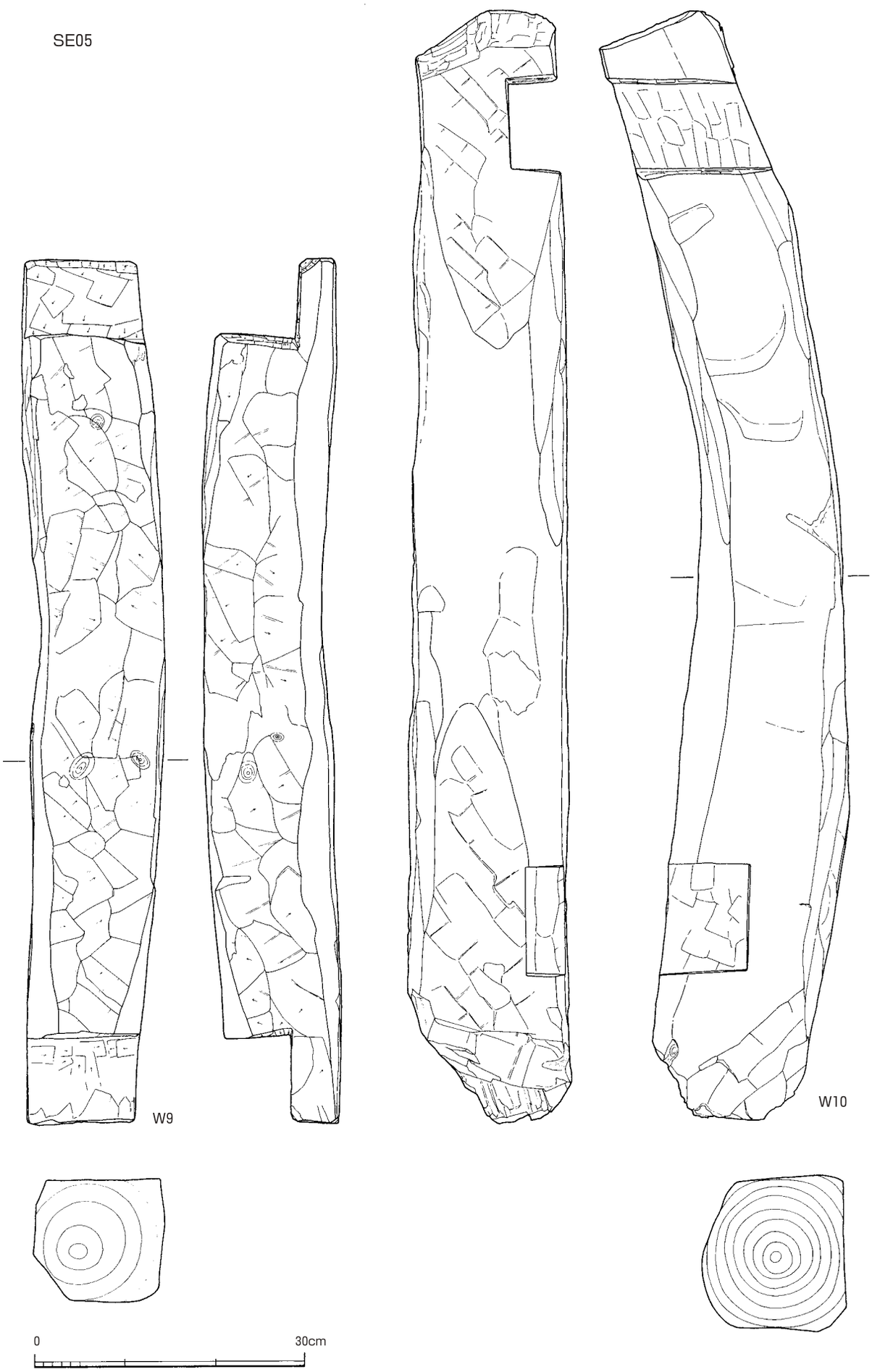
木器・木製品１（SE02）



木器・木製品２（SE02）

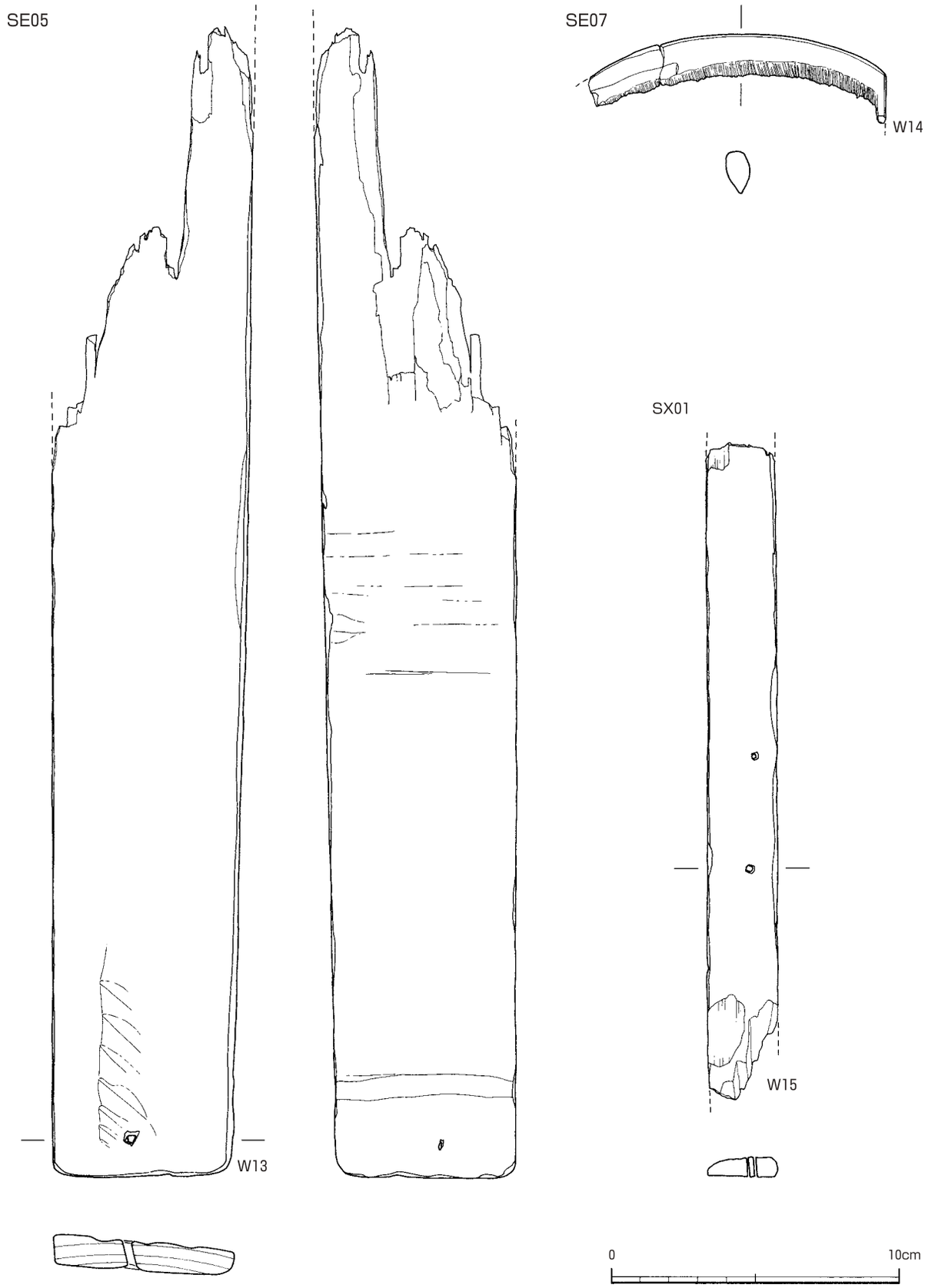


木器・木製品３（SE02、SE03、SE05）



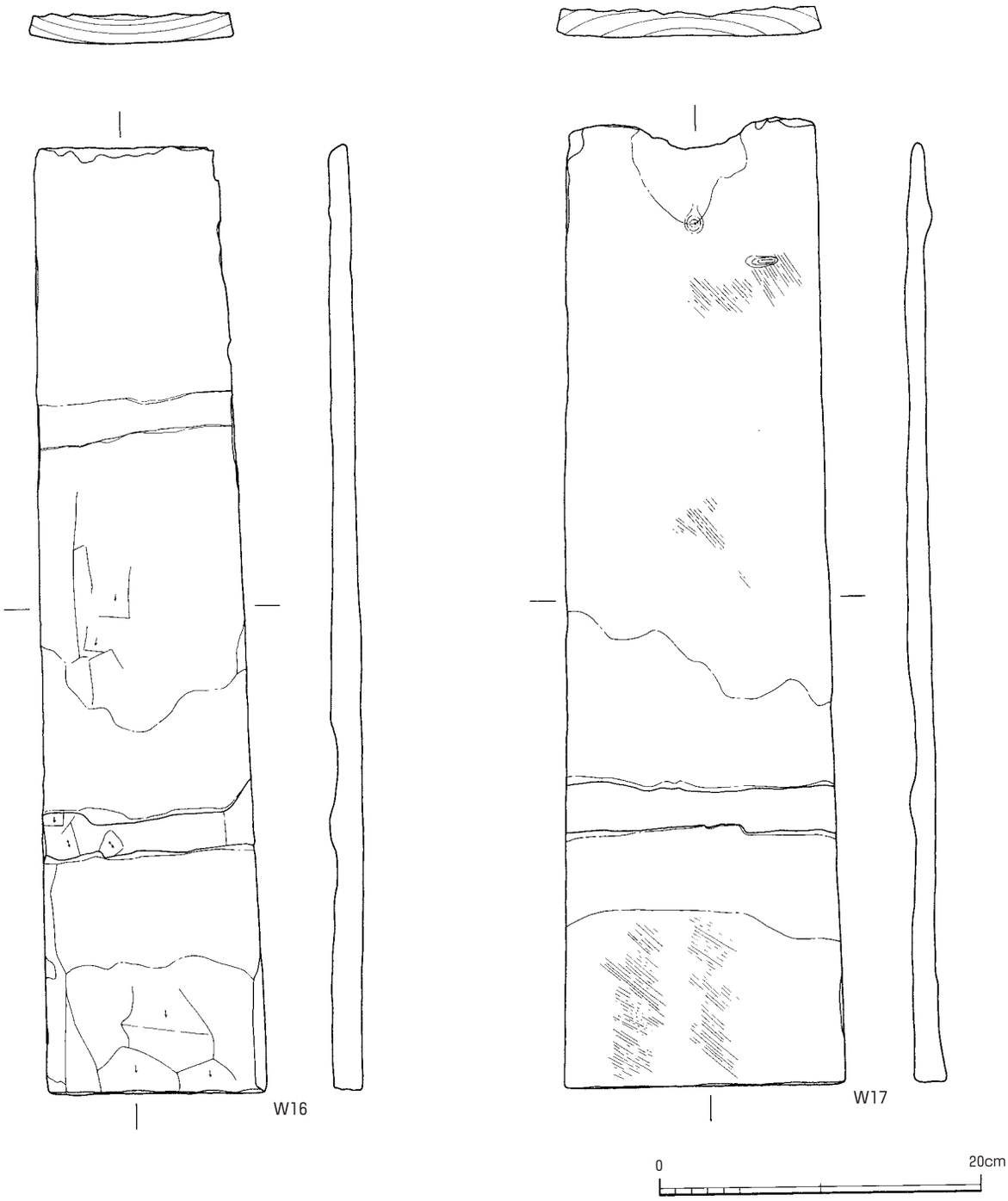
木器・木製品４（SE05）

木器・木製品５（SE05）

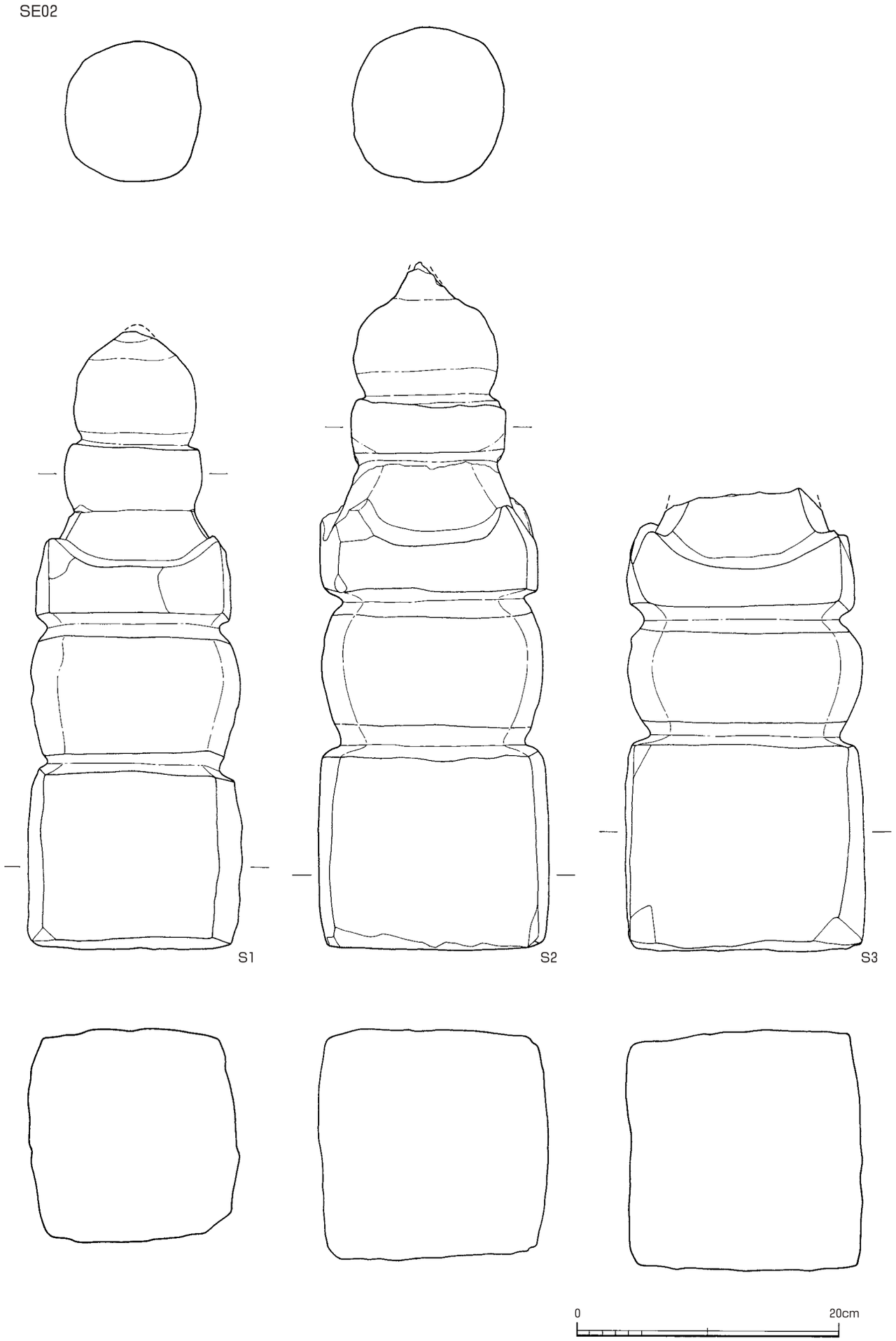


木器・木製品６（SE05、SE07、SX01）

SE06

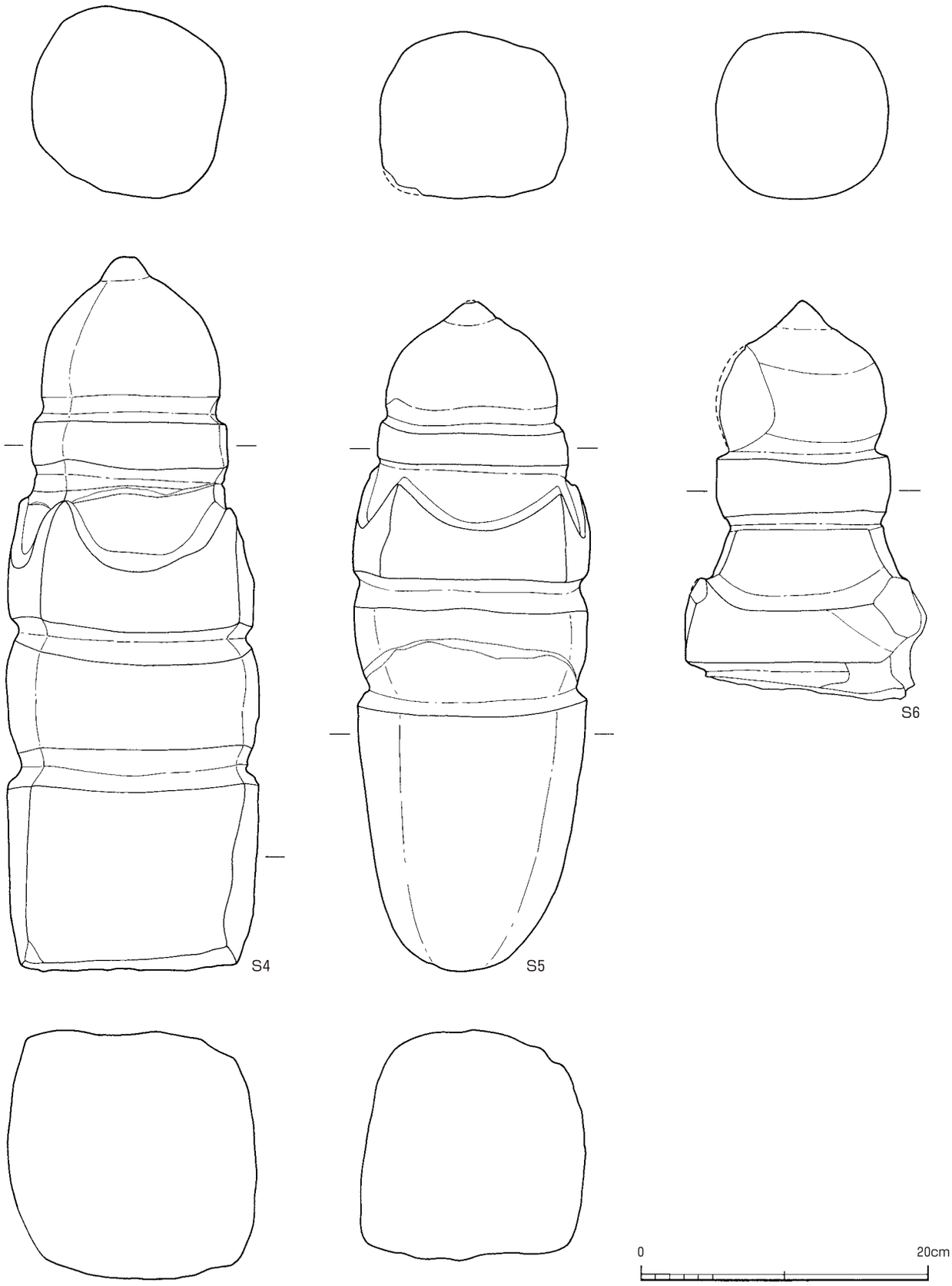


木器・木製品７（SE06）

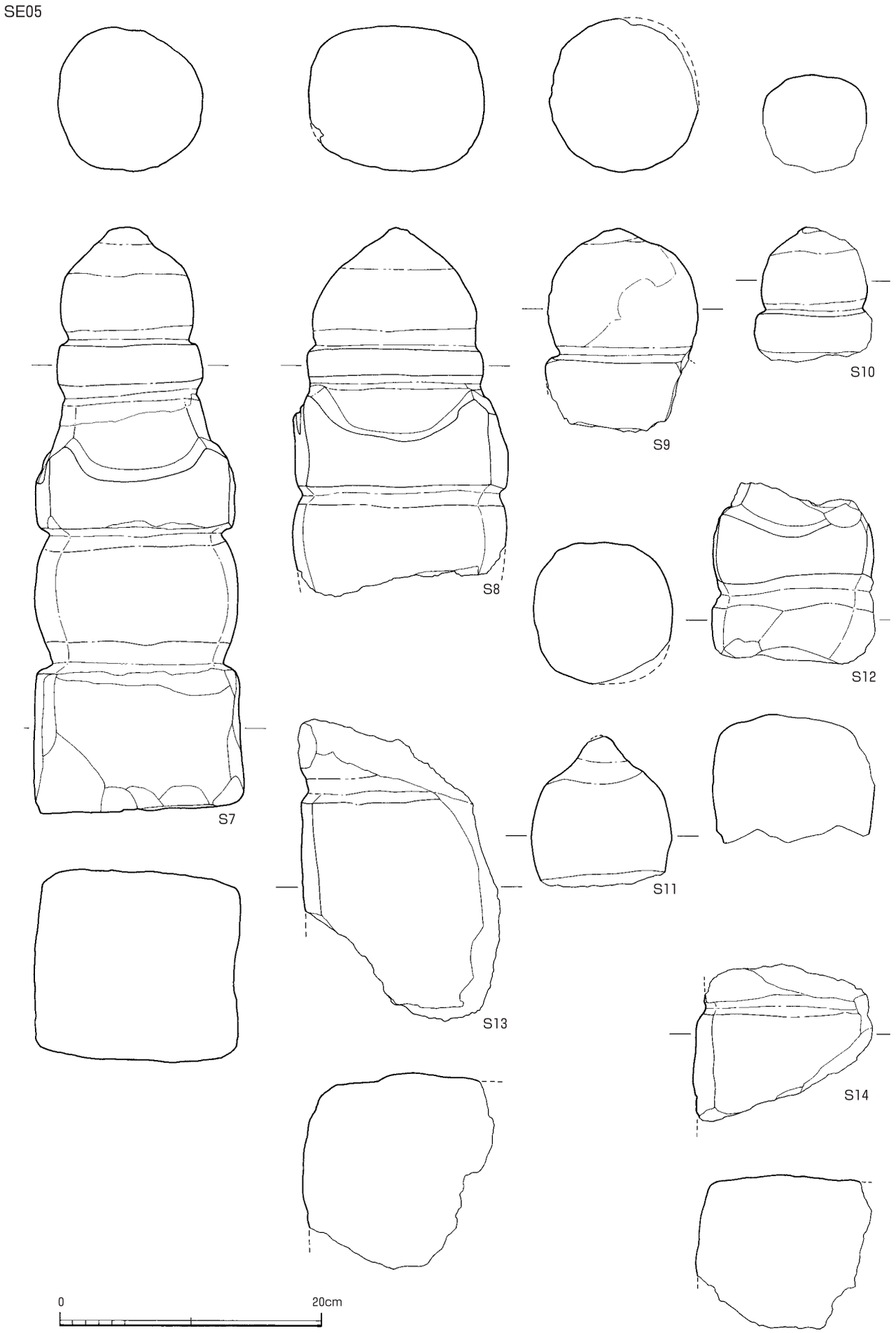


石器・石製品１（SE02）

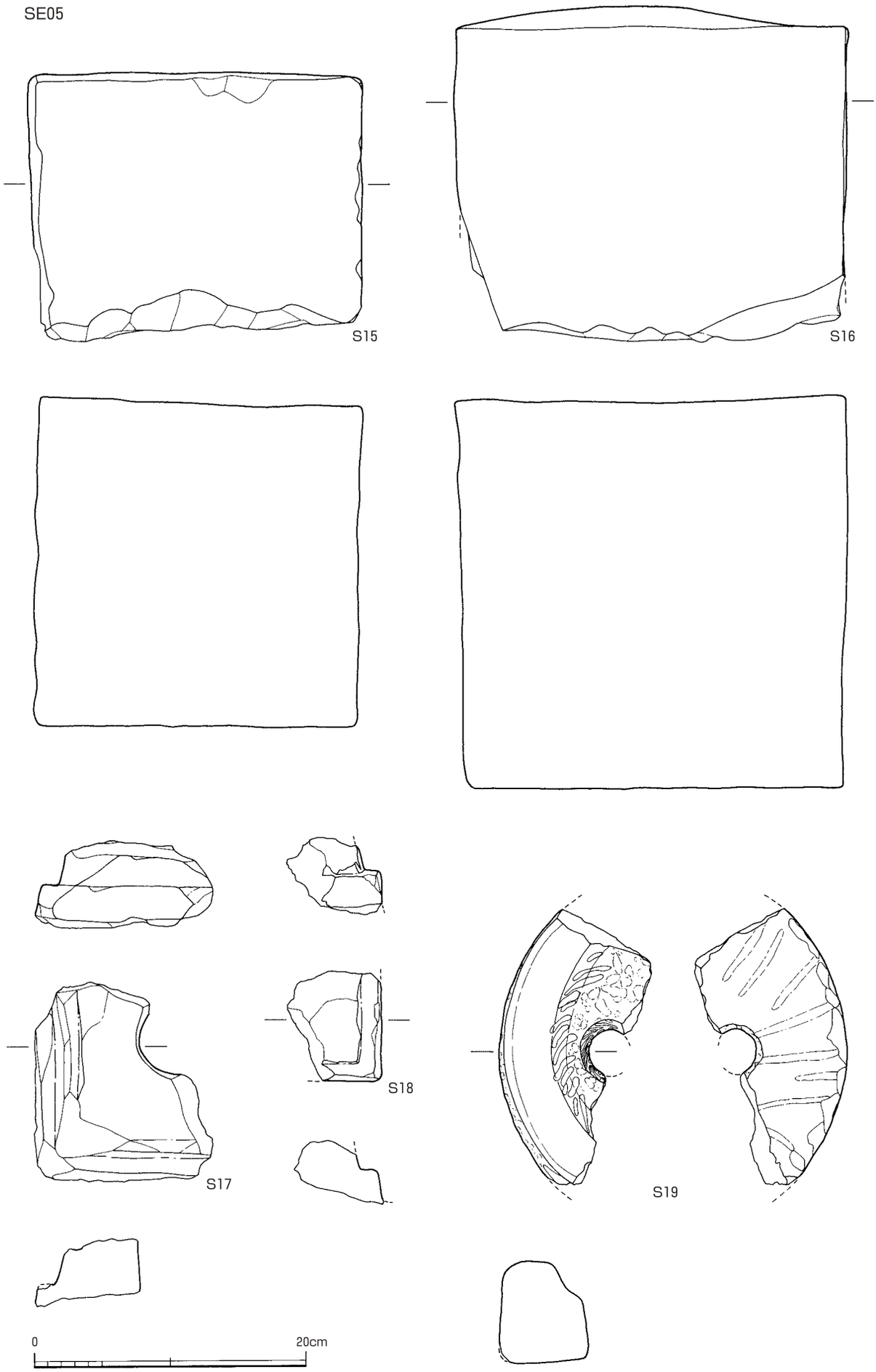
SE02



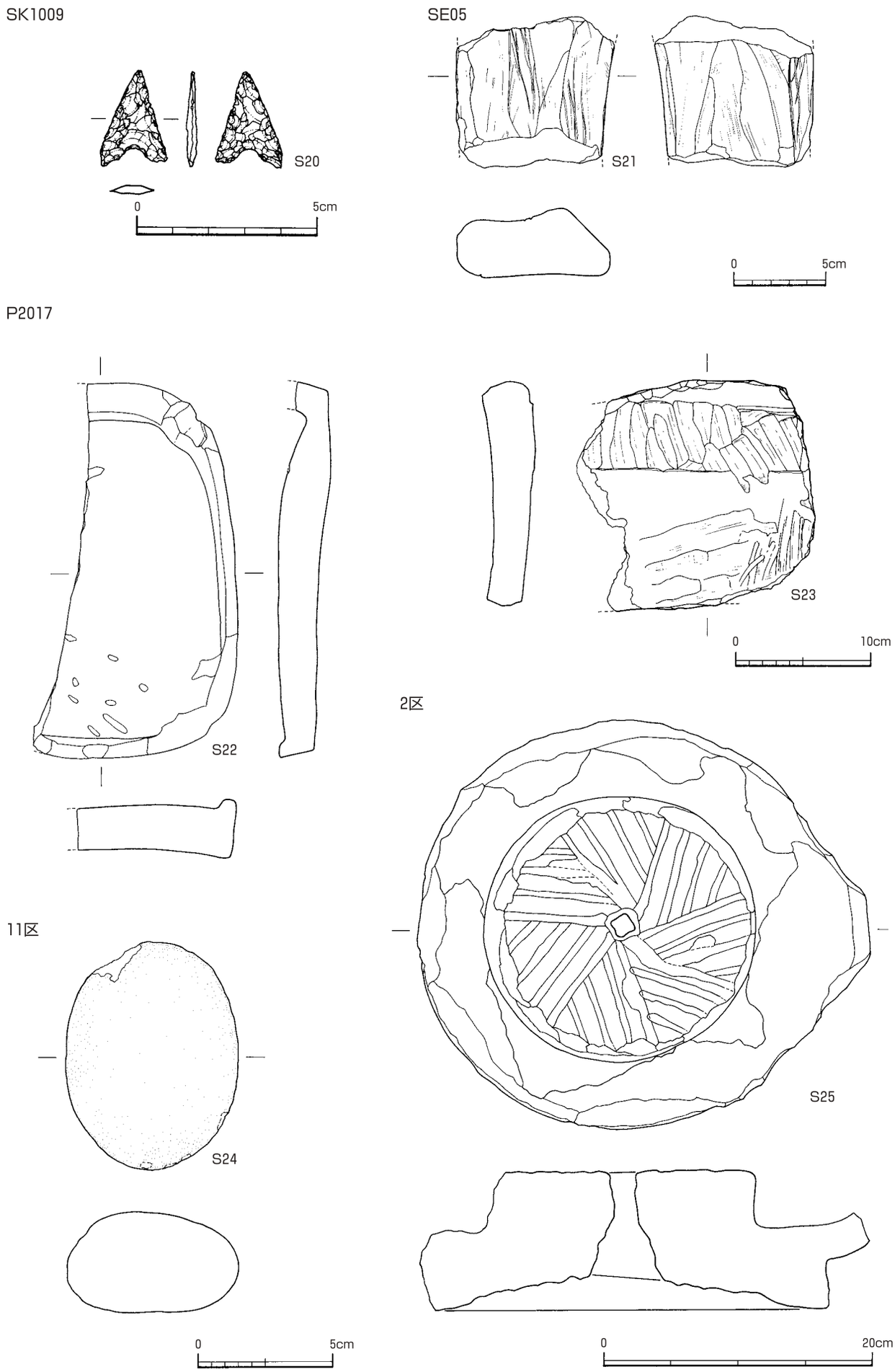
石器・石製品２（SE02）



石器・石製品３（SE05）

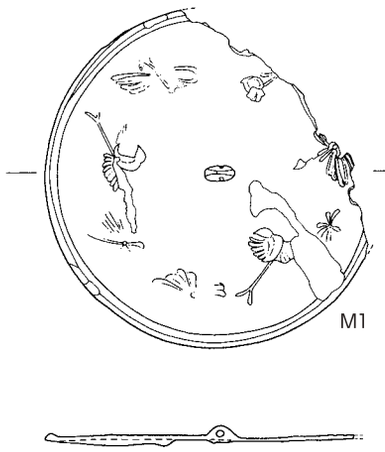


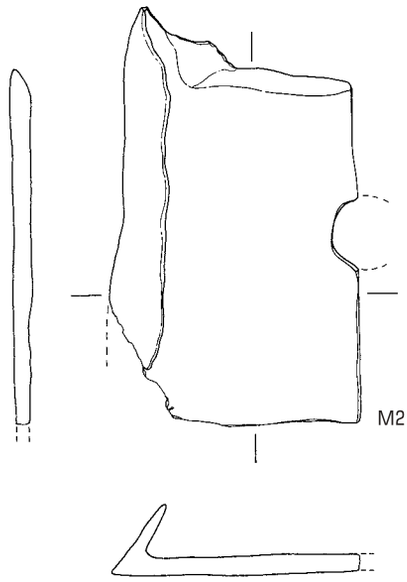
石器・石製品４（SE05）



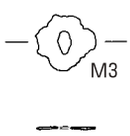
石器・石製品５（SK1009、SE05、P2017、11区、2区）

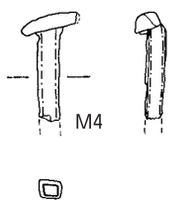
SK1006



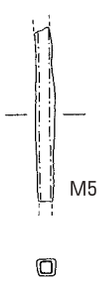


SK3001

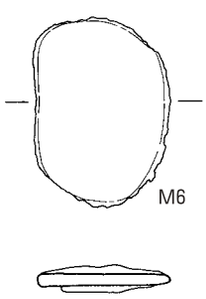




11区



堀状遺構



金属器（SK1006、SK3001、11区、堀状遺構）

写　真　図　版

遺跡の位置

遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（北から明石城跡・明石大橋を望む）

遺跡遠景（北東から）

遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（東から）

福中城跡遠景（西から）

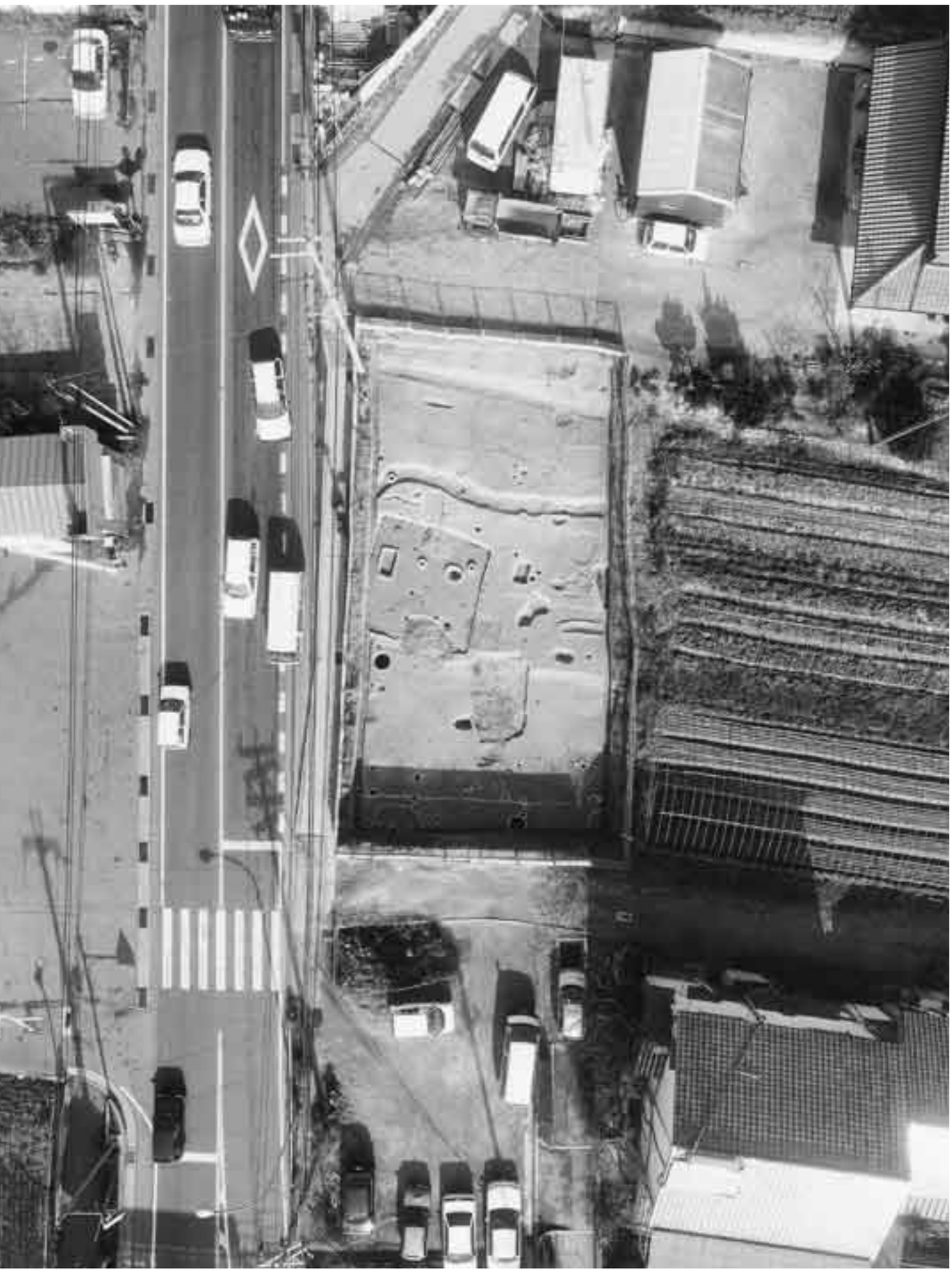
福中城跡遠景（東から）

調査範囲全景

１・２区　全景（南から）

１・２区　全景（北から）

１・２区　全景



1区　全景

1区　全景（南から）

1区　全景（北から）

右）　SH01　全景（南から）
1）　竈検出状況
2）　竈断ち割り断面
3）　竈断ち割り断面
4）　竈内土師器出土状況

SH02　掘削状況（南から）

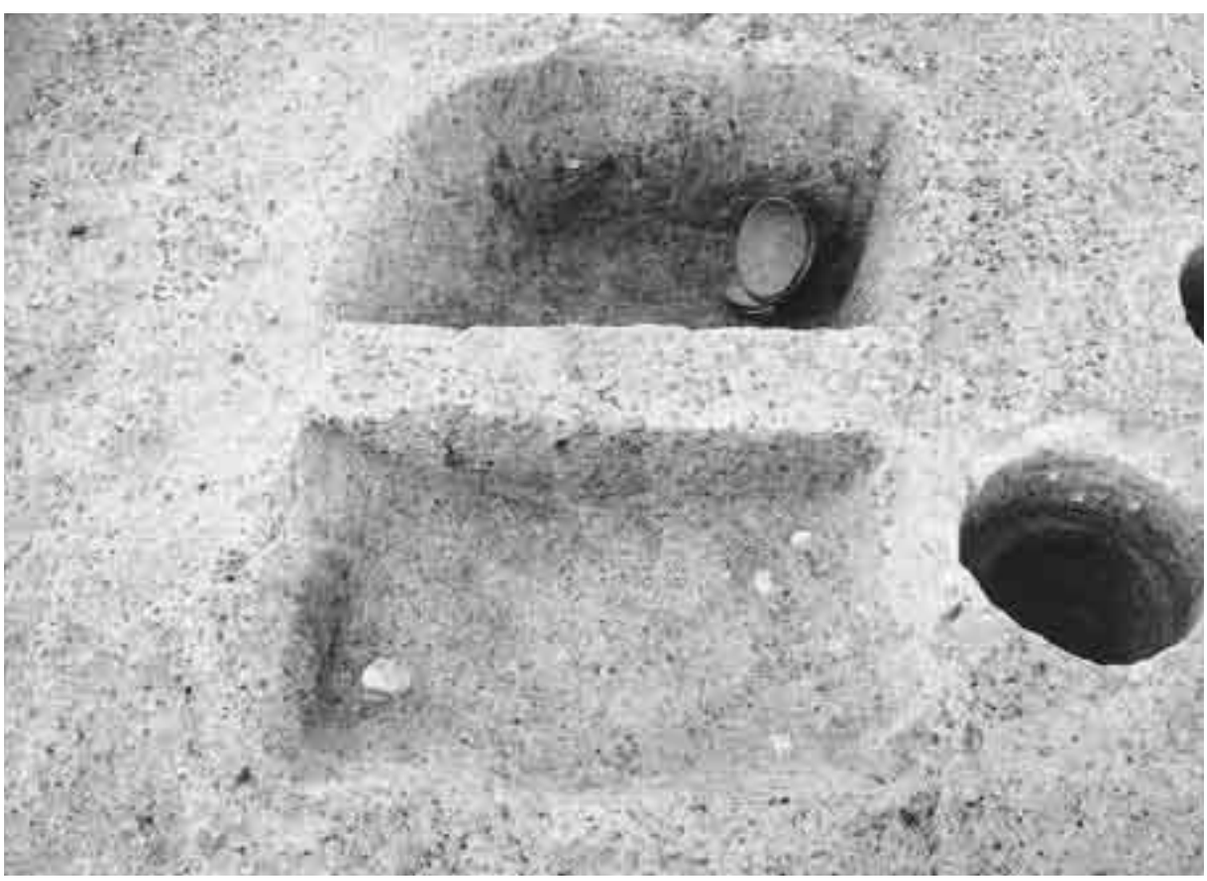
SH02　掘削状況（北から）

SD1002

SD1002　土馬出土状況

SD1002　土馬出土状況

SK1006　全景（南から）



SK1006　土層断面（南から）

SK1006　遺物出土状況（東から）

SK1006　土器出土状況（南から）

SK1006　銅鏡出土状況（南から）

SK1001　土層断面（北から）

SK1009　土層断面（北から）

SK1005　全景（南西から）

SK1005　土器出土状況

SB01（北から）

SE01　土層断面（南から）

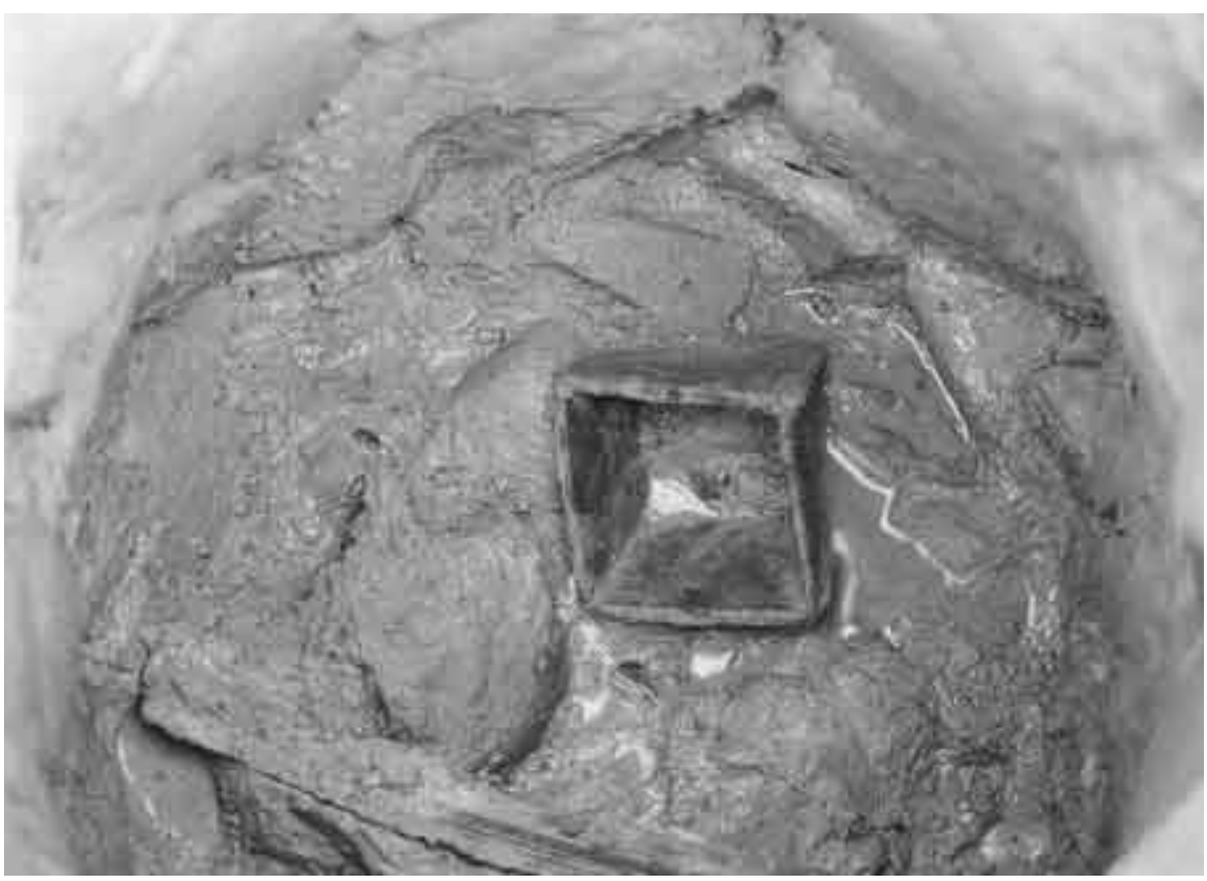
2区　全景

2区

２区　全景（南から）

２区　全景（北から）

SE02　全景（西から）



SE02　井側内釣瓶出土状況

SE02　断ち割り一石五輪塔出土状況（西から）

SE02　断ち割り状況（西から）

SE02　石組み内一石五輪塔出土状況

SE05　検出状況（北東から）

SE05　土層断面（南東から）

SE05　石組み検出状況（東から）

SE05　石組みと根太（南から）

SE05　根太（南から）

SE03　土層断面（南から）

SE06　全景（西から）

SE07　土層断面（西から）

窯状遺構１（南から）

窯状遺構１（西から）

窯状遺構１貼り床断面（西から）

窯状遺構２（北西から）

甕倉１（東から）

SK2012（東から）

SK2015（西から）

SD2004・2005　土層断面（西から）

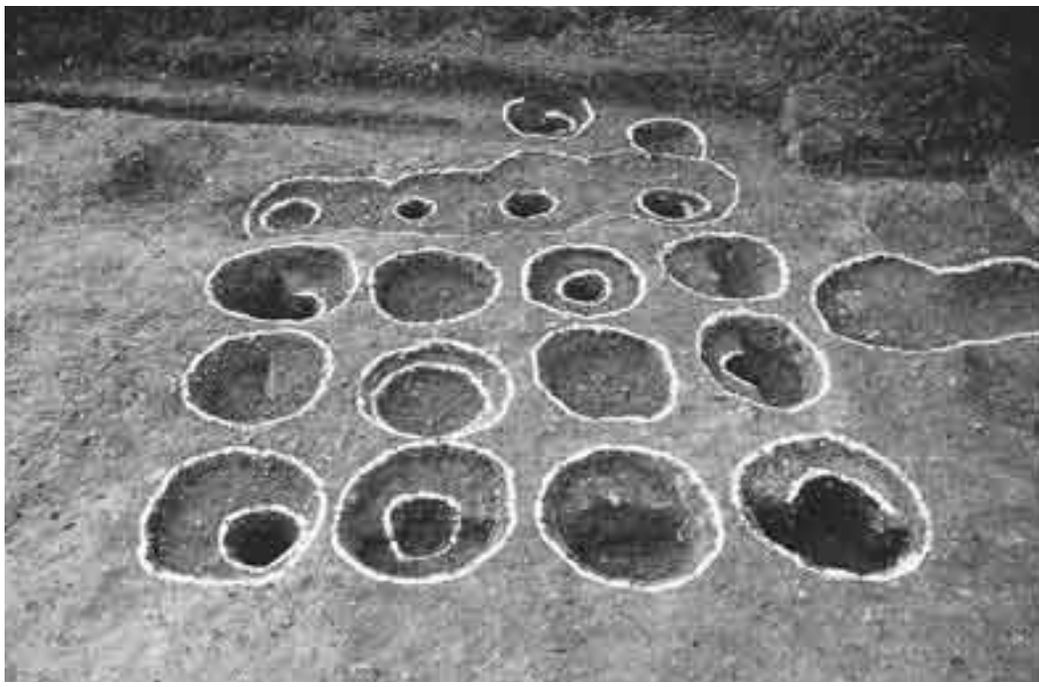
SD2005　集石（西から）

SD2011（東から）

3～10区　全景

3区　全景（左が北）

3区　全景（北から）



甕倉２（東から）

SE09（南東から）

SE09　埋土層断面（西から）

3・4・6区　全景

６・７区　全景（左が北）

６区　南側外堀・内堀南辺（南から）

6区　内堀南辺（東から）

6区　内堀南辺西壁

6区　内堀南辺（西から）

6区　内堀南辺東壁

7・8区　全景（左が北）

7区　全景（南から）

8区　全景（北から）

9区　全景

9区　全景（北から）

内堀北辺南肩（西から）

8～12区（西から）

8～12区（西から）

10区　全景

10区　内堀北辺北肩（北から）

10区　内堀北辺北肩（西から）

北側外堀（西から）

北側外堀（南から）

11区　全景

11 区　全景（南から）

SB04・05（北から）

SH03・04　検出状況（北から）

SH03　完掘状況（北から）

SH04　床面の炭

SH03　土器出土状況

SH03　土器出土状況

SH04　完掘状況（北から）

SH03・04と堀状遺構（東から）

堀状遺構断面（東から）

SD1102（南から）

SK1101（北から）

12 区　全景

12 区　全景（南から）

12 区南端　谷への落ち（西から）

福中城跡西の段丘崖（西から）

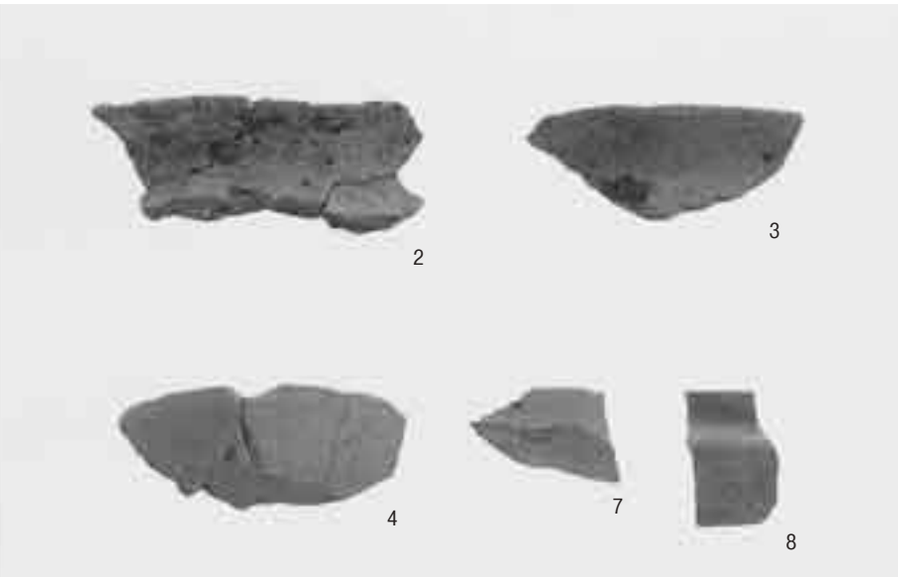
福中城跡西の平坦面（推定上の丸）

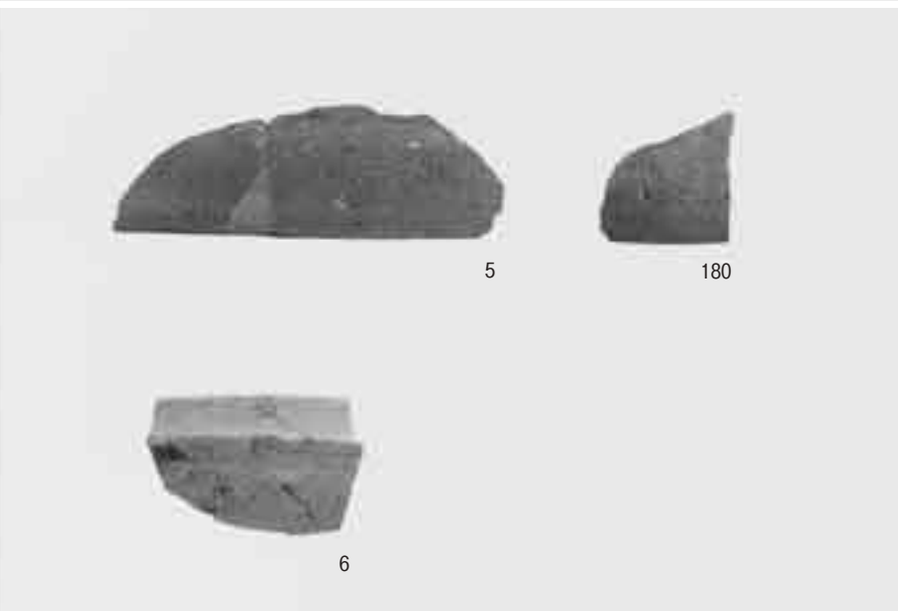
福中城跡西の段丘崖（北から）

宝珠寺

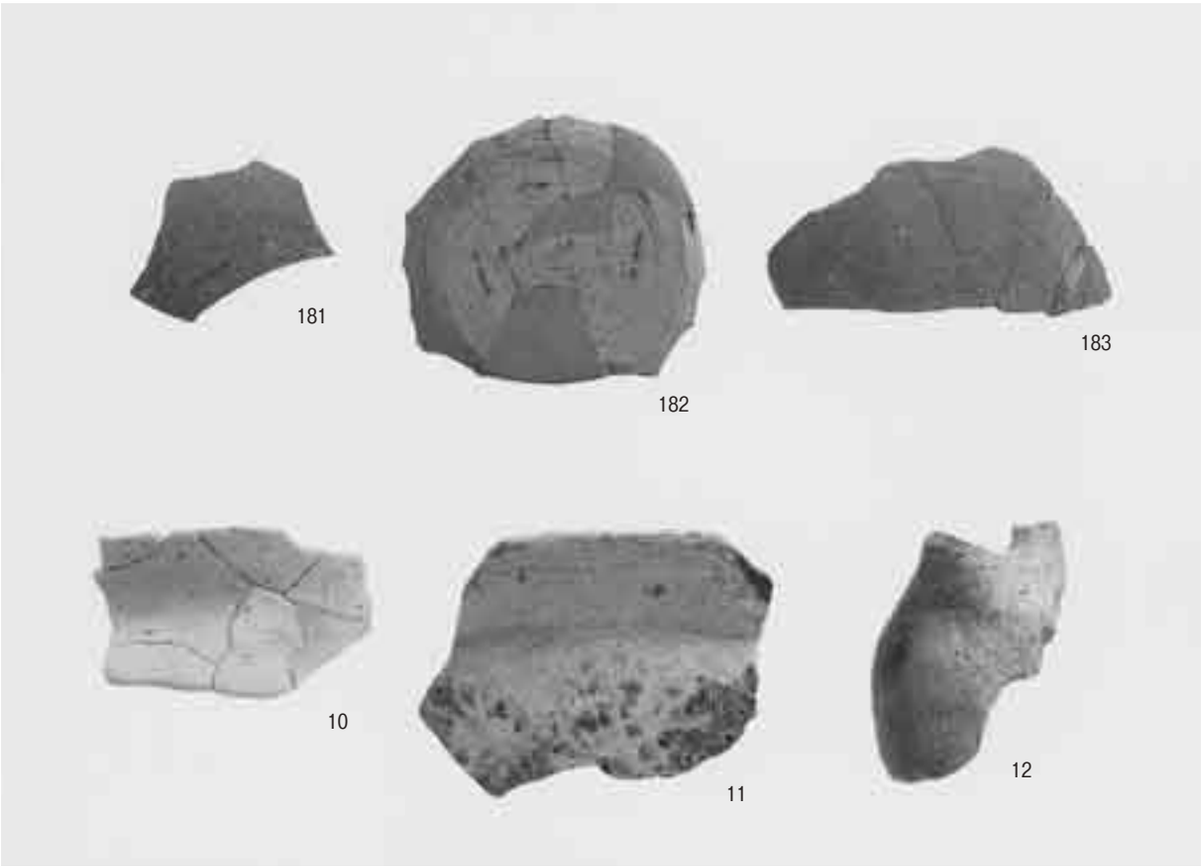
伝 間嶋彦太郎　五輪塔

三木街道

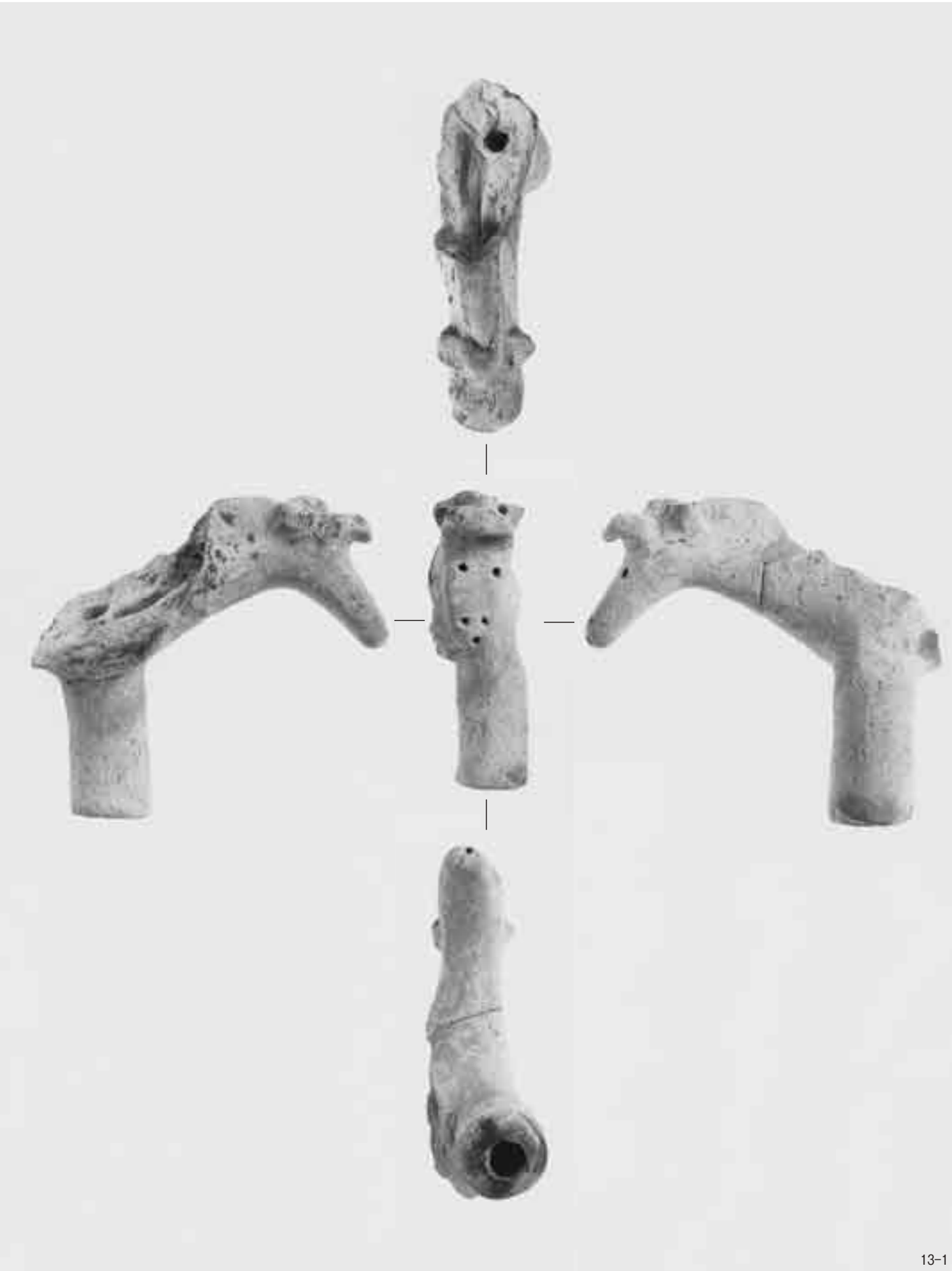




1区　SH01、SD1002出土土器



1区　SD1002出土土器



1区　SD1002出土土馬

13-3

13-2

13-4

44

45

1区　SD1002、北東土坑出土土馬

16

17

35

36

19

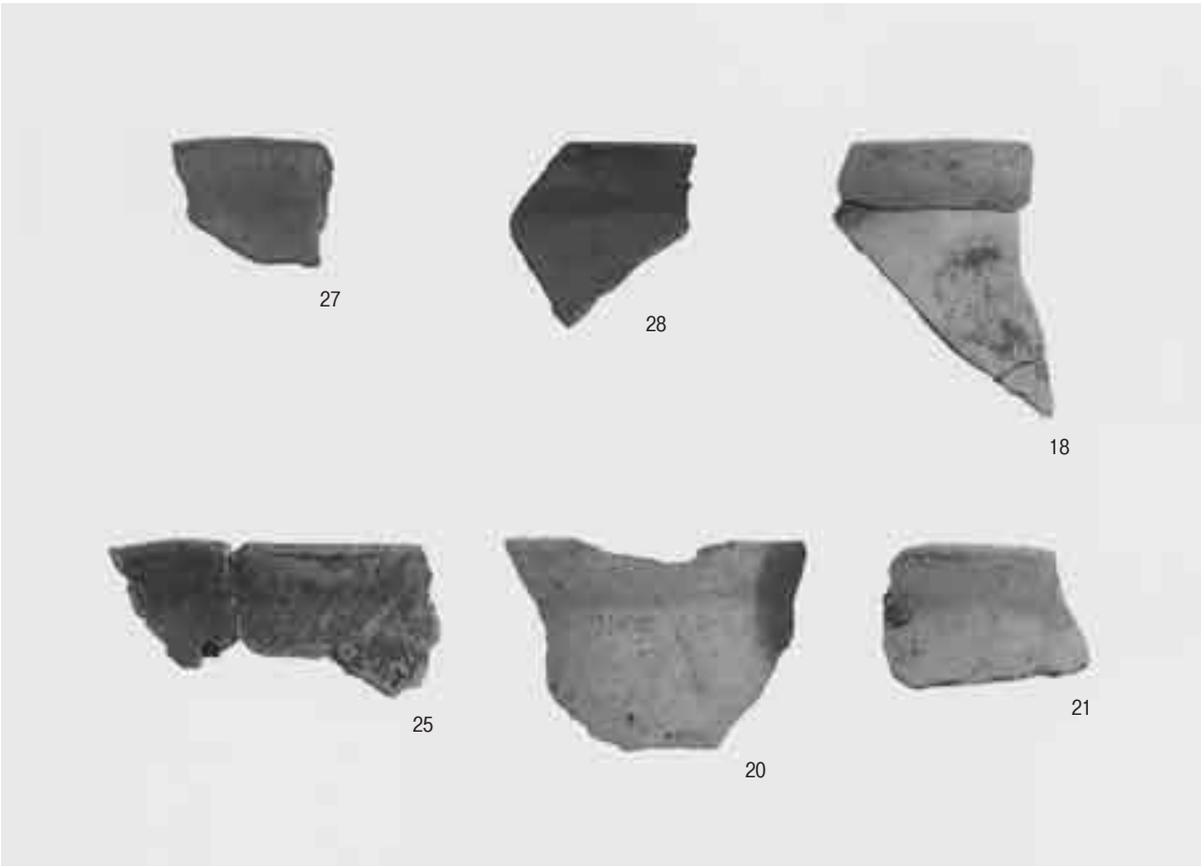
22

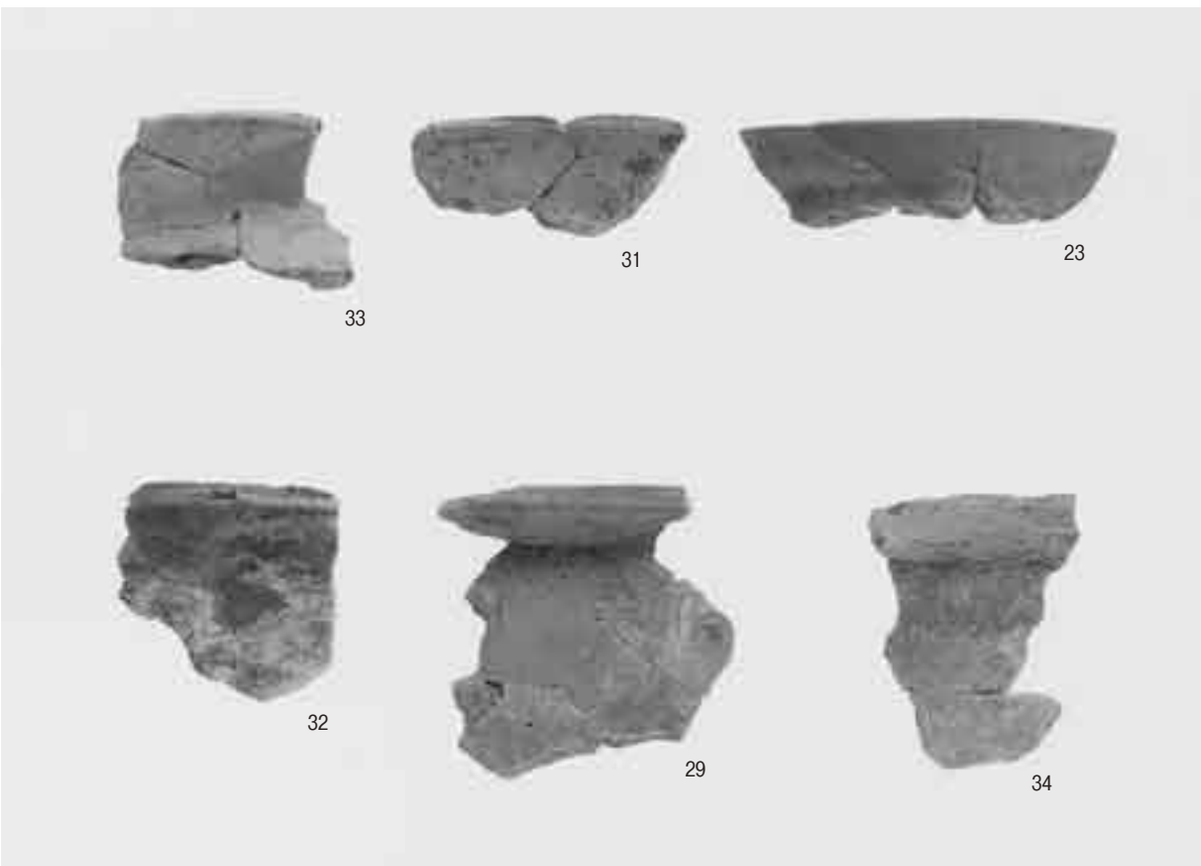
26

15

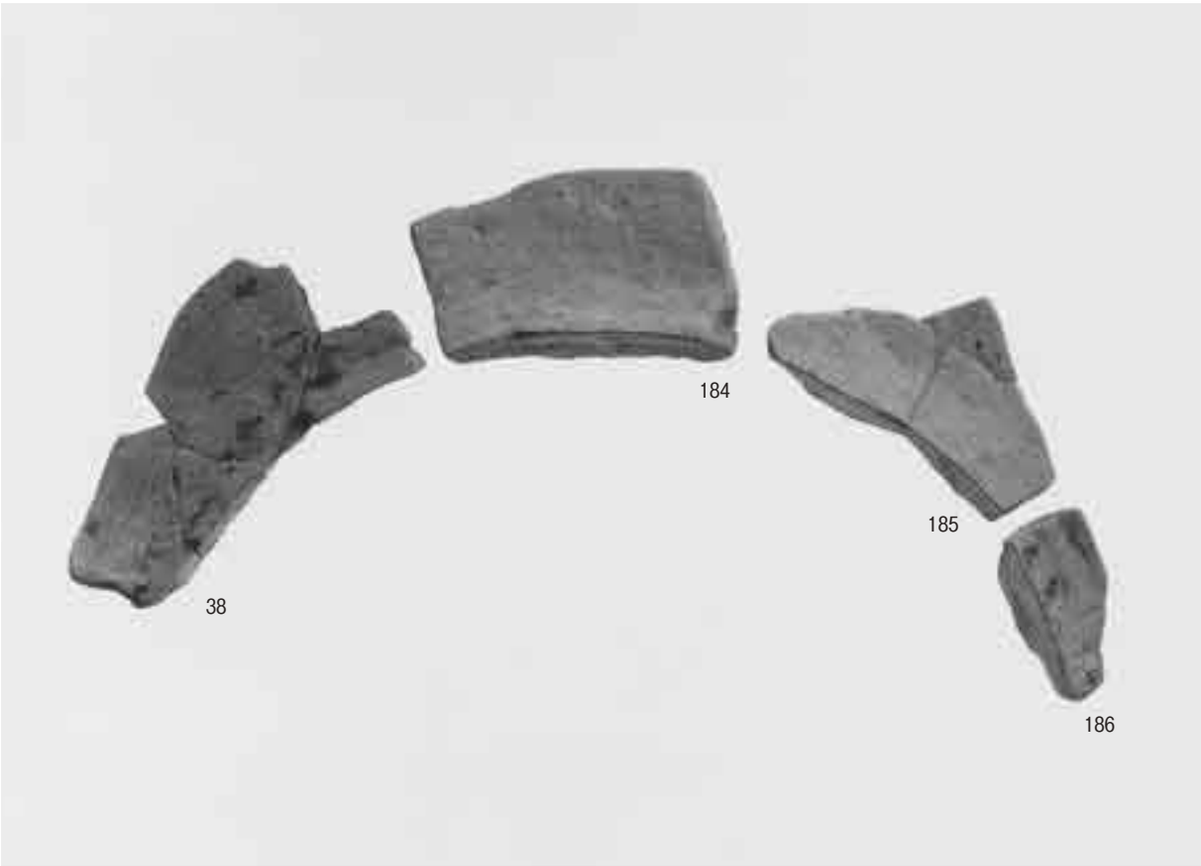
30

1区　SH02出土土器

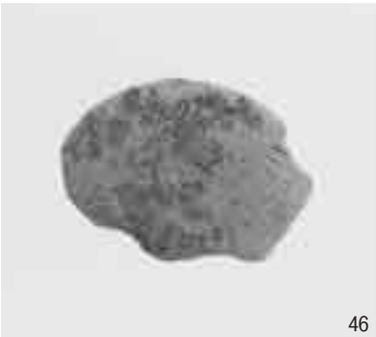




1区　SH02出土土器



1区　SH02出土土器


46

47

53

54

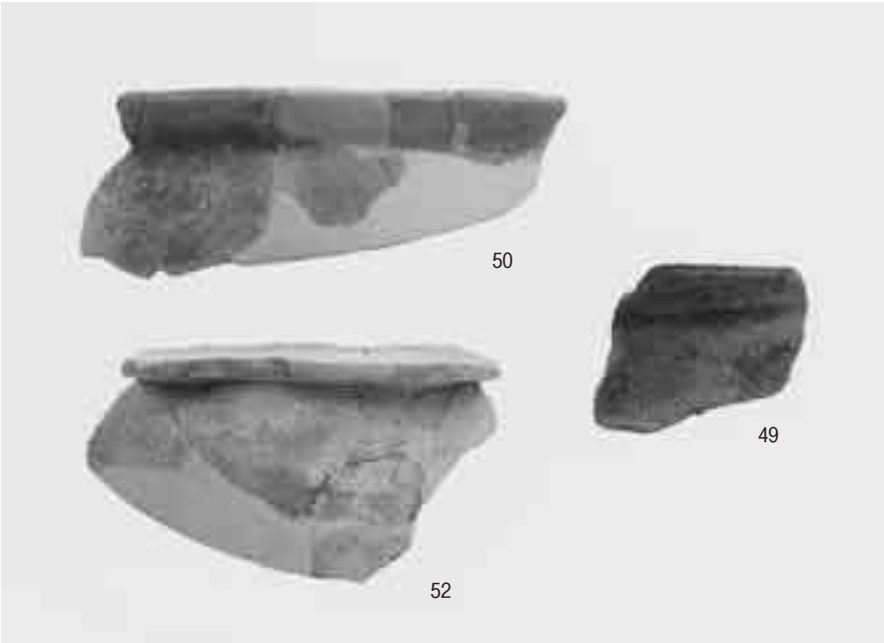
55

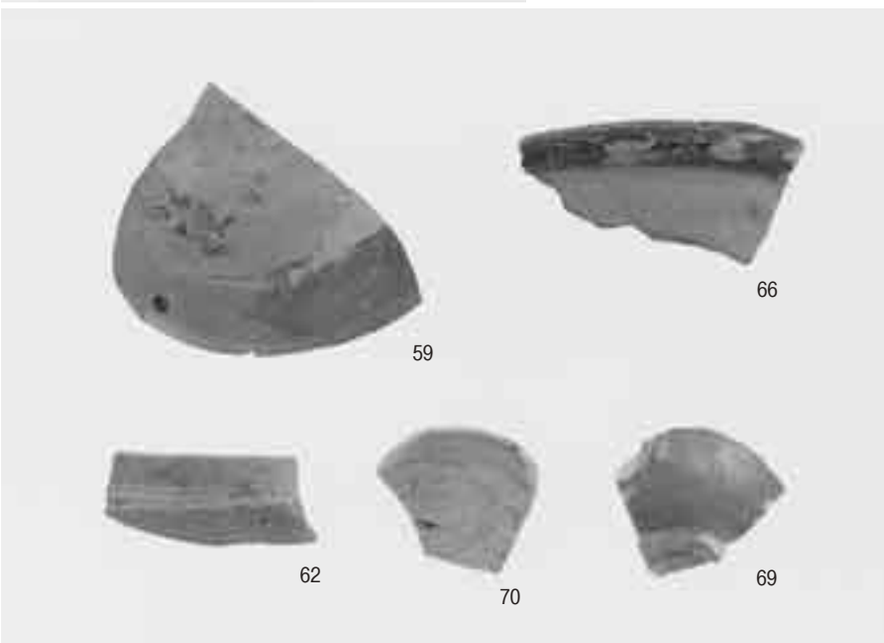
56

57

58

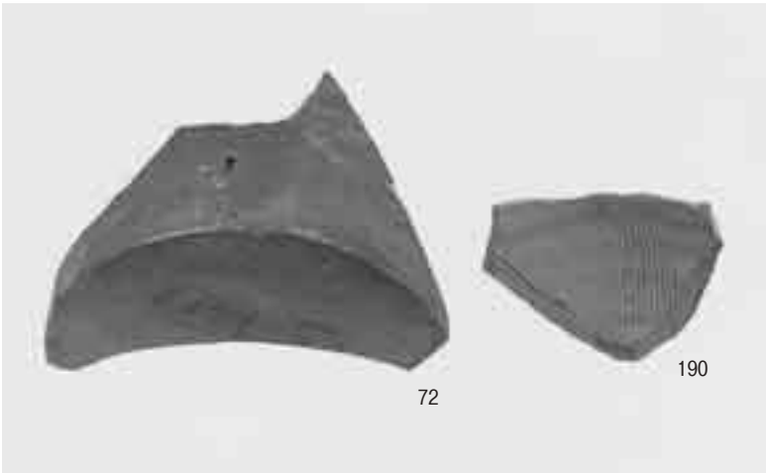
1区　SK1001・1002・1006出土土器・瓦



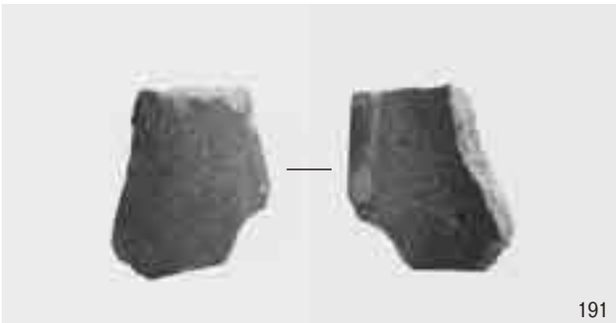


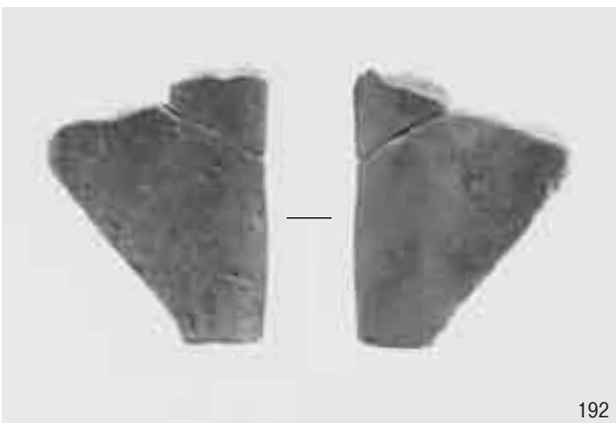
1区　SK1005、包含層出土土器

71


72
190

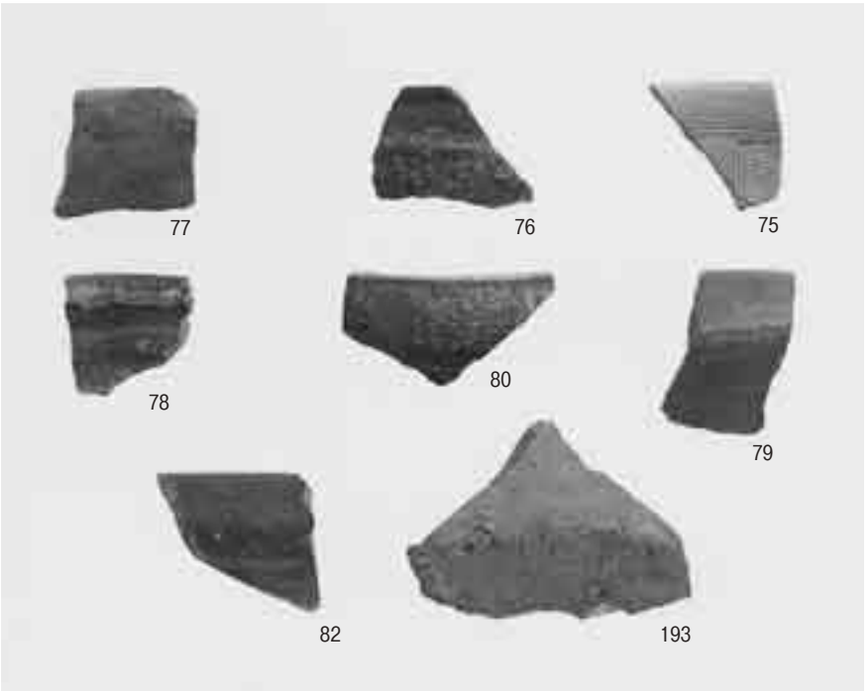
73

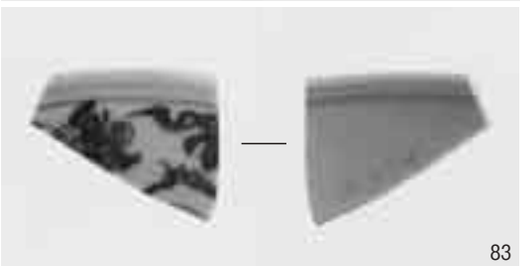

191

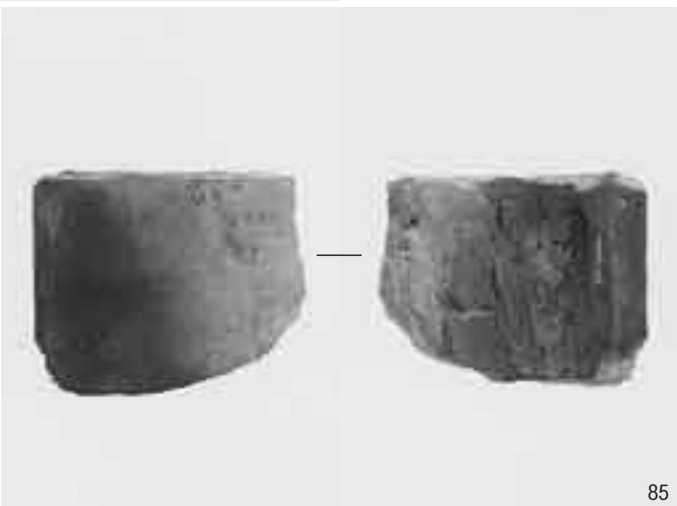

192

74

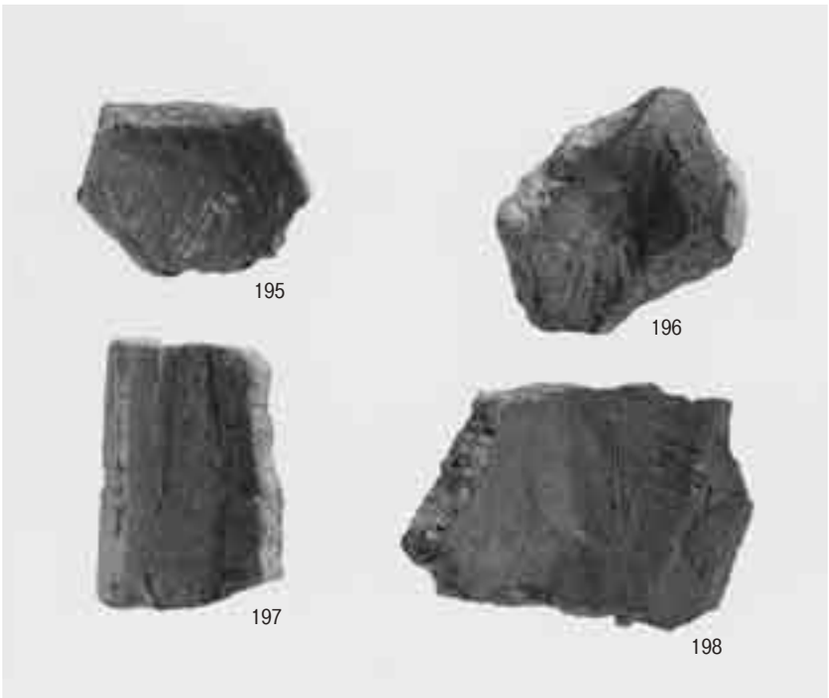
2区　P2014、SE02・03出土土器・瓦



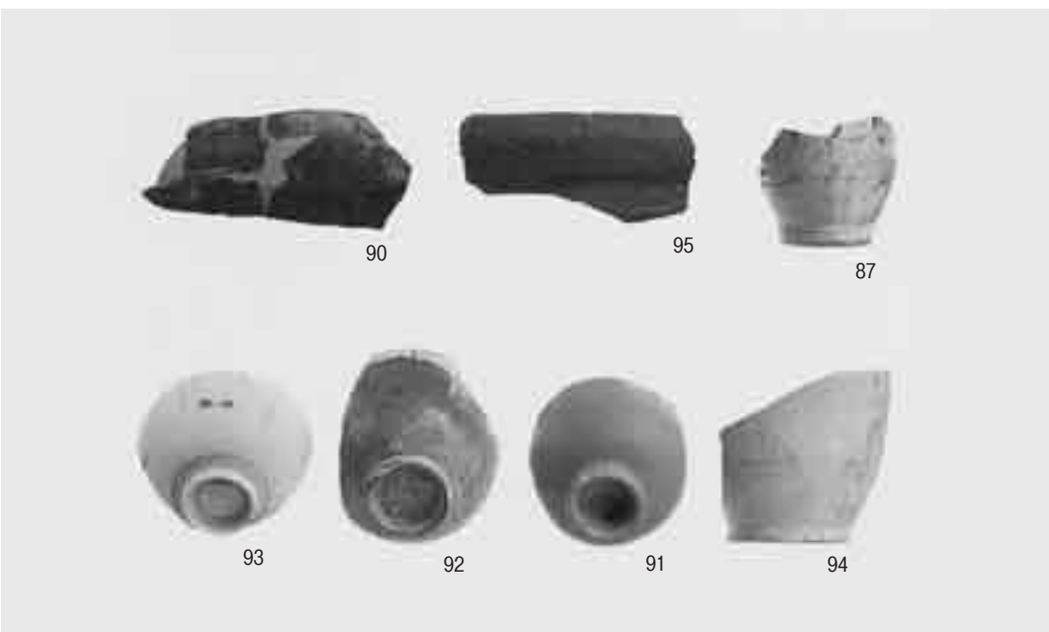




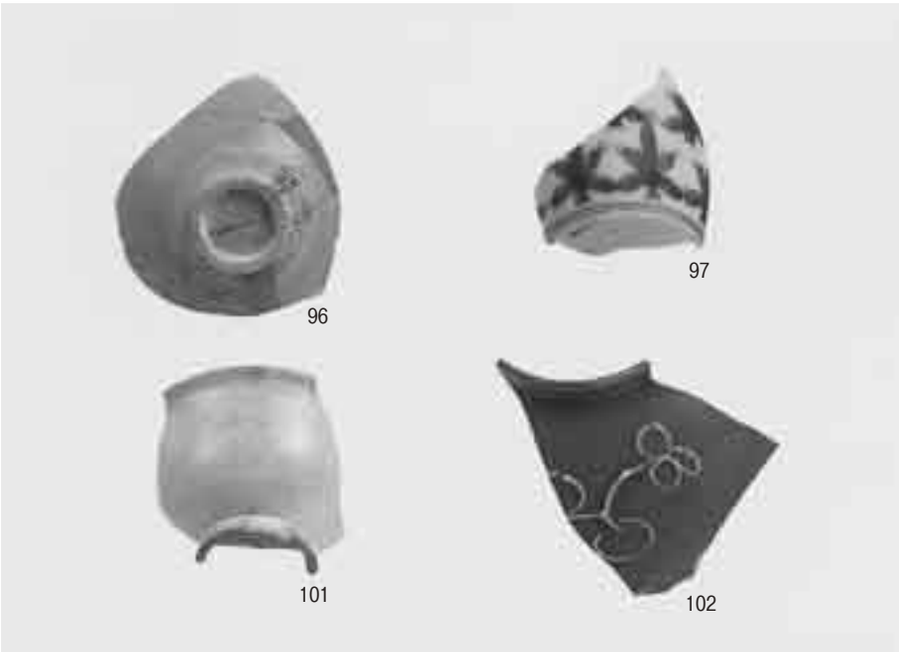
2区　SE05出土土器・瓦



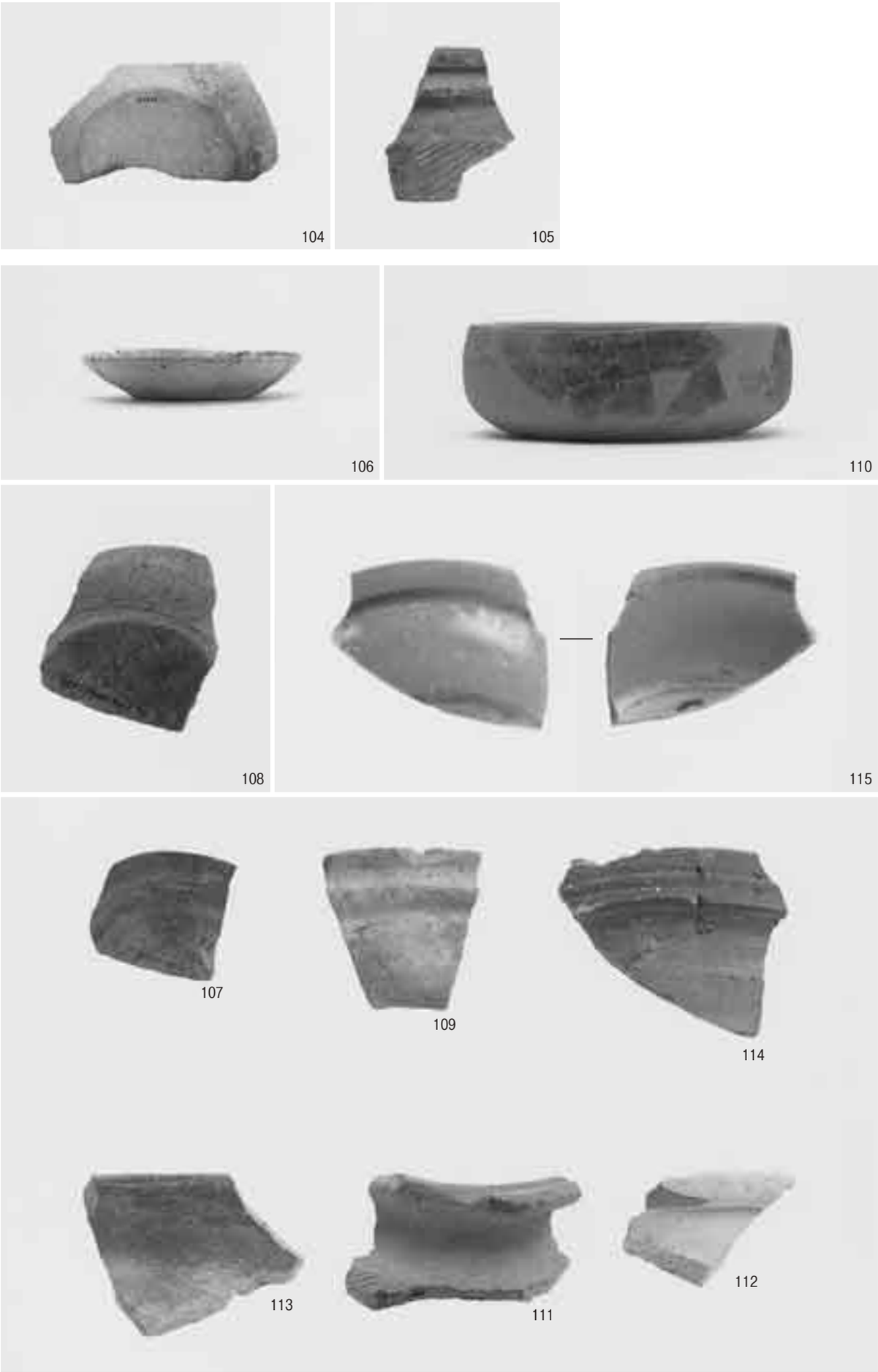
2区　SE05出土瓦



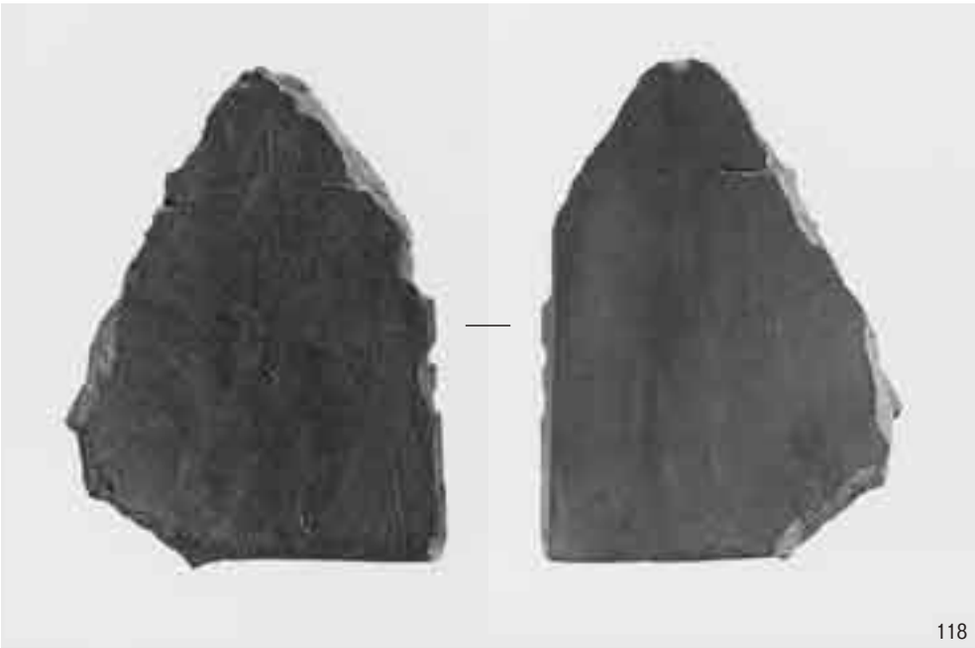
2区　SE06・07出土土器・瓦



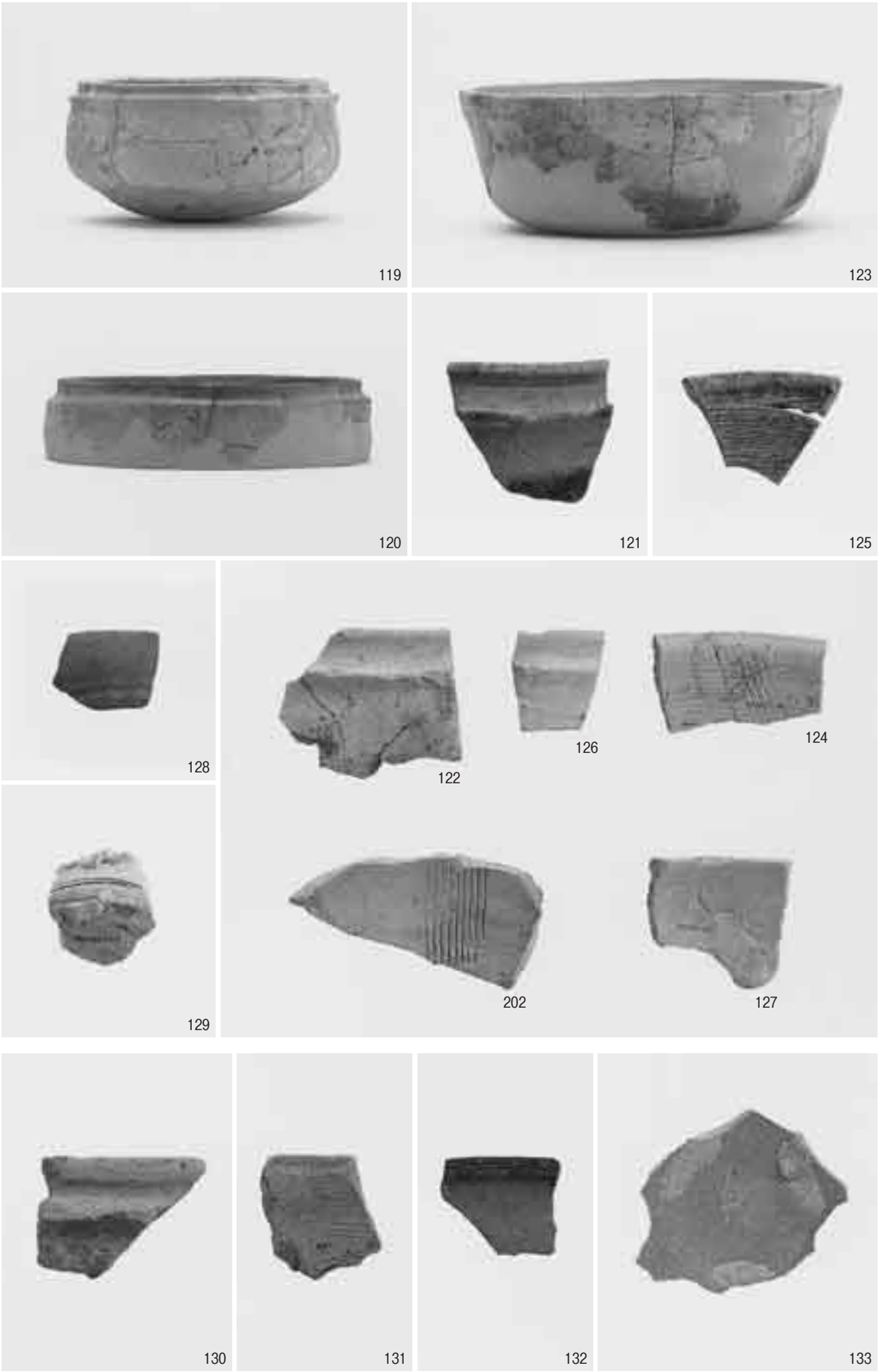
２区　SX01・04出土土器・瓦



2区　SD2004・2005出土土器



2区　SD2005出土瓦



2区　SD2006・2009出土土器

134

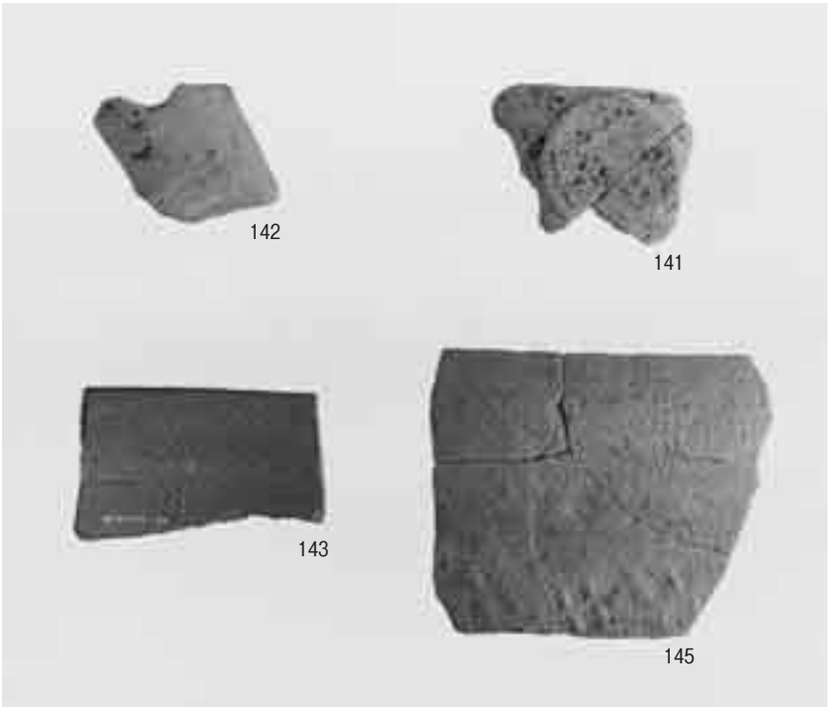
135

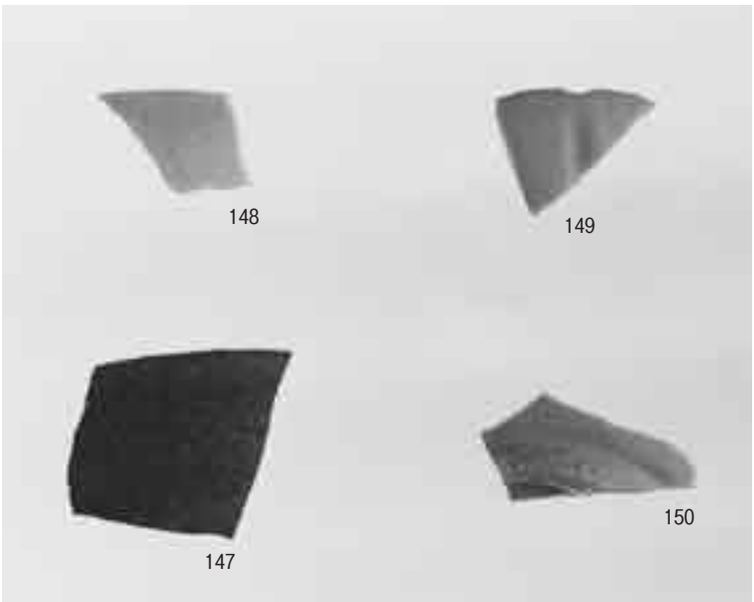
136

137

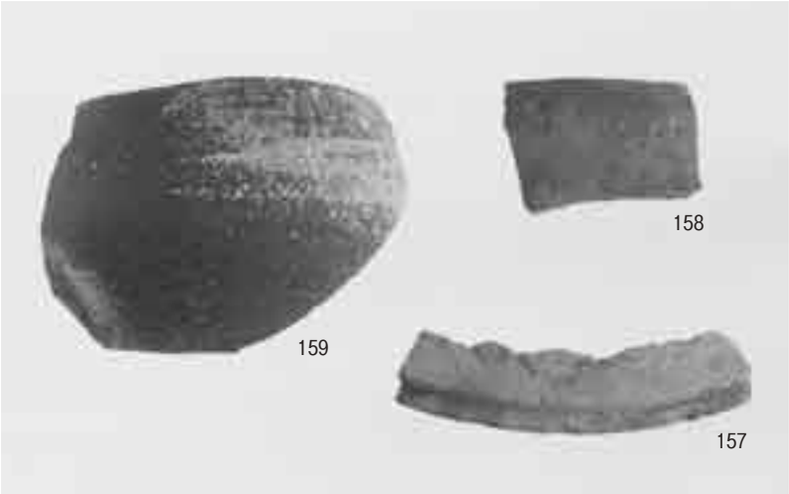
139

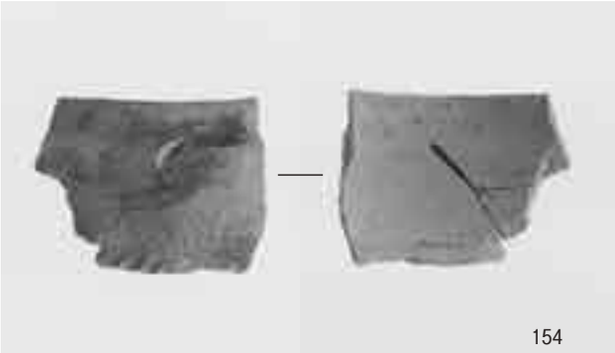
2区　SD2011、整地土出土瓦



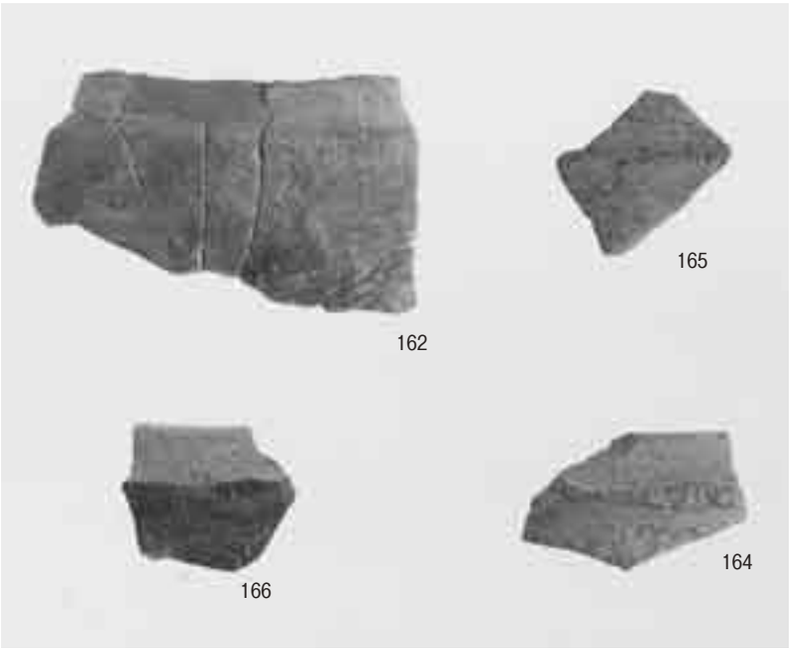


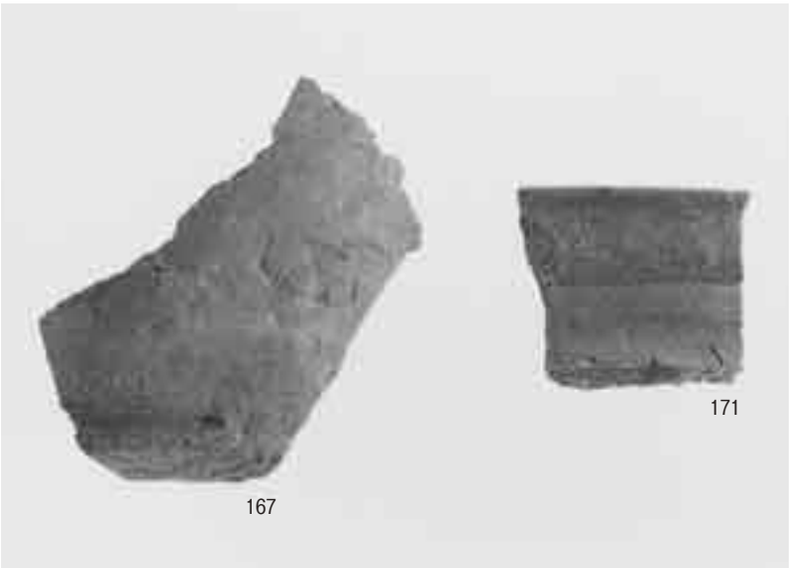
3区　甕倉2、P3006等出土土器

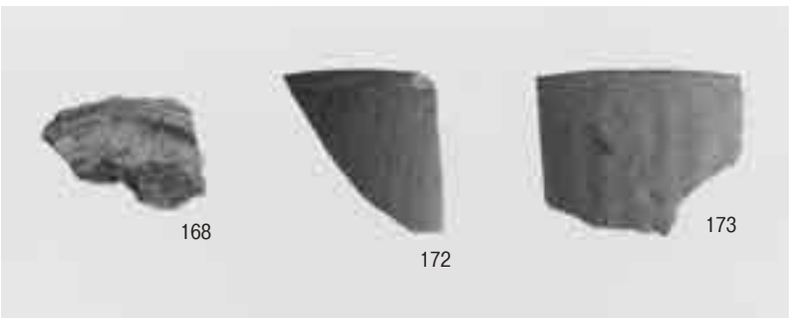




6区　内堀南辺出土土器、9区　内堀北辺出土瓦







11区　堀状遺構、SK1101、包含層出土土器

174

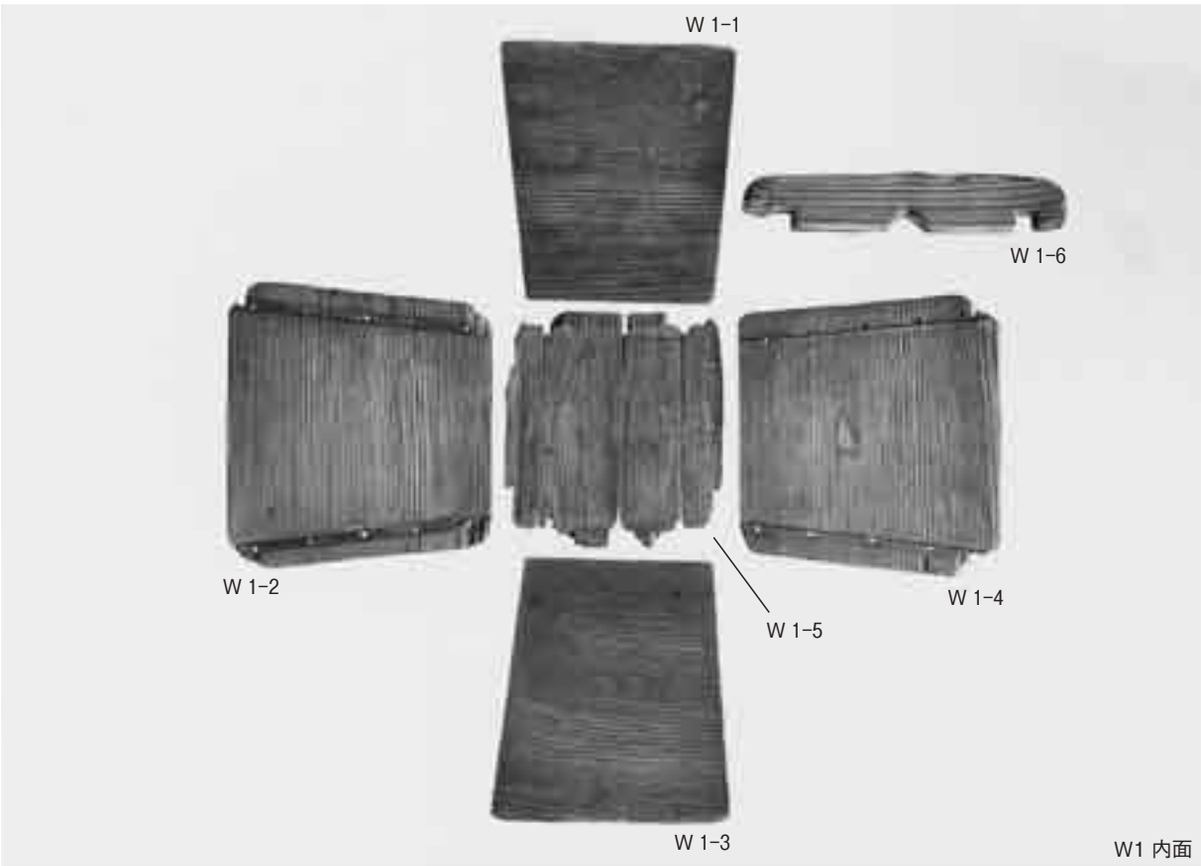
176

175

178 179

177

11区　SH03・04、包含層出土土器



2区　SE02出土箱釣瓶

W 1-1

W 1-2

W 1-3

W 1-4

W 1-5

W 1-4　加工痕

2区　SE02出土箱釣瓶

W1

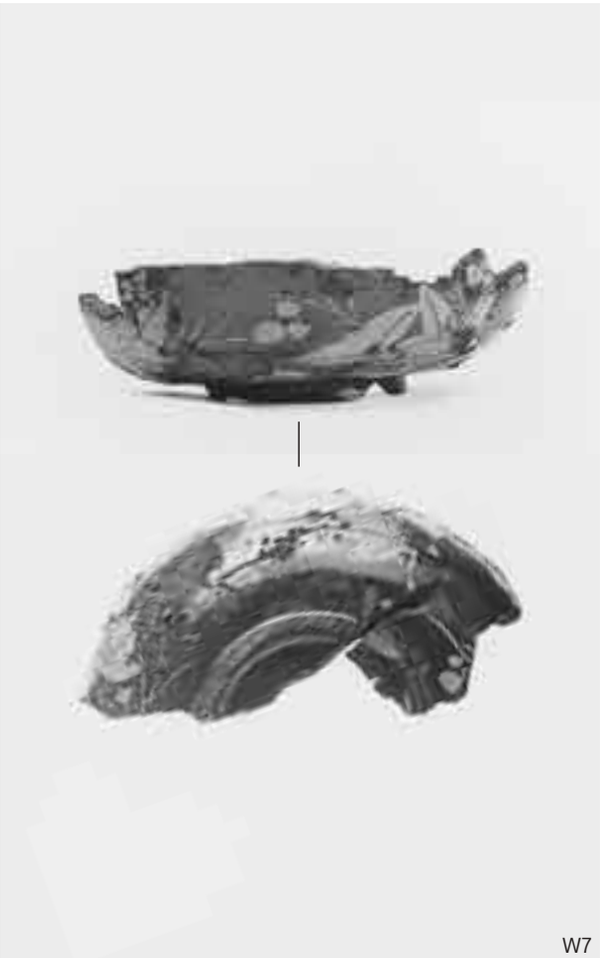
W1-6

W1　外面

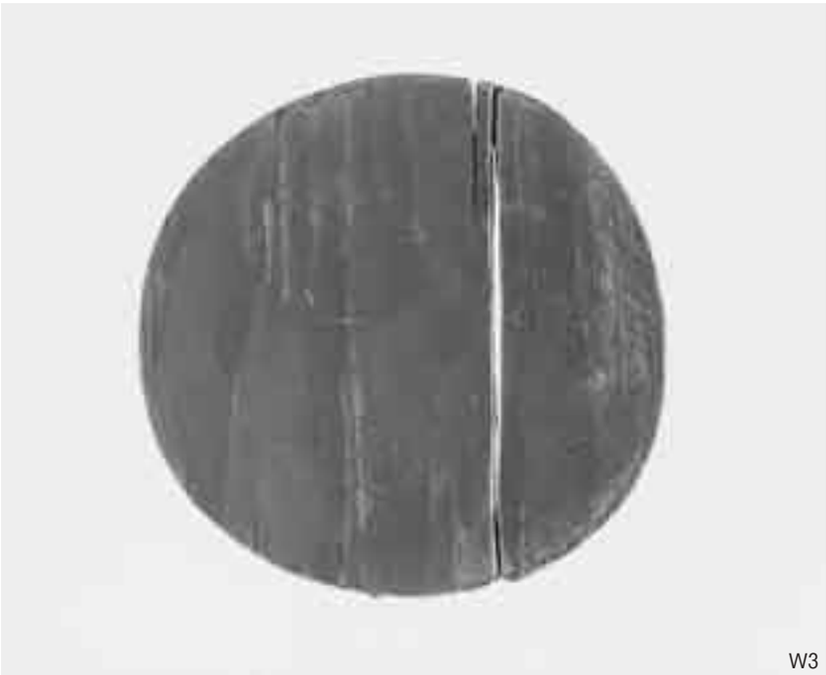
W2

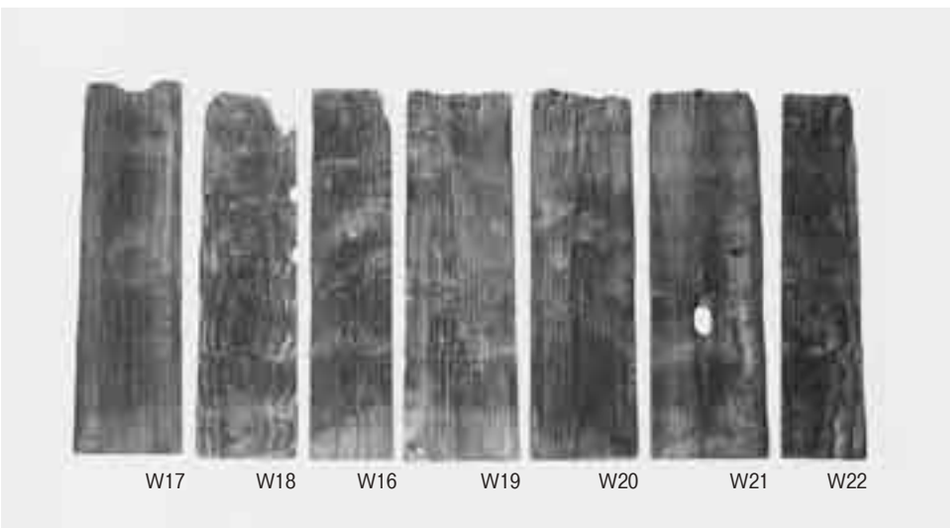
2区　SE02出土木器

2区　SE05出土根太

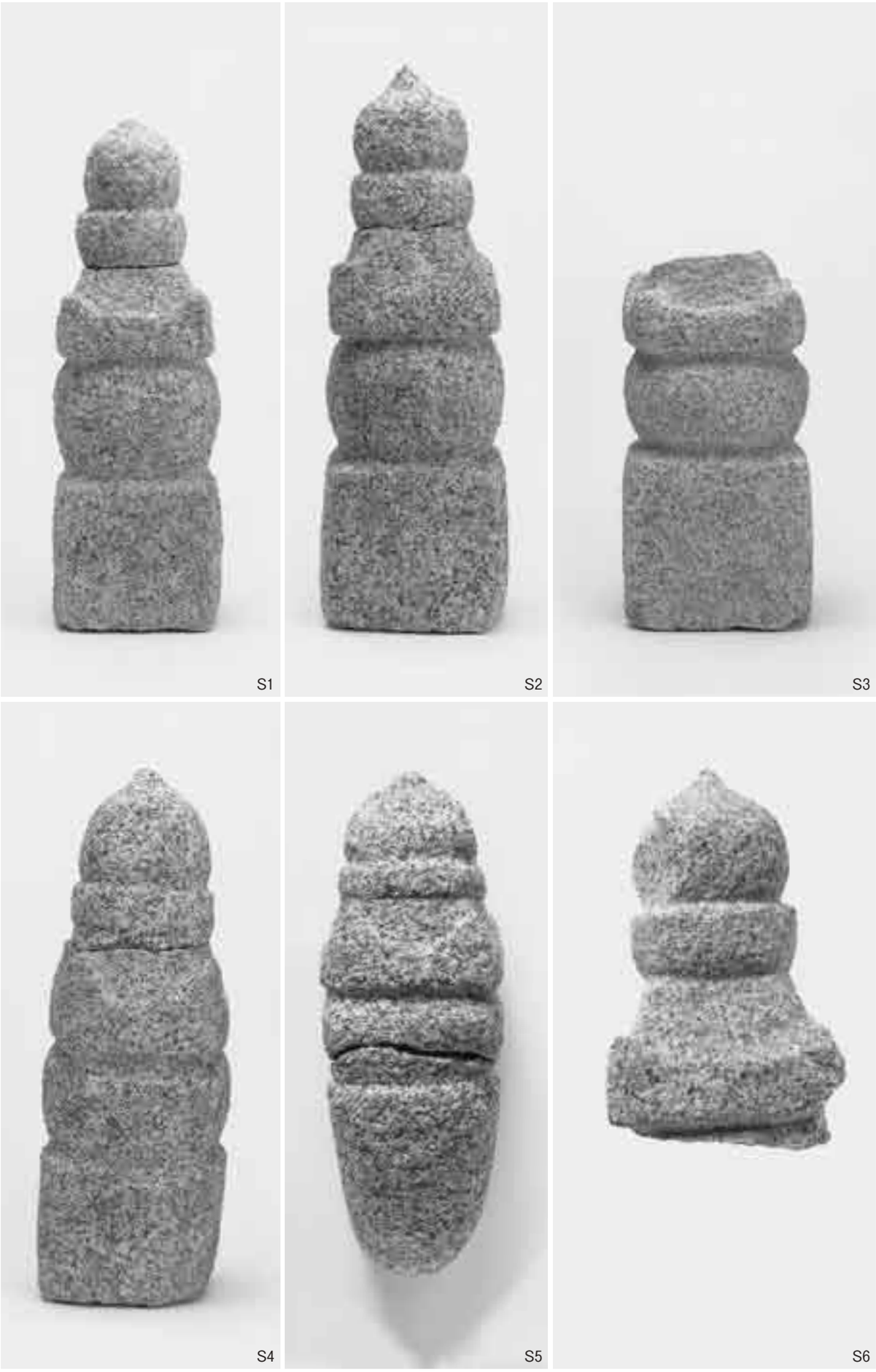


2区　SE05出土木器





2区　SE03・06・07、SX01出土木器



2区　SE02出土五輪塔

S7

S8

S9

S10

S11

S12

S13

S14

2区　SE02出土五輪塔

S15

S16

S17

S19

S18

S25

2区　SE05等出土石製品

S20

S23

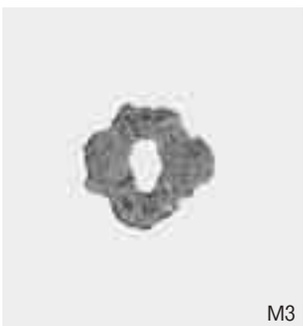
S22

S21

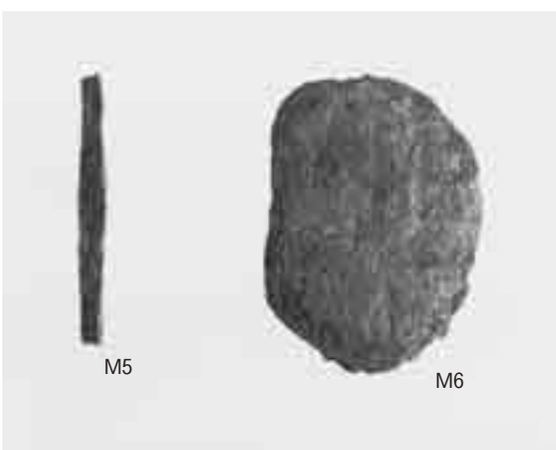
S24

M1

M2


M3

M4


M5 M6

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ふくなかじょうせき・しばさきいせき
書　　名	福中城跡・芝崎遺跡
副　書　名	一般国道175号平野拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第318冊
編 著 者 名	伊東隆夫・森内秀造・渡辺　昇・岡田章一・山上雅弘・別府洋二
編 集 機 関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所　在　地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　　TEL　078-531-7011
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　TEL　078-341-7711
発行年月日	西暦2007（平成19）年３月20日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
福中城跡（ふくなかじょうせき）	兵庫県神戸市（ひょうごけんこうべし）西区平野町（にしくひらのちょう）福中字本丸（ふくなかあざほんまる）・平瀬前（ひらせまえ）向井字祇園尾（むかいあざぎおんお）・字後垣内（あざうしろかきうち）	28111	2001174 2002059	34度41分56秒	134度58分59秒	2001.12.10～2002.03.12 2002.07.03～2002.08.01	1,402㎡ 688㎡	一般国道175号平野拡幅事業
芝崎遺跡（しばさきいせき）	兵庫県神戸市（ひょうごけんこうべし）西区平野町（にしくひらのちょう）向井字前垣内（むかいあざまえかきうち）	28111	950292	34度41分50秒	134度58分58秒	1995.11.15～1996.01.18	1,089㎡	一般国道175号平野拡幅事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福中城跡	城館址 集落	弥生・鎌倉 室町時代	竪穴住居・堀 掘立柱建物	備前・瀬戸美濃・青花・瓦	播磨城割りの「平野の城」か
芝崎遺跡	集落	古墳～奈良 中世～近世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙墓・井戸・甕倉・達磨窯	竈・土馬・銅鏡・箱釣瓶・漆器・石硯・石鍋・瓦	古式の土馬、鏡をもつ中世墓 箱釣瓶が出土した井戸 甕倉、達磨窯

兵庫県文化財調査報告　第318冊

福中城跡・芝崎遺跡

一般国道175号平野拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007(平成19)年３月20日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５

発　行　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１

印　刷　ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39